

県道富田西志度線道路改良事業及び  
県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う

# 埋蔵文化財発掘調査報告

寺田・産宮通遺跡  
南天枝遺跡

2003.3

香川県教育委員会  
(財)香川県埋蔵文化財調査センター

# 序 文

財団法人香川県埋蔵文化財調査センターでは、国・県の各種開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査と出土文化財の整理研究・報告書の刊行業務を、香川県教育委員会より受託して実施いたしております。

このたび「県道富田西志度線道路改良事業及び県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」として刊行いたしますのは、平成7・8年に調査を行いましたさぬき市大川町の寺田・産宮通遺跡と、平成8年に調査を行いました木田郡三木町の南天枝遺跡についてであります。

寺田・産宮通遺跡の調査では、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が検出されております。特に弥生時代では自然河川の河床上より1面の小形仿製鏡が出土しました。この鏡は全国的にも類例が極めて少なく、大変貴重な資料であることがわかりました。また、古墳時代では、大型の掘立柱建物跡を中心に配した首長クラスの屋敷地を検出し、東讃の古代集落跡を検討する上で大変貴重な資料となりました。

次に南天枝遺跡については、古墳時代前期から近世にかけての遺構・遺物が検出されております。特に古墳時代後期から江戸時代にかけての遺構密度は極めて高く、当時の東讃の集落跡を検討する上で大変貴重な資料となりました。

本報告書及び出土した文化財が、香川県の歴史研究や郷土を深く知るための資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、香川県土木部及び関係諸機関並びに地元関係各位には多大な御援助と御協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年3月

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター  
所長 小原 克己

## 例 言

1. 本報告書は、県道富田西志度線道路改良事業及び県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業で、さぬき市大川町富田西大道、寺田（旧大川郡大川町）に所在する寺田・産宮通遺跡（てらだ・さんのみやどおりいせき）、木田郡三木町田中宇南天枝に所在する南天枝遺跡（みなみあまえだいせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が香川県土木部道路建設課より依頼を受けて、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当者として実施した。
3. 発掘調査の期間及び担当は以下のとおりである。

寺田・産宮通遺跡	南天枝遺跡
(平成7年度)	期間 平成8年4月～平成8年11月
期間 平成7年10月～平成8年3月	担当 西村尋文、山下浩行、松尾 歩
担当 西村尋文、中村昭浩、松尾 歩	
(平成8年度)	
期間 平成8年4月～平成8年6月	
担当 山元素子、山田秀樹、糸山 晋	
4. 調査にあたっては、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。(順不同、敬称略)  
香川県土木部道路建設課、香川県長尾土木事務所、旧大川町教育委員会、旧大川町、三木町教育委員会、三木町、地元自治会、地元水利組合
5. 本報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。  
本報告書の執筆・編集は西村尋文が担当した。
6. 本報告書の作成にあたり、下記の方々のご教示・協力をえた。記して謝意を表したい。  
(順不同・敬称略) 一井眞比古、谷山 穰、望岡亮介、戸井晴夫、黒尾和久、林原利明、林 弘
7. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標系第IV系（日本測地系）の北であり、標高は東京湾平均海面（T. P.）を基準としている。
8. 本書で用いている遺構記号は次のとおりである。  
SH：竪穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SA：柵列 SP：ピット SE：井戸 SK：土坑  
SD：溝状遺構 SX：不整形遺構
9. 挿図の一部に国土交通省国土地理院作成の1/25,000地形図を使用した。

# 本文目次

(寺田・産宮通遺跡)

## 第I章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1

## 第II章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4

## 第III章 調査の成果

第1節 調査区	11
第2節 基本層位	11

### 第3節 寺田地区の調査

1. 概要	14
2. 弥生時代中期後半～古墳時代前期	14
3. 古墳時代後期末	31
4. 鎌倉時代以降	37
5. 第1低地帯	41
6. その他の遺物	46

### 第4節 産宮通地区の調査

1. 概要	47
2. 弥生時代中期後半～後期末	47
3. 平安時代～室町時代	55
4. 近世以降	67
5. 第2低地帯	69
6. 第3低地帯	83

## 第IV章 自然化学分析結果

第1節 プラント・オパール, 花粉分析結果	105
第2節 樹種同定結果	116
第3節 寺田・産宮通遺跡出土種実について	126

## 第V章 まとめ

第1節 低地帯の様相	129
第2節 集落の変遷	131

(南天枝遺跡)

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯 .....165  
第2節 調査の経過 .....165

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境 .....167  
第2節 歴史的環境 .....167

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査区 .....173  
第2節 基本層位 .....173  
第3節 遺構・遺物  
1. 概要 .....177  
2. 竪穴住居跡 .....177  
3. 掘立柱建物跡 .....179  
4. 柵列 .....208  
5. 柱穴 .....208  
6. 井戸 .....212  
7. 土坑 .....215  
8. 溝状遺構 .....220  
9. 不整形遺構 .....228  
10. 浅谷 .....232  
11. その他包含層出土遺物 .....237

第Ⅳ章 香川県、南天枝遺跡における樹種同定 .....240

第Ⅴ章 集落の変遷 .....244

# 挿 図 目 次

## (寺田・産宮通遺跡)

第1図	寺田・産宮遺跡位置図……………	4	第33図	SD04出土遺物……………	36
第2図	微地形分類図……………	5	第34図	SB01平・断面図……………	38
第3図	遺跡分布図(1/40,000)……………	6	第35図	SB02平・断面図……………	39
第4図	寺田・産宮遺跡周辺条里型地割復元図…	8	第36図	SB01・02出土遺物……………	40
第5図	寺田・産宮通遺跡地形分類模式図…	11	第37図	SA01断面図……………	41
第6図	寺田・産宮通遺跡調査区配置図…	12	第38図	第1低地帯東・西壁面土層図…	42
第7図	基本層位柱状図……………	13	第39図	第1低地帯及びその他包含層出土遺物 (1)……………	43
第8図	SH01平・断面図……………	14	第40図	第1低地帯及びその他包含層出土遺物 (2)……………	44
第9図	SH01出土遺物……………	15	第41図	寺田地区その他の出土遺物…	45
第10図	SH02平・断面図……………	16	第42図	SH07出土遺物……………	47
第11図	SH02出土遺物……………	17	第43図	SH07平・断面図……………	48
第12図	SH03平・断面図……………	18	第44図	SB06～08平・断面図……………	49
第13図	SH03出土遺物……………	19	第45図	SB09～11平・断面図……………	50
第14図	SH04・SH05平・断面図……………	20	第46図	SB12・14・15平・断面図……………	51
第15図	SH04・SH05出土遺物……………	21	第47図	SB09・11・14・15出土遺物……………	52
第16図	SH06平・断面図……………	22	第48図	SP96・139・175出土遺物……………	53
第17図	SH06出土遺物(1)……………	23	第49図	SP96平・断面図……………	53
第18図	SH06出土遺物(2)……………	24	第50図	SK29・30・32平・断面図……………	54
第19図	SP01・65・66・90・91出土遺物……………	24	第51図	SK24・31出土遺物……………	55
第20図	SK02・04～06・10・12・14平・断面図…	26	第52図	SD17断面図……………	55
第21図	SK17～19平・断面図……………	27	第53図	SD18出土遺物……………	55
第22図	SK14・17・21出土遺物……………	28	第54図	SB16～19平・断面図……………	56
第23図	SD01出土遺物……………	29	第55図	SB20・21出土遺物……………	57
第24図	SD01・03・09・13断面図……………	29	第56図	SB20・21平・断面図……………	58
第25図	SX01・02・04出土遺物……………	30	第57図	SA02平・断面図……………	58
第26図	SX01・04断面図……………	30	第58図	SP205～210平・断面図……………	59
第27図	SB03出土遺物……………	31	第59図	SP121・204・209……………	59
第28図	SB03平・断面図……………	32	第60図	SE01出土遺物……………	60
第29図	SB04・05平・断面図……………	33	第61図	SE01平・断面図……………	61
第30図	SD02・04・10・12断面図……………	34	第62図	SE03平・断面図……………	61
第31図	SD02出土遺物(1)……………	35			
第32図	SD02出土遺物(2)……………	36			

第63図	SK28・39・40・41・46平・断面図	62	第93図	第3低地帯流路04出土木製品(1)	90
第64図	SD22・23出土遺物	63	第94図	第3低地帯流路04出土木製品(2)	91
第65図	SD21～30平・断面図	64	第95図	第3低地帯流路04出土木製品(3)	92
第66図	SD40・41・44平・断面図	65	第96図	第3低地帯流路04出土木製品(4)	93
第67図	SD43・44出土遺物	66	第97図	第3低地帯流路04出土木製品(5)	94
第68図	SX10・11平・断面図	66	第98図	第3低地帯流路04出土木製品(6)	95
第69図	SX10・11出土遺物	66	第99図	第3低地帯流路04出土木製品(7)	96
第70図	SE02出土遺物	67	第100図	第3低地帯流路04及びその他包含層出土 石器	97
第71図	SD33出土遺物	67	第101図	流路05断面図	98
第72図	SD33・34・36・37断面図	68	第102図	流路07・08断面図	98
第73図	SX06出土遺物	68	第103図	第3低地帯流路05出土土器	99
第74図	SX10・11平・断面図	69	第104図	第3低地帯流路05出土石器・金属器	100
第75図	第2低地帯西壁面土層図	70	第105図	第3低地帯流路06出土土器	100
第76図	流路02断面図	71	第106図	第3低地帯流路07・08出土土器	101
第77図	第2低地帯Ⅱ-⑥層遺物出土状況	72	第107図	第3低地帯流路08出土土器	102
第78図	第2低地帯出土土器(1)	74	第108図	寺田・産宮通遺跡におけるプラント・オ パール分析結果	108
第79図	第2低地帯出土土器(2)	75	第109図	プラント・オパールの顕微鏡写真	109
第80図	第2低地帯出土土器(3)	76	第110図	寺田・産宮通遺跡Ⅲ区AⅡにおける花粉 ダイアグラム	114
第81図	第2低地帯出土土器(4)	77	第111図	寺田・産宮通遺跡の花粉・孢子顕微鏡写 真	115
第82図	第2低地帯出土土器(5)	78	第112図	寺田・産宮通遺跡出土木製品の樹種	118
第83図	第2低地帯出土土器(6)	79	第113図	木材顕微鏡写真(1)	124
第84図	第2低地帯出土土器(7)	80	第114図	木材顕微鏡写真(2)	125
第85図	第2低地帯出土木製品	81	第115図	寺田・産宮通遺跡出土種実写真	128
第86図	第2低地帯出土石器及び金属器	82	第116図	小形仿製鏡	131
第87図	第3低地帯東壁面土層図	84	第117図	寺田地区第3期遺構配置概要図	132
第88図	第3低地帯流路04遺物出土状況	85			
第89図	第3低地帯流路04下層出土土器(1)	86			
第90図	第3低地帯流路04下層出土土器(2)	87			
第91図	第3低地帯流路04上層出土土器(1)	88			
第92図	第3低地帯流路04上層出土土器(2)	89			

(南天枝遺跡)

第118図	南天枝遺跡位置図	167	第123図	南天枝遺跡遺構概略図	175・176
第119図	微地形分類図	168	第124図	SH01・SB14平・断面図	178
第120図	遺跡分布図(1/40,000)	169	第125図	SH02平・断面図	178
第121図	南天枝遺跡周辺条里型地割復元図	170	第126図	SH01・02出土遺物	179
第122図	調査区配置,基本層位柱状図	174	第127図	掘立柱建物出土遺物(1)	180

第128図 掘立柱建物出土遺物 (2) .....	182	第154図 SE01出土遺物 (2) .....	213
第129図 掘立柱建物出土遺物 (3) .....	188	第155図 SE01平・断面図 .....	214
第130図 掘立柱建物平・断面図 (1) .....	189	第156図 SE02出土遺物 .....	215
第131図 掘立柱建物平・断面図 (2) .....	190	第157図 SE02平・断面図 .....	215
第132図 掘立柱建物平・断面図 (3) .....	191	第158図 土坑平・断面図 (1) .....	217
第133図 掘立柱建物平・断面図 (4) .....	192	第159図 土坑平・断面図 (2) .....	218
第134図 掘立柱建物平・断面図 (5) .....	193	第160図 土坑出土遺物.....	219
第135図 掘立柱建物平・断面図 (6) .....	194	第161図 溝状遺構断面図 (1) .....	223
第136図 掘立柱建物平・断面図 (7) .....	195	第162図 溝状遺構断面図 (2) .....	224
第137図 掘立柱建物平・断面図 (8) .....	196	第163図 溝状遺構断面図 (3) .....	225
第138図 掘立柱建物平・断面図 (9) .....	197	第164図 溝状遺構出土遺物 (1) .....	226
第139図 掘立柱建物平・断面図 (10) .....	198	第165図 溝状遺構出土遺物 (2) .....	227
第140図 掘立柱建物平・断面図 (11) .....	199	第166図 不整形遺構平・断面図 (1) .....	229
第141図 掘立柱建物平・断面図 (12) .....	200	第167図 SX03・04出土遺物 .....	229
第142図 掘立柱建物平・断面図 (13) .....	201	第168図 不整形遺構平・断面図 (2) .....	230
第143図 掘立柱建物平・断面図 (14) .....	202	第169図 不整形遺構平・断面図 (3) .....	231
第144図 掘立柱建物平・断面図 (15) .....	203	第170図 SX08・13出土遺物 .....	232
第145図 掘立柱建物平・断面図 (16) .....	204	第171図 浅谷1～3土層図.....	233
第146図 掘立柱建物平・断面図 (17) .....	205	第172図 浅谷出土遺物 (1) .....	235
第147図 掘立柱建物平・断面図 (18) .....	206	第173図 浅谷出土遺物 (2) .....	236
第148図 柵列平・断面図 .....	207	第174図 浅谷出土遺物 (3) .....	237
第149図 SP15平・断面図 .....	209	第175図 包含層出土遺物.....	238
第150図 柱穴出土遺物 (1) .....	210	第176図 南天枝遺跡の木材 I .....	242
第151図 柱穴出土遺物 (2) .....	211	第177図 南天枝遺跡の木材 II .....	243
第152図 柱穴出土遺物 (3) .....	212	第178図 集落変遷図 (1) .....	247
第153図 SE01出土遺物 (1) .....	213	第179図 集落変遷図 (2) .....	248

## 表 目 次

### (寺田・産宮通遺跡)

第1表 調査工程表 .....	1	第6表 寺田・産宮通遺跡出土木製品の樹種同定結果.....	116
第2表 第2低地帯上層溝群一覧表 .....	63	第7表 樹種同定結果.....	120
第3表 第2低地帯堆積層一覧表 .....	71	第8表 時代別・種類別種類構成.....	121
第4表 寺田・産宮通遺跡のプラント・オパール分析結果 .....	107	第9表 試料同定結果.....	127
第5表 寺田・産宮通遺跡における花粉分析結果 .....	113	第10表 出土ヒョウタン種子と栽培品種の比較 .....	128

第11表 寺田・産宮通遺跡 竪穴住居跡一覧表 .....135	第14表 寺田・産宮通遺跡出土瓦観察表.....160
第12表 寺田・産宮通遺跡 掘立柱建物跡一覧表 .....135	第15表 寺田・産宮通遺跡出土木製品観察表 .....161
第13表 寺田・産宮通遺跡出土土器観察表 .....136	第16表 寺田・産宮通遺跡出土石器観察表.....162

(南天枝遺跡)

第17表 調査工程表 .....165	第21表 南天枝遺跡掘立柱建物跡一覧.....249
第18表 柱穴一覧表 .....208・209	第22表 南天枝遺跡出土土器観察表.....251
第19表 南天枝遺跡における樹種同定結果 .....241	第23表 南天枝遺跡出土石器観察表.....263
第20表 時期別遺構一覧 .....244	

## 付 図 目 次

(寺田・産宮通遺跡)

付図1 寺田・産宮通遺跡遺構配置図 (I・II区)
付図2 寺田・産宮通遺跡遺構配置図 (III・IV区)
付図3 寺田・産宮通遺跡遺構配置図 (V・VI区)
付図4 寺田・産宮通遺跡遺構配置図 (VII・VIII区)

(南天枝遺跡)

付図5 南天枝遺跡遺構配置図 (I・II区)
付図6 南天枝遺跡遺構配置図 (II・III区)

# 図版目次

## (寺田・産宮通遺跡)

- 巻頭図版1 寺田・産宮通遺跡航空写真(南より)
- 巻頭図版2 (1) 寺田・産宮通遺跡SB03全景(北より)  
(2) 寺田・産宮通遺跡出土小形仿製鏡・柱状片刃石斧・ガラス玉
- 図版1 (1) I区調査区全景(北より)  
(2) II区調査区全景(南より)
- 図版2 (1) SH01全景(西より)  
(2) SH02, SD03全景(西より)
- 図版3 (1) SH03全景(東より)  
(2) SH04・05全景(北より)
- 図版4 (1) SH06全景(西より)  
(2) SH06 1・2号炉(北より)
- 図版5 (1) SB01~SB03全景(北より)  
(2) SB03全景(西より)
- 図版6 (1) SB03柱穴(SP51)断面  
(2) SB01・02, SD02全景(北より)
- 図版7 (1) SB01柱穴(SP08)断面  
(2) SD01全景(西より)
- 図版8 (1) SD02土層断面  
(2) SD04全景(南より)
- 図版9 (1) III区調査区全景(北より)  
(2) IV区調査区全景(北より)
- 図版10 (1) V区調査区全景(北より)  
(2) VI区調査区全景(北より)
- 図版11 (1) VII区調査区全景(南より)  
(2) VIII区調査区全景(南より)
- 図版12 (1) SH07全景(北より)  
(2) SB06全景(北より)
- 図版13 (1) SB11全景(北より)  
(2) SB12全景(南より)
- 図版14 (1) SB14・15全景(北より)
- (2) SB16全景(東より)
- 図版15 (1) SB17全景(南より)  
(2) SE01全景(南より)
- 図版16 (1) SD36土層断面(南より)  
(2) SX10・11全景(西より)
- 図版17 (1) 第2低地帯東壁(北より)  
(2) 第2低地帯西壁(東より)
- 図版18 (1) 第2低地帯上面SD21~30全景(東より)  
(2) 第2低地帯流路01全景(東より)
- 図版19 (1) 第2低地帯II⑥層遺物出土状況  
(2) 第2低地帯小形仿製鏡出土状況
- 図版20 (1) 第3低地帯流路04・05全景(南より)  
(2) 第3低地帯流路04・06~08全景(南より)
- 図版21 (1) 第3低地帯流路04全景(南より)  
(2) 第3低地帯流路04下層木製品出土状況
- 図版22 (1) 木製品集積遺構02遺物出土状況(上位)  
(2) 木製品集積遺構02遺物出土状況(下位)
- 図版23 SH01 : 9  
SH03 : 30~32  
SH04 : 39  
SH06 : 44・45・51~53・55
- 図版24 SH06 : 57~60・80・81  
SP90 : 88  
SK14 : 94・96
- 図版25 SK14 : 99  
SK17 : 108  
SK21 : 103~105  
SD01 : 107  
SD02 : 138・143~146・154  
SD04 : 170  
SB01 : 176・177・179・186・187・189
- 図版26 SB02 : 191・197

- 第1低地带：206·218·220  
SH07：257  
SB11：264  
SB14：266  
SB15：267  
SB20：276  
SP210：298·300·301  
SD44：324  
图版27 SX10：326·328·332~335·338·  
341  
SX11：331  
第2低地带：351·356·366  
图版28 第2低地带：387·392·393·395·  
397·400·402·404·408·412·  
413·415·418  
图版29 第2低地带：427·430·441·445·  
446·449·453·454·463·491·  
495·505  
图版30 第2低地带：525·526  
第3低地带流路04下層：541·543~  
545·548·554·556·561  
第3低地带流路04上層：569·574·  
583  
图版31 第3低地带流路04上層：588·591~  
597·599·602·615  
第3低地带流路05：651·652·654~  
656  
图版32 第3低地带流路05：662·663·667·  
669·678  
第3低地带流路06：682·684·685·  
688·691  
第3低地带流路07：712·720~722·  
726  
图版33 第3低地带流路05：672·673  
第3低地带流路07：783·739  
第3低地带流路08：743·747·782~  
784  
第2低地带：363·383·431·432·  
529  
第3低地带流路04上層：616  
第3低地带流路06：710·711  
第3低地带流路08：790·791  
第2低地带：530·531  
第3低地带流路04：617  
第3低地带流路04：620·621·625  
第3低地带流路04：618·622  
第3低地带流路04：623  
第3低地带流路04：624  
SH02：17~19·21  
SH03：34  
SH06：83  
SP66：87  
SX01：108  
SD02：167  
第1低地带：223~228·232  
II区包含層：222·229  
SE02：344·345  
SX06：349  
第3低地带流路04：637·639·640  
IV区~VII区包含層：635·636·638·  
643  
第3低地带流路05：679  
第1低地带：233·256  
SE02：346  
第2低地带：536·538  
第3低地带流路04：642·645  
第2低地带：540  
图版40  
图版41

(南天枝遺跡)

- 図版42 南天枝遺跡航空写真
- 図版43 I区航空写真
- 図版44 II区航空写真
- 図版45 III区航空写真
- 図版46 (1) I区調査区東半部全景(西より)  
(2) I区調査区全景(西より)
- 図版47 (1) I区調査区中央部全景(南より)  
(2) I区調査区中央部下層遺構面全景(南より)
- 図版48 (1) SB01全景(南より)  
(2) SB04~08全景(南より)
- 図版49 (1) SB07・08全景(西より)  
(2) SB07(SP15)柱材出土状況(西より)
- 図版50 (1) SB11全景(南より)  
(2) SB02・03全景(東より)
- 図版51 (1) SP015石臼出土状況(北より)  
(2) SE01全景(東より)
- 図版52 (1) SK01遺物出土状況(北より)  
(2) SD03~05全景(北より)
- 図版53 (1) SD01・06全景(北より)  
(2) SD06,SX02全景(東より)
- 図版54 (1) SD06全景(西より)  
(2) SD06土層断面(北より)
- 図版55 (1) SD09全景(南より)  
(2) SD12全景(南より)
- 図版56 (1) SX02土層断面(西より)  
(2) SX03土層断面(西より)
- 図版57 (1) SX04全景(南より)  
(2) SX04土層断面(東より)
- 図版58 (1) II区調査区全景(東より)  
(2) II区調査区西半部全景(東より)
- 図版59 (1) SH01全景(南より)  
(2) SB12・13全景(南より)
- 図版60 (1) SB17~19全景(北より)  
(2) SB19全景(北より)
- 図版61 (1) SB20・21全景(北より)  
(2) SB23全景(西より)
- 図版62 (1) SB25全景(南より)  
(2) SB26・27全景(北より)
- 図版63 (1) SB28・29全景(東より)  
(2) SK09,SX08全景(北より)
- 図版64 (1) SK13全景(東より)  
(2) SD16・17全景(南より)
- 図版65 (1) III区調査区全景(東より)  
(2) SH02全景(西より)
- 図版66 (1) SH02竈検出状況(南より)  
(2) SB30~33全景(南より)
- 図版67 (1) SB30(SP01)遺物出土状況(西より)  
(2) SB32・34全景(西より)
- 図版68 (1) SB36,SE02,SD24・26全景(北より)  
(2) SB37全景(北より)
- 図版69 (1) SB39・40,SD18・21・22全景(西より)  
(2) SB41,SD28~31全景(東より)
- 図版70 (1) SD32遺物出土状況(北より)  
(2) 浅谷3北壁土層(南より)
- 図版71 SH01 : 3・6・7  
SB06 : 10  
SB08 : 22・26・27  
SB30 : 44
- 図版72 SP006 : 55  
SP008 : 57・58  
SP012 : 62  
SP013 : 65  
SP016 : 68  
SP024 : 75  
SP025 : 78  
SP026 : 79  
SP030 : 83  
SP032 : 86
- 図版73 SE01 : 95・96・99・100・109・111  
SE02 : 115・117  
SK01 : 120
- 図版74 SK10 : 121  
SD06 : 126~128・138・139・141・

	145~148		I 区包含層 : 257
	SD05 : 156	図版78	SB06 : 16
	SD27 : 174		SB07 : 18 · 19
	SD32 : 176 · 177	図版79	SB31 : 46
図版75	SX03 : 180		SP034 : 90
	SX04 : 185 · 186		SD06 : 150
	SX05 : 188		浅谷 1 : 219 · 220
	SX08 : 189 · 190		浅谷 2 : 224
	SX13 : 191 · 193		浅谷 3 : 234 · 250
図版76	浅谷 1 : 194 · 198~201 · 203 · 204 · 206~211	図版80	I 区包含層 : 259
	浅谷 3 : 227 · 237 · 239 · 240		SB40 : 50
図版77	浅谷 3 : 249		SE01 : 113 · 114
	I 区包含層 : 252 · 255		SX03 : 183 · 184 · 187
	SP020 : 72		浅谷 1 : 218
	I 区包含層 : 262		I 区包含層 : 260
	SP031 : 85		Ⅲ区包含層 : 280
	浅谷 1 : 217	図版81	SP015 : 89
			浅谷 1 : 221

県道富田西志度線道路改良事業に伴う

# 埋蔵文化財発掘調査報告

寺田・産宮通遺跡

2003.3

香 川 県 教 育 委 員 会  
(財)香川県埋蔵文化財調査センター



寺田・産宮通遺跡航空写真（南より）



寺田・産宮通遺跡出土SB03全景（北より）



寺田・産宮通遺跡出土小形仿製鏡



寺田・産宮通遺跡出土柱状片刃石斧



寺田・産宮通遺跡出土ガラス玉

# 第 I 章 調査の経緯と経過

## 第 1 節 調査に至る経緯

さぬき市大川町西部の住宅地を南北に走る、県道富田西志度線は一車線道路であることから混雑が著しく、大型車の通行にも困難な状態が続いていた。香川県教育委員会と香川県土木部は、平成4年度より同路線のバイパス計画に関する事前協議を継続して行い、周辺には数多くの集落遺跡が所在していることから、工事を実施する際には、十分な保護処置が必要であることの合意がなされていた。

計画路線は落合橋から県道高松長尾大内線に至る延長約600m・幅約13mを測る。路線の北端付近は津田川の氾濫原にあたり、中央南寄りの位置には古川及びその氾濫原が存在している。なお、周辺には弥生時代の竪穴住居跡を検出した寺田大角遺跡、弥生時代～中世の集落遺跡である千町遺跡、弥生時代包蔵地である田辺遺跡等が所在する。したがって今回の調査地も、弥生時代を中心とする集落遺跡の所在が予想された。

平成6年度に至り用地買収が進んできたことから、同年5月に分布調査を行い、同年11月に試掘調査を実施する事になった。その結果、古川より北の地区の北端部で古代末～中世にかけての遺構・遺物、南半部で弥生土器の包含層、古川より南の地区で弥生時代の遺構・遺物が検出され、対象地ほぼ全域で保護措置が必要と判断され『寺田・産宮通遺跡』と呼称する事になった。保護措置の必要な範囲は5,948m<sup>2</sup>を測る。なお、本調査は香川県土木部から依頼を受け、平成7・8年の2ヶ年に分けて香川県教育委員会が調査主体となり、(財)香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

## 第 2 節 調査の経過

調査に先だって、対象地の調査区を南端より北端へ向けてⅠ～Ⅷ区に区分した。平成7年度の調査は、その内Ⅰ～Ⅵ区までの調査を実施した。調査期間は平成7年10月1日から平成8年3月31日までの6ヶ月間で実施した。調査対象面積は4,404m<sup>2</sup>を測る。

平成8年度の調査は、残りの調査区であるⅦ・Ⅷ区を平成8年4月1日から6月30日までの3ヶ月間で実施した。調査対象面積は1,544m<sup>2</sup>を測る。なお、詳細な調査工程は第1表のとおりである。

第 1 表 調査工程表

項 目	面積 (m <sup>2</sup> )	平成7年			平成8年					
		10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
Ⅰ区	637			■	■					
Ⅱ区	827	■	■							
Ⅲ区	965					■				
Ⅳ区	581					■	■			
Ⅴ区	789			■	■					
Ⅵ区	605		■							
Ⅶ区	773							■	■	■
Ⅷ区	771							■	■	■
合計	5,948									

整理作業は平成13年4月1日から開始し、平成13年11月30日に終了した。

平成7・8年度の発掘調査及び平成13年度の整理作業における調査体制は、以下のとおりである。

(平成7年度)

文化行政課

総括 課 長 高木 尚 (10.25転出)  
課 長 藤原章夫 (10.25転入)  
課長補佐 高木一義  
副主幹 渡部明夫  
総務 係 長 山崎 隆  
主 査 星加宏明  
主 事 高倉秀子

埋蔵文化財 主任技師 森下英治  
技 師 塩崎誠司

(財) 香川県埋蔵文化財調査センター  
総括 所 長 大森忠彦  
次 長 真鍋隆幸  
総務 参 事 別枝義昭  
係 長 前田和也  
主 査 西村厚二  
主 査 水卜照代 (6.1 転入)  
主任主事 西川 大 (6.1 転入)  
調査 参 事 糸目末夫  
係 長 大山真充  
文化財専門員 西村尋文  
文化財専門員 中村昭浩  
調査技術員 松尾 歩

(平成8年度)

文化行政課

総括 課 長 藤原章夫  
課長補佐 高木一義  
課長補佐 北原和利  
副主幹 渡部明夫  
総務 係 長 山崎 隆  
主 査 星加宏明  
主 事 國方秀子 (6.1 転出)  
主 事 打越和美 (6.1 転入)

埋蔵文化財 文化財専門員 木下晴一  
技 師 塩崎誠司  
文化財専門員 植松邦浩

(財) 香川県埋蔵文化財調査センター  
総括 所 長 大森忠彦  
次 長 小野善範  
総務 参 事 別枝義昭  
係 長 前田和也  
主 査 西村厚二 (6.1 転出)  
主 査 水卜照代  
主任主事 西川 大  
主 事 佐々木隆司 (6.1 転入)  
調査 参 事 近藤和史  
主任文化財専門員 廣瀬常雄  
主任文化財専門員 大山真充  
文化財専門員 西村尋文  
文化財専門員 山元素子  
主任技師 山田秀樹  
調査技術員 糸山 晋

(平成13年度)

文化行政課

総括 課 長 北原和利  
課長補佐 小国史郎  
副主幹 大山真充  
総務 副主幹 中村禎伸  
主 査 須崎陽子  
主 事 亀田幸一

埋蔵文化財 係長 西岡達哉  
文化財専門員 古野徳久  
文化財専門員 宮崎哲治

(財) 香川県埋蔵文化財調査センター

総括 所 長 小原克己  
次 長 川原裕章  
総務 参 事 河野浩征  
副 主 幹 大西誠治  
係 長 多田敏弘

主 査 山本和代  
主任主事 高木康晴  
調査 参 事 梅木正信

主任文化財専門員 廣瀬常雄  
主任文化財専門員 真鍋昌宏  
文化財専門員 西村尋文

(現場作業参加者)

荒川義行、安藤政則、入倉一郎、堺 利数、篠原密夫、砂川正澄、富岡晴美、富田孝則、中川幸夫、中川弘美、福家淳司、間嶋健吉、山坂浩樹、遠藤マサ子、川田安子、堺 カネ子、多田由美子、立石サカエ、谷次義子、中村芳子、六車ふみ子、矢木和子、和田悦子、山田君子、芳澤香代

(整理作業参加者)

東條俊子、三谷和子、松尾優子、徳永貴美、田村里美、門脇範子、松崎千春、香川洋子、白川智子

(編集・校正作業参加者)

葛西 薫、溝渕さや香、角田三保

(参考文献)

香川県教育委員会 1995 『埋蔵文化財試掘調査報告Ⅷ 国道バイパス・県道建設予定地及び県営ほ場整備事業予定地内等の調査』

香川県教育委員会、(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 1996 「寺田・産宮通遺跡」 『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成7年度』

香川県教育委員会、(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 1997 「寺田・産宮通遺跡」 『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成8年度』

(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 1996 『香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成7年度』

(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 1997 『香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成8年度』

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

寺田・産宮通遺跡が所在するさぬき市大川町は、香川県東部の旧大川郡の中央部西よりに位置する。西は寒川町、東は大内町、北は雨滝山山塊を挟んで津田町、南は白鳥町と接する。大川町は、南北及び東の三方を山塊に囲まれ、町中央から西方の寒川町に向かって平野部が広がる。南方の阿讃山脈からはこの平野部に向かって多くの低丘陵が北に細長く延びる。この低丘陵間を梅壇川、古川、爛川等の小河川が北流し、平野北端付近で長見山山系から派生し、平野北端付近で西流する津田川に合流する。そして、雨滝山の山裾を東に迂回し津田湾に注ぐ。



第1図 寺田・産宮通遺跡位置図

本遺跡が所在する地点は大きく2地区に分かれる。古川～爛川間に広がる微高地の北端部に位置する産宮通地区及び、同地点より南に古川を越へ、古川西岸の氾濫原と旧河道Bに挟まれた北西方向に短く延びる微高地の寺田地区とに分かれる。行政区画の上では、産宮通地区がさぬき市大川町富田西大道、寺田地区がさぬき市大川町富田西寺田にあたる。調査区は、南端部をほぼ県道高松長尾大内線に接し、約13～14m幅で、途中古川の氾濫原に分断されるが、北北東に約600mの範囲に直線的に延びる。

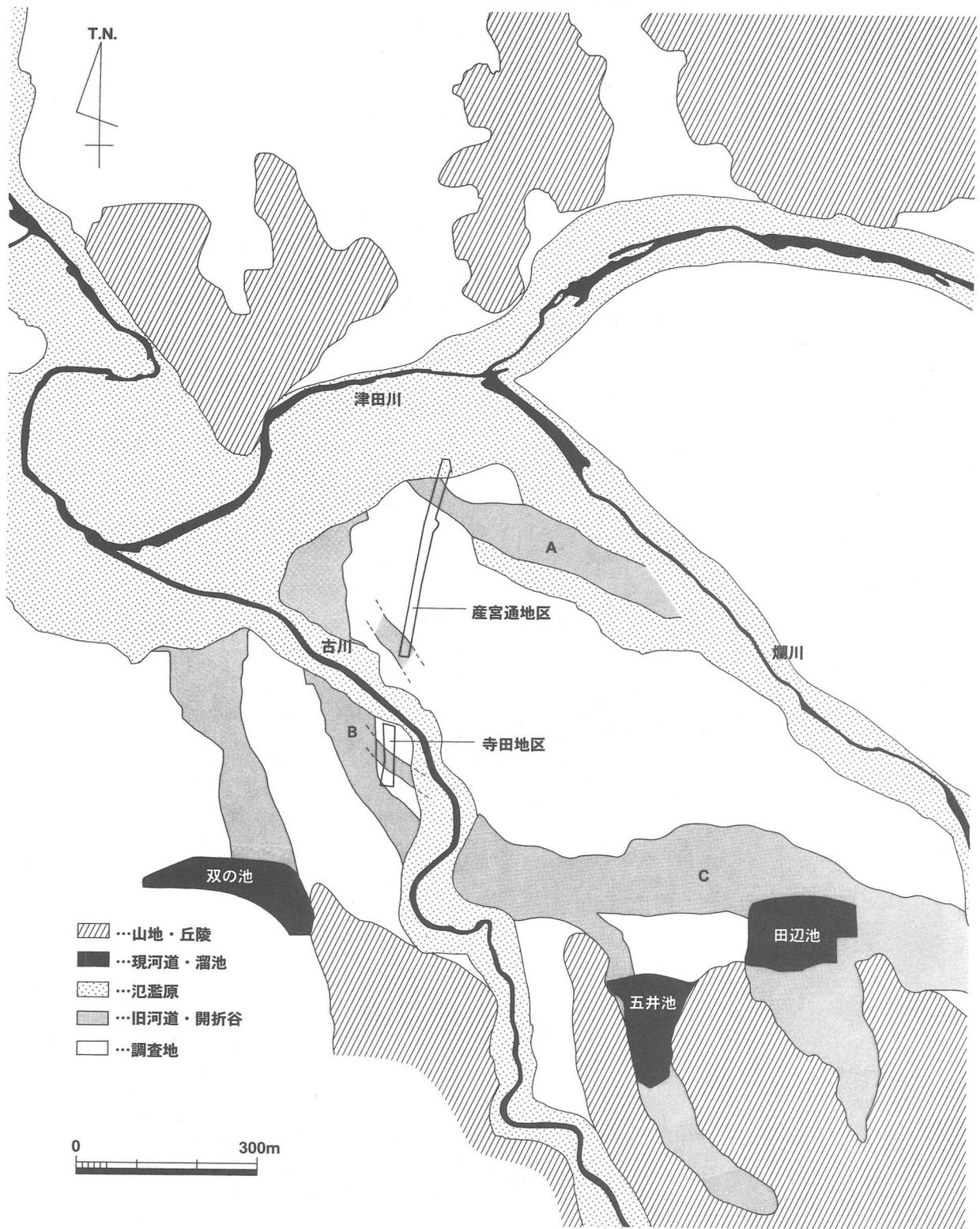
産宮通地区は現地表を観察する限り平坦で、目立った特徴は見あたらないが、北端部で爛川の氾濫原から延びる旧河道Aに含まれる弥生後期及び鎌倉時代の埋没河川からなる第3低地帯、南端部では古川の旧支流か旧河道Bの支流にあたるものと考えられる弥生時代後期の第2低地帯を確認した。寺田地区では調査区のはほぼ中央部で旧河道Bより古川の氾濫原に向けて延びる弥生時代中～後期の小規模な第1低地帯を確認した。なお、開析谷Cは爛川よりほぼ東西方向に向けて延びて古川の氾濫原に交わるが、同地点は旧河道Bが古川の氾濫原に交わる地点でもあり、可能性として旧河道B・Cは爛川の氾濫原より派生する同一の旧河道の可能性が高い。

### 第2節 歴史的環境

本遺跡の所在するさぬき市大川町から寒川町にかけての地域は、弥生時代後期から古墳時代にかけて大規模な遺跡が広がっており、東讃地域の古代の中心的な地域であったことが伺える。

#### 1. 旧石器・縄文時代

旧石器時代の遺構・遺物は確認されていない。縄文時代の遺跡も旧石器時代同様に不明瞭である。少ない事例をあげると、縄文草創期の有舌尖頭器等が、大川町と寒川町で数点表採されている。また、寒川町の森広遺跡から縄文時代後期・晩期の土器片、加藤遺跡から縄文時代後期初頭の土器片、石田高校校



第2図 微地形分類図



第3図 遺跡分布図 (1/40,000)

庭遺跡では、包含層から縄文時代晩期後半の土器片等が出土している。なお、寒川町から大川町にかけての平野部は、かなり厚い沖積層に覆われており、その堆積層下あるいは平野南側の低丘陵上で、今後新たに縄文時代の遺跡が発見される可能性がある。今後の調査成果に期待をるところである。

## 2. 弥生時代

弥生時代前期は不明瞭である。寒川町神崎遺跡で前期後半の壺形土器の表採資料があげられる程度である。弥生時代中期では、寒川町蓑神遺跡で中期末の土器と共に環濠と考えられる3条の溝を検出した。寒川町極楽寺遺跡、石田神社遺跡、天王山遺跡等はいずれも高所に位置する高地性遺跡に属する遺跡と考えられている。弥生時代後期になれば遺跡数は増大する。後期初頭では高地性集落で、寒川町のズバ山遺跡がある。本遺跡に隣接する遺跡としては、本遺跡の200m西方に、後期後半の竪穴住居跡を確認した大川町寺田大角遺跡があり、その関係が注目できる。本遺跡の西方2.0kmには、東讃を代表する後期～古墳時代にかけての拠点集落である森広遺跡群がある。遺跡は県道高松長尾大内線の沿いに分布しており、西から布勢遺跡、森広天神遺跡、石田高校校庭遺跡、加藤遺跡など東西約1.5kmの範囲に広がる。森広天神遺跡から巴型銅器8点、加藤遺跡から扁平紐式袷袷文銅鐸7点等青銅器を多種・多様に保有していた地域でもあった。なお、出土地点に不明瞭な点があるが、森広遺跡に隣接した石田神社遺跡から平形銅剣3口が出土しており、森広遺跡群との関係が注目できる。

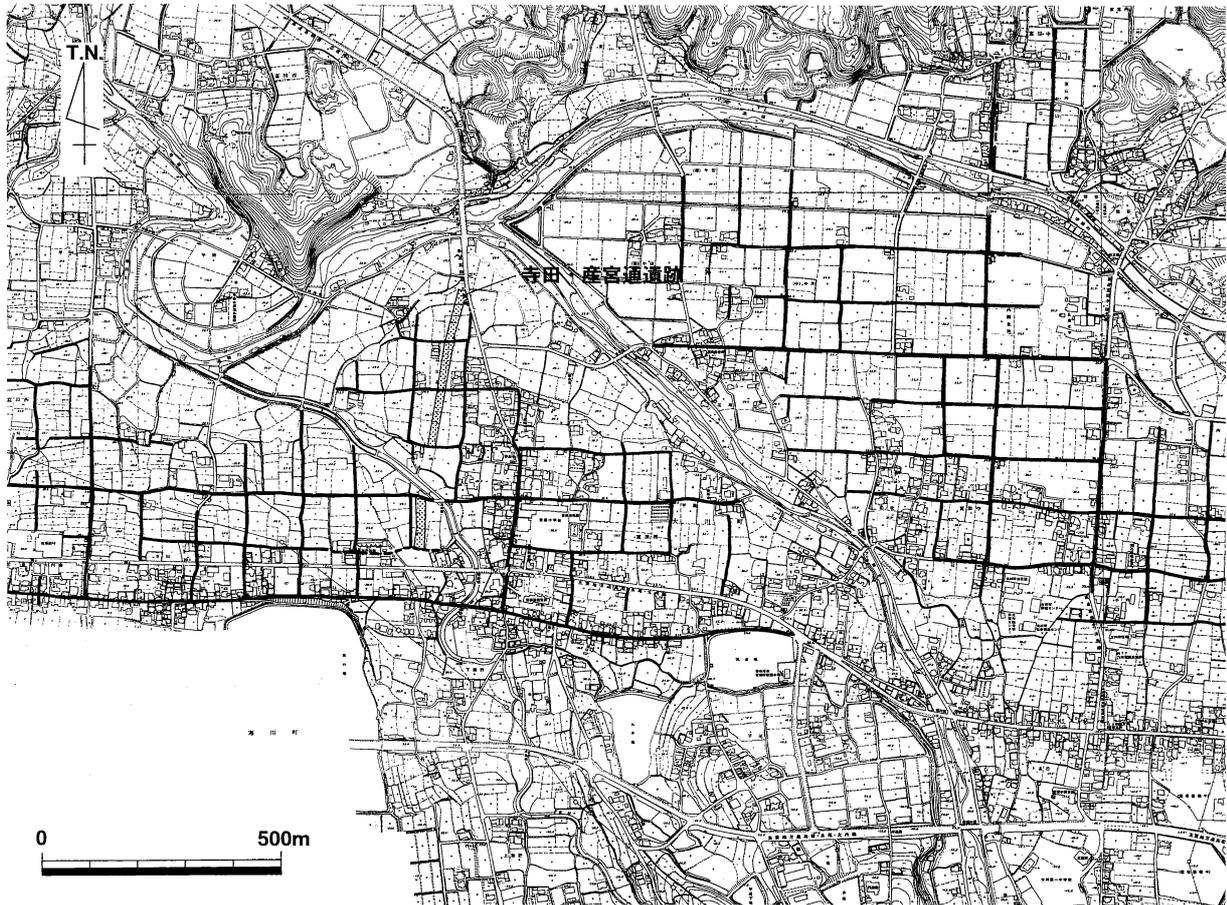
本遺跡の北には、標高253mの雨滝山が位置する。その雨滝山の西麓から南麓にかけて、弥生時代後期末の墳丘墓が分布している。主な遺跡としては、方形の墳丘墓5基・土壙墓・壺棺等を確認した古枝6号遺跡、円形の墳丘墓・竪穴式石室等を確認した奥10・11号等がある。また、本遺跡の約400m北には、方形の墳丘墓・大型土壙墓・無蓋竪穴式石室・箱式石棺・多数の壺棺等からなる集団墓群の大井遺跡があり、地理的に本遺跡と隣接する点より、その関係が注目できる。

## 3. 古墳時代

古墳時代前期には雨滝山周辺に集中して前期古墳が築造される。寒川町域では奥3号（前方後円墳）13号（前方後円墳）14号（前方後円墳？）、大川町域では古枝古墳（前方後円墳）川東古墳（前方後円墳・積石塚）等があげられる。なかでも奥3号墳は、椿井大塚山古墳と同形の三角縁神獸鏡が出土しており、機内政権との関係が注目できる。また、古枝古墳からは方格規矩四神鏡が出土している。古墳時代中期には甲冑等の遺物が出土した寺尾古墳群、大井七つ塚古墳群等の古式群集墳が築造される一方、大規模な古墳群は、津田湾沿岸や富田茶臼山古墳が知られる。富田茶臼山古墳は全長140m、3段に築造された四国最大規模の前方後円墳である。埋葬施設は未発掘のため定かではないが、墳丘上に円筒埴輪、家形埴輪それに葺き石があることが知られている。また、近年ほぼ同時期に築造された3基の陪塚が確認されている。古墳時代後期には森広天神古墳、東讃最大の横穴式石室をもつ中尾古墳など有力者が埋葬された大型円墳が築造されるほか、天神山古墳群、蓑神古墳群、蓑神東古墳群、大末古墳群、相の山古墳群、極楽寺古墳群などの群集墳が形成される。

## 4. 古代

さぬき市大川町・寒川町周辺は条里型地割が比較的明瞭に残っている地域である。本遺跡の調査地内及び隣接地においても坪境線が推定できる。また、本遺跡の南方には南海道のルートが推定されている。



第4図 寺田・産宮通遺跡周辺条里型地割復元図

周辺の坪境線の状況より、寺田地区の南方約110mの旧街道上が南海道のルートとなる可能性が高い。当該地周辺の南海道のルート上には讃岐六駅のうち「松本駅」が推定されている。詳細な位置は今後の課題であるが、本遺跡の東方、現在の田面・石仏・東町・千町付近に推定する案が有力である。南海道沿道の遺跡として下り松麿寺跡、極楽寺跡などの古代寺院があげられる。本遺跡の東1.5kmには下り松麿寺跡がある。この寺院からは、素弁蓮華文軒丸瓦・細単弁蓮華文軒丸瓦・細弁蓮華文軒丸瓦・複弁蓮花文軒丸瓦・単弁蓮華文軒丸瓦・均整唐草文軒平瓦など、奈良時代から平安時代の瓦類が出土している。極楽寺跡は白鳳期の四天王寺式伽藍配置が想定され、白鳳期～平安時代までの単弁蓮華文軒丸瓦・重弧文軒平瓦・偏行唐草文軒平瓦・シビ片等が出土した他、宝珠形輪頭鉄錫杖、奈良興福寺金堂鎮壇具であった唐花双鷺八花鏡の踏み返し鏡等が出土している。両古代寺院とも、本遺跡に近接しその関係が今後の課題となってくるであろう。なお、南海道沿いではないが、本遺跡より北西へ約2.0kmの地点で、白鳳期の寺院跡である石井麿寺跡がある。この寺は現在塔心礎が残されており、複弁蓮華文軒丸瓦・四重弧文の軒平瓦や藤原京式偏行唐草文軒平瓦、シビ片等が出土している。軒丸瓦は畿内の川原寺や山田寺の形式の影響を受けており、畿内との強い結びつきがうかがわれる。なお、この寺院跡は大川・寒川の平野部と津田湾を結ぶルート上にあり、同ルートを掌握した集団による造営の可能性が高い。

集落跡の調査例もここ数年増加傾向にあり、主な調査をあげれば、大川町の千町遺跡、寒川町の石田高校校庭遺跡、本村・横内遺跡等の調査例があげられる。千町遺跡は本遺跡同様推定南海道に隣接し、

竪穴住居跡、建物群等を検出した。石田高校校庭遺跡は、奈良時代前半の溝、建物跡等を検出した。本村・横内遺跡では奈良～平安の掘立柱建物跡等の遺構・遺物が報告されている。森広遺跡では7世紀中葉頃と8世紀代の掘立柱建物群を検出している。8世紀代の建物が周辺の条里型地割方向に揃えている事に対して、7世紀中葉の建物が真北よりやや西に振っており、この地域の条里型地割りの施工時期を伺う上で良資料といえる。

平安時代の文献中でさぬき市大川町に関連する二・三の記録がある。平安時代中期、承平年間（940年頃）にできた『和妙類聚抄』では寒川郡は七郷として難波・石田・長尾・造田・鴨部・神崎・多和の七郷が掲載されている。和名抄の「難波郷」は寒川郡の平野部の東端、現在の大川町と白鳥町五名の地を合わせた区域であったようである。また、難波郷はその後「富田郷」と呼ばれるようになる。平安後期では、安楽寿院領富田庄の記録がある。安楽寿院は京都伏見竹田にある真言宗の寺院で、この寺院に山城・河内・淡路などで14箇所荘園を鳥羽上皇から施入された。讃岐では野原庄（高松）、多度庄（多度津）、富田庄（大川）等がある。「富田庄」の範囲はかつての難波郷（富田・松尾・五名の三村の地）、現在の大川町全域と五名の地を含む範囲が推定されている。

## 5. 中世

平安後期に立券された安楽寿院領富田庄は、御願寺領として鎌倉時代にも皇室関係に伝領されていたが、後醍醐天皇の代に建武中興が挫折すると北朝方によって処分される。それ以降は記録がなく不明であるが、他の荘園同様、戦国時代にこの荘園も崩壊していったものと考えられている。

室町時代の戦国争乱期の東讃地域は、細川四天王の一人安富氏と、在地豪族の出である寒川氏を中心として統治される。安富氏は応安の頃細川頼之に従って讃岐に入り、長祿年間（1457～60）に寒川氏より寒川郡の鶴羽郷・鴨部郷・志度郷を分割され、大川・津田・寒川町にわたる雨滝山に築城し東讃支配の拠点とした。応仁の乱後は、讃岐十三郡のうち東讃七郡の守護代にもなり、東讃の中心的勢力になる。また、雨滝城の周辺には、城山（六車城）・西城村・大井城・石田城等の支城を整備した。その後、安富氏は土佐の新興勢力である、長宗我部氏に対して阿波の三好氏とよしみを結び、三好・十河氏を中心とした反長宗我部陣営の一員となる。後に、土佐の長宗我部氏の東讃侵攻の際には、雨滝城周辺も主戦場となり、三好氏と十河氏を中心とした反長宗我部勢力との間で激しい攻防戦が繰り返される。そして、天正11年（1583）長宗我部軍の攻撃を受け雨滝城は落城することになる。なお、当遺跡の隣接する富田西産宮神社にも長宗我部氏が屯した伝承がある。また、調査地周辺の数地点で塚の跡が確認できる。昭和45年大川町教育委員会が主体となり、雨滝城の発掘調査を実施している。その結果、4間×5間の礎石建物跡、瓦類・明銭・釘・陶磁器等が出土した。いずれも火災にあった形跡があり、戦火により焼失した可能性が指摘されている。

当該地の中世集落の調査例は本遺跡の調査例を含めて、数例を数えるだけである。主要なものでは、石田高校校庭内遺跡において12～13世紀の集落跡、布勢遺跡と同様な時期の遺物を多量に含む溝等である。今後の資料増加を待ちたい。

（参考文献）

大川町 1978『大川町史』

寒川町史編集委員会 1985『寒川町史』

- 香川県 1988「第1巻 通史編 原始・古代、第2巻 通史編 中世」『香川県史』
- 大川町教育委員会 1990『富田茶白山古墳発掘調査報告書』
- 高松市歴史資料館 1992『第11回 特別展 讃岐の古瓦展』
- 香川県教育委員会 1993『石田高校校庭内遺跡』
- 香川県教育委員会 1995『千町遺跡発掘調査報告書—富田駐在所改築に伴う事前調査—』
- 寒川町教育委員会 1997『大型店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—森広遺跡—』
- 香川県教育委員会、(財)香川県埋蔵文化財調査センター 2000「本村・横内遺跡」『県道改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—八丁地遺跡 本村・横内遺跡—』

## 第Ⅲ章 調査の成果

### 第1節 調査区

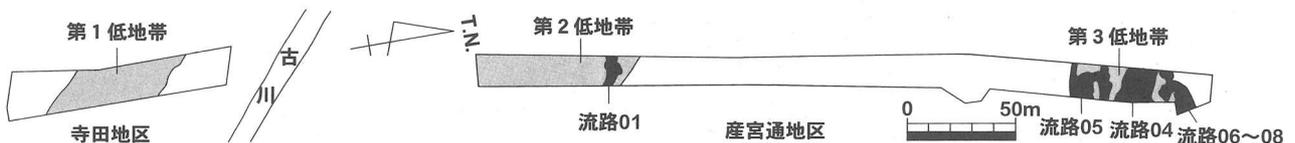
調査対象地は津田川にかかる落合橋付近から南南西方向に直線的に延びて、県道高松長尾大内線に至る延長約600m、幅約13m、面積5,948m<sup>2</sup>を測る。北端付近は津田川の氾濫原に含まれる。中央南寄りの位置には古川の氾濫原が幅110m程存在し、同地区が調査対象から外れているため、調査対象地は大きく南・北2地区に区分される。

調査区は県道高松長尾大内線に隣接する南端より北端にかけて、Ⅰ区～Ⅷ区までの8区分し、道路センターを基にグリッドを設定した。グリッドは20m方面で南北に数字、東西にアルファベットを付してグリッドの名称とした。なお、調査対象地が、古川の氾濫原を境に南北に2分され、遺跡の様相が地理的にも内容的にも異なるため、地元の地名をとって南側を「寺田地区・(Ⅰ・Ⅱ区)」、北側を「産宮通地区(Ⅲ～Ⅷ区)」と仮に呼称し、地区別に報告することにする。

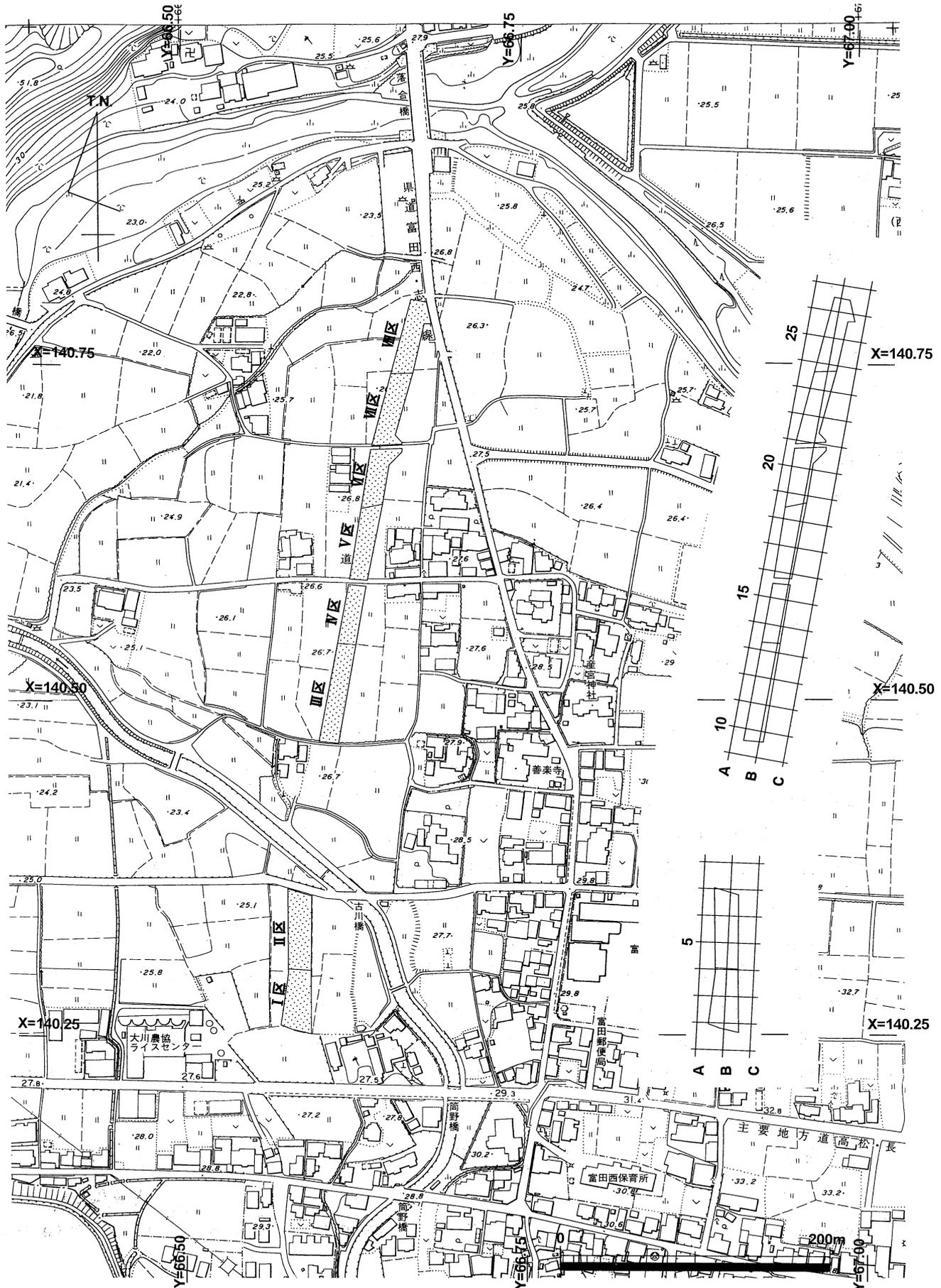
### 第2節 基本層位

古川西岸の氾濫原と旧河道Bに挟まれた北西方向に短く延びる微高地の寺田地区では、推定南北170.0m、東西60.0mの微高地上に展開している。調査区のほぼ中央部で旧河道Bより古川の氾濫原に向けて延びる弥生時代中～後期の小規模な第1低地帯を確認した。第1低地帯は、Ⅰ区北半部よりⅡ区南半部にかけて浅い谷状の地形を呈し、幅約30m、深さ約0.5mを測り、北西方向に延びる。堆積層は上層がシルト、下層が砂質土からなる。遺構面は平均でTP26.0m程の高さに展開している。なお、第1低地帯では遺構面が上・下2面存在する。上層遺構面では、古墳時代後期末以降の遺構が展開するが、北辺部で弥生時代後期末の住居も所在することから、比較的短期間で埋没したようである。また、下層遺構面は出土遺物が少なく詳細な時期は比定できないが概ね弥生時代中期後半～後期前半の遺構が展開する。ベースは地点により異なるが、概ね黄褐色のシルトないし砂礫層からなる。

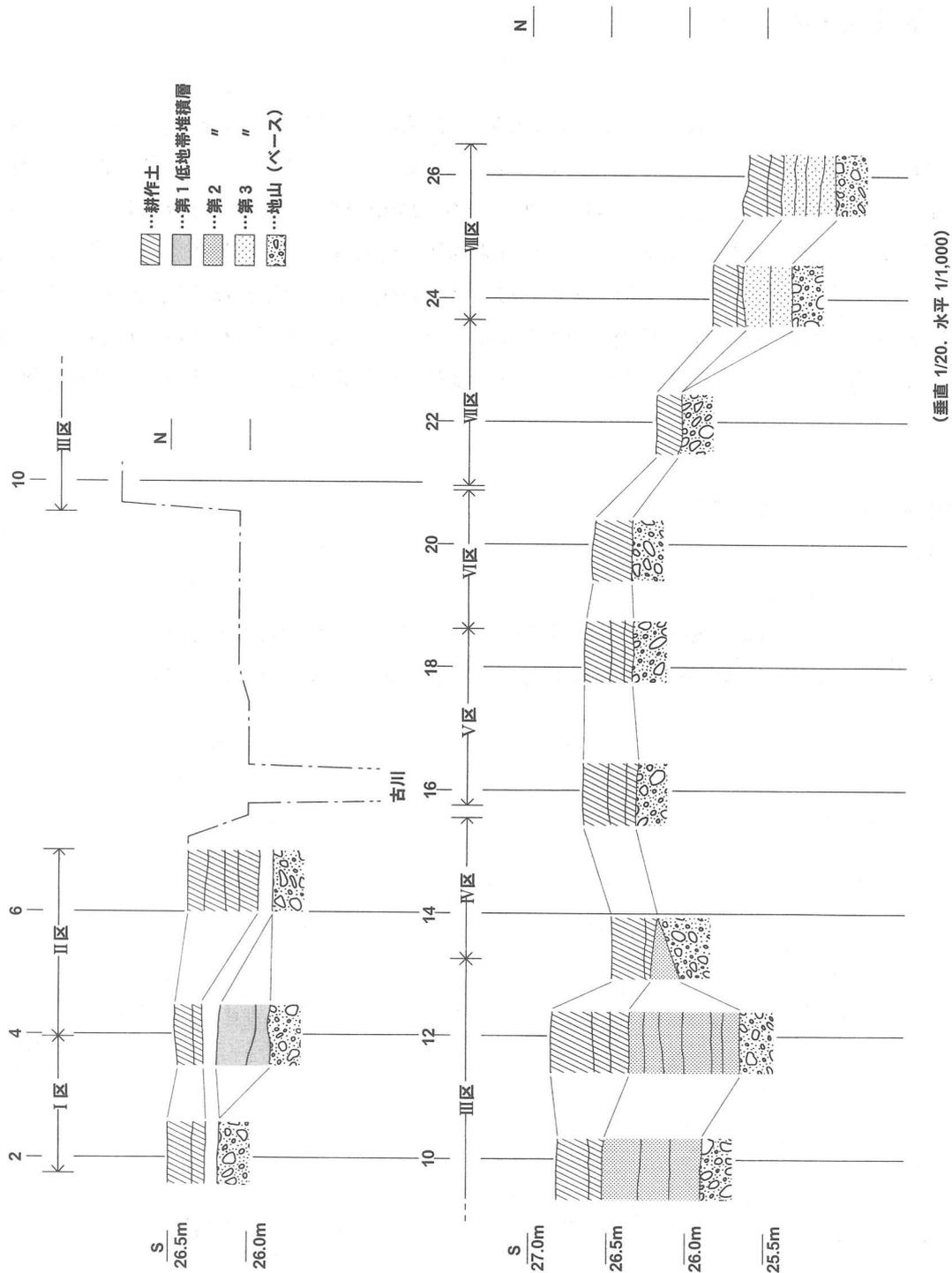
古川～欄川間に広がる微高地の北端部に位置する産宮通地区は、現地表を観察する限り平坦で、目立った特徴は見あたらないが、北端部で欄川の氾濫原から延びる旧河道Aに含まれる弥生後期及び鎌倉時代の埋没河川からなる第3低地帯、南端部では古川の旧支流か旧河道Bの支流にあたるものと考えられる弥生時代後期の第2低地帯を確認した。第2低地帯は、産宮通地区の南端部(Ⅲ区)に位置し、幅約40.0m、深さ約1.4mを測り、北西方向に延びる。堆積層は十数層に細分でき、おおむね上位が淡灰～茶系



第5図 寺田・産宮通遺跡地形分類模式図



第6図 寺田・産宮通遺跡調査区配置図



第7図 基本層位柱状図

の粘質土で下位が淡黒色系の粘質土からなる。なお、上位では中世の畑地の跡と考えられる畝溝群、下位層では弥生後期後半を中心として多量の遺物が出土した。第3低地帯は、産宮通地区の北端部（Ⅶ・Ⅷ区）に位置し、幅約54.0m、深さ約0.5mを測り、北西方向に延びる。低地帯内には弥生時代後期前半頃の流路4、鎌倉時代の流路5～8等の小流路を検出した。遺構面は南端部より北端部にかけて緩やかに傾斜し、南端のⅣ区でTP26.6m、北端のⅧ区でTP25.6mを測る。ベースは地点により異なるが、概ね黄褐色のシルトないし砂礫層からなる。

### 第3節 寺田地区の調査

#### 1. 概要

寺田地区からは、縄文時代後期、弥生時代前期・弥生時代中期後半～古墳時代前期、古墳時代後期末、鎌倉時代等の遺構・遺物を検出した。このうち縄文時代後期、弥生時代前期の資料は、若干の遺物が出土したのみであり、明確な遺構には恵まれず、周辺に当該期の遺跡が展開する可能性を指摘するに留まる。

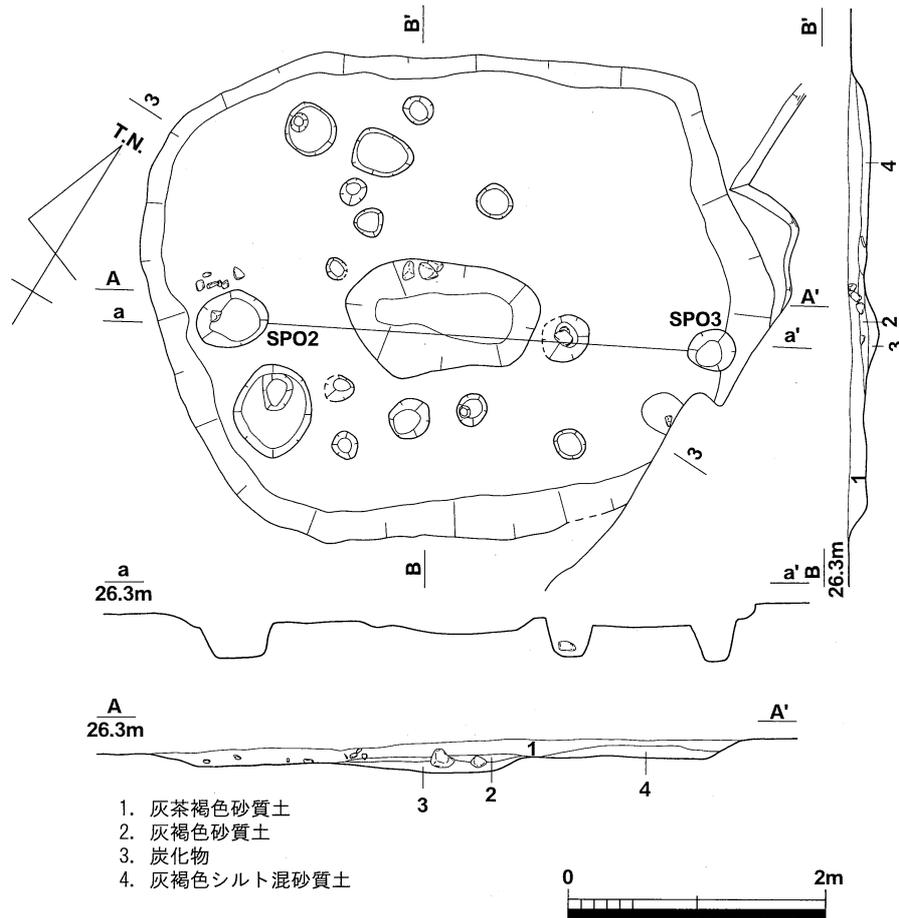
弥生時代後期後半～古墳時代前期の遺構は、第1低地帯周辺で竪穴住居跡・溝等の集落を構成する遺構を検出した。また、第1低地帯の下層遺構面上からは、弥生時代中期後半頃以降の竪穴住居跡を検出した。古墳時代後期末頃の遺構は、第1低地帯の上層遺構面上から、大型の掘立柱建物を中心とした屋敷跡を構成する遺構群を検出した。また、鎌倉時代では低地帯上層遺構面上より、大型の掘立柱建物群を検出した。

#### 2. 弥生時代中期後半～古墳時代前期

##### (1) 竪穴住居跡

SH01 (第8・9図, 図版2・23)

I区中央の東壁際のB2・3区で検出した小型の竪穴住居跡である。平面形は不整形な隅丸形状を呈し長径約5.0m×短径約3.8m、深さ約0.2m、主軸方位はN63°Eを測る。東辺の一部は対象地から外



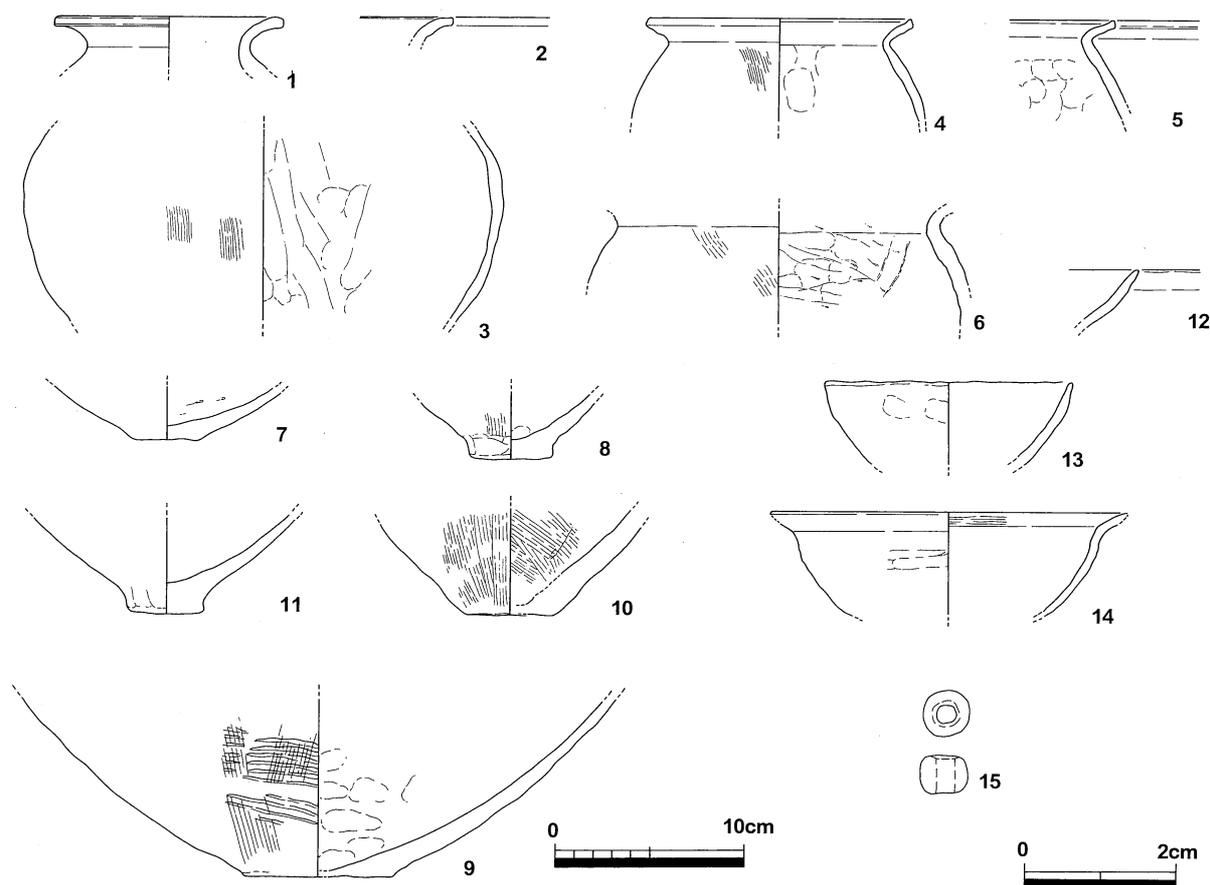
第8図 SH01平・断面図

れるため、全体の約5/6を検出した。面積は推定15.4m<sup>2</sup>を測る。埋土は灰茶褐色の砂質土である。主柱穴は東西で2主柱穴検出した。主柱穴は径0.4~0.6m、深さ約0.3mを測る。床面中央には楕円形状の炉跡を検出した。長径1.5m×短径0.8m、深さ0.1mを測る。炉跡内からは炭等の炭化物が比較的多量に検出された。

出土遺物としては弥生土器及びガラス玉1点等がコンテナ1箱出土した。図化できる資料を15点抽出した(第9図1~15)。(1~3・7~9)は壺形土器である。(1・2)はラッパ状に外上方に開く壺の口縁部、(3)は体部である。(7~9)は底部である。(9)はかなり大型の壺の底部である。外面のタタキ調整、丸底気味の形態より、弥生後期末頃の特徴を持つ。(4・6・10)は甕型土器である。(4~6)は甕の上半部、(10)は底部である。(11~14)は鉢型土器である。(11)は甕の可能性も考えたが、器壁が薄く小型の土器と考えて、鉢と分類した。(15)はガラス玉で、1点のみ出土した。

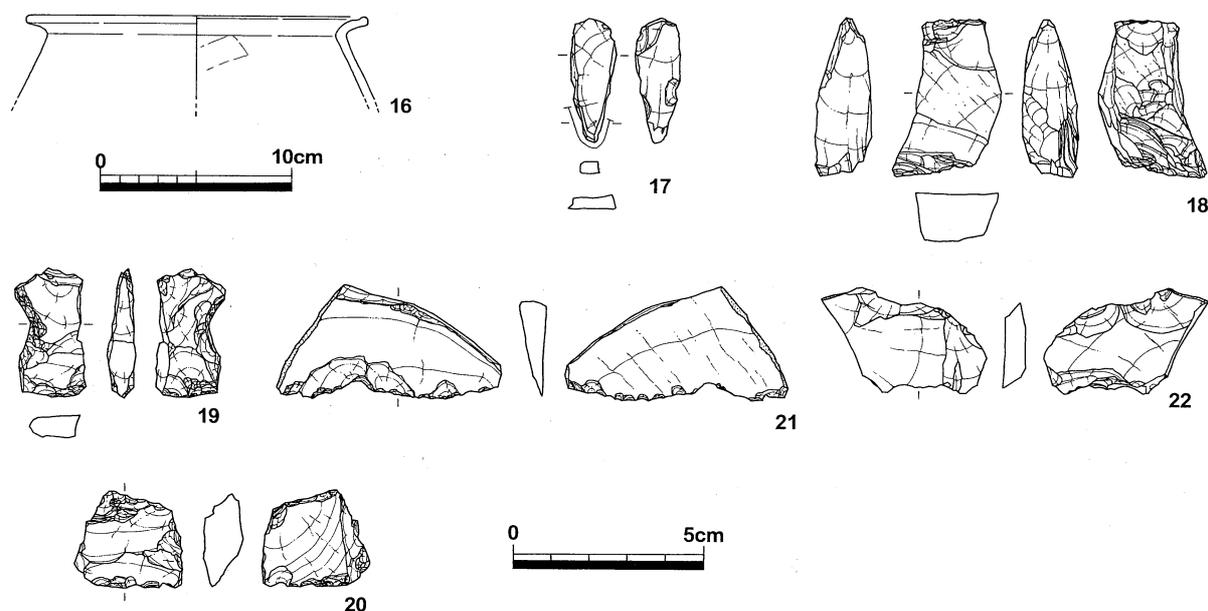
SH02 (第10・11図, 図版2・39)

I・II区の境界、B3・4区の第1低地帯下層遺構面上で検出した竪穴住居跡である。平面形は円形を呈し径約5.9mを測る。この住居跡は後世の削平をかなり受けていて、深さは約0.1mしか残っていない。また、東半部は対象地から外れるため、全体の約1/2を検出した。面積は推定で約28.3m<sup>2</sup>を測る。短期間で埋没したためか、上層の堆積層と遺構の埋土とが区別できなかった。外周には幅約0.2m、深さ0.05mの壁溝が巡る。主柱穴は推定6主柱穴のうち3主柱穴を検出した。主柱穴は径約0.3m、深さ0.4mを測る。床面中央には不整楕円形状の炉跡の西半部を検出した。長径1.2m×短径0.8m、深さ0.2mを測る。炉跡内からは炭化物がさほど出土していないため、住居の廃棄時に炭化物を除去したものと考



第9図 SH01出土遺物





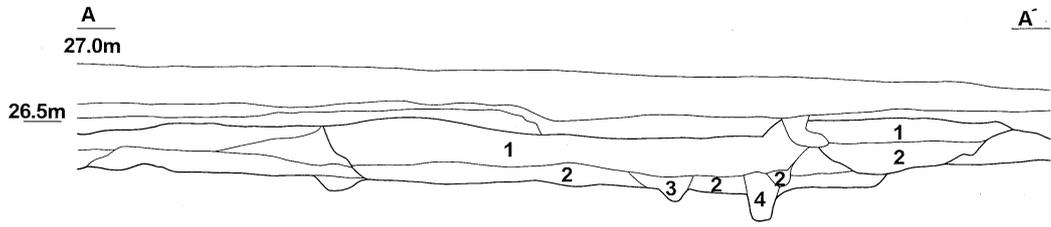
第11図 SH02出土遺物

えられる。なお、住居跡の外周には住居の周囲を巡るSD03を検出した。出土遺物は少なく弥生土器及び石器類等が少量出土した（第11図16～22）。（16）は炉跡内より出土した、弥生中期後半頃の甕型土器の上半部である。（17～22）は上層より出土したサヌカイト製の石器類である。（17）は縦長状の剥片を素材にした石錐である。先端部には使用痕が顕著に残る。（18・19）は楔形石器である。（19）の側面には抉れ状の凹が施されている点より打製の石包丁を転用した楔形石器と考えられる。（20）は楔形石器の素材である。（21）は横長の剥片を素材にした削器、（22）は削器の破損品と考えられる。これらの遺物より時期を決めるのは少し無理があるが、検出状況及び出土した土器の形状等より、SH02は弥生中期後半以降の可能性が高い。

#### SH03（第12・13図，図版3・23・39）

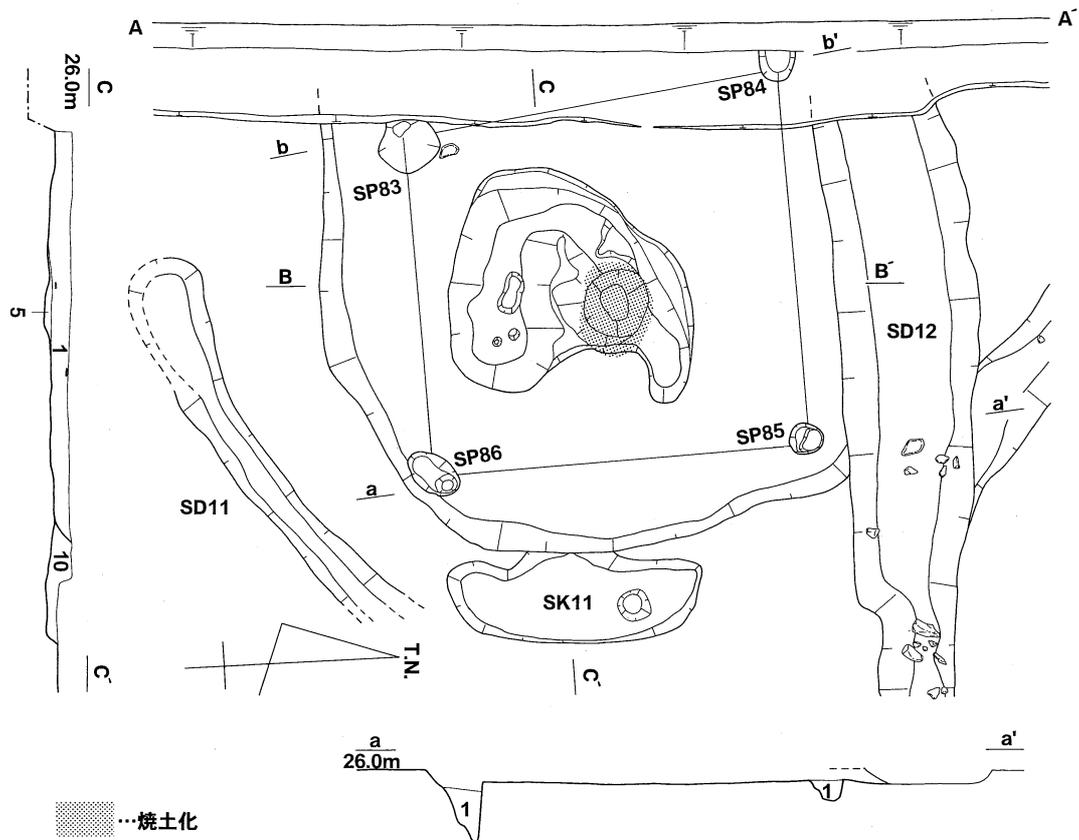
II区中央西壁よりのA5区で検出した堅穴住居跡である。南にはSH03の周溝の可能性のあるSD11が、南辺部を巡る。なお、SH03が所在する地点は、第1低地帯の北辺部にあたり、SH03も一部その埋土を切り込んでいる。そのため、第1低地帯は、SH03が構築される頃にはかなり埋没が進んでいた可能性が高い。平面形は不整形な隅丸形状を呈し長径4.2m以上×短径3.5m以上、深さ約0.4m、主軸方位はN4°Wを測る。北辺ではSD12が切り込み、西辺は対象地から外れるため、全体の約3/4を検出した。面積は推定で約17.8m<sup>2</sup>を測る。埋土は暗灰褐色の砂質土で、床面には貼り床が認められる。支柱穴は四隅で4支柱穴検出した。支柱穴は径約0.3m、深さ約0.4mを測る。床面中央には不整楕円形状の炉跡を検出した。長径2.3m、短径1.0m、深さ0.4mを測る。炉跡内からは焼土と炭化物からなる焼土塊が比較的多量に出土した。

出土遺物としては、弥生土器及び石器等がコンテナ1箱出土した。図化できる資料12点抽出した（第13図23～34）。これらの資料中（25・32・33）の壺及び鉢は炉跡から出土している。（23～25）は壺底部である。（23）の底部外外面にはヘラ削りが施されている希な事例である。（26・27）は高杯である。（26）は高杯の杯部、（27）は高杯脚部の柱状部である。（28～33）は鉢である。（30）の底部外面には木葉痕が認められる。（32）の鉢は炉跡から出土した鉢であるが、接合する破片中に、一部二次加熱を受け

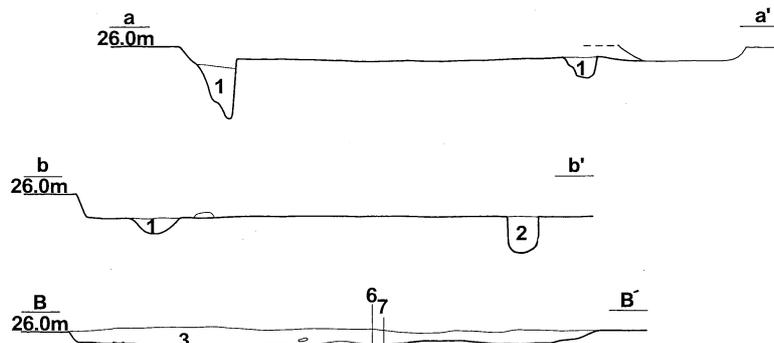


- SH03
1. 暗灰褐色砂質土
  2. 灰褐色砂質土 (貼床部)
  3. ピット, 灰褐色砂質土 (粗砂多)
  4. ピット, 灰黄色砂質土 (主柱穴)

- SD12
1. 灰茶色砂質土
  2. 灰褐色砂質土



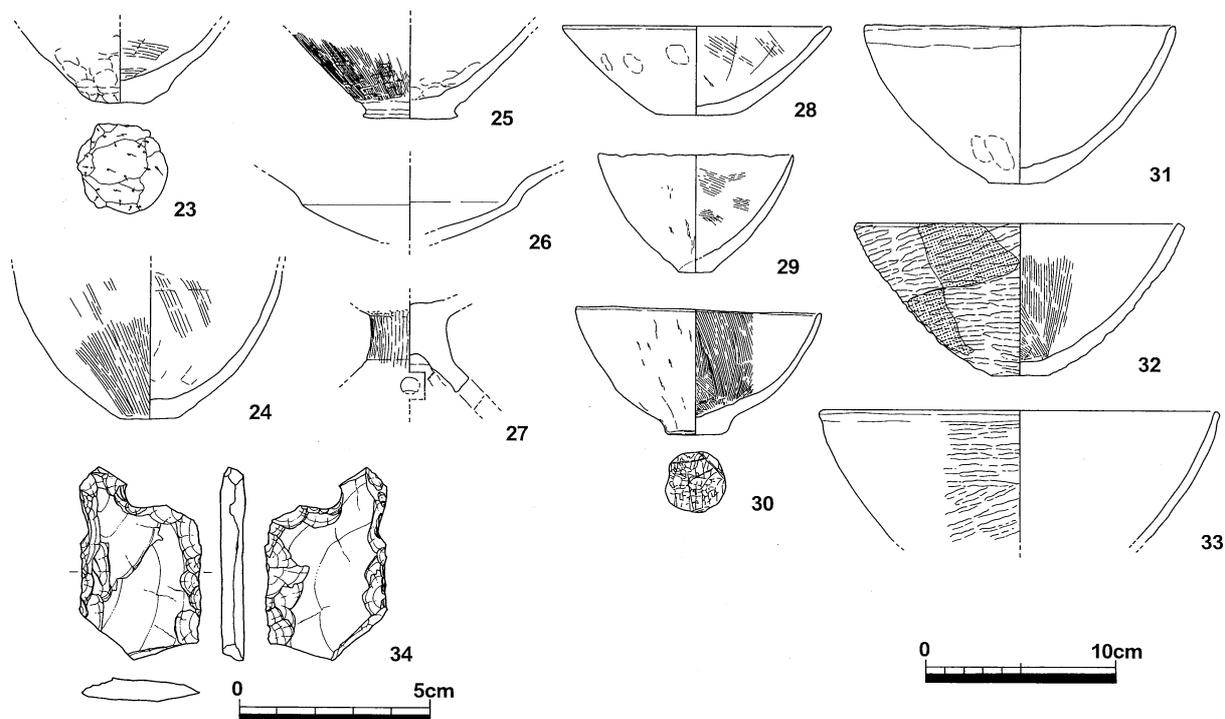
...焼土化



1. 淡灰褐色土
2. 淡黒色砂質土
3. 淡褐色砂質土 (粗)
4. 淡褐色砂質土
5. 淡黒褐色砂質土 (炭化物・焼土片を含)
6. 炭
7. 灰褐色砂質土 (焼土ブロックを多量に含)
8. 暗灰褐色砂質土 (炭小ブロックを多量に含)
9. 淡灰色砂質土 (炭片を含)
10. 暗灰褐色砂質土



第12図 SH03平・断面図



第13図 SH03出土遺物

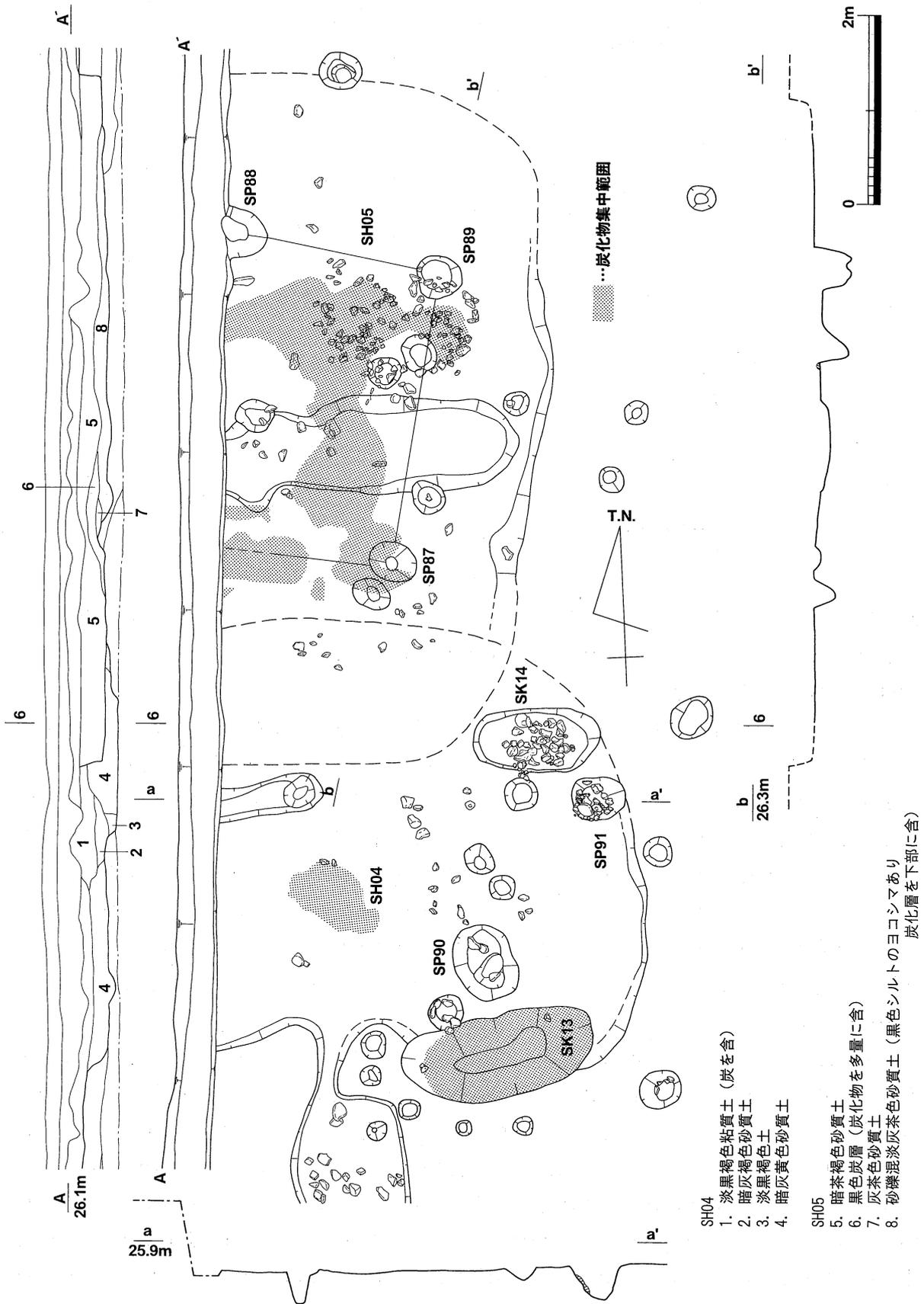
た痕跡を残す破片が認められる。そのためこの鉢は、破壊後に炉の中に廃棄し、一部が二次加熱を受けたものと考えられる。(34)はサヌカイト製の打製石包丁片である。

#### SH04 (第14・15図, 図版3)

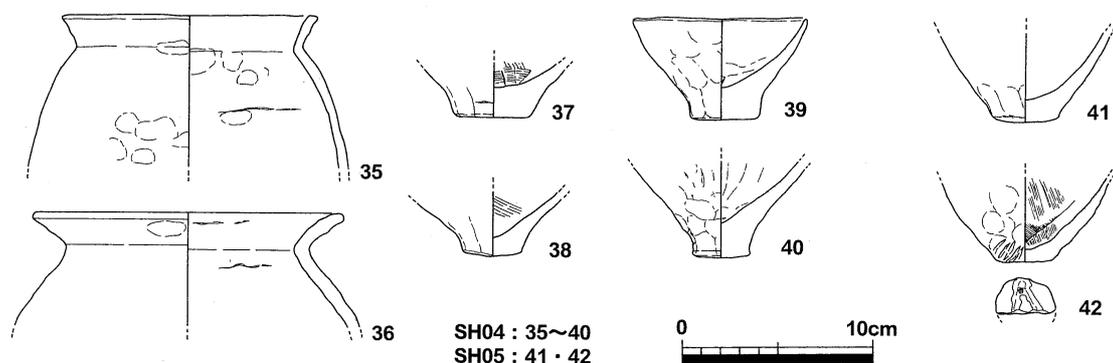
Ⅱ区のA5区で検出し、SH05、SK13・14等に切込まれた不整形な竪穴住居跡である。SH05同様に上面プランが不明瞭であったため、推定する部分が多い。西半部は対象地から外れるため、全体の約1/2を検出した。平面形は不整形な長楕円形状を呈するものと考えられ、長径約4.7m以上×短径約4.4m、面積は推定で約24.9㎡を測る。埋土は4層に細分できる。床面上からは明確な主柱穴が検出できなかったが、南東隅のSP90は配置・規模等主柱穴の可能性はある。また、この住居の床面上からは多量の炭化物が検出できた。なお、この住居跡の南端部には排水溝としてSD13が備わる。出土遺物としては、弥生土器がコンテナ0.5箱出土した。図化できる資料6点抽出した(第15図35~40)。(35・36)は弥生後期後半頃の甕の上半部である。(37~40)は鉢で、(39)は鉢の中でもかなり小型品である。

#### SH05 (第14・15図, 図版3)

Ⅱ区のA6区で検出した、SH04を切込む不整形な竪穴住居跡である。上面プランが不明瞭であったため、推定する部分が多い。西半部は対象地から外れるため、全体の約1/2を検出した。平面形は隅丸形状を呈するものと考えられ、1辺約7.0m、面積は推定で約30.4㎡を測る。埋土は4層に細分できる。床面上から3主柱穴を検出した。主柱穴は径約0.4m、深さ0.2~0.4mを測る。床面中央には長径3.0m×短径1.0m、深さ0.1mを測る、東西方向に延びる長楕円形状の浅い落ち込みを検出した。なお、この住居の床面上からは炭化物が広範囲に検出できた。そのため、この住居は焼失家屋と考えられる。出土遺物としては、弥生土器が少量出土した。図化できる資料2点抽出した(第15図41・42)。(41・42)伴に甕の底部に分類したが鉢の可能性もある。(42)の底部外面には2条の直線状の圧痕が認められる。



第14図 SH04・05平・断面図



第15図 SH04・05出土遺物

SH06 (第16~18図, 図版4・24・39)

Ⅱ区中央東壁より、B5・6区で検出した大型の竪穴住居跡である。平面形は不整形な円形を呈し径約7.2m、深さ約0.3mを測る。東半部は対象地から外れるため、全体の約1/2を検出した。面積は推定で約39.9m<sup>2</sup>を測る。支柱穴は推定4支柱穴のうち2支柱穴を検出した。支柱穴は径約0.2m、深さ0.2mを測る。床面には南よりの位置に、東西主軸で長楕円形状の1号炉跡、ほぼ中央部に不整形円形の2号炉跡が検出された。1号炉跡は長径2.0m×短径0.9m、深さ0.2mを測る。2号炉跡は長径1.0m×短径0.9m、深さ0.3mを測る。1・2号伴に埋土は淡黒色の炭層が堆積していた。なお、この炉跡はその形状より、主に播磨地域で見られる「10型中央土坑」と呼ばれる遺構に類似するものと考えられる。

出土遺物としては、中央の炉跡の上面一帯からからは一括廃棄で、多量の弥生土器と少量の石器類がコンテナ8箱出土している(第17・18図43~83)。(43~52)は床面直上の遺物である。(43・44)は弥生後期後半の壺の上半部、(46~49)は底部である。(48)は下川津B類に類似する。(45・50)は甕である。(45)の甕は体部がかなり球体化していて、後期末に近い特徴を有している。(51)は鉢、(52)は脚台付製塩土器の脚台部である。内陸部からの出土例として希な資料である。胎土は角閃石を多量に含み下川津B類の胎土に類似する。(53~83)は土器溜りの遺物である。(53~58・73)は弥生後期後半頃の壺である。(73)の底部外面には木葉痕が認められる。(59~72・74)は甕である。口縁は外上方に開き、体部外面にハケ・タタキ調整を施し、底部は平底の甕が主体を占める。(70)の甕底部は、丸底であり土師器に近い形態である。いずれの土器も弥生後期後半~末頃の特徴を有している。なお、(61・67)の甕は下川津B類の胎土に類似している。(71・74)の底部外面には木葉痕が認められる。(75・76)は高杯の杯部(77~79)は高杯の脚部である。(80~82)は鉢、(83)はサヌカイト製の石鏃である。

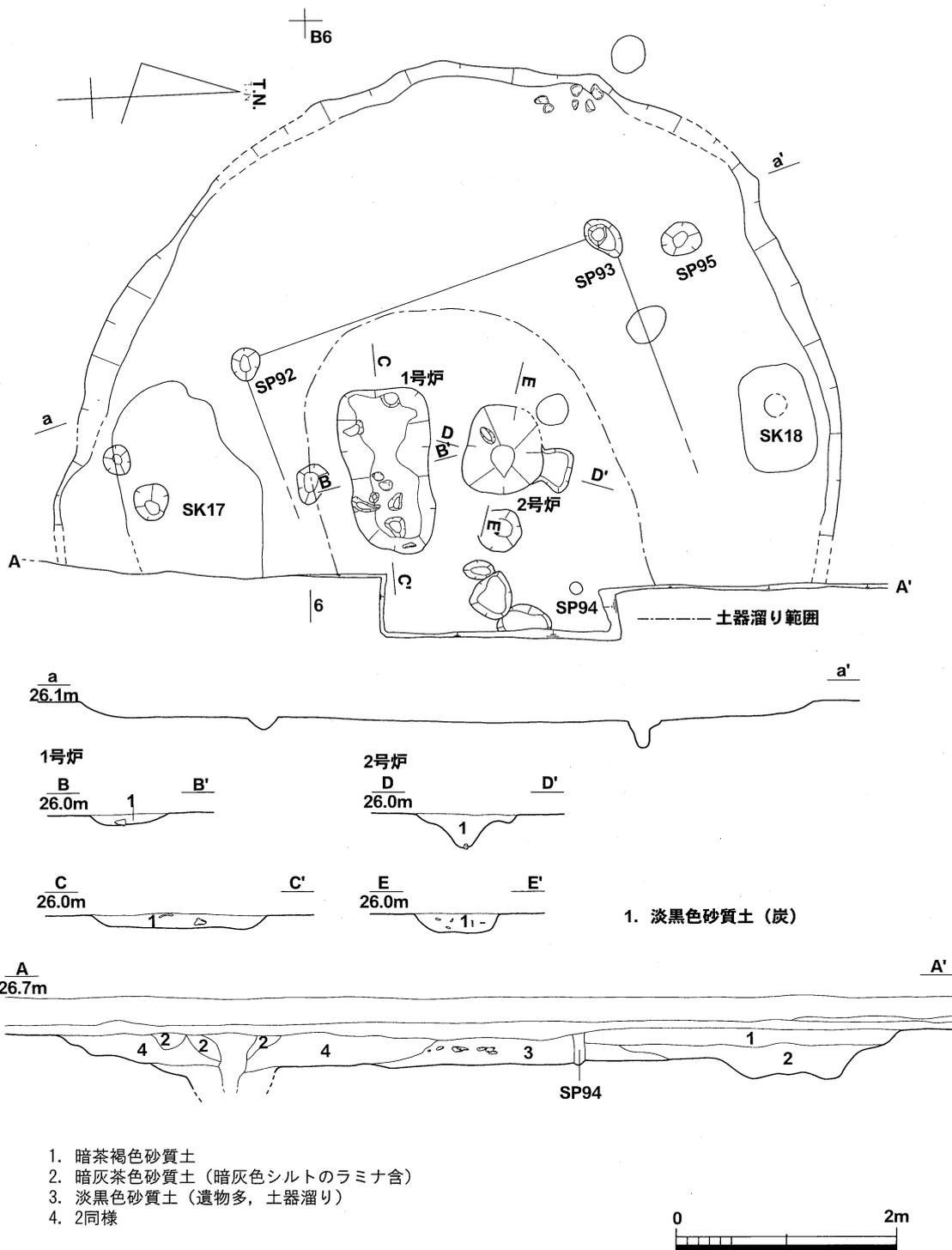
(2) 柱穴

SP01 (第19図)

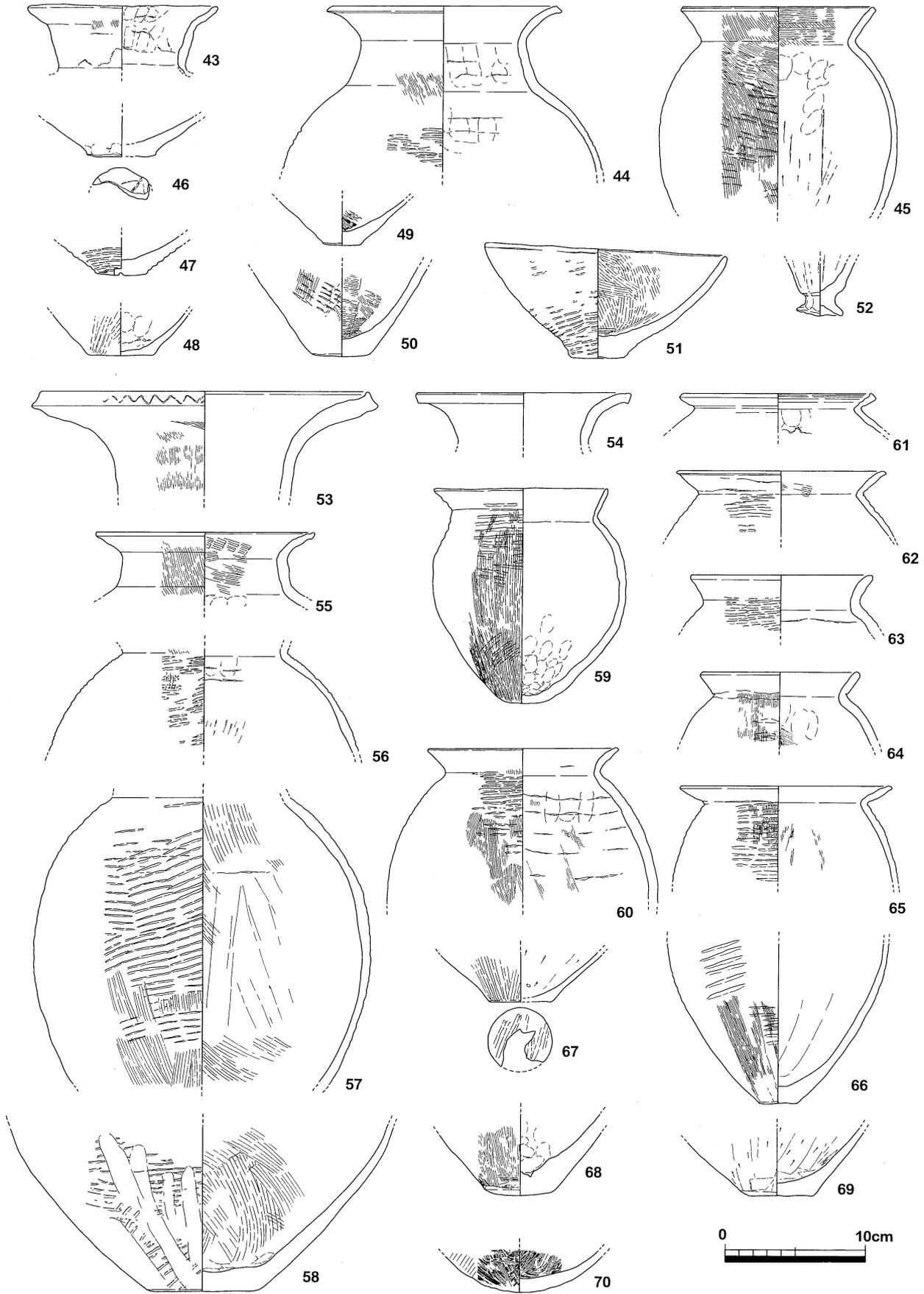
I区のA2区で検出した小型の柱穴である。堀形は円形を呈し、径0.3m、深さ0.2mを測る。埋土は暗灰色砂質土である。出土遺物として、(第19図84)の弥生土器の大型の壺底部1点を図化した。

SP65 (第19図)

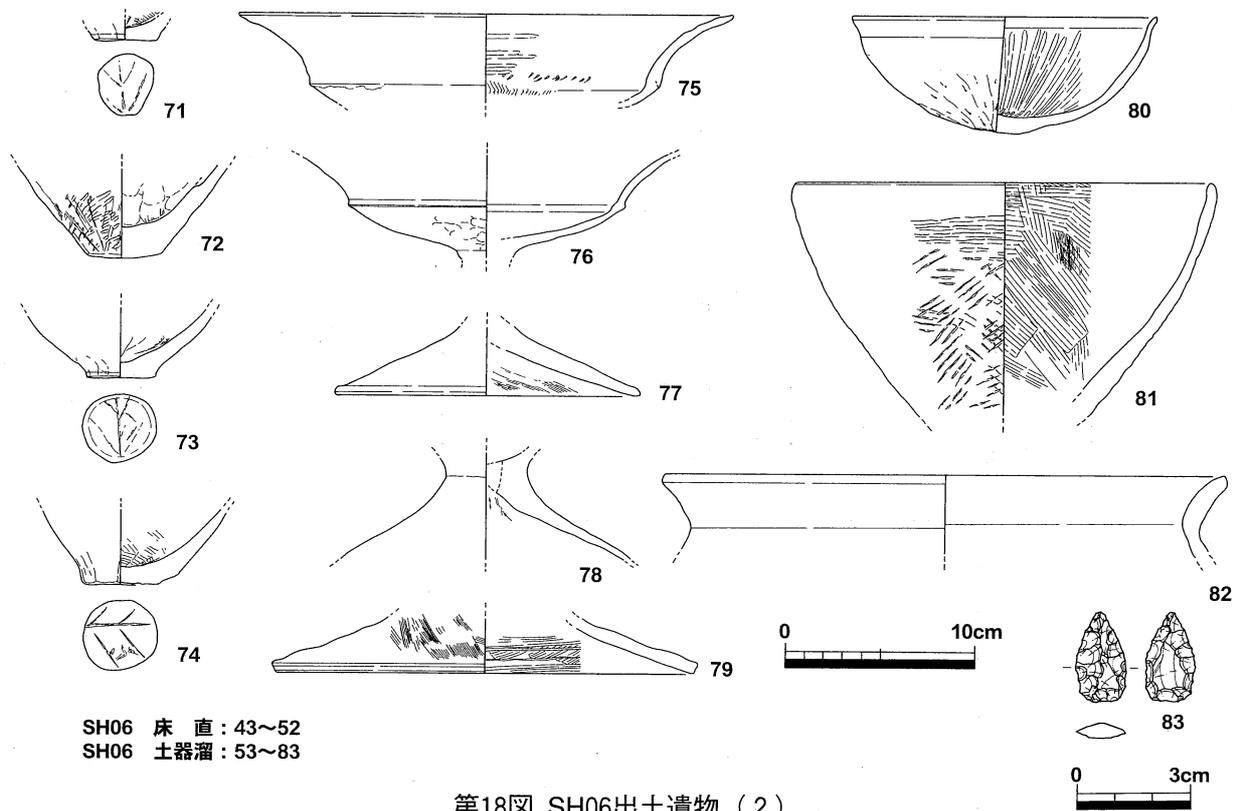
I区のB3区で検出した柱穴である。堀形は不整形円形を呈し、径0.4m、深さ0.2mを測る。柱穴上部には扁平で板状の安山岩が柱穴を塞ぐように出土した。埋土は灰褐色砂質土である。出土遺物として、(第19図85・86)の弥生土器が出土した。(85)は小型で平底の壺底部である。(86)は高杯の柱状部である。



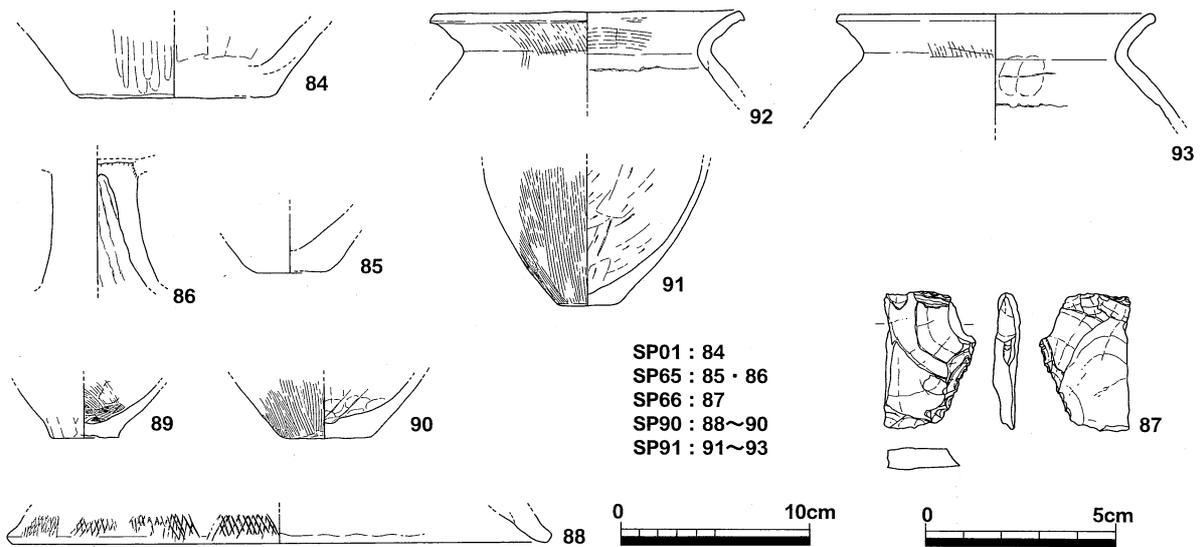
第16図 SH06平・断面図



第17图 SH06出土遺物 (1)



第18図 SH06出土遺物 (2)



第19図 SP01・65・66・90・91出土遺物

SP66 (第19図, 図版39)

I区のB3区SP65に隣接して検出した柱穴である。堀形は不整円形を呈し、径0.2m、深さ0.2mを測る。埋土は黄褐色粘質土である。出土遺物として(第19図87)のサヌカイト製の楔形石器を図化した。

SP90 (第19図)

II区のA5区で検出した大型の柱穴である。この柱穴はSH04の主柱穴の可能性はあるが、対面の柱穴が検出できなかったため、別扱いにした。堀形は円形を呈し、径0.8m、深さ0.2mを測る。埋土は淡黒色砂質土である。出土遺物としては(第19図88~90)の弥生土器が出土した。(88)は弥生後期後半

の壺の口縁部に分類したが、器台の口縁部の可能性もある。外面にはヘラ描による粗い鋸歯文を施している。(89・90)は壺の底部である。

#### SP91 (第19図)

Ⅱ区のA 5区で検出した柱穴である。堀形は円形を呈し、径0.5m、深さ0.3mを測る。埋土は淡黒色砂質土である。出土遺物としては、(第19図91～93)の弥生土器が出土した。(91)は小型の壺下半部、(92・93)は甕の口縁部及び肩部である。

### (3) 土坑

#### SK02 (第20図)

Ⅰ区中央A 2区で検出した土坑である。平面は不整円形を呈し、断面は削平を受けたものか浅い皿状を呈する。長径1.8m×短径1.6m、深さ0.1mを測る。埋土は淡黒褐色砂質土を呈している。出土遺物としては、弥生土器の細片が数点出土しているだけである。

#### SK04 (第20図)

Ⅱ区の南端A 4区の、第1低地帯下層遺構面上で検出した土坑である。平面は隅丸方形状を呈し、断面は浅い皿状を呈する。長径1.2m×短径0.7m、深さ0.1mを測る。埋土は単層で暗灰黒褐色の砂質土である。なお、SK05・06同様、形状よりこの土坑は墓の可能性はある。出土遺物としては、弥生土器の細片が数点出土しているだけである。

#### SK05 (第20図)

Ⅱ区の南端A 4区の、第1低地帯下層遺構面上で検出した土坑である。平面は長楕円形状を呈し、断面は浅い皿状を呈する。長径0.8m以上×短径0.5m、深さ0.1mを測る。埋土は単層で暗灰褐色の砂質土である。なお、SK04・06同様、形状よりこの土坑は墓の可能性はある。この遺構から遺物は出土しなかった。

#### SK06 (第20図)

Ⅱ区の南端A 4区の、第1低地帯下層遺構面上で検出した土坑である。平面は隅丸長方形状を呈し、断面は浅い皿状を呈する。長径2.1m×短径1.1m、深さ0.1mを測る。埋土は単層で暗灰褐色の砂質土である。なお、SK04・05同様、形状よりこの土坑は墓の可能性はある。出土遺物としては、弥生土器の細片が数点出土しているだけである。

#### SK10 (第20図)

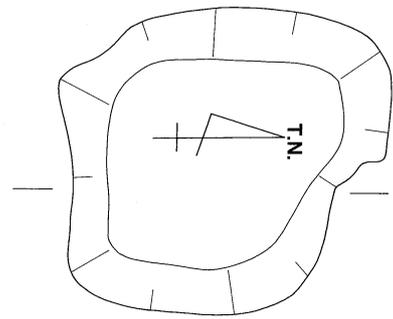
Ⅱ区中央B 4区の、第1低地帯下層遺構面上で検出した土坑である。平面は長楕円形状を呈し、断面は浅い皿状を呈する。長径1.5m×短径0.6m、深さ0.1mを測る。埋土は単層で淡黄色シルトを呈する。なお、形状よりこの土坑は墓の可能性はある。出土遺物としては、弥生土器の細片が数点出土しているだけである。

#### SK12 (第20図)

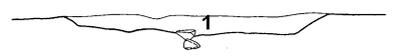
Ⅱ区中央B 5区、東壁際で検出した土坑である。平面は円形状を呈し、断面は浅いU字状を呈する。長径0.9m×短径0.7m以上、深さ0.3mを測る。埋土は上・下2層に分かれる。出土遺物としては、弥生土器の細片が数点出土しているだけである。

#### SK13 (第14図)

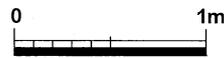
Ⅱ区北半部A 5区、SH04を切り込む形で検出した長楕円形状の土坑である。平面は長楕円形状を呈し、断面は削平を受けたものか浅いU字状を呈し、上面には炭層が広がっていた。長径2.1m×短径0.9



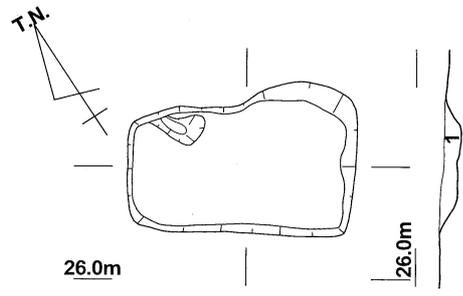
26.2m



1. 淡黒褐色砂質土

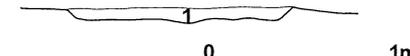


SK02

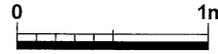


26.0m

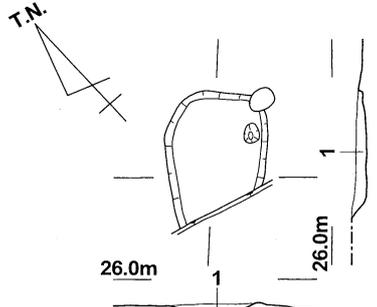
26.0m



1. 暗灰褐色砂

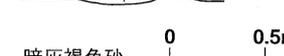


SK04



26.0m

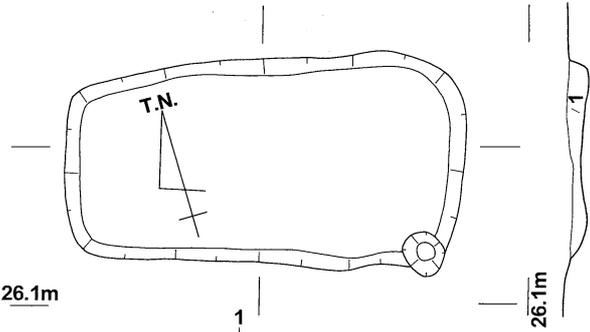
26.0m



1. 暗灰褐色砂



SK05



26.1m

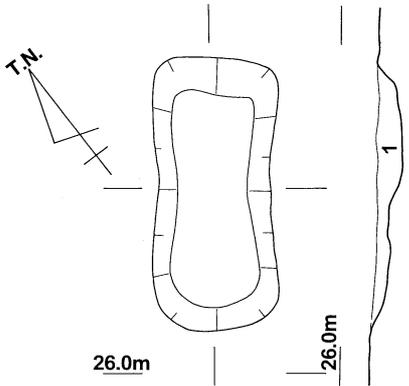
26.1m



1. 暗灰褐色砂



SK06



26.0m

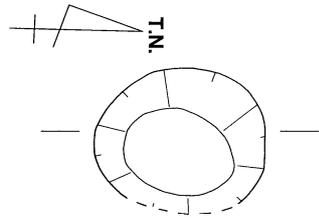
26.0m



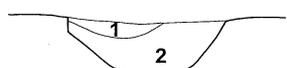
1. 淡灰褐色シルト



SK10



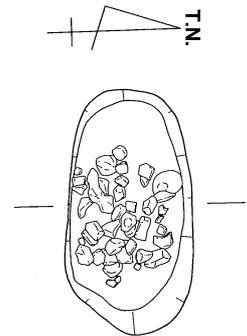
26.0m



1. 暗茶褐色粘質土 (淡黄色粘土・淡灰褐色砂質土等のブロックを含む)  
2. 1に類似 (1より淡)



SK12



25.9m



1. 暗灰褐色砂質土



SK14

第20図 SK02・04~06・10・12・14平・断面図

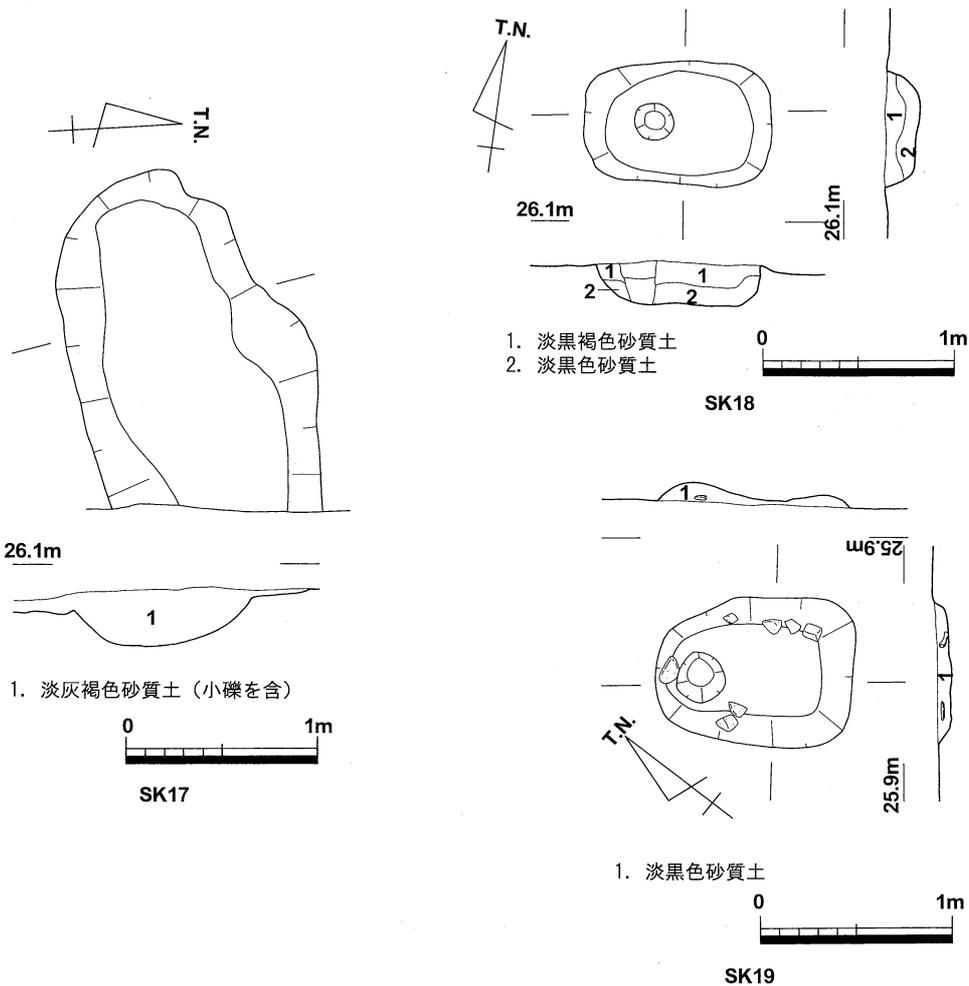
m、深さ0.2mを測る。埋土は淡黒色砂質土である。なお、この遺構から遺物は出土しなかった。

SK14 (第20・22図, 図版25)

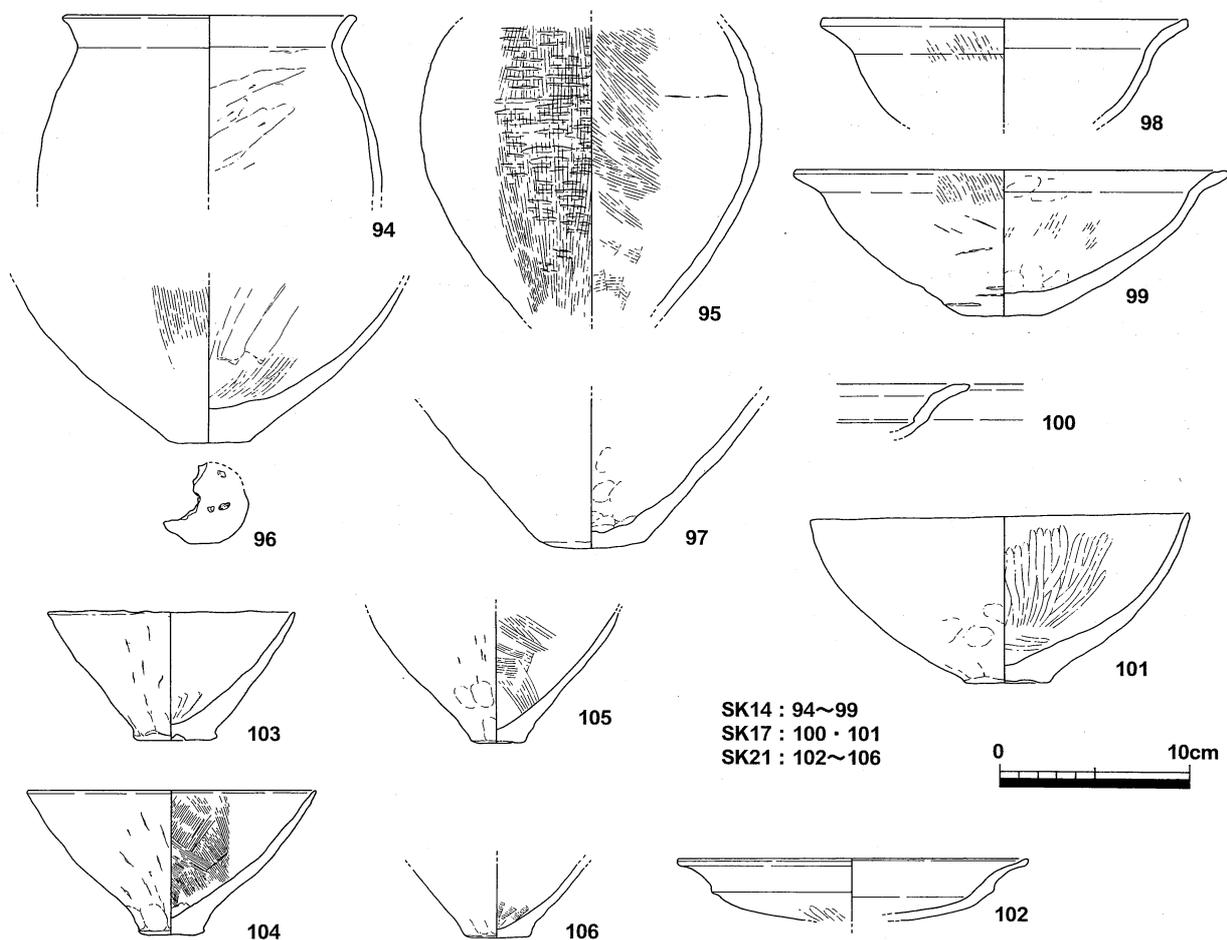
Ⅱ区北半部A 5区、SH04を切り込む形で検出した土坑である。平面は長楕円形状を呈し、断面は削平を受けたものか浅い皿状を呈する。長径3.3m×短径1.6m、深さ0.2mを測る。埋土は暗灰褐色砂質土の単層である。出土遺物としては、土坑上面よりコンテナ0.5箱程の弥生土器が出土した(第22図94~99)。(96・97)は弥生後期後半頃の壺の下半部である。(96)は比較的大型の部類で、底部外面に籾殻の圧痕が認められる。(94・95)は弥生後期後半頃の甕の上半部(94)及び体部(95)である。(98・99)は鉢である。口縁が外反し底部は平底である。

SK17 (第21・22図, 図版25)

Ⅱ区北端B 5区、SH06を切り込む形で検出した土坑である。平面は長楕円形状を呈し、断面は削平を受けたものか浅いU字状を呈する。長径1.8m以上×短径1.2m、深さ0.3mを測る。埋土は淡灰褐色砂質土の単層である。出土遺物としては、少量の弥生土器が出土した(第22図100・101)。(100)は高杯の杯部の口縁部である。(101)は鉢である。



第21図 SK17~19平・断面図



第22図 SK14・17・21出土遺物

SK18 (第21図)

Ⅱ区北端B5区、SH06を切り込む形で検出した楕円形状の土坑である。平面は楕円形状を呈し、断面は削平を受けたものか浅いU字状を呈する。長径1.0m×短径0.7m、深さ0.2mを測る。埋土は上・下2層に分かれる。出土遺物としては、弥生土器の細片が数点出土しているだけである。

SK19 (第21図)

Ⅱ区北端B6区で検出した土坑である。平面は楕円形状を呈し、断面は削平を受けたものか浅い皿状を呈する。長径1.0m×短径0.8m、深さ0.1mを測る。埋土は淡黒色砂質土を呈している。出土遺物としては、弥生土器の壺の体部片が数点出土しているだけである。

SK21 (第22図, 図版25)

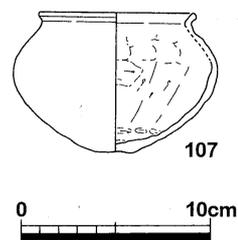
Ⅱ区北端B6区で検出した土坑である。堀形は円形を呈し、径0.8m、深さ0.2mを測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物としては、少量の弥生土器が出土している(第22図102~106)。(102)は高杯の杯部である。(103~106)は鉢である。(105・106)は甕の底部の可能性を残すが、器壁の薄さ等より鉢に分類した。

(4) 溝状遺構

SD01 (第23・24図, 図版7・25)

I区の南端、B2区で検出した東西方向に延びる溝状遺構である。調査区の関係で北岸部の一部を検出した。一部を検出したただけだが、検出状況より、断面はV字状あるいは逆台形状を呈するものと考え

られる。検出長7.5m、幅2.5m以上、深さ1.0m以上を測る。埋土は大別して上層の褐色系の砂と、シルトないし粘質土からなる下層の堆積土よりなり、堆積状況より比較的短期間に埋没したものと考えられる。出土遺物としては、直上層である1層上面より、小型壺（第23図107）が1点のみ出土している。(107)の壺は、口縁は短く外反し、体部は算盤玉状にはり、底部は僅かに平底を呈する弥生後期末頃の土器である。なお、この溝は寺田地区の弥生集落の南限に位置し、南限を画した区画溝の可能性はある。



第23図 SD01出土遺物

SD03 (第10・24図, 図版2)

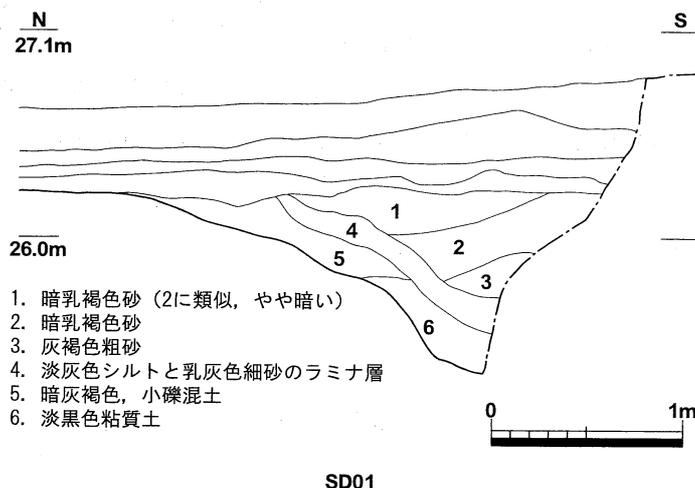
I・II区の境界、B3・4区の、第1低地帯下層遺構面上で検出した、SH02の周囲を巡る溝状遺構である。調査区の関係で西半部を検出ただけである。断面は浅い皿状を呈する。幅0.4~1.4m、深さ0.1mを測る。埋土は上層からの流れ込みの灰色シルトである。堆積状況より比較的短期間に埋没したものと考えられる。なお、この遺構から遺物は出土しなかった。

SD09 (第24図)

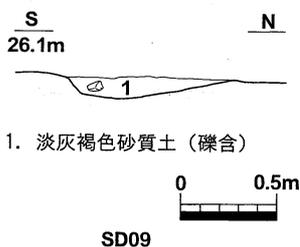
II区の中央、A5区の、第1低地帯下層遺構面上で検出した不整形な溝状遺構である。北端部はSD11及びSH03により切り込まれ詳細には検出できなかったが、II区南半部に広がる第1低地帯に流れ込む溝状の遺構である。断面は浅い皿状を呈し、検出長5.8m、検出幅0.7m~1.5m、深さ0.1mを測る。埋土は小礫混灰褐色砂質土よりなる。なお、この遺構から遺物は出土しなかった。

SD13 (第24図)

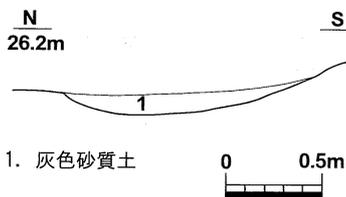
II区の中央、A5区で検出したSH04より南東方向に延びる溝状遺構である。SH04の排水溝と考えら



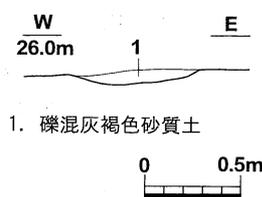
SD01



SD09



SD03



SD13

第24図 SD01・03・09・13断面図

れ、南端部はSD12及びSH03により切り込まれ詳細には検出できなかったが、第1低地帯に流れ込む溝状遺構である。断面は浅い皿状を呈し、検出長6.5m、検出幅0.8m、深さ0.1mを測る。埋土は小礫混灰褐色砂質土よりなる。出土遺物としては、弥生の壺体部片が数点出土している。

(5) 不整形遺構

SX01 (第25・26図, 図版39)

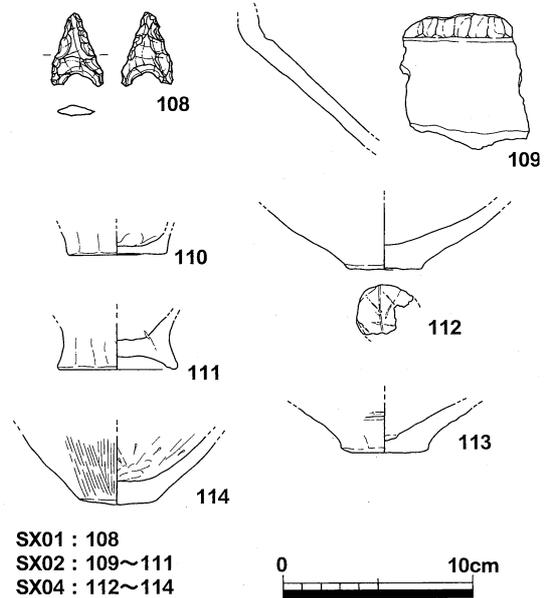
I区中央B2区、SK02に隣接して検出した不整形な落ち込みである。平面は不整円形状を呈し、断面は削平を受けたものか浅い皿状を呈する。長径4.4m×短径1.7m、深さ0.1mを測る。埋土は単層である。出土遺物としては、(第25図108)のサヌカイト製の石鏃1点が出土している。

SX02 (第25図)

II区南端A4区、第1低地帯下層遺構面上で検出した不整形な落ち込みである。東半部はSD04により切られているため、約1/2を検出した。平面は不整形形状を呈し、断面は削平を受けたものか浅い皿状を呈する。長径3.1m×短径1.8m以上、深さ0.2mを測る。埋土は単層である。出土遺物としては、弥生土器が少量出土している(第25図109~111)。(109)は壺の肩部である。頸部との境に指頭圧突帯を施している。(110・111)は甕の底部である。両者とも弥生中期後半の特徴を持つ資料である。

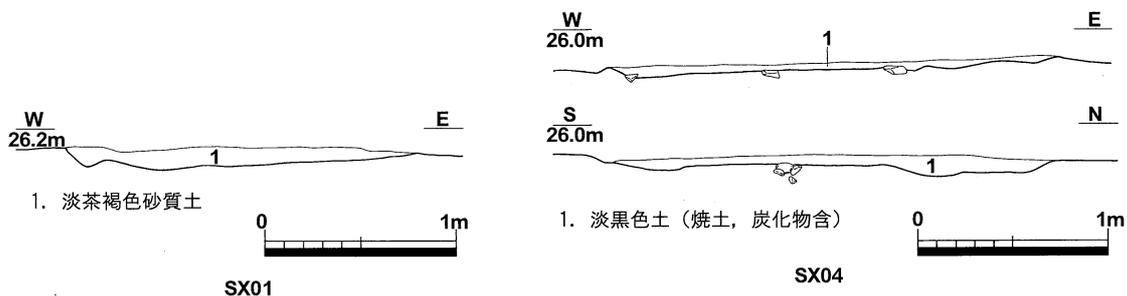
SX04 (第25・26図)

II区中央A5区で検出した不整形な落ち込みである。平面は不整円形状を呈し、断面は削平を受けたものか浅い皿状を呈する。長径2.4m×短径2.3m、深さ0.1mを測る。埋土は単層である。出土遺物としては、弥



SX01 : 108  
SX02 : 109~111  
SX04 : 112~114

第25図 SX01・02・04出土遺物



第26図 SX01・04断面図

生土器が少量出土している（第25図112～114）。（112～114）は弥生後期末頃の壺の底部である。（112）の底部外面には木葉痕が認められる。

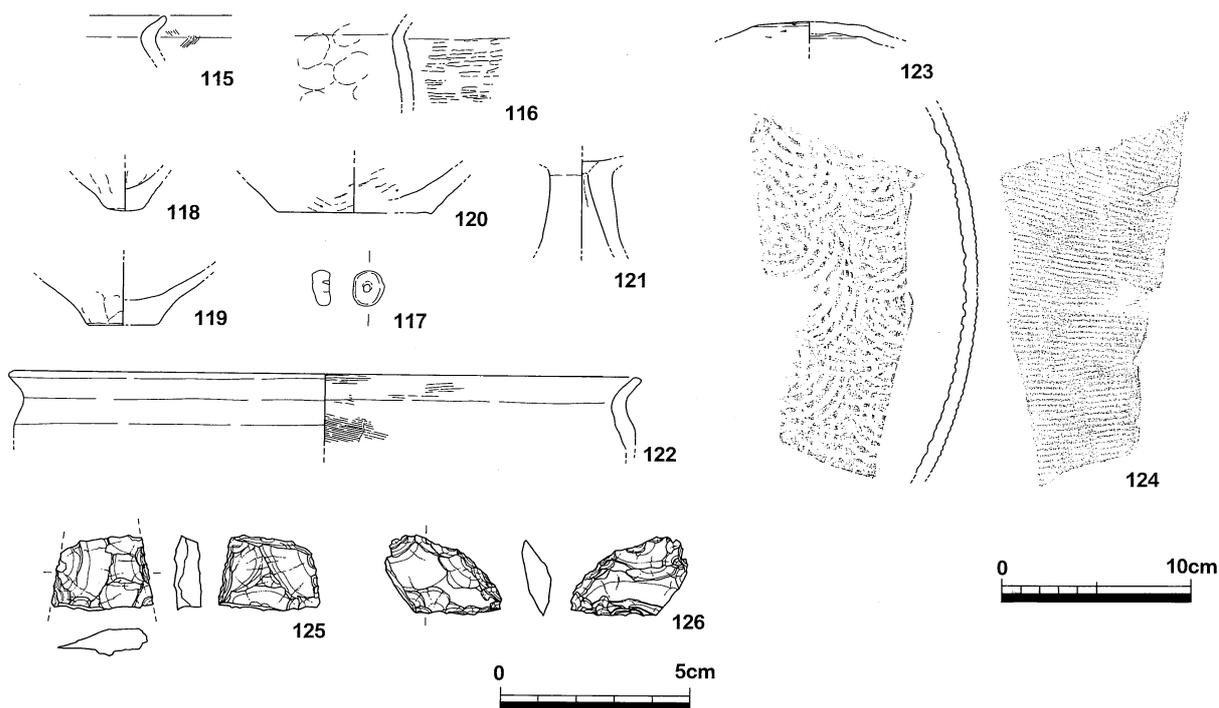
### 3. 古墳時代後期末

#### (1) 掘立柱建物跡

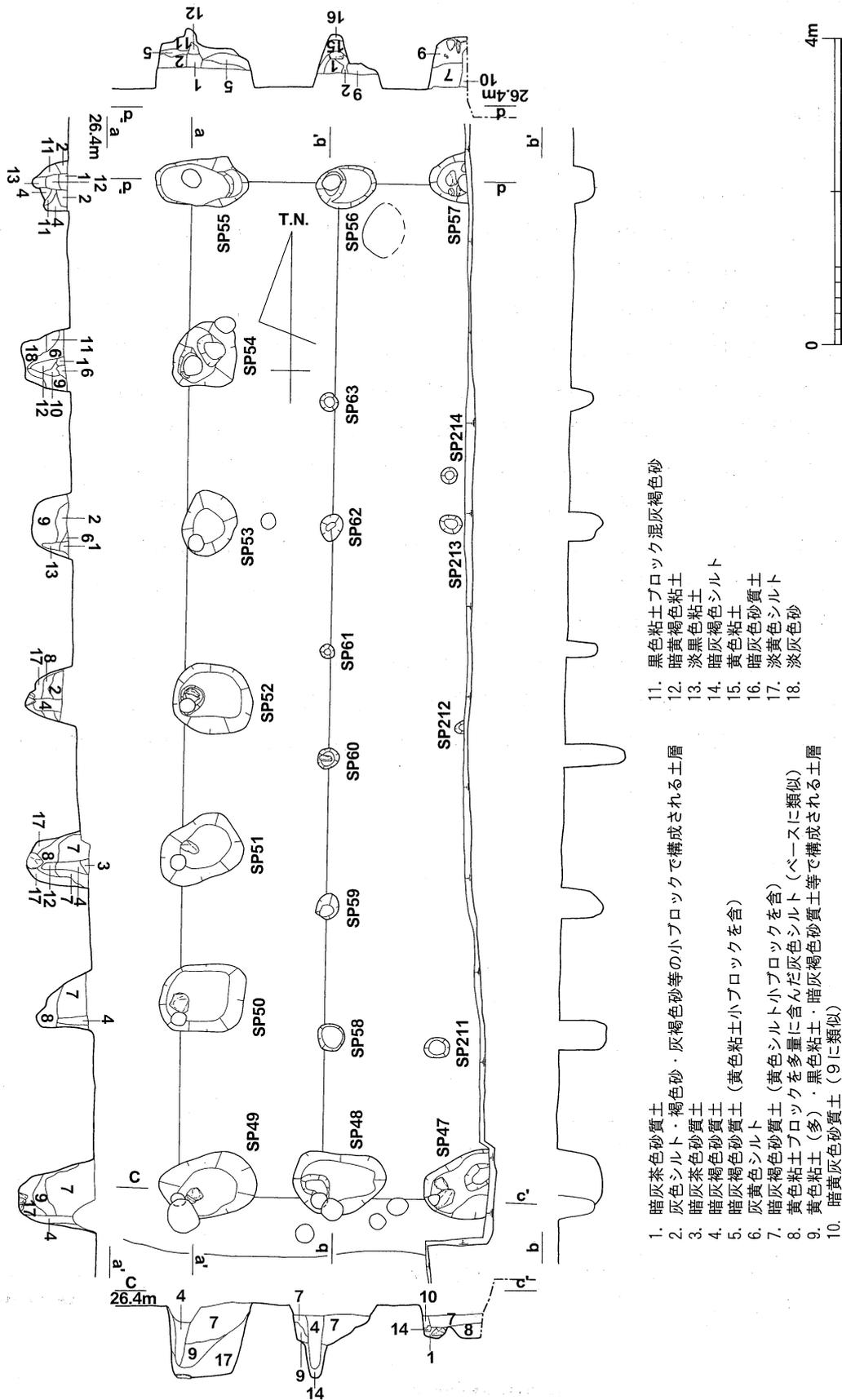
SB03（第27・28図，図版5・6）

I区とII区の境界、B3・4区の第1低地上層遺構面上で検出した、南北棟の大型の掘立柱建物である。東側柱列は調査区外に所在するため、約7割り程度を検出できたものと考えられる。建物南端部に隣接するSD02は、その配置よりSB03の雨落溝と考えられる。また、南端部ではSB02により切り込まれている。2間（3.5m）以上×6間（13.4m）、面積は46.9m<sup>2</sup>以上、主軸方位はN1°Wを測る。柱間は梁間1.5m～1.8m、桁行2.1m～2.3mを測る。なお、建物床面には東柱と考えられる小型の柱穴、SP58～63・211～213等を検出した。柱穴掘形は不整円形を呈しかなり大型で、径0.6m～1.2m、深さ0.6m～1.0mを測る。全ての柱穴で柱痕と、7基の柱穴で根石を確認した。柱穴埋土はかなり締まっている点と、堆積状況より版築工法によるものと考えられる柱穴がある。この建物の東側柱列は調査区の外に広がるため、全体をつかめていないが、検出状況より少なくとも梁間は、1間分は東に広がる。この建物に梁間を1間分追加した場合、建物の構造は3間（5.3m）×6間（13.3m）となり、面積を少なく見積っても約70m<sup>2</sup>程度のかかなり大型の建物が推定できる。

出土遺物としては、弥生土器・土師器・須恵器・石器等が少量出土している（第27図115～126）。（115～122・125・126）は柱穴内に混入した弥生時代の遺物である。（115・116）は甕（118～120）は壺底部（121）は高杯柱状部（122）は大型の鉢口縁部（117）は壺口縁部の外周に付された円形浮文の浮文



第27図 SB03出土遺物



- |                                   |                   |
|-----------------------------------|-------------------|
| 1. 暗灰茶色砂質土                        | 11. 黒色粘土ブロック混灰褐色砂 |
| 2. 灰シルト・褐色砂・灰褐色砂等の小ブロックで構成される土層   | 12. 暗黄褐色粘土        |
| 3. 暗灰茶色砂質土                        | 13. 淡黒色粘土         |
| 4. 暗灰褐色砂質土                        | 14. 暗灰褐色シルト       |
| 5. 暗灰褐色砂質土 (黄色粘土小ブロックを含)          | 15. 黄色粘土          |
| 6. 灰黄色シルト                         | 16. 暗灰色砂質土        |
| 7. 暗灰褐色砂質土 (黄色シルト小ブロックを含)         | 17. 暗灰色シルト        |
| 8. 黄色粘土ブロックを多量に含んだ灰色シルト (ベースに類似)  | 18. 淡灰色砂          |
| 9. 黄色粘土 (多)・黒色粘土・暗灰褐色砂質土等で構成される土層 |                   |
| 10. 暗黄灰色砂質土 (9に類似)                |                   |

第28図 SB03平・断面図

部が剥がれたものである。(125)はサヌカイトの槍先形石器片(126)はサヌカイトの石小刀の先端部分である。この建物の時期を示す資料は少なく(123・124)等の須恵器しか抽出できなかった。(123)は杯蓋の天井部(124)は大甕の体部片である。(123)の天井部外面には回転ヘラケズリを施している。これらの遺物より、SB03の時期を決めるには材料不足である。そのため、SB03の雨落ち溝であるSD02の資料をふまえて、総合的に判断すれば、この建物は7世紀の第2四半期頃にあてるのが妥当と考える。

#### SB04 (第29図)

Ⅱ区の南端、A4区第1低地帯下層遺構面上で検出した、東西棟の掘立柱建物である。低地帯の下層遺構面上で検出したのであるが、状況より判断して上層より切り込まれている可能性は高い。2間(3.0m)×3間(5.3m)、面積は15.9㎡、主軸方位はN86°Eを測る。柱間は、梁間1.4m~1.5m、桁行1.4m~2.2mを測る。柱穴掘形は円形ないし楕円形状を呈し、径0.2m~0.4m、深さ0.1m~0.4mを測る。柱穴埋土は茶~灰色系の砂質土が主体を占める。出土遺物としては、土器の細片が数点出土しているだけである。

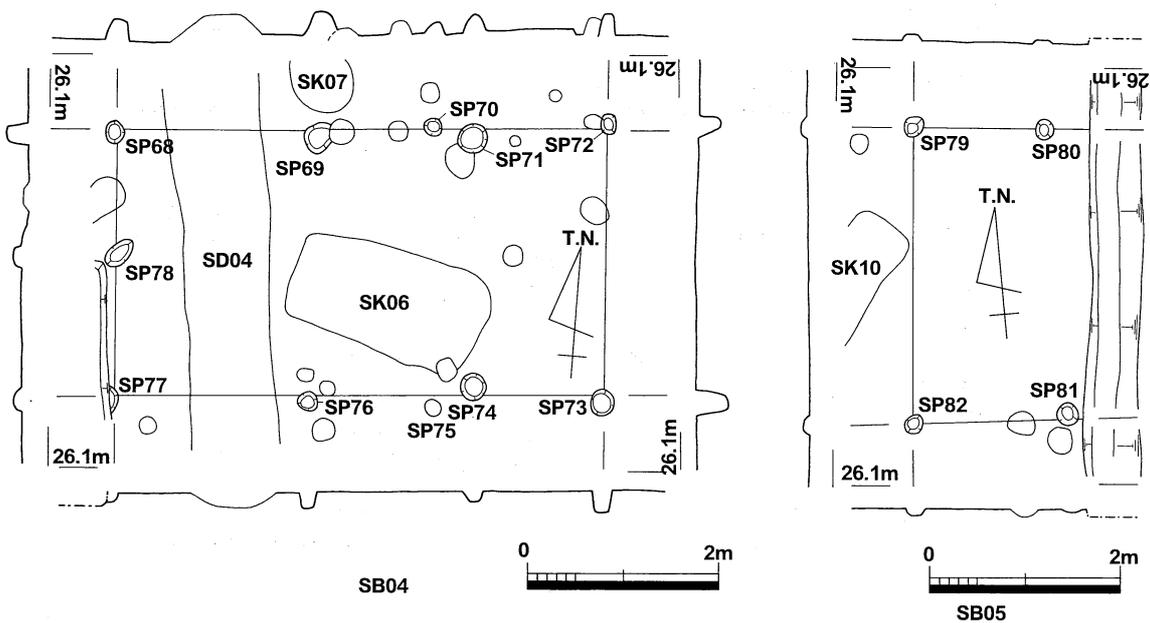
#### SB05 (第29図)

Ⅱ区の中央、B4・5区第1低地帯下層遺構面上で検出した、東西棟の掘立柱建物である。低地帯の下層遺構面上で検出したのであるが、状況より判断して上層より切り込まれている可能性は高い。東半部は対象地から外れるため、全体の約1/2を検出した。1間(3.2m)×1間(1.6m)以上、面積は5.1㎡以上、主軸方位はN86°Wを測る。柱間は、梁間3.2m、桁行1.4m~1.6mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、径0.2m~0.3m、深さ0.1mを測る。柱穴埋土は茶~灰色系の砂質土が主体を占める。出土遺物としては、土器の細片が数点出土しているだけである。

#### (2) 溝状遺構

#### SD02 (第30~32図, 図版6・8・25・39)

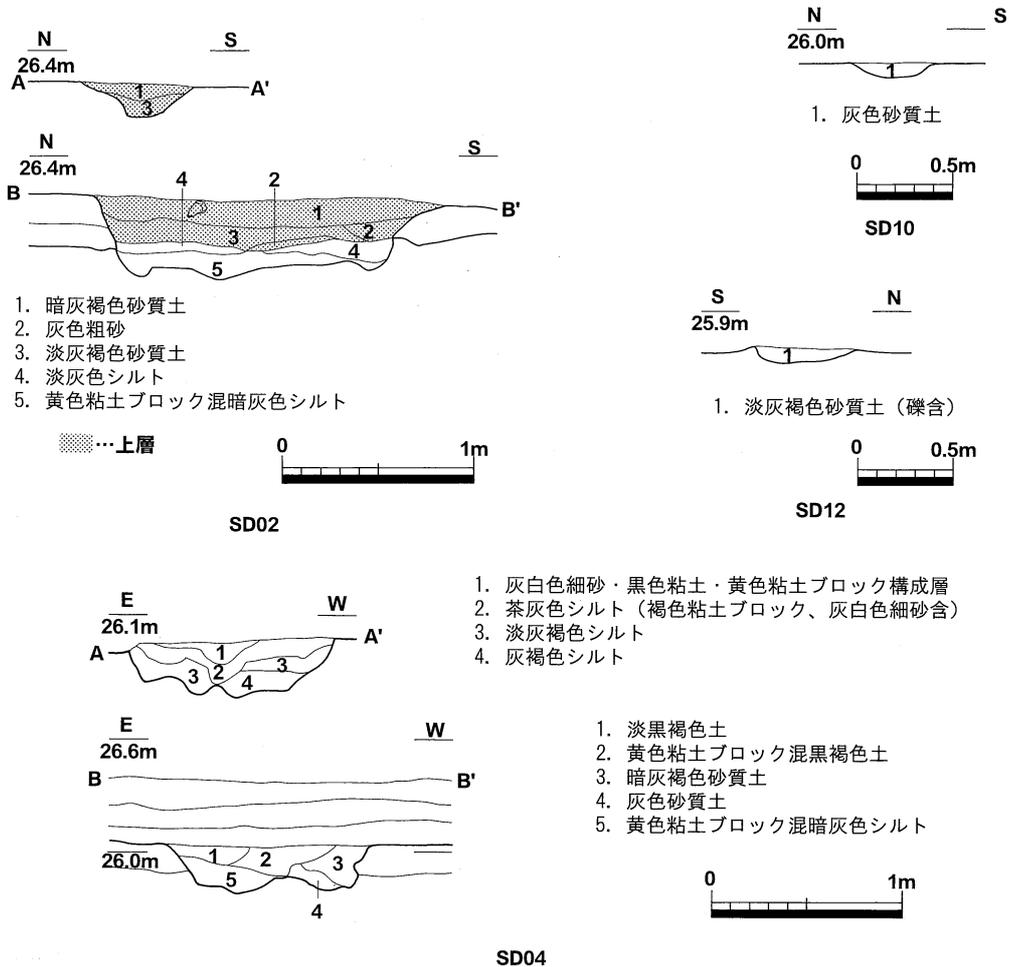
I区の北端、A3・B3区第1低地帯上層遺構面上で検出した、東西方向に延びる溝状遺構である。なお、この溝はSB03の北辺に隣接し、SB03の北辺より一定の距離をあけSB03の北辺に並行するように



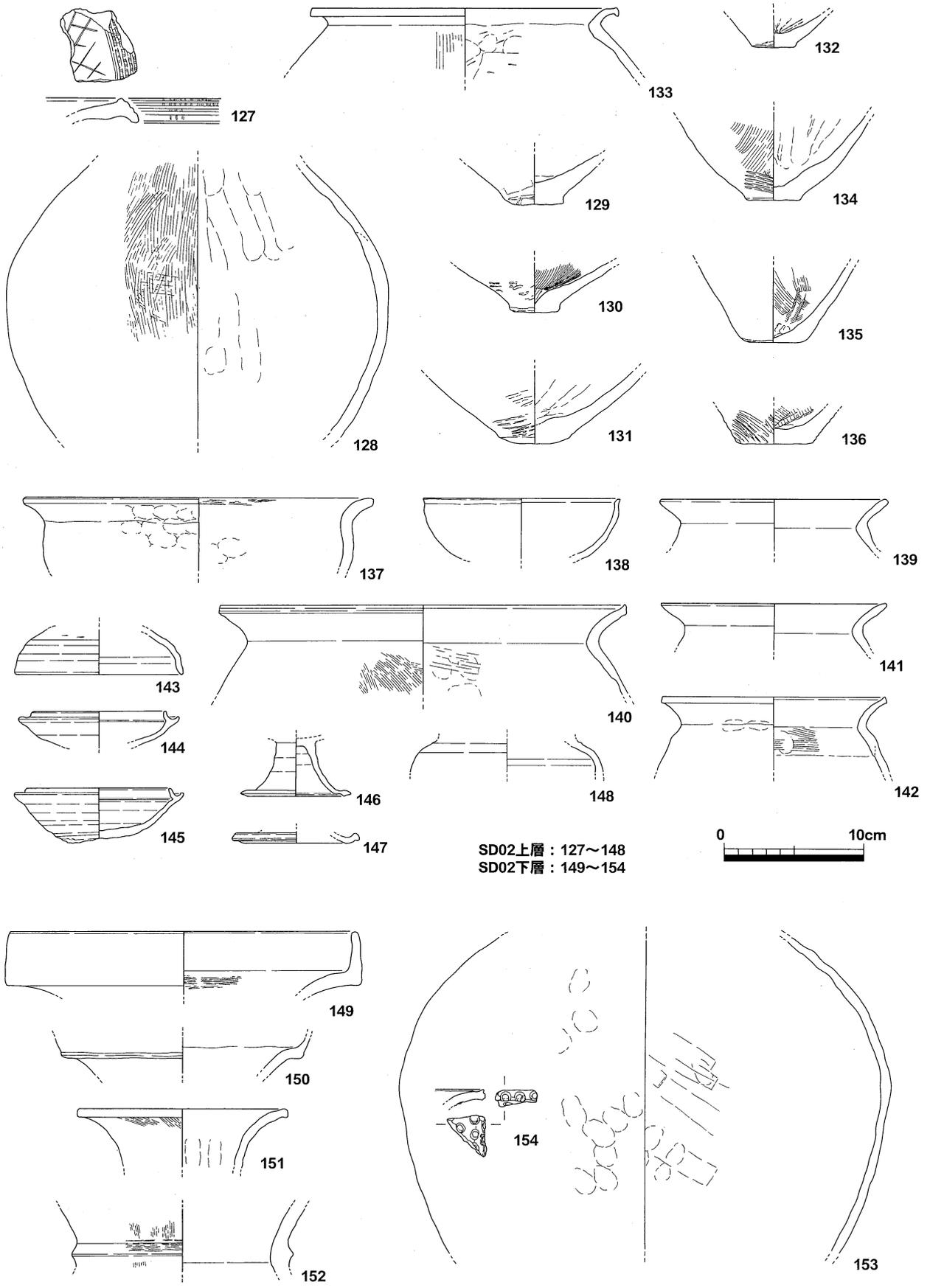
第29図 SB04・05平・断面図

配されている配置の特徴より、SB03の雨落ち溝と考えられる。溝は不整形な形態を呈し、西半部は幅広で、SB03に隣接する東半部ではSB03をかわすように幅が狭く、細長く延びている。検出長14.0m、幅広な西半部の検出幅2.8m、深さ0.5m、細長い東半部の検出幅0.5m、深さ0.2mを測る。埋土は、大別して上層の灰褐色系の砂質土と、灰色系のシルトの下層とに区分できる。なお、下層の埋土は西半部の幅広の部分のみに堆積している。埋土中からは弥生時代中期～後期末までの遺物がコンテナ4箱程出土しているが、主体を占めるのは弥生時代後期末の資料である。なお、上層からは古墳時代後期末7世紀第2四半期頃の須恵器・土師器が出土しているため、この溝の時期としてはこの頃が考えられるが、弥生後期末の遺物が主体を占める関係上、上層と下層で2時期の継続期間を考慮する必要がある。

(第31図127~148)は上層から出土した土器である。この内(127~137)は弥生土器の混入遺物で、(137~148)までが古墳時代後期末の土師器及び須恵器である。(127)は弥生時代中期末の凹線文の顕著な壺口縁部である。(128)は弥生土器の壺体部(129~131)は弥生土器の壺底部である。なお、(130)は壺に分類したが、器壁の薄いところから鉢の可能性もある。(133)は弥生土器の大型甕(134~136)は甕の底部である。(137)は弥生土器の鉢の上半部である。(138)は土師器の杯である。口縁端部は僅かに外反し、端部内面は平坦に仕上げる。(139~142)は土師器の甕上半部である。口縁端部を丸く納めるものと平坦に仕上げるものとに分かれる。(140)は大型の甕で、口縁端部に1条の浅い沈線を施し



第30図 SD02・04・10・12断面図



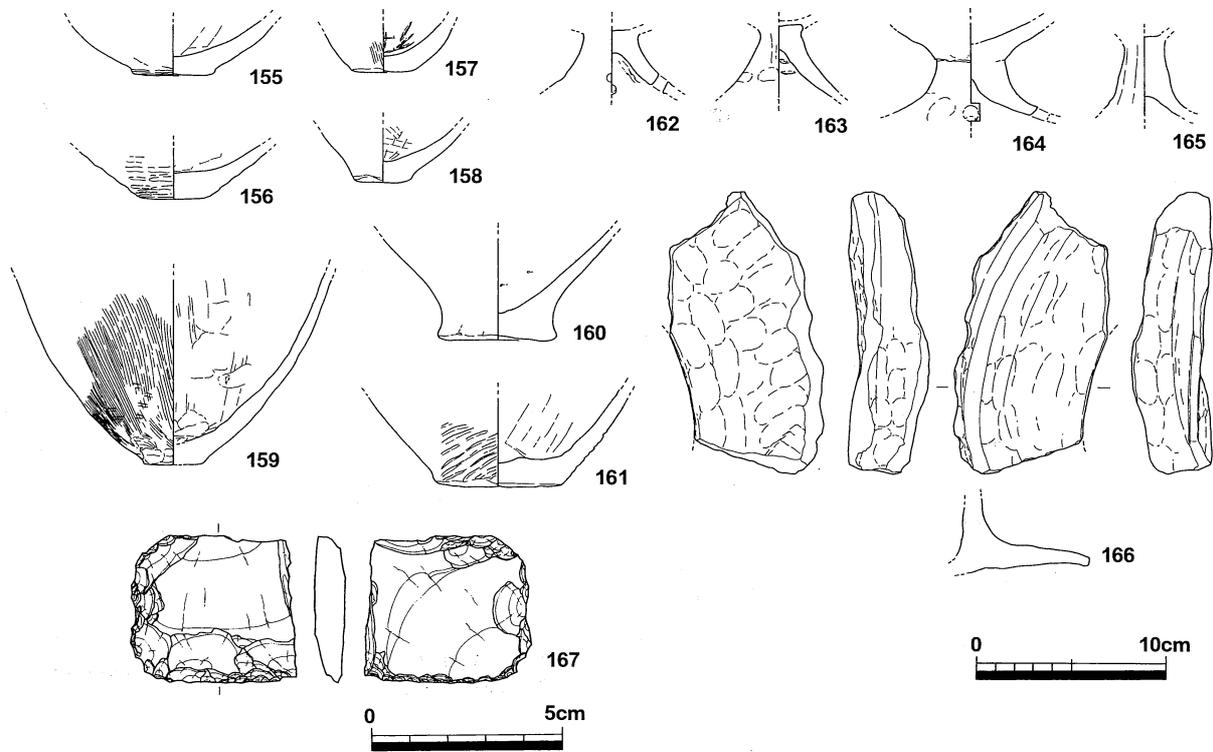
第31図 SD02出土遺物（1）

ている。(143~145)は7世紀第2四半期頃の須恵器の杯で、上層の時期を示す資料である。(143)は杯蓋(144・145)は杯身にあたる。(146・147)須恵器の高杯脚部(148)は須恵器の小型壺である。

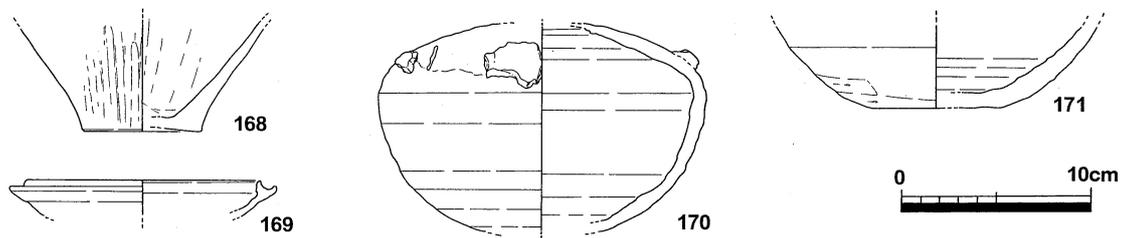
(第31・32図149~166)は下層から出土した土器である。(149~158)は弥生土器の壺である。(155・156)等は平底から丸底へ移行する寸前の底部である。(159~161)は甕の下半部である。(162~165)は高杯の脚部である。(166)は土師質の竈の焚き口部分にあたる土製品である。(167)はサヌカイト製の石庖丁片である。

SD04 (第30・33図, 図版8・25)

II区の南西部、A4区の第1低地上層遺構面上で検出した南北方向に一直線上に延びる溝状遺構である。北端部は調査区外に延び、南端部はSD02に接する5m手前で留まる。断面は逆台形状を呈し、検出長25.0m、検出幅1.1m、深さ0.3mを測る。主軸方位はN7.5°Wを測る。埋土は灰色系のシルトか



第32図 SD02出土遺物(2)



第33図 SD04出土遺物

らなる。出土遺物としては、弥生土器・土師器・須恵器等が少量出土している（第33図168～171）。（168）は弥生土器の壺の底部で、混入品である。外面にはヘラミガキが顕著である。（169）は7世紀第2四半期頃の須恵器杯身の口縁部である。（170・171）は須恵器の小型の壺である。SD04は、これらの出土遺物の中で（169～171）等の資料により、SD02同様に7世紀第2四半期頃の時期が考えられる。なお、この溝は、配置・時期及び形状等よりSB03、SD02に係わる区画溝の可能性が高い。

#### SD10（第30図）

Ⅱ区の中央、B5区で第1低地帯上層遺構面上で検出した、東西方向に直線上に延びる溝状遺構である。

東端部は調査区外に延び、西端部は削平を受け途絶える。断面は浅いU字状を呈し、検出長4.0m、検出幅0.5m、深さ0.1mを測る。主軸方位はN84°Eを測る。埋土は灰色系の砂質土を呈している。遺物は出土しなかった。なお、この溝は、隣接して所在するSD12の主軸方向を揃えている事より、SD12同様区画溝の可能性が高い。

#### SD12（第30図）

Ⅱ区の中央、A5区で検出した、東西方向に直線上に延びる溝状遺構である。西端部は調査区外に延び、SH03の北辺を切り込んでいる。東端部は削平を受け途絶える。断面は浅いU字状を呈し、検出長8.0m、検出幅1.0m、深さ0.3mを測る。主軸方位はN84°Eを測る。埋土は灰褐色系の砂質土を呈している。出土遺物としては、弥生土器・土師器等が少量出土している。なお、この溝は、隣接して所在するSD04の主軸方向に対して直交する事より、SD04とほぼ同時期の区画溝の可能性が高い。

## 4. 鎌倉時代以降

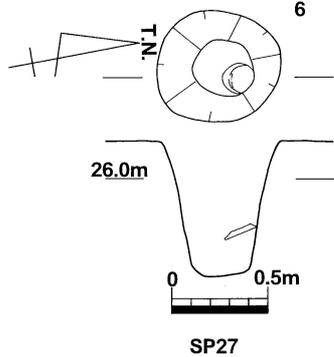
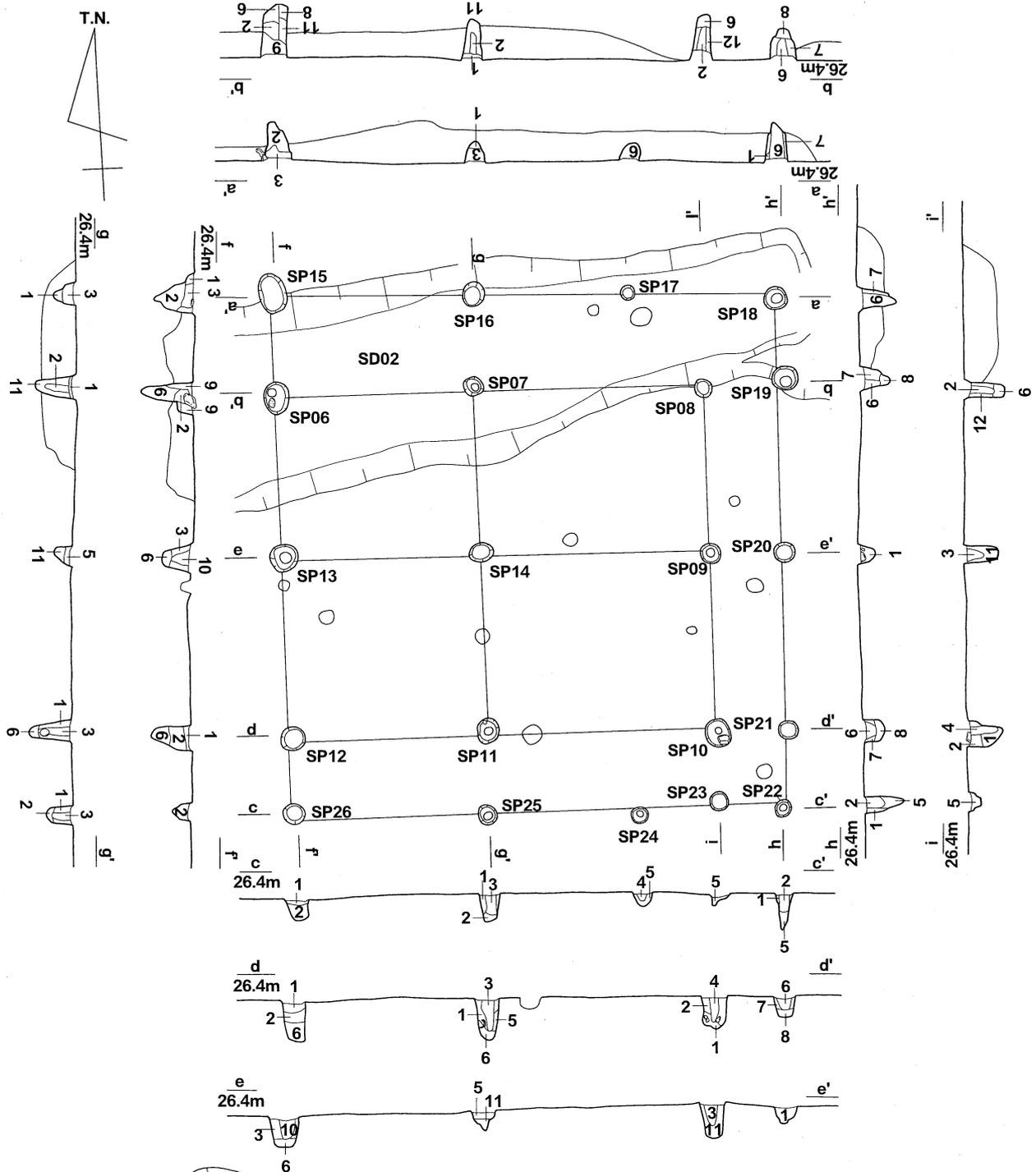
### （1）掘立柱建物跡

#### SB01（第34・36図、図版5～7・25）

I区の北端、A3区の第1低地帯上層遺構面上で検出した、東西棟の大型の掘立柱建物である。西面を除き3面に庇が付く。身舎中央には主軸を揃え柱穴1基を検出したが、他の柱穴と比べ浅い点より東柱と考えられる。身舎は2間（4.6m）×2間（5.6m）、面積は25.8m<sup>2</sup>、主軸方位はN88°Wを測る。柱間は、梁間2.1m～2.2m、桁行2.5m～3.0mを測る。柱穴堀形は円形ないし楕円形状を呈し、径0.2m～0.5m、深さ0.2m～0.5mを測る。また、大多数の柱穴で柱痕を確認した。柱穴埋土は茶～灰色系の砂質土が主体を占める。なお、SB01は調査区西辺よりで検出した。そのため、調査区外の西方へ建物が延びる可能性が指摘できる。出土遺物としては地鎮祭祀によるものか、9基の柱穴中より土師小皿・杯等が出土している（第36図172～190）。（172・173）は混入品で、弥生土器の壺底部である。（174～179）は土師器の小皿である。（180～188）は土師器の杯である。（183～187）は比較的大型の部類である。（185～187）の底部外面には板状圧痕を残す。（189）は須恵器の高杯で、混入品である。（190）は須恵器の壺底部である。これらの出土遺物より、SB01は13世紀頃の時期が考えられる。

#### SB02（第35・36図、図版5・6・26）

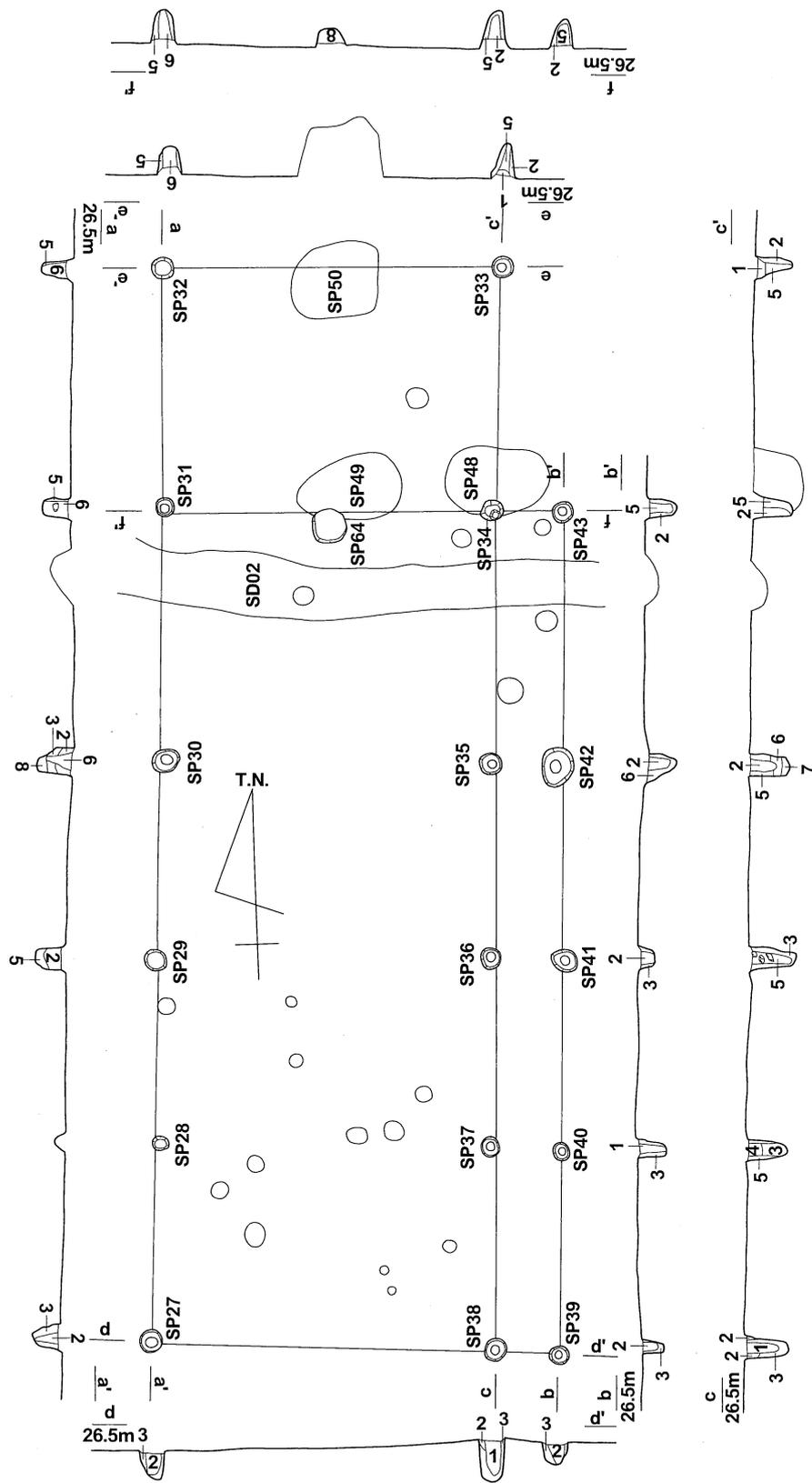
I区の北端、B3区の第1低地帯上層遺構面上で検出した、南北棟の大型の掘立柱建物である。東面には北端の1間分を除き庇が付く。また、東柱と考えられる柱穴を1基検出した。身舎は1間（4.0m）×5間（12.8m）、面積は51.2m<sup>2</sup>、主軸方位はN2°Eを測る。柱間は、梁間4.0m、桁行2.2m～3.0mを測る。柱穴堀形は円形ないし楕円形状を呈し、径0.2m～0.3m、深さ0.2m～0.5mを測る。また、大多数



1. 暗茶褐色砂質土
2. 暗乳褐色砂質土
3. 茶灰色砂質土
4. 灰褐色砂質土
5. 淡灰褐色砂質土
6. 淡灰色シルト
7. 暗乳茶褐色ブロック層 (褐色粒, 黄色粒を多量に含)
8. 乳茶褐色ブロック層 (7に類似)
9. 淡黒褐色粘質土
10. 淡茶褐色砂質土
11. 乳褐色砂質土
12. 茶褐色粘質土



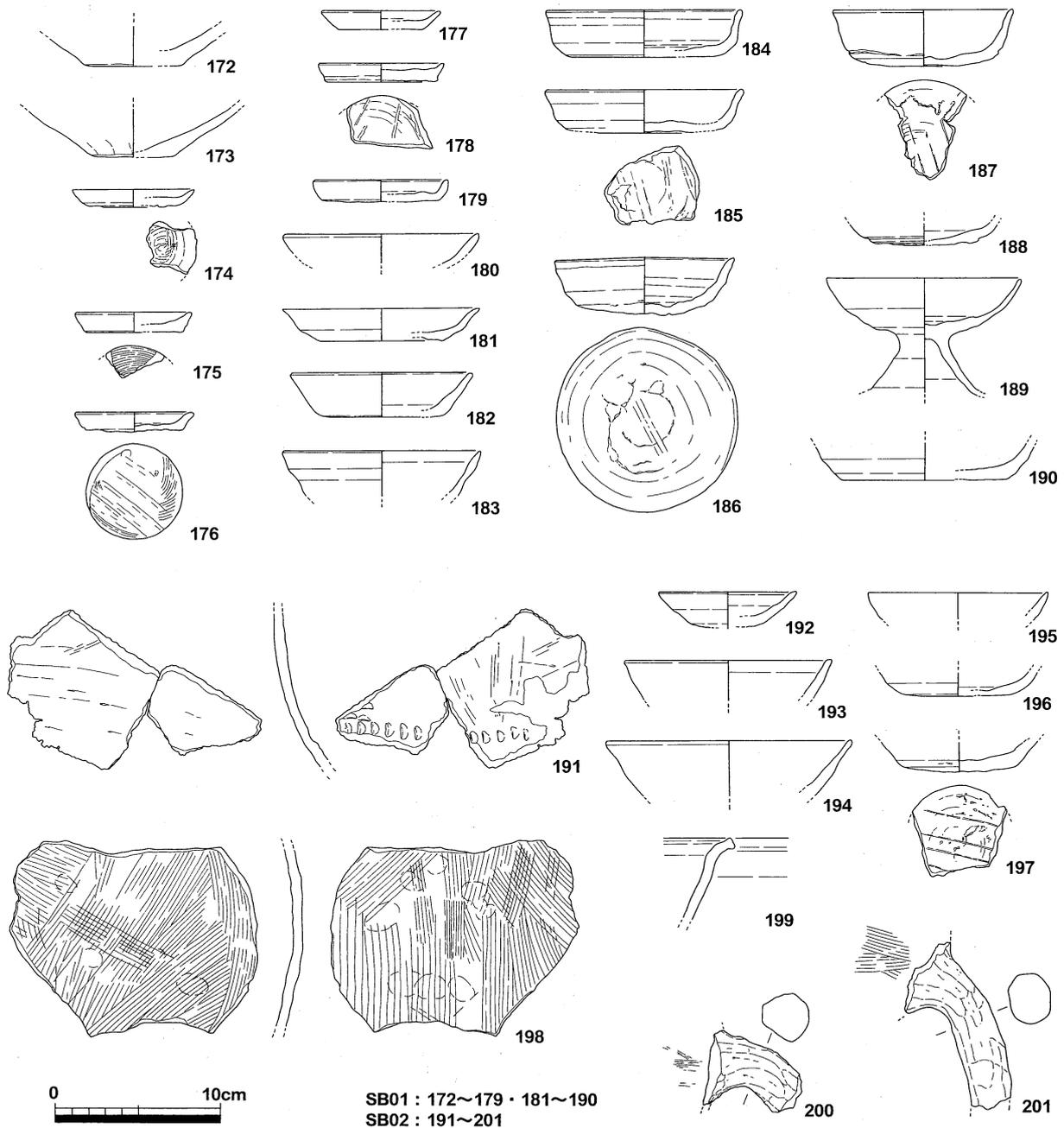
第34図 SB01平・断面図



1. 暗茶褐色砂質土
2. 灰茶褐色砂質土 (2より淡)
3. 灰茶褐色砂質土 (Mn塊を多量に含)
4. 灰茶褐色砂質土
5. 灰褐色砂質土
6. 淡灰色砂質土 (Mn含)
7. 暗茶灰色粘質土 (Mn粒等含)
8. 乳灰褐色シルト

第35図 SB02平・断面図

の柱穴で柱痕を確認した。柱穴埋土は茶～灰色系の砂質土が主体を占める。出土遺物としては、3基の柱穴中より土師小皿・杯等が出土している（第36図191～201）。（191）縄文の深鉢で、混入品である。外面に爪型文を顕著に施している。（192）は土師器の小皿（193～197）は土師器の杯である。（197）の底部外面には板状圧痕が顕著に残っている。（198）は土師器の長胴甕の体部（200・201）は土釜の支脚部である。これらの出土遺物より、SB02は13世紀頃の時期が考えられる。

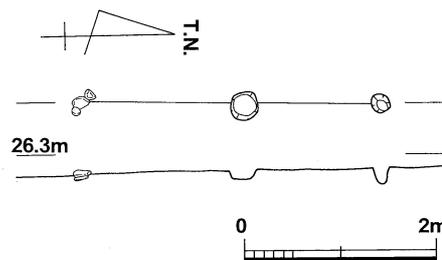


第36図 SB01・02出土遺物

## (2) 柵列

### SA01 (第37図)

I 区の北端 A 3 区で検出した、南北方向 2 間の柵列である。柱間は、4.0m、主軸方位は  $N 2^{\circ} W$  を測る。柱穴掘形は円形で、径 0.2m~0.3m、深さ 0.2m~0.5m を測る。また、南端の柱穴は残りが悪く根石のみ検出した。なお、この柵列は SB01 の南側に位置し、SB01 の方向に揃えている点より SB01 の付属施設の可能性が高い。なお、この遺構からは遺物は出土しなかった。



## 5. 第1低地帯

### (1) 概要

古川西岸の氾濫原と旧河道 B に挟まれた北西方向に短く延びる微高地の寺田地区では、調査区のほぼ中央部で旧河道 B より古川の氾濫原に向けて延びる弥生時代中~後期の小規模な第 1

第37図 SA01断面図

低地帯を確認した。第 1 低地帯は、I 区北半部より II 区南半部にかけて浅い谷状の地形を呈し、幅約 30m で、深さ約 0.5m を測り、北西方向に延びる。堆積層は上層がシルト、下層が砂質土からなる。堆積層を大別すれば II ③~II ⑥層に区分できる。

II ③層：暗茶褐色シルト（褐色粘土ブロック・粗砂・小礫等を含む）層厚約 0.3m を測り、第 1 低地帯のほぼ全面に広がる。

II ④層：灰黄褐色シルト（褐色粘土ブロック・粗砂・小礫等を含む）層厚約 0.3m を測り、II ③層同様、第 1 低地帯のほぼ全面に広がる。

II ⑤層：暗灰褐色砂質土、層厚約 0.2m を測り、第 1 低地帯の西半部で部分的に認められる。

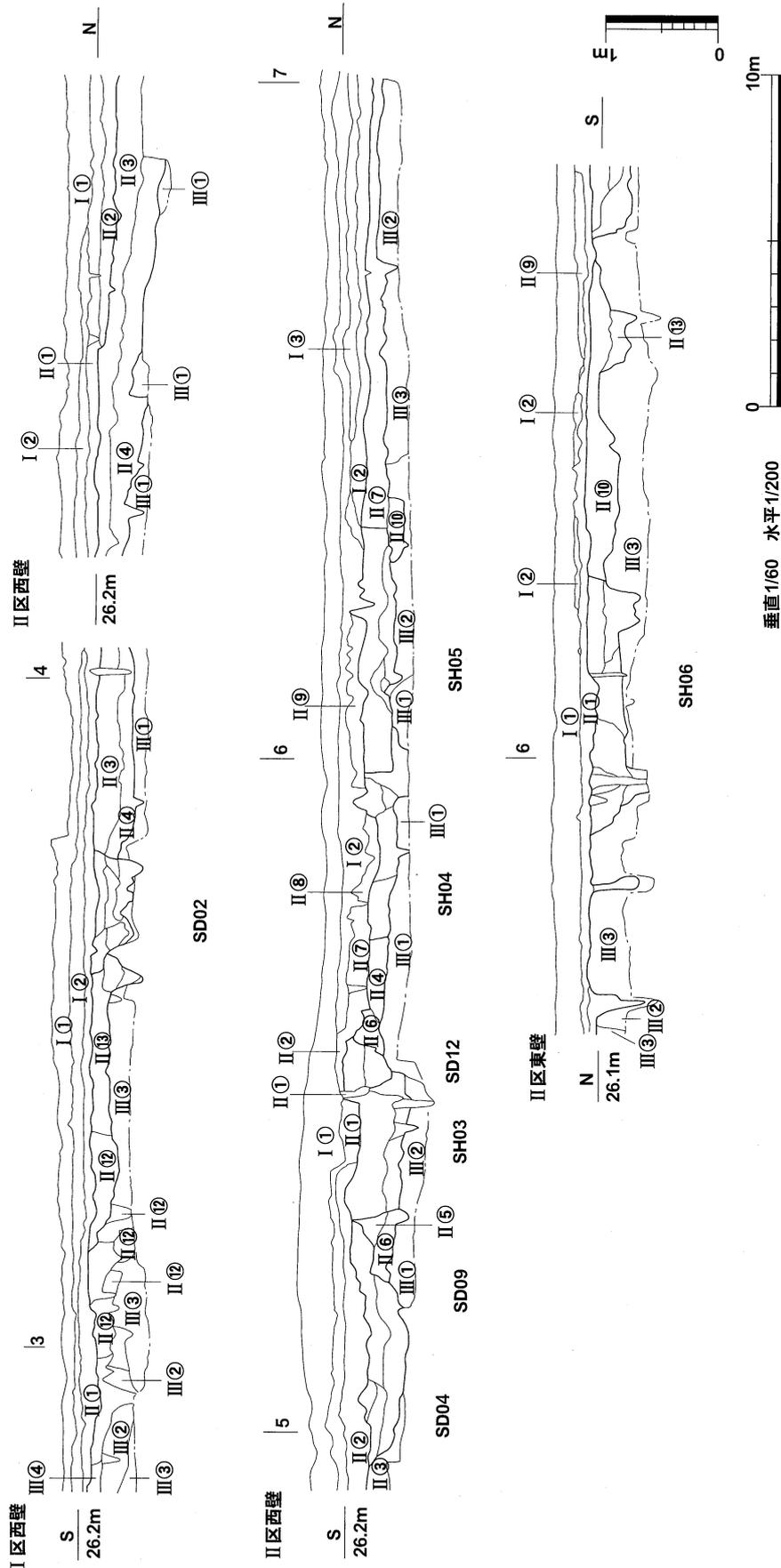
II ⑥層：灰褐色砂質土、層厚約 0.2m を測り、第 1 低地帯の西半部で部分的に認められる。

なお、第 1 低地帯では遺構面が上・下 2 面存在する。II ③層の上面で、古墳時代後期末以降の遺構が展開する第 1 低地帯上層遺構面、また、ベース面の直上に広がる第 1 低地帯下層遺構面は、出土遺物が少なく詳細な時期は比定できないが、概ね弥生時代中期後半~後期前半の遺構が展開する。ベースは地点により異なるが、黄褐色のシルトないし砂礫層を呈している。また、低地帯の周辺では II ⑬層等、小規模な包含層を検出している。

### (2) 第 1 低地帯及びその他の包含層出土遺物

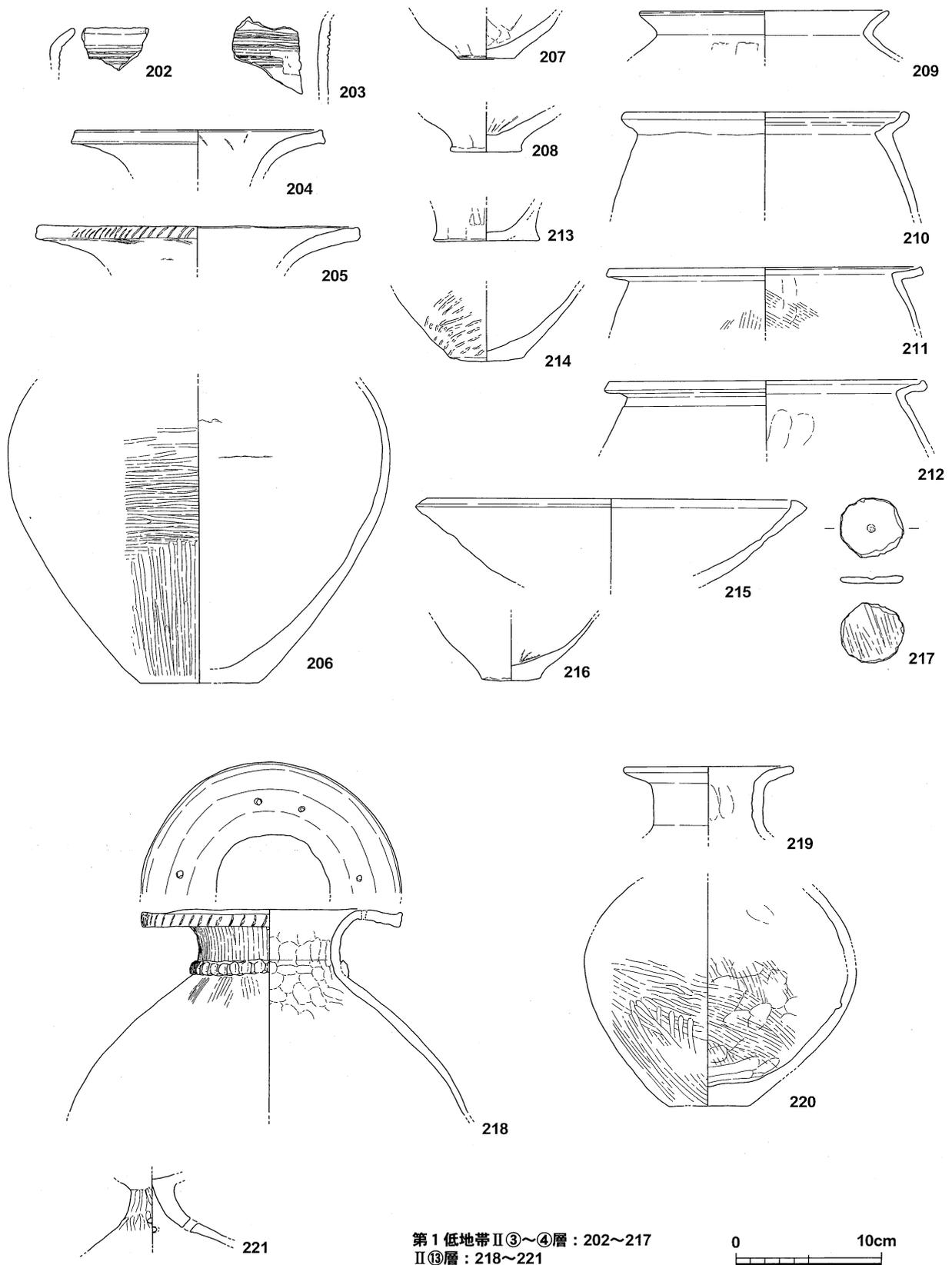
第 1 低地帯及び隣接する包含層出土の遺物を紹介する。II ③~II ④層中からは弥生時代前期~中期の土器及び石器が少量出土している（第 39 図 202~217）。（202・203）は弥生前期の甕口縁部及び体部である。外面には櫛描沈線が顕著に施されている。（204・205）は壺口縁部である。（206）は壺体部、（207・208）は壺底部である。（209~212）は甕上半部、（213・214）は甕底部である。（214）の甕は後期後半のタタキ甕の底部である。（215）は高杯杯部（216）は鉢に分類したが壺の可能性がある。（217）は甕の体部を再利用した土製紡錘車の未製品である。これらの資料は一部を除き、おおよそ弥生後期中葉ないし後半にあたる土器である。

（第 40 図 223~228・230・232~234）は第 1 低地帯より出土した石器類である。（223・224）はサヌカイト製の石鏃、（225・226）はサヌカイト製の楔形石器、（227・228）は楔形石器の削片である。（232）

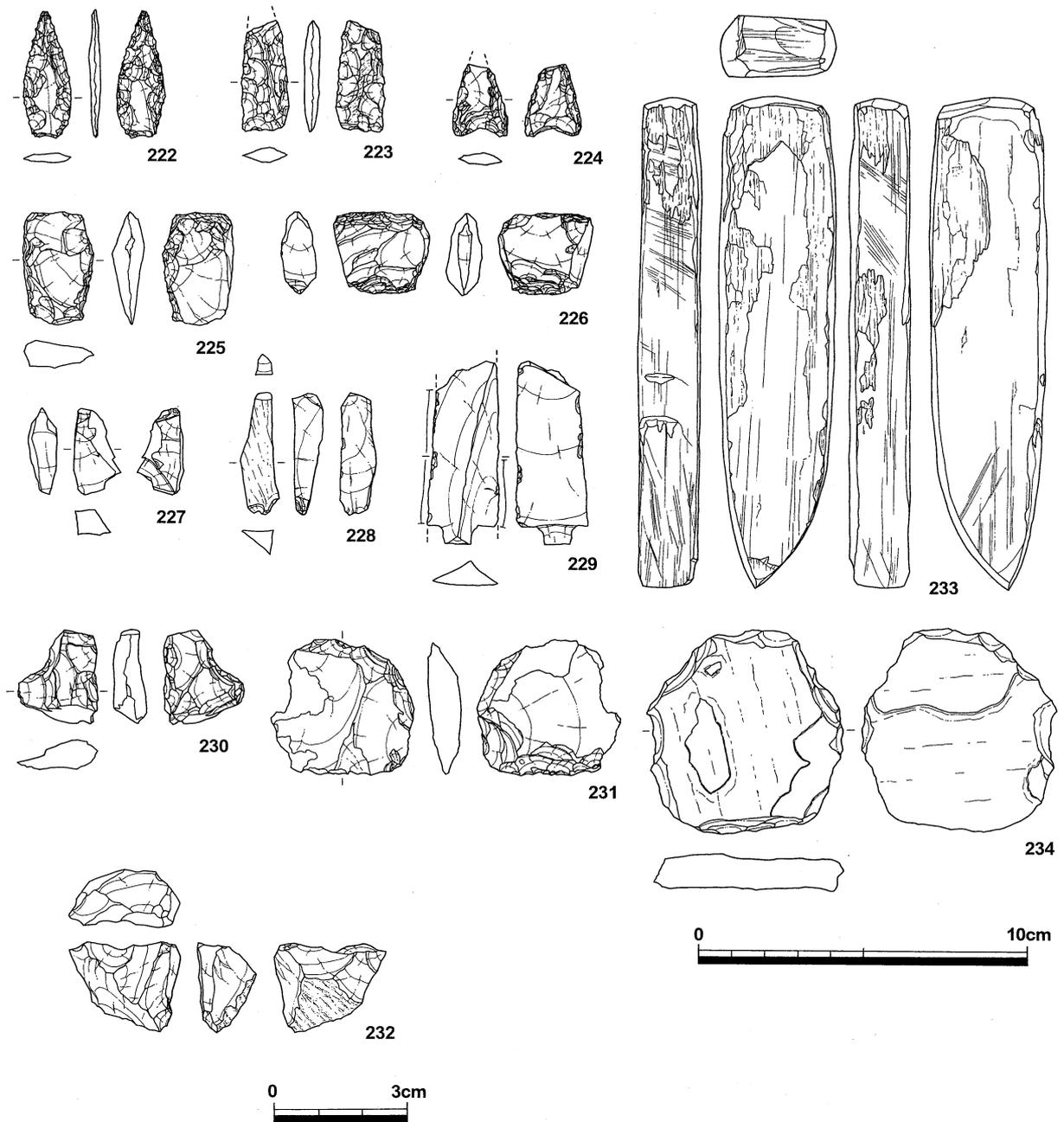


- I ①. 現耕土
- I ②. 灰色砂質土
- I ③. 灰褐色砂質土 (I ①に類似, Mn酸化著しい)
- II ①. 明茶褐色砂質土 (花崗土に類似, Mn酸化著しい)
- II ②. 暗茶褐色砂質土 (Mn酸化著しい)
- II ③. 暗茶褐色シルト (褐色粘土ブロック・粗砂・小礫等を含む)
- II ④. 灰黄褐色シルト (褐色粘土ブロック・粗砂・小礫等を含む)
- II ⑤. 暗灰褐色砂質土
- II ⑥. 灰褐色砂質土
- II ⑦. 灰色砂質土 (黄褐色粘土小ブロック・Mnを多量に含)
- II ⑧. II ⑦に類似 (僅かに暗い)
- II ⑨. 灰色砂 (Mnブロックを多量に含)
- II ⑩. 暗茶褐色砂質土
- II ⑪. 暗茶灰色礫混砂質土 (硬質)
- II ⑫. 砂礫
- II ⑬. II ③に類似 (僅かに暗い, 遺物多)
- III ①. 灰黄色シルト
- III ②. 灰褐色砂礫
- III ③. 淡黄灰色砂 (暗灰色シルトのラミナが顕著)
- III ④. 暗茶褐色砂礫 (Mn酸化著しく, 硬質でブロック化している)

第38図 第1低地帯東・西壁面土層図



第39図 第1低地帯及びその他包含層出土遺物(1)

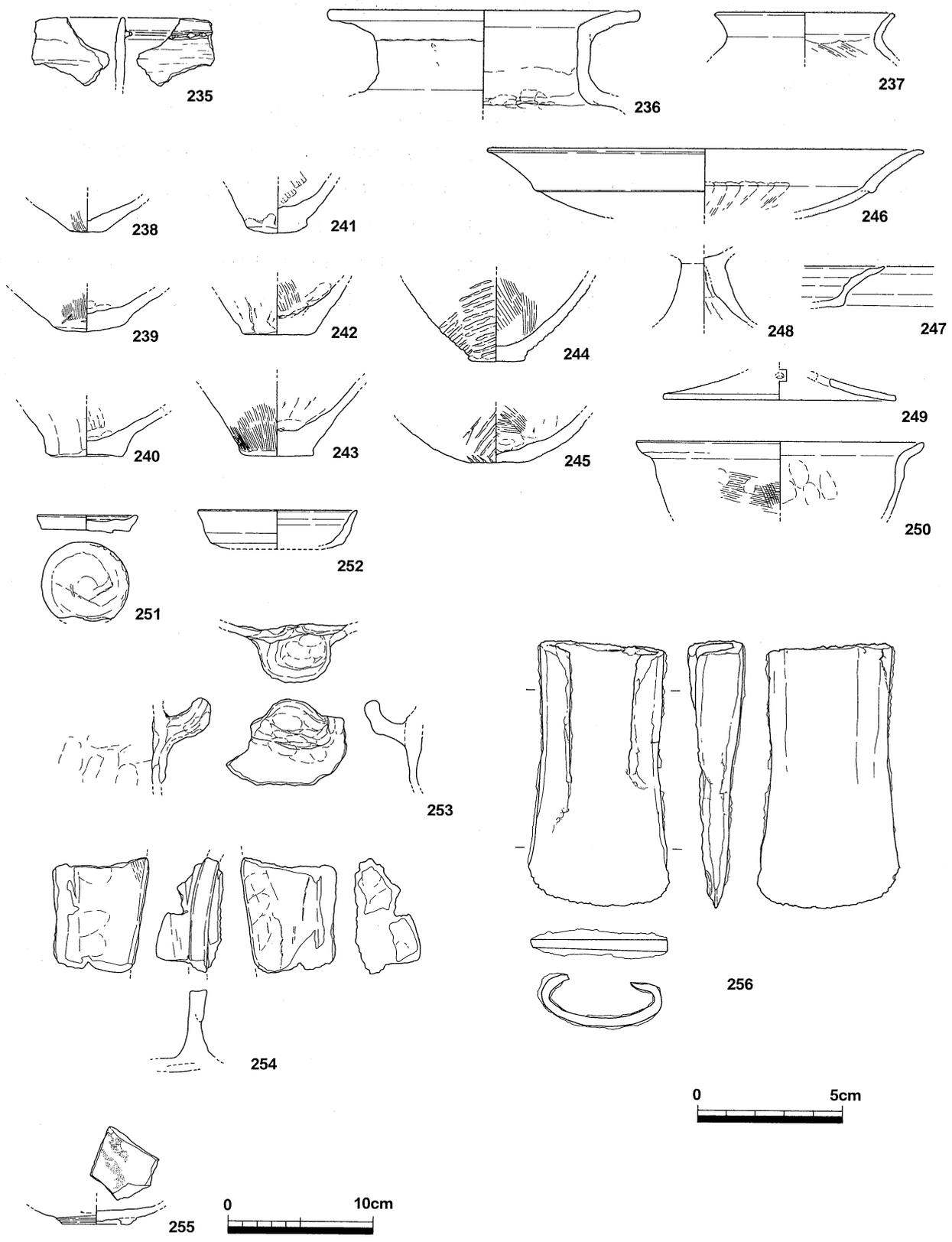


第40図 第1低地帯及びその他包含層出土遺物(2)

はサヌカイト製の石核である。角錐状の剥片に打面を設定し1条の槌状剥離が認められる。これらの特徴だけでみれば旧石器時代の細石刃核とも考えられるが慎重に検討する必要がある。(233)は柱状片刃石斧である。先端部には使用痕、基部周辺にも装着痕を残す優品である。

(第39図218~221)はⅡ区の北端部で検出した包含層Ⅱ⑬層より出土した弥生土器である。(218)壺の上半部である。口縁部内面には、蓋を掛けるためか2穴で一对の単位の穿孔を三方向に施している。また、口頸部と体部との境に指頭圧突帯を施している。(219)は壺の口頸部、(220)は壺の体部である。下半部外面のヘラミガキは顕著である。

(第40図222・229)は包含層Ⅱ⑬層より出土した石器類である。(222)はサヌカイト製の石鏃である。先端部まで残す希な事例である。(229)はサヌカイト製の縦長状の剥片である。上下両端部は折れてい



第41図 寺田地区その他の出土遺物

て、本来の形状は損なわれている。周囲のエッジには刃こぼれ状の使用痕が認められる。

## 6. その他の遺物

(第41図235～256)は発掘途上の段階で出土した、出土地点が不明瞭な遺物を図化したものである。(235)は縄文晩期の突帯文が付された深鉢の口縁部である。(236)は弥生土器の壺口縁部(237)弥生甕の口縁部である。(238～240)は弥生壺の底部、(241～245)は弥生甕の底部である。平底の底部が主体を占めるが、(245)は丸底直前の底部である。(246～249)は弥生高杯(250)は弥生鉢口縁部である。(251)は土師器小皿(252)は土師器の杯である。(253)は土師器甌の把手部、(254)は土師質の竈の焚き口部付近の個所である。(256)袋状の鉄斧である。弥生時代後期頃にあたる鉄製品と考えられるが、遺構が特定できなかった。

## 第4節 産宮通地区の調査

### 1. 概要

産宮通地区からは、縄文時代後期、弥生時代前期、弥生時代中期後半～後期末、古墳時代末～奈良時代、平安時代～室町時代、近世以降の遺構・遺物を検出した。このうち縄文時代後期、弥生時代前期、古墳時代後期末～奈良時代は若干の遺物が出土したのみであり、明確な遺構には恵まれず周辺に当該期の遺跡が展開する可能性を指摘するに留まる。

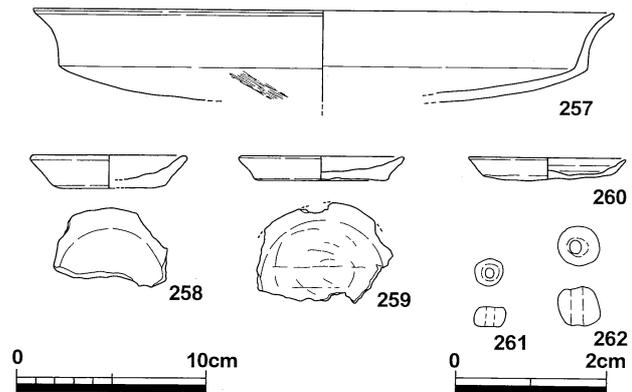
弥生時代中期後半～後期末の遺構は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡等の集落を構成する遺構を検出した。このうち掘立柱建物はⅣ～Ⅵ区で、竪穴住居はⅧ区で検出した。なお、第2低地帯の下層からは弥生時代中期～古墳時代前期初頭の多量の土器・木製品と、河床面上からは水利関連の祭祀によるものか、弥生時代後期後半の水形の仿製鏡が出土した。また、第3低地帯の流路04からは弥生時代前期、中期後半～後期前半の多量の土器と、木製品が出土した。平安時代の遺構はⅤ区の南端の不整形な落込みから比較的一括に近い形で土器が出土した。鎌倉時代～室町時代の遺構は、掘立柱建物跡・井戸等の集落を構成する遺構を北半部のⅣ～Ⅷ区で検出した。なお、掘立柱建物はⅥ～Ⅷ区に集中する傾向がある。また、第3低地帯の流路5～8からは12世紀前半頃の土器が多量に出土している。以下時代順に報告する。

### 2. 弥生時代中期後半～後期末

#### (1) 竪穴住居跡

SH07 (第42・43図, 図版12・26)

Ⅷ区北端部西壁際のA25・26区で検出した小型の竪穴住居跡である。南西隅は一部対象地外へ延び、東側は攪乱により破壊されている。そのため、全体の1/2を検出した。平面形は隅丸方形を呈し一辺約4.0m、深さ約0.1mを測る。主軸方位はN27°Eを測る。面積は推定で13.3m<sup>2</sup>を測る。埋土は褐色系の粘質土からなる。床面上には幅約0.1m、深さ7cmの壁溝が巡る。また、床面中央には焼土を含む不整楕円形状の炉跡を



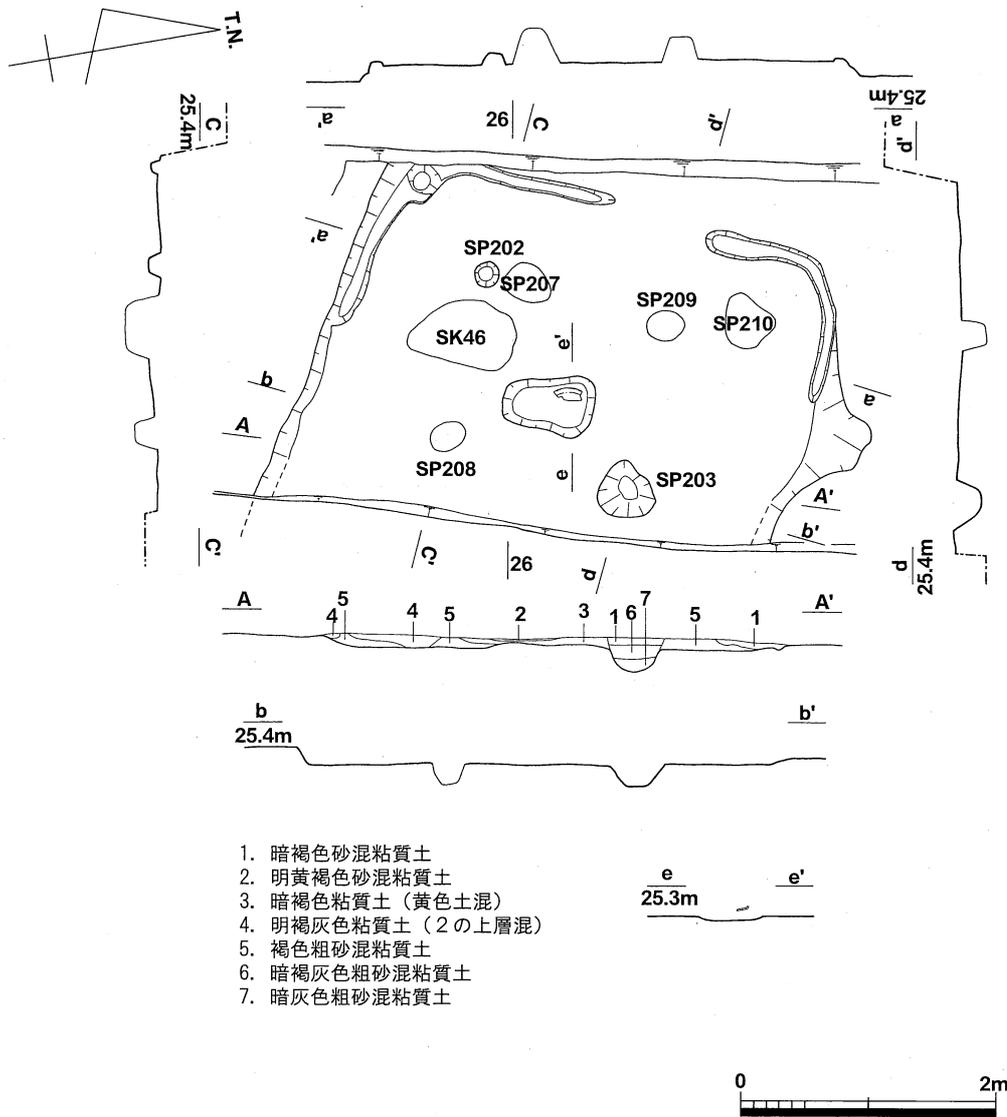
第42図 SH07出土遺物

検出した。長径0.7m、短径0.4m、深さ5cmを測る。床面上面からは中世の柱穴及び土坑等が多数切り込んでいる。中世の柱穴を除き2主柱穴を検出した。主柱穴は円形及び不整形円形を呈し、径0.2m～0.4m、深さ約0.2mを測る。出土遺物としては弥生土器及び土師器等がコンテナ0.1箱程出土している(第42図257～262)。(257)は炉跡から出土した弥生後期後半の高杯の杯部である。(258～260)は混入品で中世の土師器の小皿である。(261・262)はSP203より出土したガラス小玉である。

#### (2) 掘立柱建物跡

SB06 (第44図, 図版12)

Ⅳ区の中央B14区の東壁際で検出した、東西棟の掘立柱建物である。東半部は対象地から外れるため、全体の1/2を検出した。1間(2.6m)×2間(3.9m)以上、面積は10.1m<sup>2</sup>以上、主軸方位はN76°Eを



第43図 SH07平・断面図

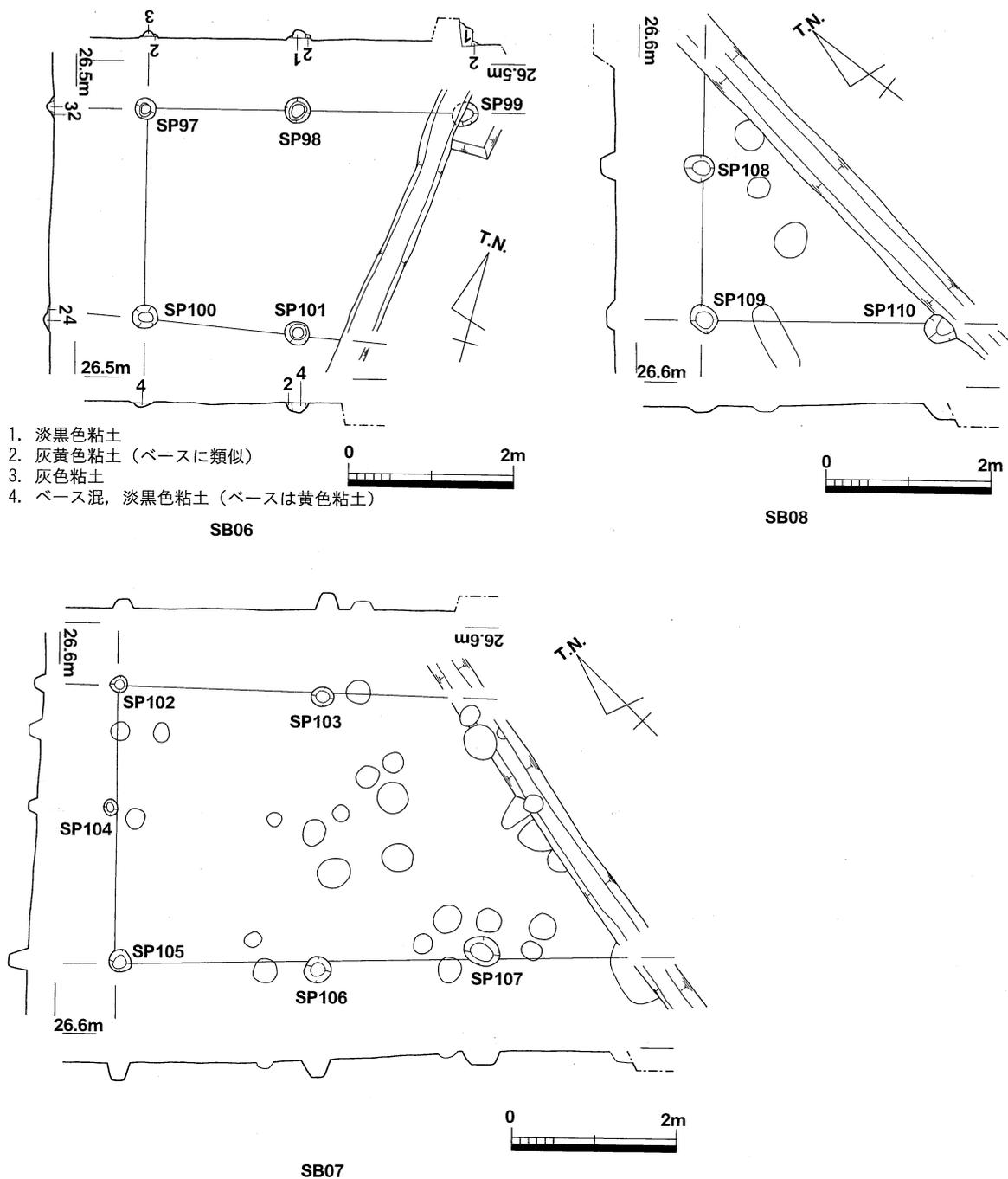
測る。柱間は、梁間2.6m、桁行1.8m～2.0mを測る。柱穴堀形は円形を呈し、径約0.3m、深さ0.1m～0.3mを測る。柱穴埋土は淡黒系の粘質土が主体を占める。5柱穴中4柱穴で柱痕を検出した。なお、この建物から遺物は出土していない。

SB07（第44図）

V区の南半部A・B16区で検出した、掘立柱建物である。東半部は対象地から外れるため、全体の1/2を検出した。2間（3.4m）×2間（4.4m）以上、面積は15.0m<sup>2</sup>以上、主軸方位はN47°Wを測る。柱間は、梁間1.5m～1.9m、桁行2.0m～2.5mを測る。柱穴堀形は円形を呈し、径0.2m～0.4m、深さ0.1m～0.2mを測る。なお、この建物から遺物は出土していない。

SB08（第44図）

V区の南半部B18区で検出した、掘立柱建物である。東半部は対象地から外れるため、全体の1/2を検出した。1間（2.9m）×1間（1.9m）以上、面積は5.5m<sup>2</sup>以上、主軸方位はN52°Wを測る。柱間は、梁間2.9m、桁行1.9mを測る。柱穴堀形は円形を呈し、径0.3m、深さ0.1m～0.2mを測る。なお、この建物から遺物は出土していない。



第44図 SB06~08平・断面図

SB09 (第45・47図)

V区の南南部A17区で検出した、掘立柱建物である。西半部は対象地から外れるので、全体の約1/2を検出した。1間(2.7m)×1間(1.5m)以上、面積は4.1m<sup>2</sup>以上、主軸方位はN81°Wを測る。柱間は、梁間2.7m、桁行1.5mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、径0.2m~0.4m、深さ0.2mを測る。出土遺物としては、SP113より弥生土器の甕1点(第47図263)が出土している。

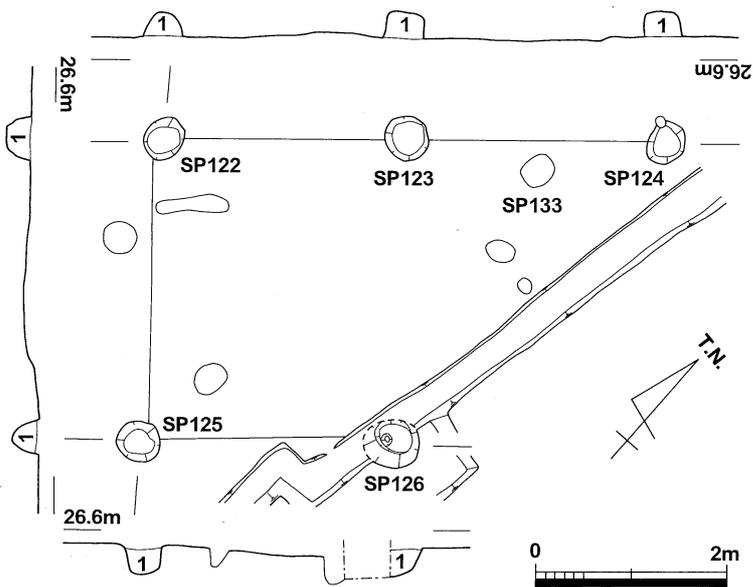
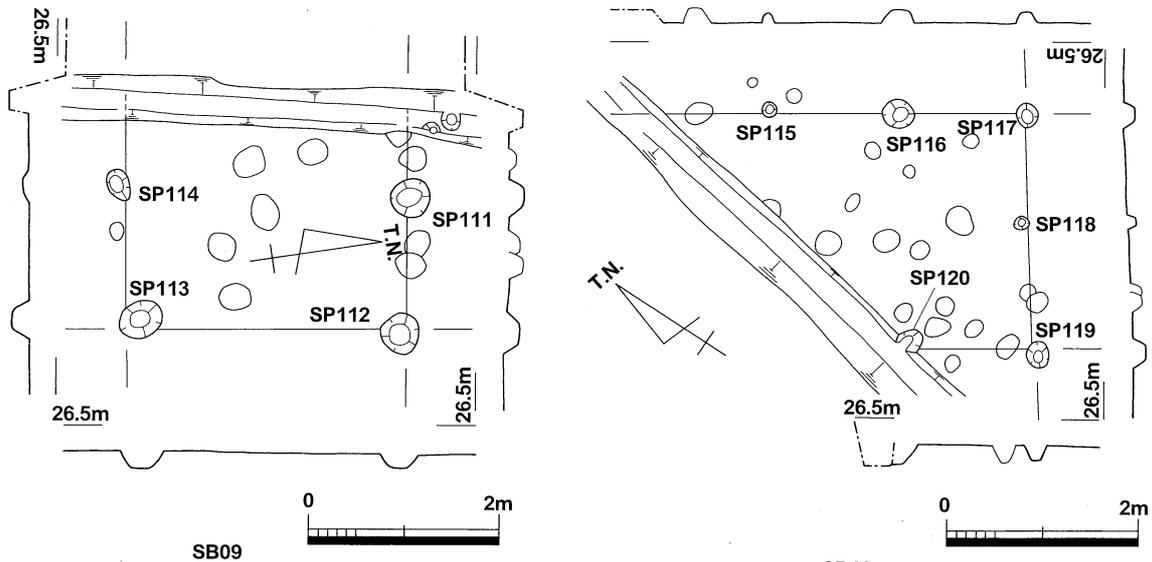
SB10 (第45図)

V区の南南部B18区で検出した、掘立柱建物である。東半部は対象地から外れるので、全体の約1/2

を検出した。2間(2.6m)×2間(3.5m)以上、面積は9.1㎡以上、主軸方位はN34°Wを測る。柱間は、梁間1.2~1.4m、桁行1.4m~2.1mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、径0.3m、深さ0.1m~0.2mを測る。なお、この建物から遺物は出土していない。

SB11 (第45・47図, 図版13)

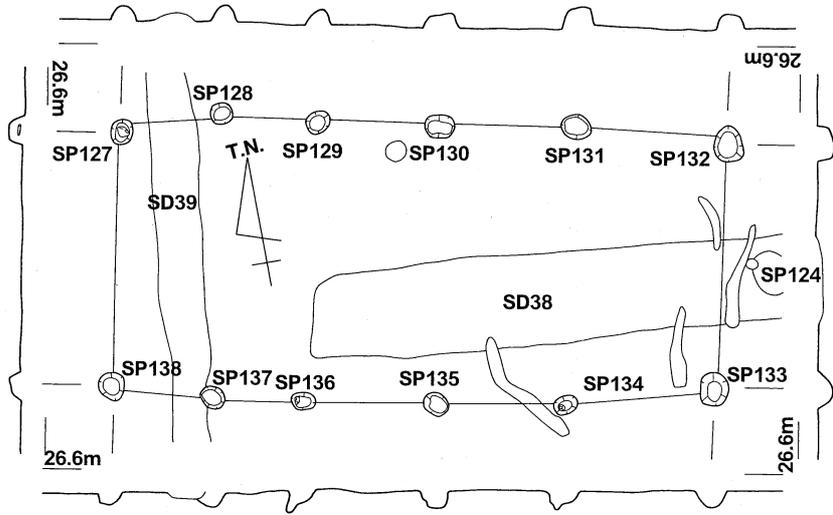
VI区の南端部A・B18区で検出した、東西棟の掘立柱建物である。SB12と重複するが柱穴が切りあわないため、前後関係は不明である。1間(3.2m)×2間(5.3m)以上、面積は17.0㎡以上、主軸方位はN50°Eを測る。柱間は、梁間3.2m、桁行2.6m~2.7mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、径約0.5m、深さ約0.3mを測る。柱穴埋土は地山の黄色粘土ブロック(ベース)が混じった灰色の砂質土である。



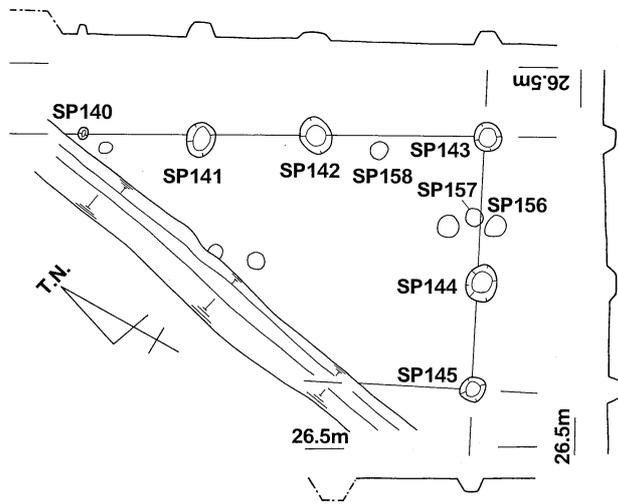
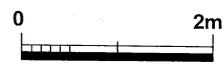
1. 黄色粘土ブロック(1~3mm位)混灰色砂質土

SB11

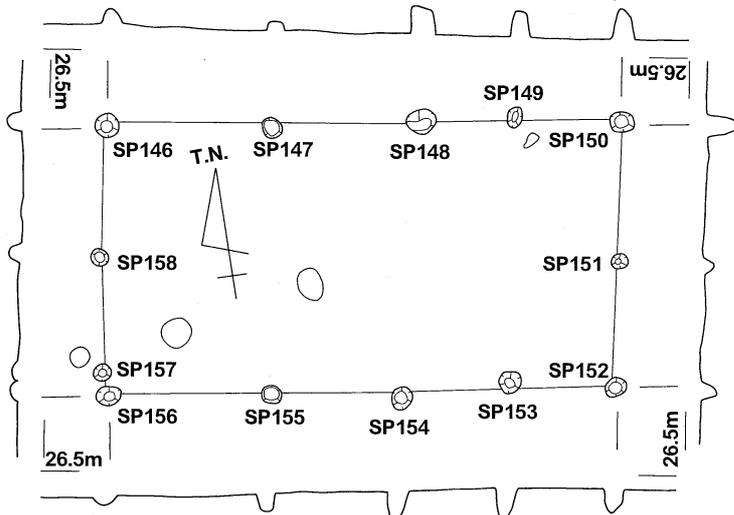
第45図 SB09~11平・断面図



SB12



SB14



SB15



第46図 SB12・14・15平・断面図

出土遺物としては、SP122より少量の弥生土器が出土している（第47図264・265）。（264）は弥生中期中葉頃の直口壺の口縁部である。頸部外面には指頭圧突帯を付す。（265）は壺の底部である。

**SB12（第46図）**

Ⅵ区の南半部A・B19区で検出した、側柱列が歪んだ東西棟の掘立柱建物である。SB11と重複するが柱穴が切りあわないため、前後関係は不明である。1間（2.7m）×5間（6.5m）、面積は17.6㎡、主軸方位はN79°Wを測る。柱間は、梁間2.7m、桁行1.0m～1.6mを測る。柱穴堀形は円形を呈し、径約0.2m、深さ0.1m～0.3mを測る。柱穴埋土は淡黒系の粘質土が主体を占める。出土遺物としては、土器の細片が数点出土しているだけである。

**SB13**

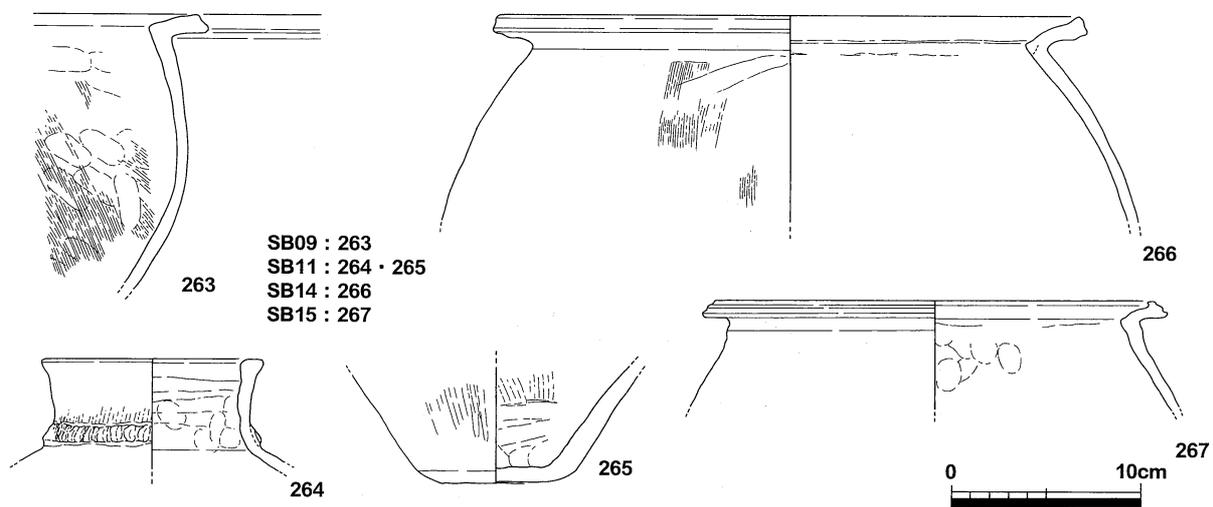
Ⅵ区の南半部A19区で検出した、掘立柱建物である。調査区の関係で東半部のみ検出した。2間（2.2m）×1間（1.3m）以上、面積は2.9㎡以上、主軸方位はN54°Wを測る。柱間は、梁間1.0m～1.2m、桁行1.3mを測る。柱穴堀形は円形を呈し、径約0.2m、深さ0.1m～0.3mを測る。柱穴埋土は茶褐色粘質土が主体を占める。出土遺物としては、土器の細片が数点出土しているだけである。

**SB14（第46・47図，図版13・25）**

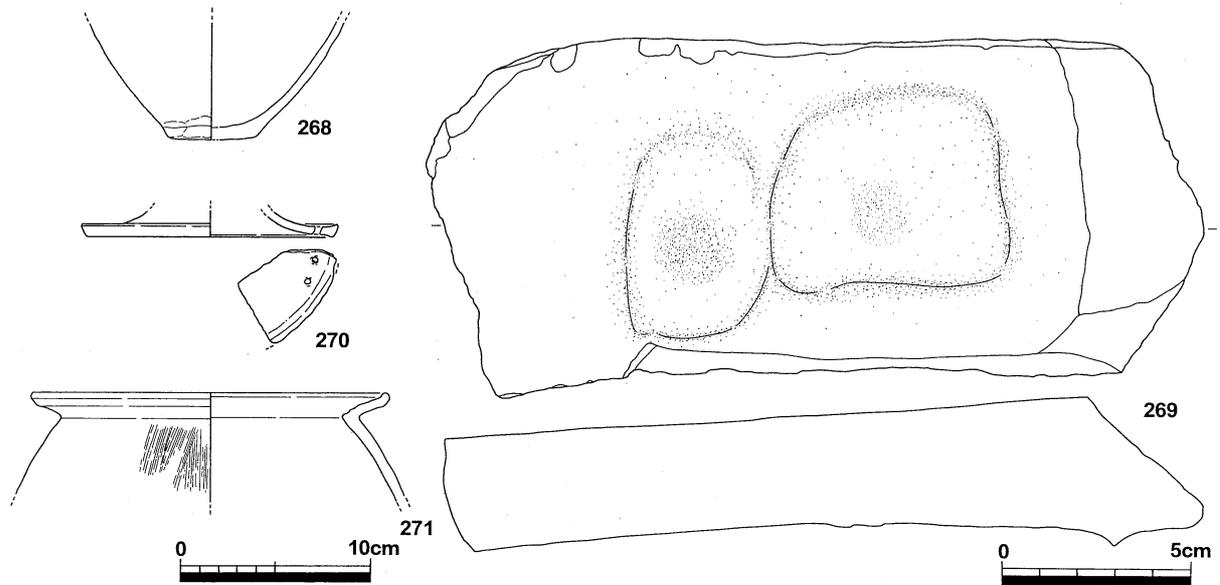
Ⅵ区の北半部A20区で検出した、南北棟の掘立柱建物である。SB14と重複するが柱穴が切りあわないため、前後関係は不明である。北半部は対象地から外れるので、全体の約1/2を検出した。2間（2.7m）×3間（4.2m）以上、面積は11.3㎡以上、主軸方位はN29°Wを測る。柱間は、梁間1.1m～1.6m、桁行1.2m～1.8mを測る。柱穴堀形は円形を呈し、径約0.1m～0.4m、深さ約0.1m～0.2mを測る。柱穴埋土は灰茶色砂質土が主体を占める。出土遺物としては、SP139より弥生中期中葉以降の大型の甕の上半部（第47図266）が出土している。

**SB15（第46・47図，図版14）**

Ⅵ区の北半部A20区で検出した、東西棟の掘立柱建物である。SB13と重複するが柱穴が切りあわないため、前後関係は不明である。2間（2.9m）×4間（5.5m）、面積は16.0㎡以上、主軸方位はN83°Wを測る。柱間は、梁間1.4m～1.5m、桁行1.0m～1.7mを測る。柱穴堀形は円形を呈し、径約0.3m、深さ0.1m～0.3mを測る。柱穴埋土は黄色粘土ブロック（ベース）を含む暗灰色粘質土が主体を占める。出土遺物としては、SP152より弥生の甕の上半部（第47図267）が出土している。



第47図 SB09・11・14・15出土遺物



第48図 SP96・139・175出土遺物

(3) 柱穴

SP96 (第48・49図)

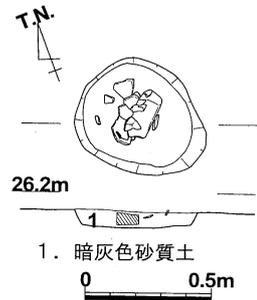
IV区のA14区で検出した柱穴である。堀形は円形を呈し、径0.5m、深0.1mを測る。埋土は暗灰色砂質土である。出土遺物としては、(第48図268・269)の弥生土器及び石器が出土した。(268)は壺の底部で(269)は比較的大型の砥石である。

SP139 (第49図)

VI区のB19区で検出した柱穴である。堀形は円形を呈し、径0.3m、深0.1mを測る。埋土は黄色粘土ブロック(ベース)を含む暗灰色粘質土である。出土遺物としては、(第139図270)の弥生の高杯が出土している。(270)は高杯の脚部で、端部に1対の穿孔が認められる。

SP175 (第48図)

VII区のA21区で検出した柱穴である。堀形は円形を呈し、径0.2m、深さ0.1mを測る。出土遺物としては、(第48図271)の弥生の甕上半部が出土している。



第49図 SP96平・断面図

(4) 土坑

SK24 (第51図)

III区の南端A10区、第2低地帯の河床面上で検出した土坑である。平面は長楕円形状を呈し、断面は削平を受けたものか浅いU字状を呈する。長径2.9m×短径1.0m、深さ0.2mを測る。出土遺物としては、(第51図272)の弥生後期後半の甕上半部が出土している。

SK29 (第50図)

III区のA11区、第2低地帯の河床面上で、SD19に切られる形で検出した土坑である。平面は円形状を呈し、断面は隅丸逆台形状を呈し、長径2.0m×短径1.4m、深さ0.4mを測る。なお、この遺構からは遺物は出土しなかったが、弥生時代後期のSD19に切られていることより、SD19以前の土坑であること

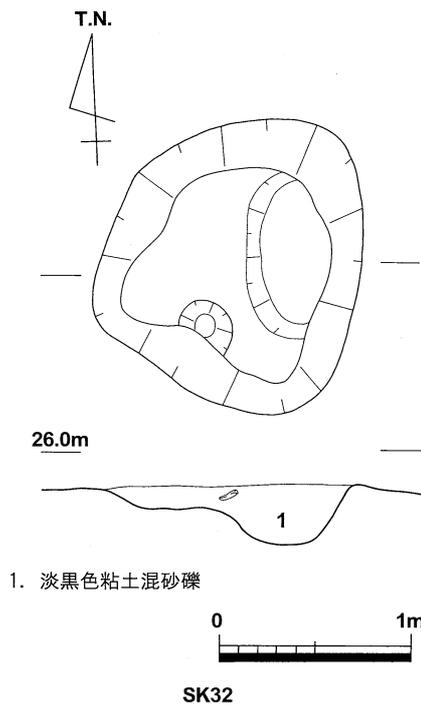
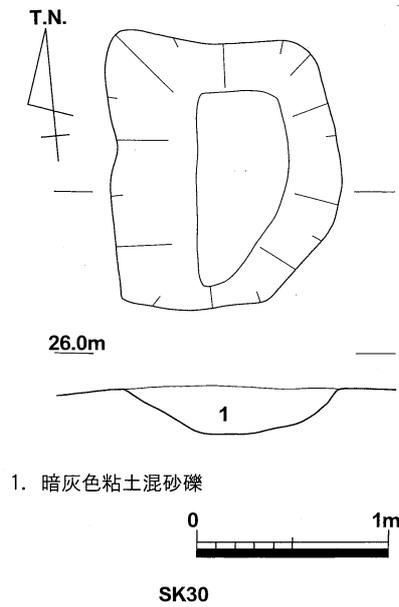
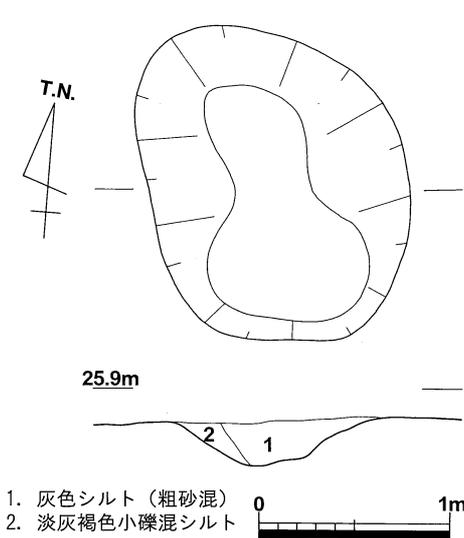
は確かである。

SK30 (第50図)

Ⅲ区のB12区、第2低地帯の河床面上、SK31に隣接した土坑である。平面は不整形な台形状を呈し、断面は浅い皿状を呈する。長径1.7m以上×短径1.5m、深さ0.3mを測る。埋土は暗灰色粘土混り砂礫である。

SK31 (第51図)

Ⅲ区のB12区、第2低地帯の河床面上、SK32に隣接した土坑である。東半部は対象地から外れるため、全体の1/2を検出した。平面は不整形な台形状を呈し、断面は浅い皿状を呈する。長径1.7m以上



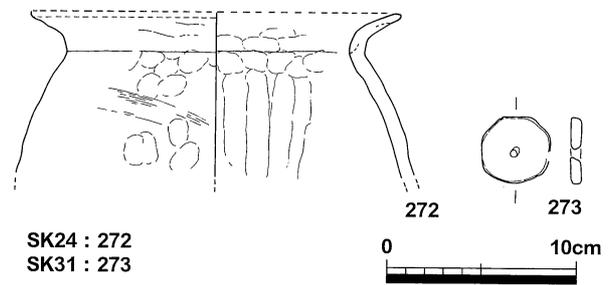
第50図 SK29・30・32平・断面図

×短径1.5m、深さ0.1mを測る。出土遺物としては、(第51図273)の弥生土器転用の土製紡錘車の他、弥生時代前期頃の壺・甕等の細片が少量出土している。

SK32 (第50図)

Ⅲ区のB12区、第2低地帯の河床面上、SK31に隣接した土坑である。平面は円形状を呈し、断面は東側が落ち込む不整形な浅いU字状を呈する。

長径1.6m×短径1.4m、深さ0.3mを測る。埋土は淡黒色粘土が混入した砂礫である。なお、この土坑から遺物は出土しなかった。

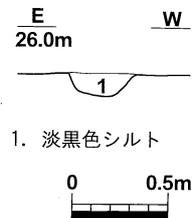


第51図 SK24・31出土遺物

(5) 溝状遺構

SD17 (第52図)

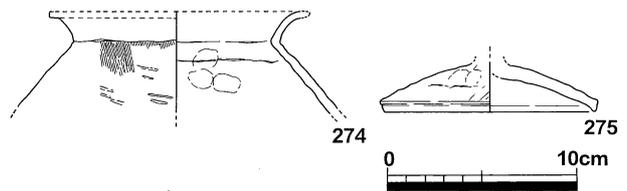
Ⅲ区のA10区、第2低地帯の河床面上で検出した、南北方向に延びる溝状遺構である。断面は浅いU字状を呈し、検出長6.8m、検出幅0.4m、深さ0.1mを測る。主軸方位はN21° Eを測る。埋土は淡黒色シルトを呈している。出土遺物としては、弥生土器の細片が数点出土しているだけで、詳細な時期決定には問題を残す。



第52図 SD17断面図

SD18 (第53図)

Ⅲ区のA・B10区、第2低地帯の河床面上で検出した東西方向に直線上に延びる溝状遺構である。東半部で流路02を切り込む。断面は浅いU字状を呈し、検出長11.0m、検出幅0.5m、深さ0.2mを測る。主軸方位はN85.5° Eを測る。出土遺物としては、弥生土器が数10点出土している(第53図274・275)。(274)は弥生後期後半の甕の上半部である。(275)は、形状より天井部の摘みを欠く、壺の蓋であろう。



第53図 SD18出土遺物

SD19

Ⅲ区のA11区、第2低地帯の河床面上で検出した北に向かって弧を描くように延びる溝状遺構である。なお、北端部では二股に短く分かれる。断面は浅いU字状を呈し、検出長7.8m、検出幅0.4m、深さ0.1mを測る。出土遺物としては、弥生土器の細片が10数点出土しているだけで、詳細な時期決定には問題を残すが、外面タタキを施した甕がみられることより弥生後期後半の範疇で捉えられるであろう。

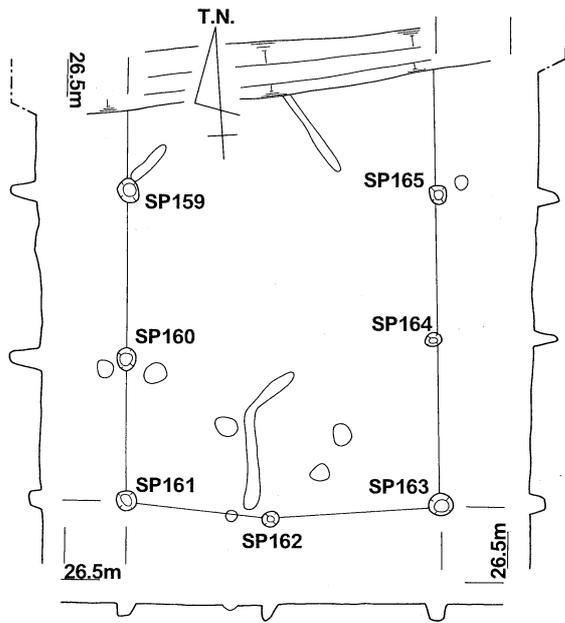
SD20

Ⅲ区のA11区、第2低地帯の河床面上で検出した東西方向に延びる溝状遺構である。断面は浅いU字状を呈し、検出長4.8m、検出幅0.4m、深さ0.1mを測る。主軸方位はN70° Wを測る。出土遺物としては、弥生土器の細片が10数点出土しているだけで、詳細な時期決定には問題を残す。

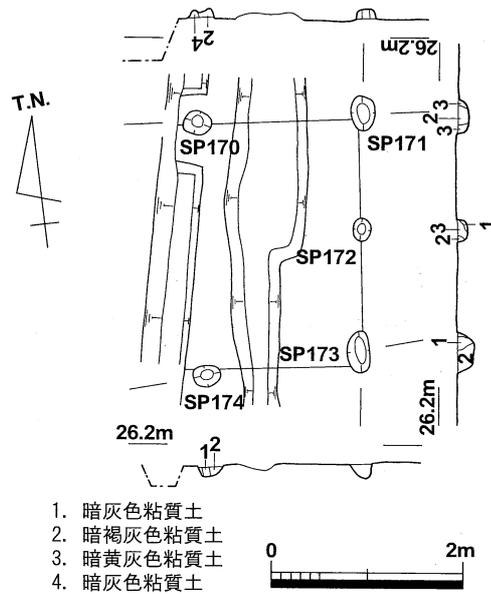
3. 平安時代～室町時代

(1) 掘立柱建物跡

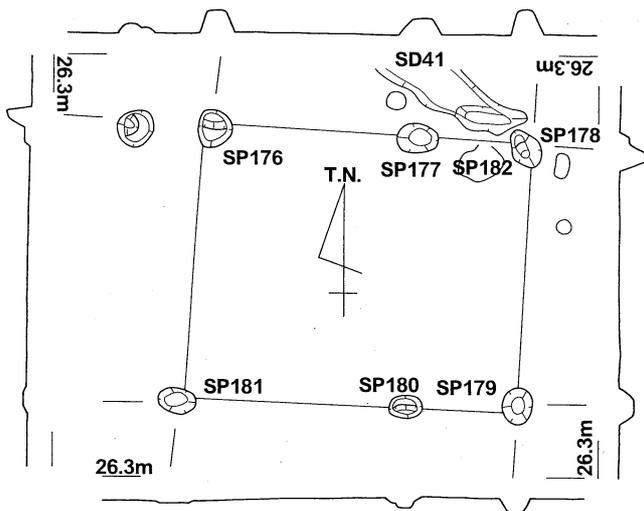
SB16 (第54図, 図版14)



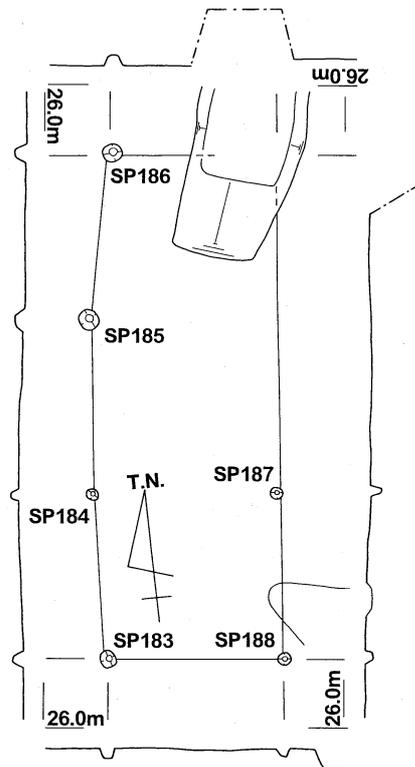
SB16



SB17



SB18



SB19

第54図 SB16~19平・断面図

Ⅵ区の北端部B20区で検出した、南北棟の掘立柱建物である。北半部は対象地から外れるため、全体の1/2を検出した。梁間は棟持柱が外側にずれるため僅かに歪んでいる。2間(3.3m)×2間(3.4m)以上、面積は11.2m<sup>2</sup>以上、主軸方位はN4°Eを測る。柱間は、梁間1.5m~1.8m、桁行1.5m~1.8mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、径0.2m~0.3m、深さ0.2m~0.3mを測る。柱穴埋土は黄色粘土ブロック(ベース)を含む淡黒色粘土が主体を占める。なお、この遺構からは遺物は出土していない。

SB17 (第54図, 図版15)

Ⅶ区の西壁際A21区で検出した、東西棟の掘立柱建物である。西半部は対象地から外れるため、全体の1/2を検出した。2間(2.5m)×1間(1.8m)以上、面積は4.5m<sup>2</sup>以上、主軸方位はN85°Wを測る。柱間は、梁間1.2m~1.3m、桁行1.7m~1.8mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、径0.2m~0.4m、深さ約0.1m~0.3mを測る。出土遺物としては、時期不詳の土師器の細片が数点出土している。そのため詳細な時期決定には問題を残すが、類似する主軸方位等より大別し当該期に含めた。

SB18 (第54図)

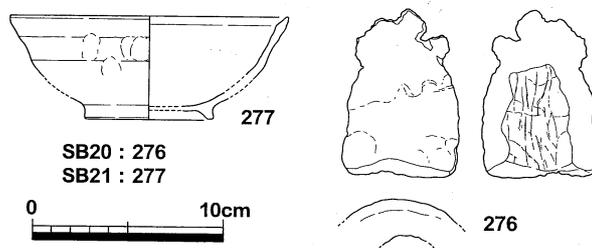
Ⅶ区のA・B21区で検出した、東西棟の掘立柱建物である。1間(2.9m)×2間(3.6m)、面積は10.4m<sup>2</sup>、主軸方位はN89°Wを測る。柱間は、梁間2.3m~2.9m、桁行1.2m~2.4mを測る。柱穴掘形は円形ないし不整形円形を呈し、径約0.4m、深さ0.05m~0.3mを測る。出土遺物としては、時期不詳の土師器の細片が数点出土している。そのため詳細な時期決定には問題を残すが、類似する主軸方位等より判断し、この時期に含めた。なお、この建物に隣接するSD41はその位置的な点よりSB17の雨落ち溝の可能性が高い。

SB19 (第54図)

Ⅶ区の北半部A・B22・23区で検出した、南北棟の掘立柱建物である。北東隅は攪乱で壊れ、西辺の側柱列は僅かに外側にふくらみ不揃いである。1間(1.9m)×3間(5.5m)、面積は10.5m<sup>2</sup>、主軸方位はN7°Eを測る。柱間は、梁間1.9m、桁行1.8m~1.9mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、かなり小さい。径0.1m~0.2m、深さ約0.1mを測る。なお、この遺構からは遺物が出土していない。そのため、詳細な時期決定には問題を残すが、類似する主軸方位等より判断し、この時期に含めた。

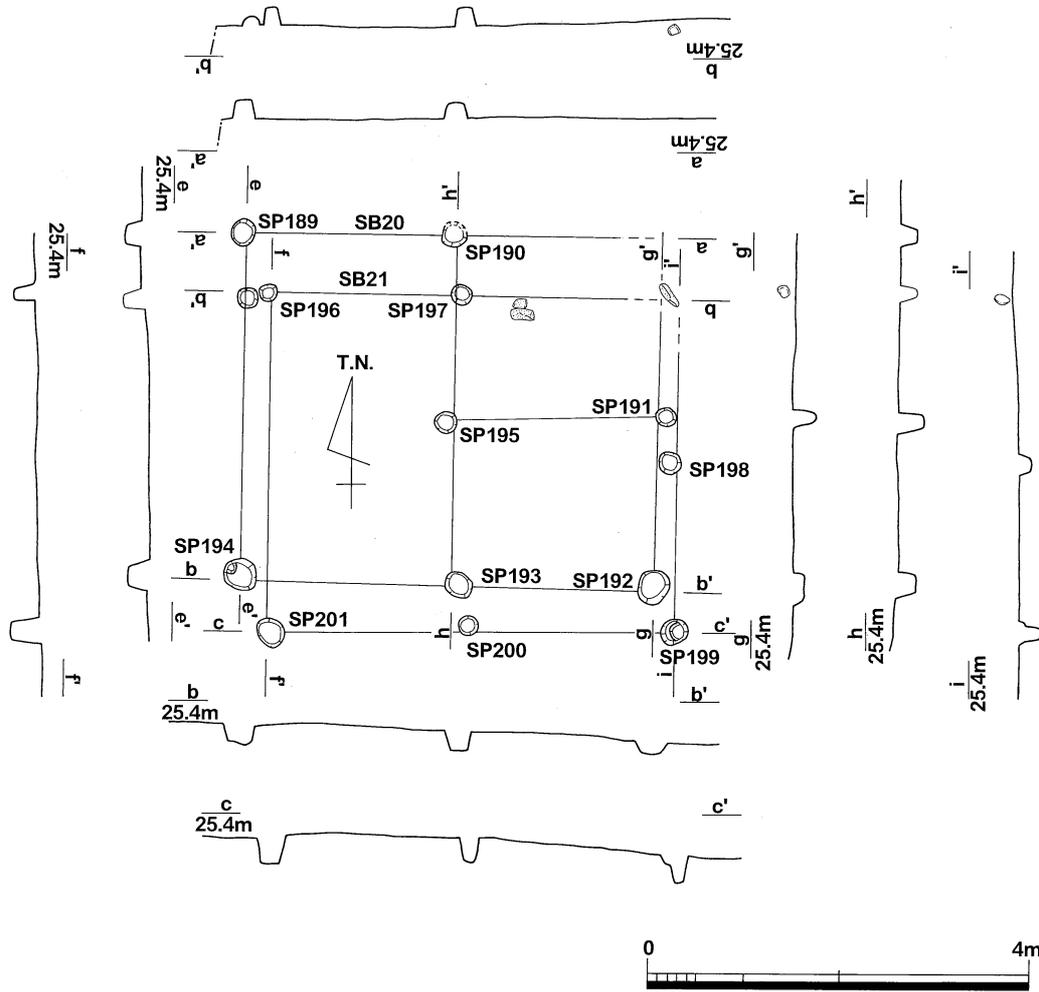
SB20 (第55・56図, 図版26)

Ⅷ区の中央部A24区でSB21と重複する形で検出した、東西棟の掘立柱建物である。床面中央には東柱を備える。2間(3.7m)×2間(4.3m)、面積は15.9m<sup>2</sup>、主軸方位はN90°Eを測る。柱間は、梁間1.8m、桁行2.0m~2.3mを測る。柱穴掘形は円形を呈し、径0.2m~0.3m、深さ約0.1m~0.3mを測る。出土遺物としては、



第55図 SB20・21出土遺物

SP191・195から轆の羽口1点(第55図276)が出土した他は、時期不詳の土師器の細片が数点出土しているだけである。なお、この建物はSB21と重複する形で検出し、SB21と規模・配置がほぼ同一であるため、SB20・21は同一建物の建替え関係にあたる建物と考えられるが、柱穴同士の切り合いがないので、その前後関係までは明らかにはできない。そのためSB20の時期決定には問題を残すが、SB21に近い時期にあたるものと考えられる。



第56図 SB20・21平・断面図

SB21 (第55・56図)

Ⅷ区の中央部A24区でSB20と重複する形で検出した、東西棟の掘立柱建物である。先にも述べたが、SB20・21は同一建物の建替え関係にあたる建物と考えられる。2間(3.7m)×2間(4.3m)、面積は15.9㎡、主軸方位はN90°Eを測る。柱間は、梁間1.8m、桁行2.0m~2.2mを測る。柱穴堀形は円形を呈し、径0.2m~0.3m、深さ0.1m~0.3mを測る。出土遺物としては、SP202より12世紀前半頃の瓦器椀(第55図277)が出土している。

(2) 柵列

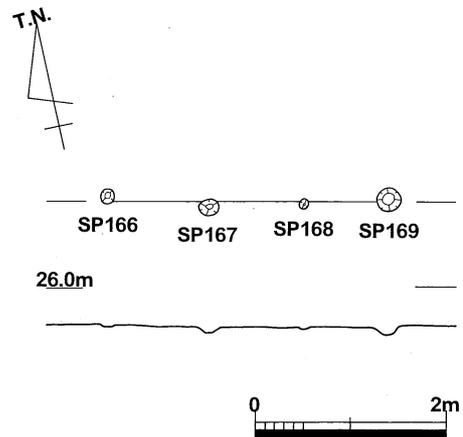
SA02 (第57図)

Ⅶ区の南端B21区で検出した、東西方向3間の柵列である。柱間は、0.9m~1.1m、主軸方位はN77°Eを測る。柱穴堀形は円形で、径0.1m~0.2m、深さ0.1mを測る。なお、この遺構からは遺物が出土していない。そのため詳細な時期決定には問題を残す。

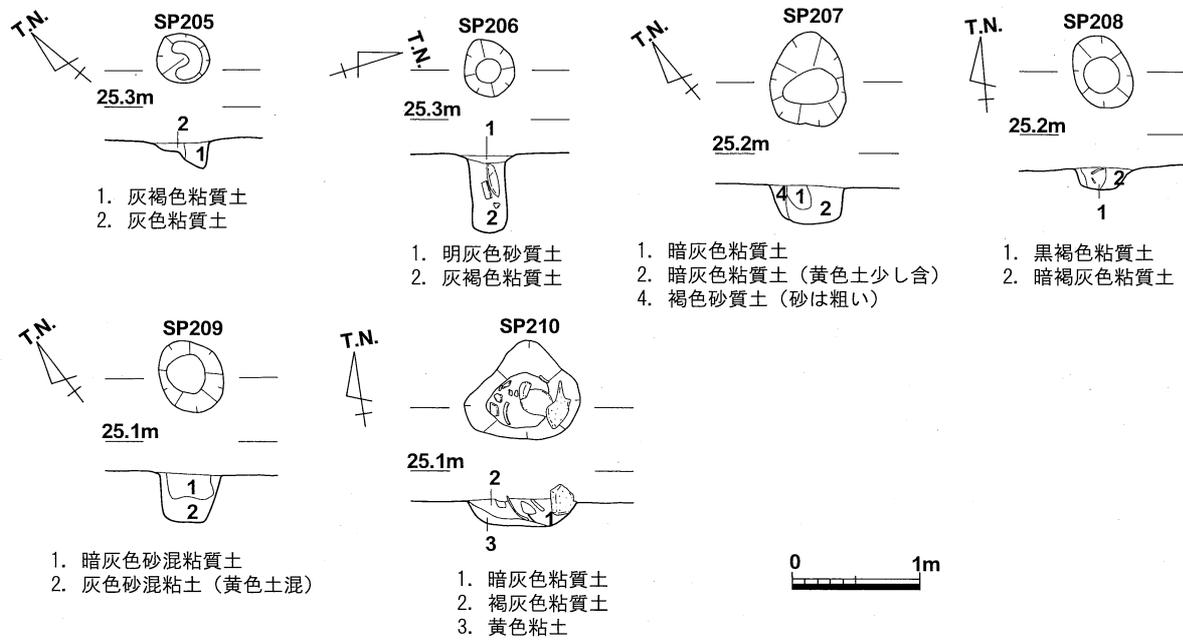
(3) 柱穴

SP121 (第59図)

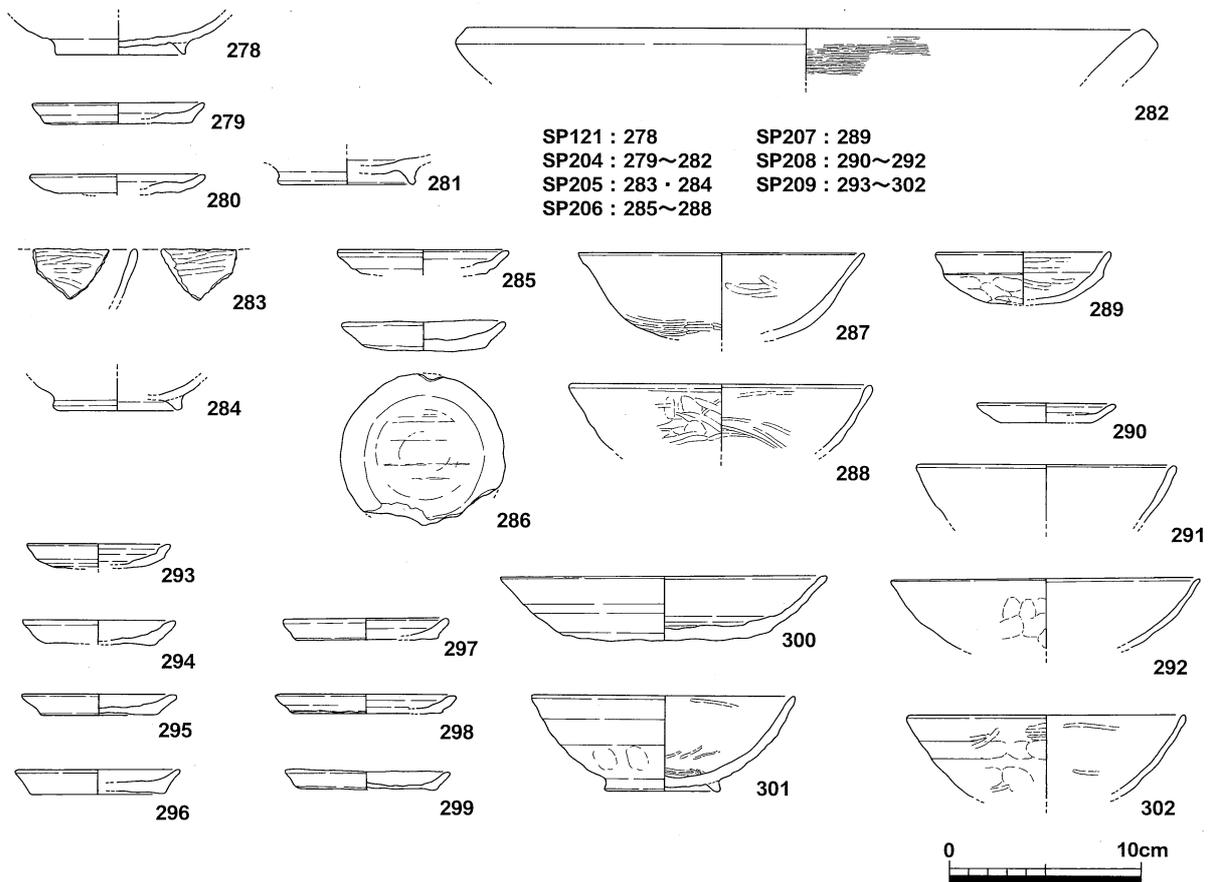
Ⅵ区のA18区で検出した柱穴である。堀形は円形を呈し、径



第57図 SA02平・断面図



第58図 SP205~210平・断面図



第59図 SP121・204~209出土遺物

0.3m、深さ0.2mを測る。埋土は灰茶色砂質土である。出土遺物としては（第59図278）の黒色土器A類の椀底部が出土している。

SP204（第59図）

Ⅷ区のA25区で検出した小型の柱穴である。堀形は円形を呈し、径0.1m、深さ0.1mを測る。出土遺物としては（第59図279～282）の中世土器が、小型の柱穴のわりには比較的多量に出土している。（279・280）は土師器の小皿である。（281）は黒色土器A類の椀底部である。

SP205（第58・59図）

Ⅷ区のA25区で検出した小型の柱穴である。堀形は円形を呈し、径0.5m、深さ0.4mを測る。埋土は2層に細分できる。出土遺物としては（第59図283・284）の中世土器が出土した。（283）は黒色土器B類の椀口縁部である。（284）は黒色土器A類の椀底部である。

SP206（第18・59図）

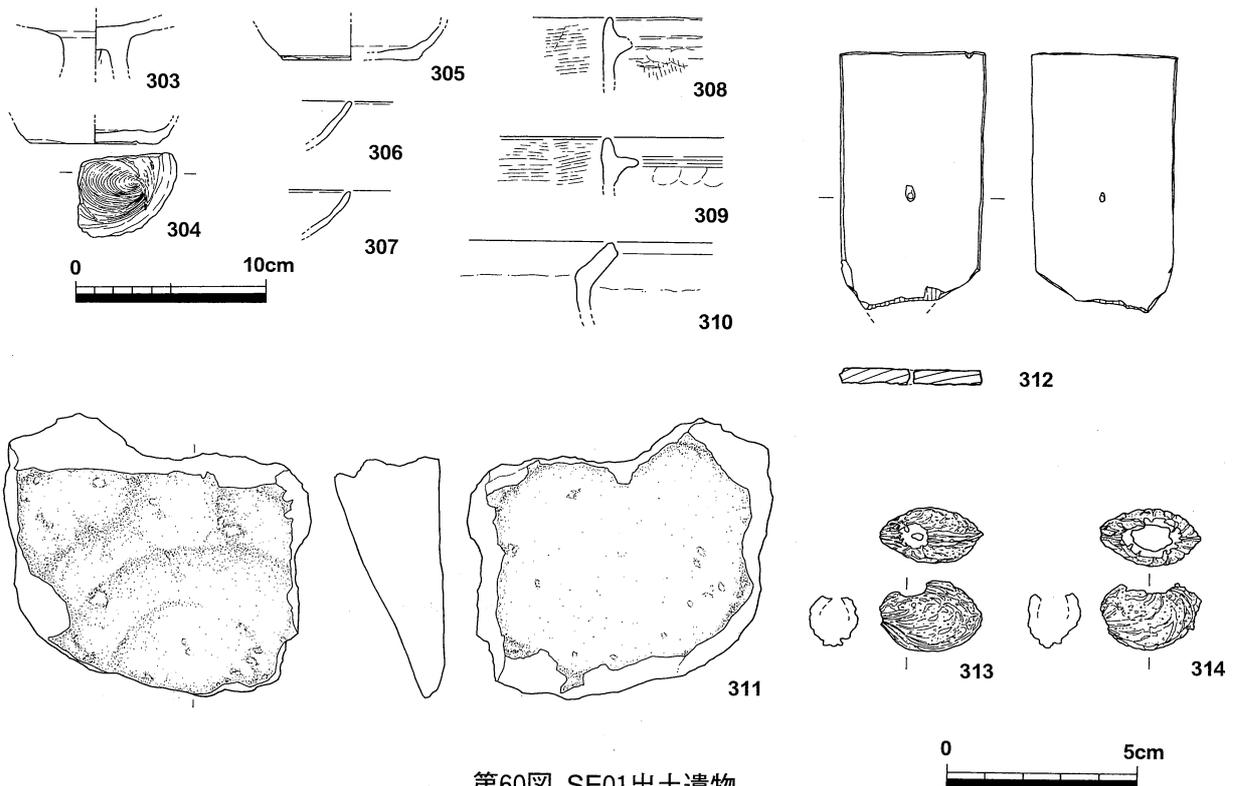
Ⅷ区のA25区で検出した小型の柱穴である。堀形は円形を呈し、径0.4m、深さ0.6mを測る。埋土は2層に細分できる。出土遺物としては（第59図285～288）の中世土器が出土した。（285・286）は土師器の小皿である。（286）の底部外面には板状圧痕が顕著に残る。（287）は黒色土器A類の椀（288）は瓦器の椀である。

SP207（第58・59図）

Ⅷ区のA26区SH07を切込む形で検出した小型の柱穴である。堀形は円形を呈し、径0.7m、深さ0.3mを測る。埋土は3層に細分できる。出土遺物としては（第59図289）の瓦器の小皿が出土した。

SP208（第58・59図）

Ⅷ区のA25区SH07を切込む形で検出した、小型の柱穴である。堀形は円形を呈し、径0.5m、深さ0.2mを測る。埋土は柱痕を含め2層に細分できる。出土遺物としては（第59図290～292）の中世土器が出



第60図 SE01出土遺物

土した。(290)は土師器の小皿である。(291)は黒色土器A類の椀である。(292)は和泉型の瓦器の椀である。

#### SP210 (第58図)

Ⅷ区のA26区で検出した、柱穴である。堀形は不整形な円形を呈し、径0.9m、深さ0.3mを測る。埋土は3層に細分できる。出土遺物としては(第59図293~302)等の中世土器が比較的少量に出土した。(293~299)は土師器の小皿である。(300)は器高が低く皿に近い土師器の杯である。(301)は黒色土器A類の椀である。(302)は瓦器の椀である。

#### (4) 井戸

##### SE01 (第60・61図, 図版15)

Ⅳ区のB14区、SB06に隣接して検出した素堀の井戸である。平面は不整円形状を呈し、断面は上位がラッパ状に開いた逆台形状を呈している。長径2.0m×短径1.6m、深さ1.4mを測る。埋土は約10層に細分できるが、大別して上層は淡灰褐色系の砂であり、下層は暗灰色系の粘質土である。出土遺物としては、上層より(第60図303~314)の土器、下層より(第60図312~314)の木製品・石器等が少量出土している。(303)は混入品で7世紀頃の須恵器高杯の脚部である。(304)は土師器小皿の底部である。外面には糸切り痕を明瞭に残す。(305)は土師器の杯(306・307)は土師器の椀口縁部である。(308・309)は15世紀頃の土師器土釜の口縁部である。(312)は木製の木札片である。中央に小さな穿孔が認められる。(311)は弥生時代頃の石製の凹石で混入品と考えられる。(313・314)は桃核で、一辺に抉りが認められる。これらの遺物よりSE01は、15世紀後半頃の時期が考えられる。

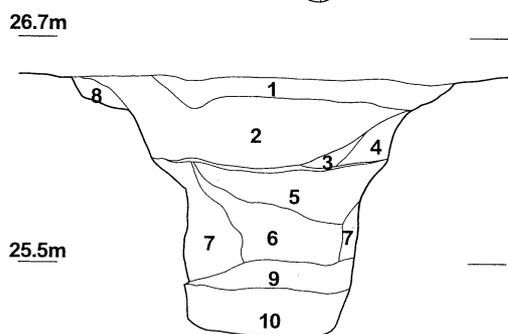
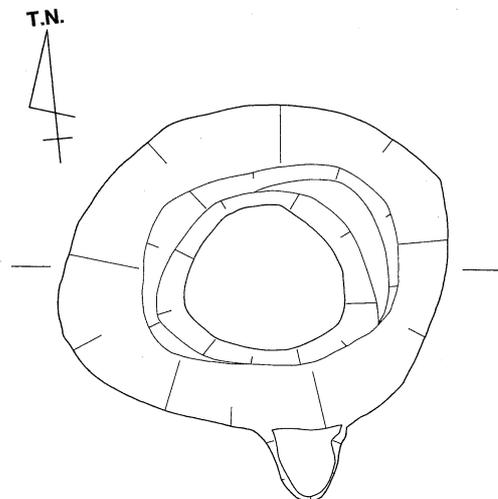
##### SE03 (第62図)

Ⅷ区のA24区、流路5に隣接して検出した浅い井戸である。かなり削平が及んだものか残りが悪い。平面は不整楕円形状を呈し、断面は北側が窪んだ浅いU字状を呈する。長径1.1m×短径0.7m、深さ0.3mを測る。井戸の基部構造のものか、10~20cm大の小礫を土坑の周囲に巡らしている。埋土は灰褐色系の粘土ないし砂質土等より、3層に分けられる。なお、最深部は湧水点にたっており湧水が著しい。出土遺物としては、土師器細片、黒色土器B類の椀、十瓶焼鉢の細片等の中世土器が少量出土している。

#### (5) 土坑

##### SK25

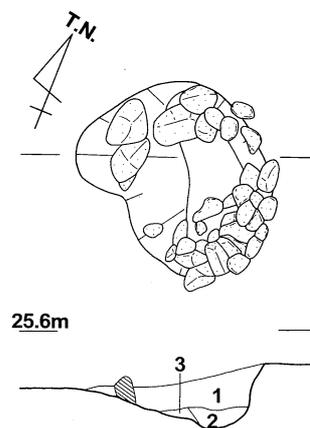
Ⅲ区のA10区、第2低地帯の河床面上で検出した土坑である。平面は楕



1. 淡灰褐色砂質土
2. 灰褐色砂質土 (褐色粘土粒・炭粒含)
3. 灰色シルト (炭粒含)
4. 淡灰褐色砂質土 (褐色粘土粒・炭粒含, 1に比べ暗い)
5. 暗灰色シルト (上端, 褐色に変色)
6. 淡灰色粘土 (褐色粒含)
7. 灰白色細砂質土
8. 淡乳褐色砂質土 (Mn粒含)
9. 暗青灰色粘土 (水分を多量に含)
10. 粘土混暗灰色砂礫



第61図 SE01平・断面図



1. 灰褐色砂混粘質土
2. 灰褐色粘土
3. 灰褐色砂質土



第62図 SE03平・断面図

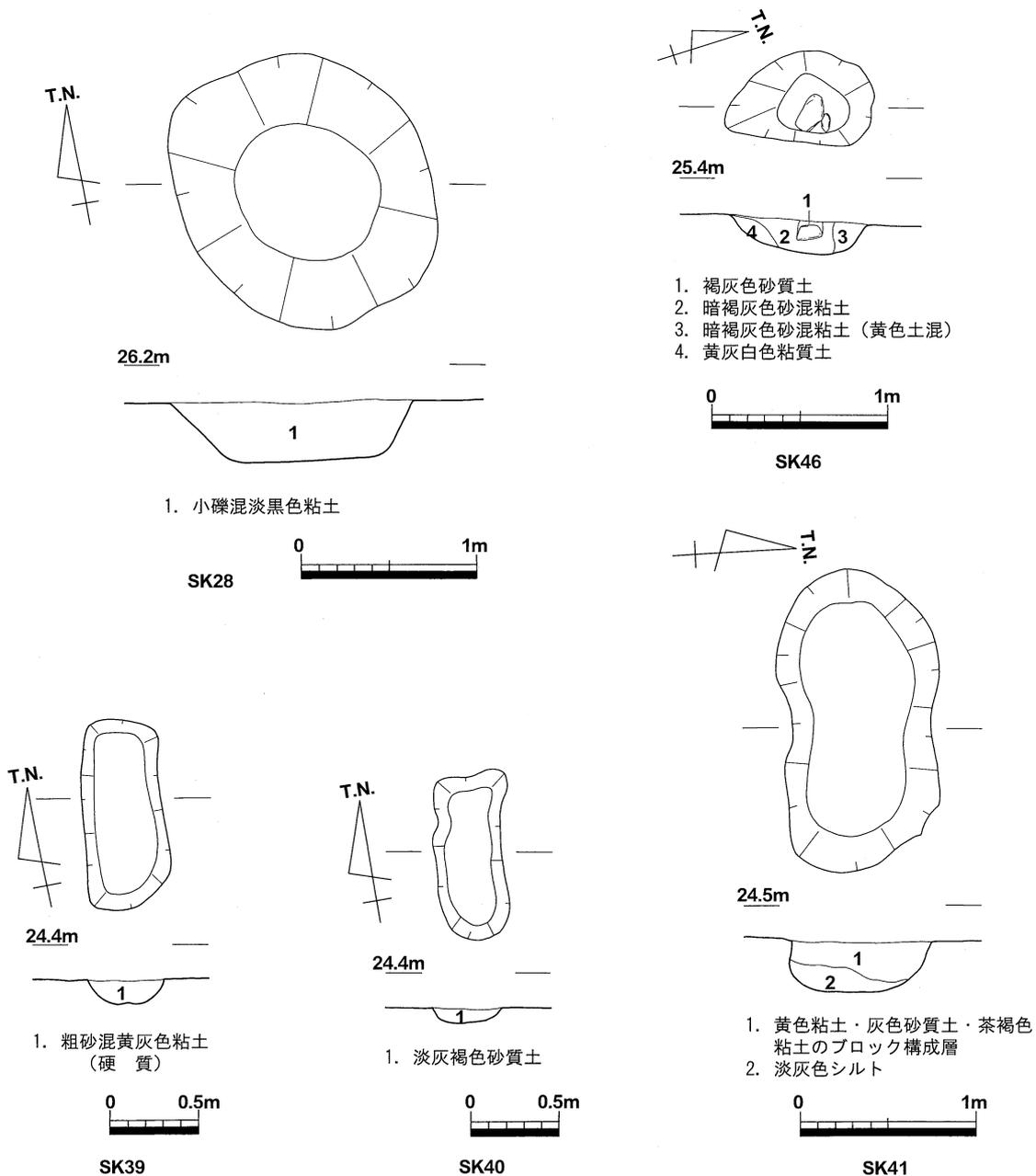
円形状を呈し、断面は逆台形状を呈する。長径2.1m×短径1.4m、深さ0.4mを測る。出土遺物としては、土師器の甕、瓦器碗の細片等の中世土器が少量出土している。

**SK26**

Ⅲ区のA10区、第2低地帯の河床面上で検出した土坑である。平面は円形状を呈し、断面は隅丸逆台形状を呈し、長径1.9径m×短径1.6m、深さ0.2mを測る。出土遺物としては、土器の細片が数点出土している。

**SK28 (第63図)**

Ⅲ区のB11区、第2低地帯の河床面上で検出した土坑である。平面は円形状を呈し、断面は逆台形状を呈する。長径1.6m×短径1.4m、深さ0.3mを測る。埋土は小礫混り淡黒色粘土である。なお、この土



第63図 SK28・39・40・41・46平・断面図

坑は河床面上で検出したが、状況より上層から切り込まれた土坑と考えられる。出土遺物としては、弥生の壺・甕の細片、須恵器壺の細片等が少量出土している。

SK39 (第63図)

Ⅵ区のA20区、SK40に隣接して検出した土坑である。平面は不整楕円形状を呈し、断面は浅いU字状を呈する。長径1.1m×短径0.4m、深さ0.1mを測る。埋土は粗砂が混じった黄灰色粘土でかなり硬質である。なお、この土坑からは遺物は出土しなかった。

SK40 (第63図)

Ⅵ区のA20区、SK39に隣接して検出した土坑である。平面は不整楕円形状を呈し、断面は浅いU字状を呈する。長径1.0m×短径0.4m、深さ0.1mを測る。埋土は淡灰褐色砂質土である。なお、この土坑からは遺物は出土しなかった。

SK41 (第63図)

Ⅵ区のB20区で検出した土坑である。平面は楕円形状を呈し、断面は浅いU字状を呈する。長径1.8m×短径0.8m、深さ0.3mを測る。埋土は上・下層2層に分かれる。出土遺物としては、土師器の椀底部、瓦器の細片等の中世土器が少量出土している。

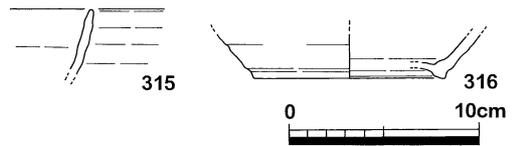
SK46 (第63図)

Ⅷ区A25区のSH07の上面で検出した土坑である。平面は不整楕円形状を呈し、断面は浅い皿状を呈する。土坑内には浮いた状態で円礫2点出土した。長径0.9m×短径0.6m、深さ0.2mを測る。埋土は4層に分かれる。出土遺物としては中世土器の細片が少量出土した。

(6) 溝状遺構

第2低地帯上層溝群 (第64・65図, 図版18)

Ⅲ区の中央、A13区周辺で検出した東西・南北方向に直線上に延びる溝状遺構群 (SD21~30) である。第2低地帯のⅡ①層上面で検出した。幅広で比較的規模の大きい東西方向のSD21~23、29・30を南北2群に分けて配し、その間を、南北方向のSD24~28を配している。断面は浅い皿状を呈し、埋土は灰褐色系の砂質土を呈している。出土遺物としては、SD22・23より土師器杯、須恵器杯・壺・甕等の細片が少量出土している。(第64図315)は中世の土師器の杯口縁部である。(316)は混入品で須恵器の杯底部である。



第64図 SD22・23出土遺物

第2表 第2低地帯上層溝群一覧

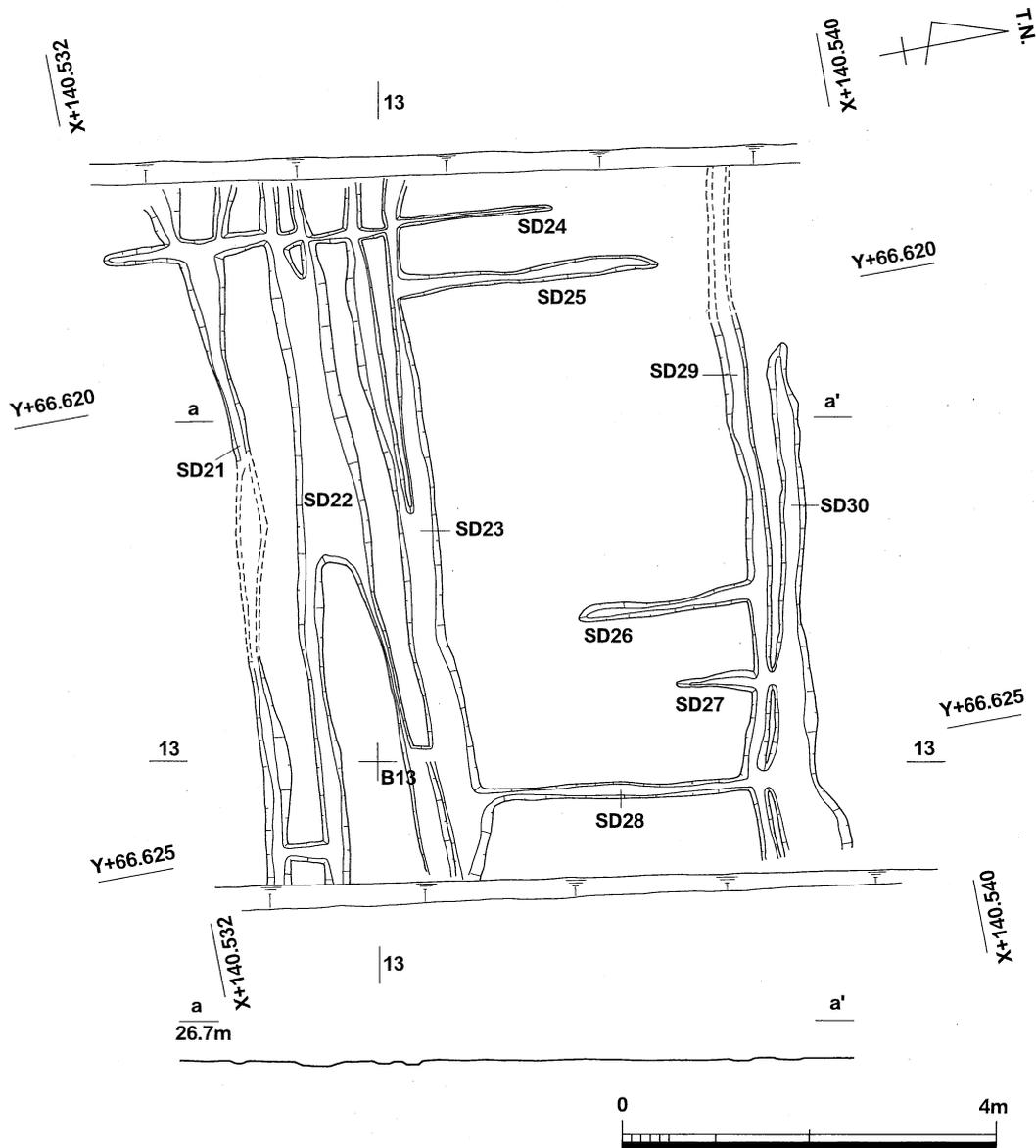
遺構名	検出長 (m)	検出幅 (m)	深さ (cm)	方向南	備考
SD24	4.8	0.1	約5	南北	SD23~SD21と切り合う
SD25	2.8	0.2	約5	南北	SD23と切り合う
SD26	1.8	0.2	約5	南北	SD29と切り合う
SD27	0.8	0.2	約5	南北	SD29・30と切り合う
SD28	2.8	0.2	約5	南北	SD23・29と切り合う
SD23	7.7	0.5	約5	東西	西半部で二股に分岐
SD22	7.8	0.6	約5	東西	東西で二股に分岐
SD21	7.7	0.3	約5	東西	西端部で二股に分岐
SD29	5.9	0.3	約5	東西	
SD30	5.6	0.3~0.8	約5	東西	

SD40 (第66図)

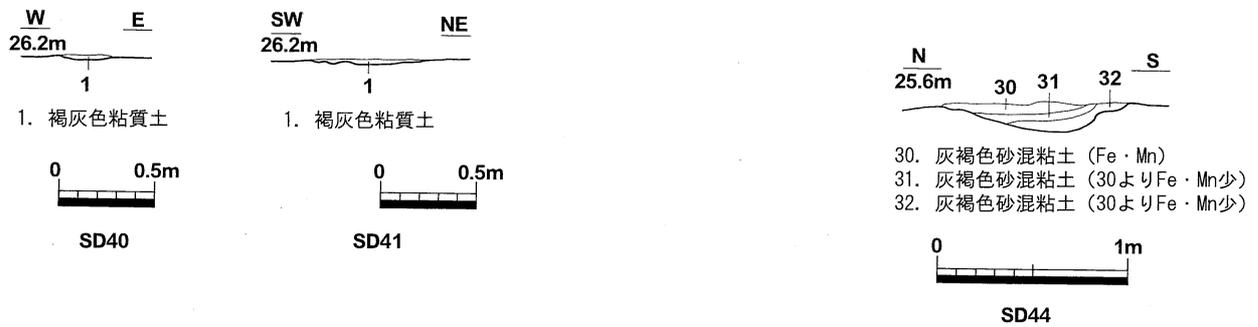
Ⅶ区のA21区で検出した北東方向に延びる溝状遺構である。断面は浅いU字状を呈し、検出長4.5m、検出幅0.4m、深さ0.1mを測る。主軸方位はN37.5° Eを測る。埋土は褐灰色粘質土である。なお、この遺構から遺物は出土しなかった。

SD41 (第66図)

Ⅶ区のA・B21区で検出した不整形な溝状遺構である。SB17に隣接する事よりSB17に伴う雨落ち溝の可能性が高い。断面は浅いU字状を呈し、検出長4.5m、検出幅0.4m、深さ0.1mを測る。埋土は褐灰色粘質土である。なお、この遺構から遺物は出土しなかった。



第65図 SD21～30平・断面図



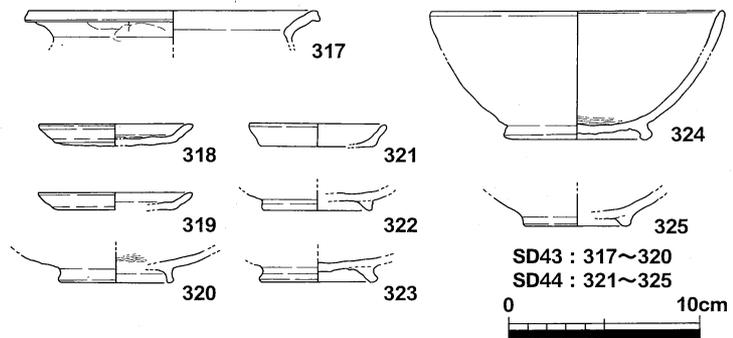
第66図 SD40・41・44断面図

SD43 (第66・67図)

Ⅷ区のA25区、第3低地帯の上面、SD44に隣接して検出した、南北方向に延びる溝状遺構である。断面は浅いU字状を呈し、検出長3.0m、検出幅0.6m、深さ0.1mを測る。出土遺物としては、弥生土器、中世土器等が少量出土している(第67図317~320)。(317)は弥生後期の甕口縁部で混入品である。(318・319)は土師器の小皿(320)は黒色土器B類の椀底部である。

SD44 (第66・67図)

Ⅷ区のA・B25区、第3低地帯の上面、SD43に隣接して検出した、東西方向に延びる溝状遺構である。断面は浅い皿状を呈し、検出長8.0m、検出幅0.6m、深さ0.15mを測る。主軸方位はN83°Wを測る。埋土は3層に分層できる。出土遺物としては、中世土器が少量出土している(第67図321~325)。(321)は土師器の小皿である。(323・324)は黒色土器A類の椀で(325)は黒色土器B類の椀底部である。



第67図 SD43・44出土遺物

(7) 不整形遺構

SX10 (第68・69図, 図版16・27)

V区の南端A15区で検出した不整形な落ち込みである。なお、東端部でSX11が隣接する。平面は東に向かって先細る不整形な三角形状を呈し、断面は浅い皿状を呈する。長径5.7m×短径4.0m、深さ0.4mを測る。埋土は5層に分層できる。出土遺物としては、10世紀頃の比較的一括性の高い遺物がコンテナ1箱程度出土している(第69図326~330・332~343)。(326~330・332~334)は土師器の杯で、底部が平底で口縁部が外上方に「ハ」の字状に開くタイプである。(332~334)の底部外面には板状圧痕を残す。(336~338)は底部に高台が付くタイプの土師器の杯である。(336)の口縁部は、外上方にハの字状に開く回転ナデの凹凸が著しい。(335)は土師器の椀(339・340)は黒色土器A類の椀底部である。(341)は土師器の土釜の上半部である。(342・343)は8世紀頃の須恵器の杯蓋・甕口縁部で混入品である。

SX11 (第68・69図, 図版16・27)

V区の南端A15区で検出した落ち込みである。なお、SX10が隣接する。平面は円形状を呈し、断面



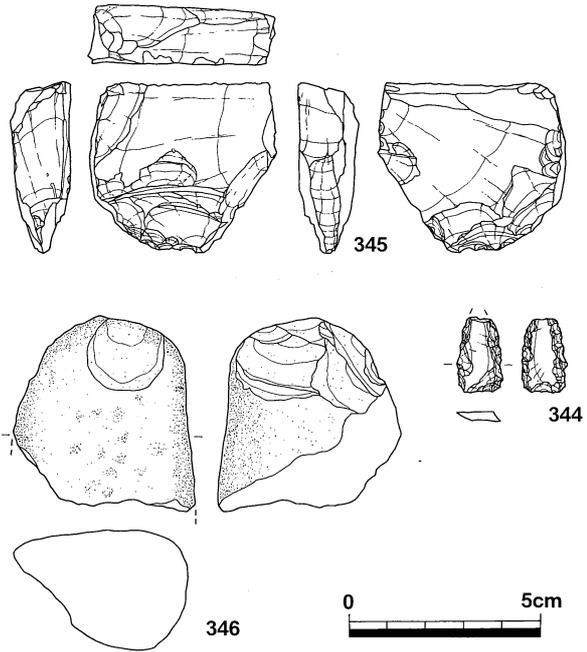
は浅い皿状を呈する。長径1.3m、短径1.2m、深さ0.1mを測る。埋土は2層に分層できる。出土遺物としては、弥生土器の細片及び（第69図331）の土師器の杯が出土している。遺構の状況及び遺物等よりSX10と同時期の遺構である。

#### 4. 近世以降

##### (1) 井戸

SE02（第70図，図版39）

IV区のA13区で検出した素堀の井戸である。平面は円形状を呈し、断面はU字状を呈している。長径2.8m×短径2.4m、深さ1.0mを測る。出土遺物としては、陶磁器の細片、弥生時代の石器等が少量出土している。その中より石器を図化した（第70図344～346）。(344)はサヌカイト製の平基式の石鏃である。表・裏面に素材面を多量に残している。(345)はサヌカイト製で、石核に分類する見方もあるが、比較的風化が進んでいない点より弥生時代の楔形石器の範疇で捉えた。(346)は大型蛤刃石斧の基部である。

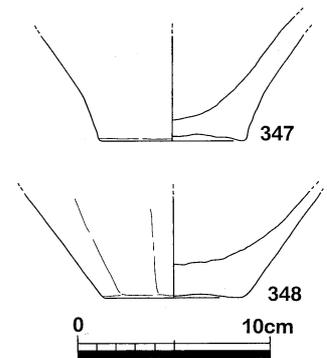


第70図 SE02出土遺物

##### (2) 溝状遺構

SD33（第71・72図）

IV区のA14・15区で検出した不整形な溝状の遺構である。隣接してSD34が所在する。東西方向と南北方向の溝がL字状に短く交わり、断面は浅い皿状を呈する。全長14.5m、幅2.0m～3.5m、深さ0.1m～0.2mを測る。埋土は2層に細分できる。性格は不明だがSD31・32・34・SX06～09の状況と類似しておりほぼ同一時期の遺構群と考えられる。出土遺物としては弥生土器・陶磁器が少量出土している。その中より弥生土器の底部を図化した（第71図347・348）。



第71図 SD33出土遺物

SD34（第72図）

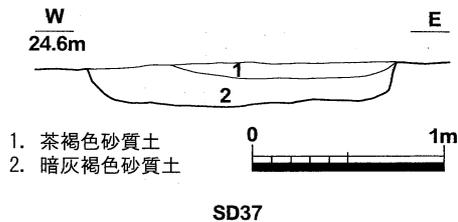
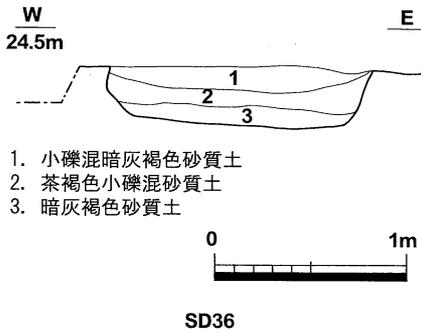
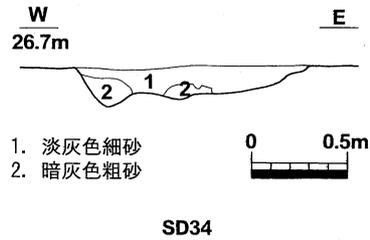
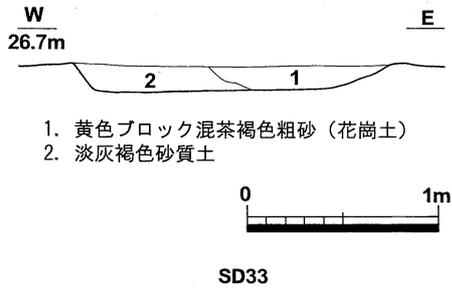
IV区のB14・15区で検出した。不整形な溝状の遺構である。断面は不整形な逆台形状を呈する。全長8.2m、幅1.4m、深さ0.2mを測る。埋土は2層に分かれる。なお、この遺構から遺物は出土しなかった。

SD36（第72図，図版16）

V区のA16～18区で検出した、南北方向に延びる溝状遺構である。直線状に延長も長く、区画溝の可能性が高い。断面は浅いU字状を呈し、検出長26.0m、検出幅1.8m、深さ0.3mを測る。埋土は3層に細分できる。出土遺物としては、弥生土器・土師器・磁器染付碗等が少量出土している。

SD37（第72図）

V区のA・B17区で検出した、南北方向に延びる溝状遺構である。断面は浅いU字状を呈し、検出長



第72図 SD33・34・36・37断面図

6.5m、検出幅1.7m、深さ0.2mを測る。埋土は2層に細分できる。なお、この遺構から遺物は出土しなかった。

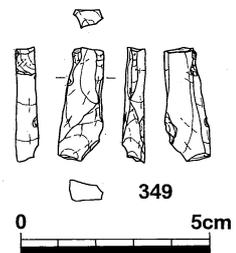
SD38

Ⅵ区のA・B19区で検出した、東西方向に延びる溝状遺構である。断面は浅い皿状を呈し、検出長5.5m、検出幅0.9m、深さ0.1mを測る。また、この遺構から遺物は出土しなかった。

(3) 不整形遺構

SX06 (第73・74図, 図版39)

Ⅳ区のA・B14区で検出した。不整形な落込みみである。平面は不整形な台形状を呈し、断面は浅い逆台形状を呈する。長径3.5m×短径2.7m、深さ0.3mを測る。埋土は単層である。出土遺物としては、弥生の壺・甕の細片、中世の土釜片、磁器染付椀、弥生の石器等が少量出土した。それらの中より(第73図349)の楔形石器の削片を図化した。



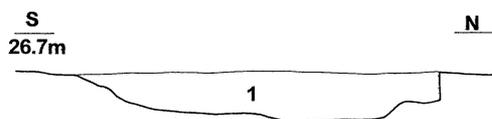
SX07 (第74図)

Ⅳ区のB15区で検出した。不整形な落込みみ状の遺構である。断面は不整形浅いU字状を呈する。長径3.1m×短径1.0m、深さ0.1mを測る。埋土は単層である。なお、この遺構から遺物は出土しなかった。

SX08 (第74図)

Ⅳ区のA15区で検出した不整形な落込みみ状の遺構である。北半部は対象地から外れるため、全体の1/2を検出した。断面は浅いU字状を呈する。長径2.2m×短径1.4m、深さ0.2mを測る。埋土は単層で

第73図 SX06出土遺物



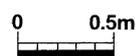
1. 黄色粘土ブロック混茶褐色粗砂（花崗土）



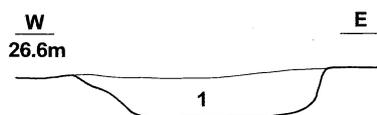
SX06



1. 灰茶褐色砂質土



SX07



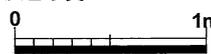
1. 灰色砂ブロック混淡茶色粗砂  
（花崗土に類似）



SX08



1. 花崗土混淡灰色砂質土



SX09

第74図 SX06～09断面図

ある。なお、この遺構から遺物は出土しなかった。

#### SX09（第74図）

IV区のB15区で検出した不整形な落込み状の遺構である。北半部は対象地から外れるので、全体の1/2を検出した。断面は浅い皿状を呈する。長径3.0m×短径1.3m、深さ0.1mを測る。埋土は単層である。なお、この遺構から遺物は出土しなかった。

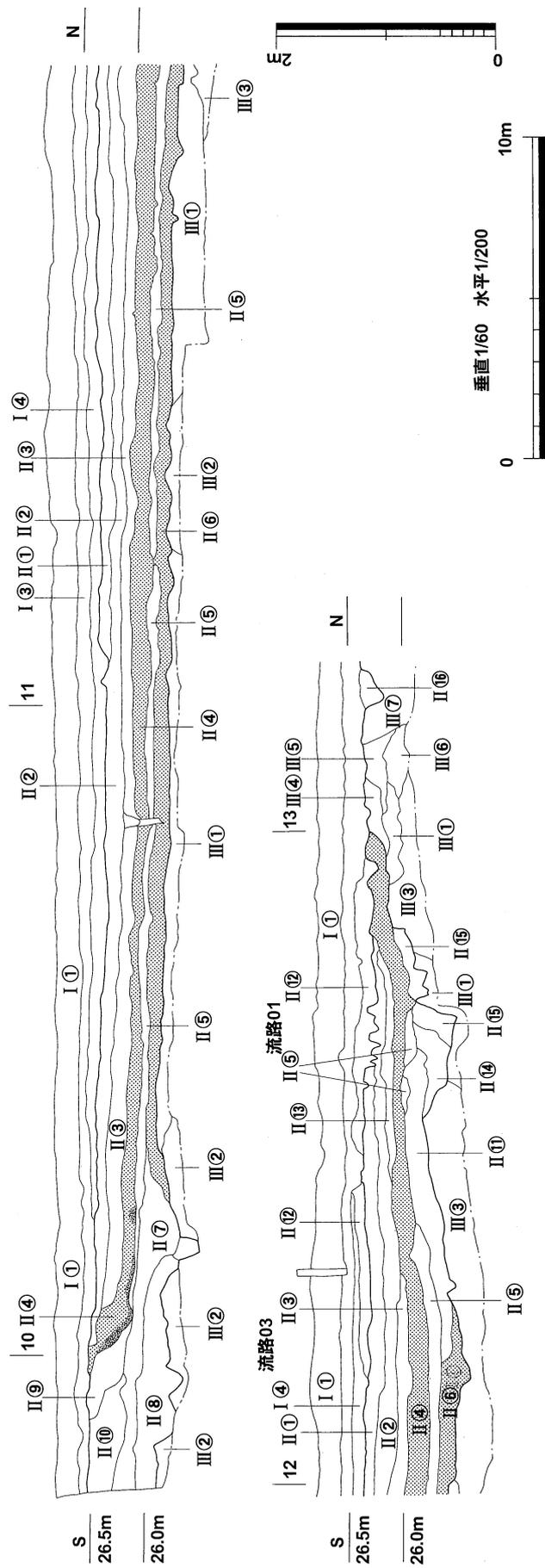
## 5. 第2低地帯

### (1) 概要

第2低地帯は産宮通地区の南端、古川の氾濫原に接する地点で確認した。この低地帯は、産宮通地区が所在する微高地の南端を削るように、北西方向に延びている。断面形態は扁平な逆台形状を呈し、幅は推定で約40.0m、深さ約1.4mを測る。所在地及び周囲の地理的な状況よりみて、古川の旧支流か、先に触れた旧河道Bの支流にあたるものと考えられる。

上位の耕作土等の堆積層を除き、純粹に低地帯部分の堆積層を抽出すれば十数層に分層できるが、主なものは(第3表)に記したII①～II⑬層である。また、II①～II⑬層に分けた堆積層中で、主体を占めるのは、低地帯のほぼ全域に均等に堆積しているII①～II⑥層である。大まかな傾向として上位のII①～③層は淡い灰～茶系の粘土、下位のII④・II⑥・II⑨層等は淡い黒色系の粘土ないしシルト質である。

第2低地帯中の遺構として、A. II①層上面でSD21～30の畝溝群、B. II④～II⑤層間の土器溜り、C. 河床面上で溝、土坑、不整形な落込み、旧流路等を検出した。SD21～30の畝溝群は中世土器を少量含み、中世段階で当該地が畑地として開発されたことを示している。なお、プラント・オパールの分析の結果、II①～③層中から比較的良好な状態でプラント・オパールが抽出されており、耕地化の裏付



- I ①. 現耕作土
- I ②. 淡灰色砂質土 (旧耕作)
- I ③. 明茶褐色粗砂 (花崗土に類似, 床土)
- I ④. 淡灰褐色砂質土 (床土)
- II ①. 淡灰褐色砂混粘土 (粗砂少量)
- II ②. 暗茶褐色砂混粘土 (粗砂少量)
- II ③. 暗灰褐色砂混り粘土 (粗砂多量)
- II ④. 黒色粘土
- II ⑤. 淡灰色砂 (II ④の少プロックを含む)
- II ⑥. 淡黒色シルト (砂が混在)
- II ⑦. 淡黒色砂礫混粘土 (硬質)
- II ⑧. 淡黒色砂混シルト (II ⑧に類似)
- II ⑨. 黒茶褐色砂質土 (土器を多量に含)
- II ⑩. 暗灰茶褐色砂質土
- II ⑪. 黒色砂礫混粘土 (比較的大きい (5cm位) の礫を含, 基本的にII ⑥に類似)
- II ⑫. 淡茶灰色砂質土 (シルトに近い)
- III ①. 黄褐色粘土小プロック混淡黒色粘土
- III ②. 暗灰色小礫混砂質土
- III ③. 黄色粘土小プロック混暗灰色シルト
- III ④. 暗灰色シルト
- III ⑤. 灰色砂
- III ⑥. 淡黄褐色シルト
- III ⑦. 淡黄褐色砂
- III ⑧. 暗灰黄色砂礫 (一部シルト混)
- III ⑨. 暗灰色細砂 (黒のシミあり)
- III ⑩. 乳灰色細砂
- III ⑪. 乳白色細砂
- III ⑫. 灰色砂

第75図 第2低地帯西壁面土層図

け資料となった。土器溜りは南端部のB10区のⅡ④－Ⅱ⑤層間で確認した。

第2低地帯からはコンテナ25箱程の遺物が出土している。Ⅱ①層～Ⅱ⑩層まで遺物は含まれるが、Ⅱ④～Ⅱ⑥層出土の遺物が主体を占める。中心になる遺物は弥生時代後期初頭～後期末頃の土器である。なお、河床面上のA・B11・12区に堆積しているⅡ⑥層の最深部からは、土器・石器及び種実等と共に鋏の未製品を主体にした木製品が数点出土した。さらに、河床の最深部に近い地点で小形仿製鏡が1点出土しており、河床面上で水利に関わる祭祀が執り行われたものと考えられる（第77図）。次に個別の遺構・遺物を報告するが、SD21～30の畝溝群、河床面上の溝、土坑、不整形な落込み等はすでに記述しており、未報告の部分を報告する。

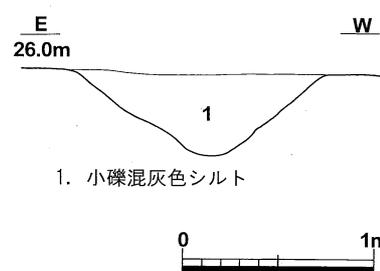
第3表 第2低地帯堆積層一覧

層位	土質	堆積状況等	備考
Ⅱ①層	淡灰褐色砂混粘土	上面にSD21～30等の畝溝群が展開し、中世の畑地面と考えられる	
Ⅱ②層	暗茶褐色砂混粘土	ほぼ全域に広がる、Ⅱ①層同様上面は中世の畑地と考えられる	
Ⅱ③層	暗灰褐色砂混粘土	ほぼ全域に広がる	
Ⅱ④層	黒色粘土	ほぼ全域に広がる	
Ⅱ⑤層	淡灰色砂	層厚8cm程の洪水砂層で、ほぼ全域に広がる	土器多
Ⅱ⑥層	淡黒色シルト	第2低地帯の最下層にあたり、河床面のほぼ全域に広がる	土器・木製品多・小形仿製鏡
Ⅱ⑦層	淡黒色砂混粘土	南端の西岸肩口のB10区に広がる	
Ⅱ⑧層	淡黒色砂混シルト	南端の西岸肩口のB10区に広がる	
Ⅱ⑨層	黒茶褐色砂質土	南端の西岸肩口のB10区に広がる	遺物多
Ⅱ⑩層	暗灰茶褐色砂質土	南端の西岸肩口のB10区に広がる	遺物多
Ⅱ⑪層	黒色砂混粘土	北端のB13区の河床面に広がる	
Ⅱ⑫層	淡茶灰色砂質土		
Ⅱ⑬層	黄褐色粘土小ブロック混淡黒色粘土		

## (2) 第2低地帯に伴う遺構

### 流路01～流路03（第75～77図，図版18）

第2低地帯の河床面上からは、流路01～流路03までの小規模な旧流路及び旧流路の痕跡を検出した。流路01はA・B12区で検出した、東西方向に延びる小規模な流路である。断面は浅い逆台形状を呈し、検出長10.0m、検出幅3.0m～4.0m、深さ0.4m、埋土は砂質土及びシルト等より2層に細分できる。なお、この流路からは遺物は出土しなかった。流路02はB10・11区で検出した、東西方向より南北方向に向きを変え消滅する、落ち込み状の小規模な流路の痕跡である。



1. 小礫混灰色シルト

第76図 流路02断面図

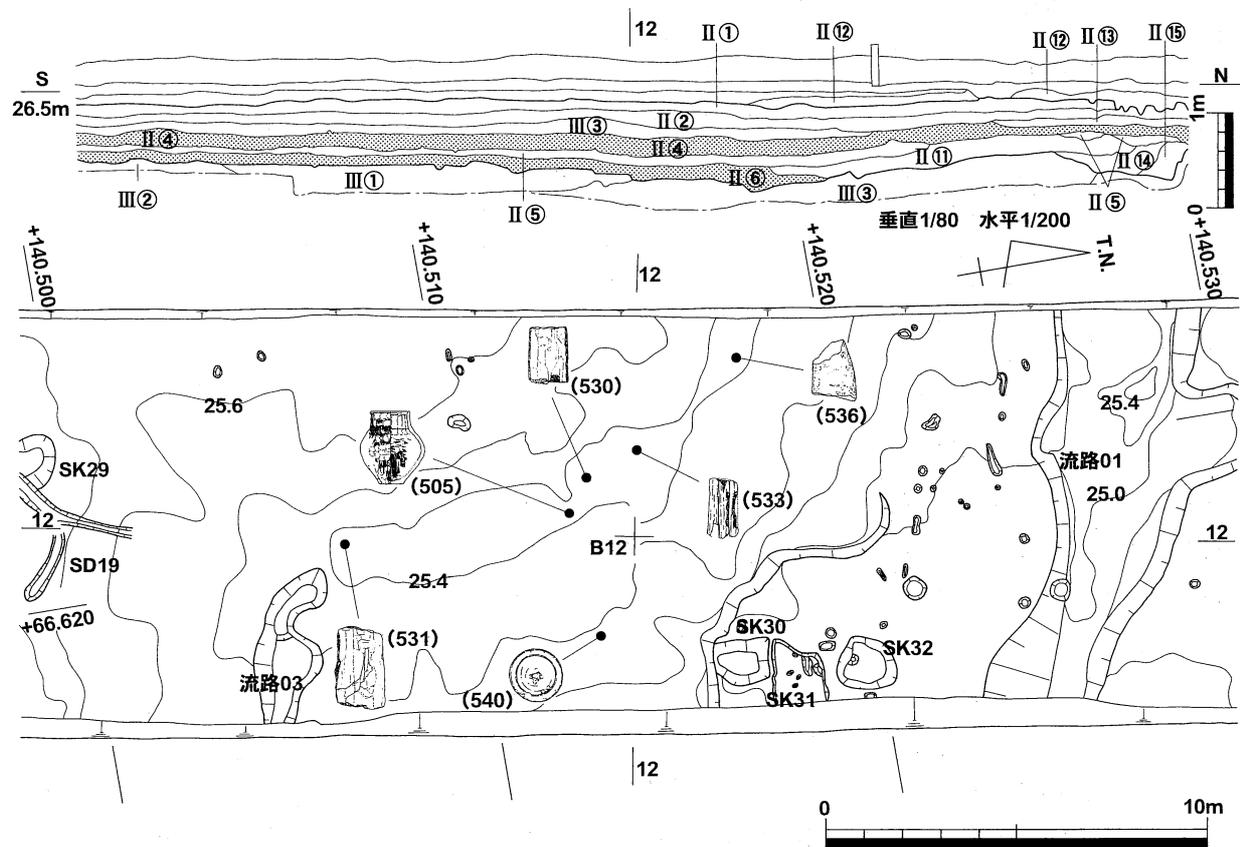
検出長9.0m、検出幅1.5m～3.0m、深さは最深部で0.4mを測る。埋土は小礫混灰色シルトの単層である。なお、この流路からは遺物は出土しなかった。流路03はB11区で検出した、東西方向に短く延びる小規模な落ち込み状の流路の痕跡である。検出長4.0m、検出幅1.0m～1.5m、深さは最深部で0.4mを測る。埋土は上層のⅡ⑥層と同様で淡黒色シルトである。

### 土器溜り（第79～81図，図版28・29）

Ⅲ区南端部B10区では、Ⅱ②～Ⅱ④層の上がりか認められ、低地帯の一時期の西岸部にあたるものと考えられる。その西岸部の斜面部のⅡ④－Ⅱ⑤層間に、南北約6m程の範囲で土器溜りを検出した。そのため、西岸部の上端より廃棄されたものと考えられる。この土器溜りからは、コンテナ6箱程の弥生

土器等が出土した。出土土器の内訳は一部中期後半～古墳時代初頭頃の土器を含むが、主体を占めるのは後期後半～後期末頃の土器である。なお、混入遺物として少量瓦の細片が出土している。弥生中期後半、古墳前期の土器及び少量の混入品を除けば、比較的一括性の高い出土状況であった。図化できる資料を最大限抽出した（第79～81図）。

（384～397）は壺形土器である。（384）は凹線文が口縁端部に顕著に認められ、弥生中期後半の特徴を示している。（385・396）の口縁端部には退化した凹線文が施され、弥生後期初頭頃の特徴を示している。（392）はかなり大型の複合口縁の壺である。口縁外面には退化した凹線文が多数施している。（398～421）は甕形土器である。甕形土器は出土土器の中で主体を占める。口縁が外上方に短く外反し、体部が丸味をもち、底部が僅かに平底を残す後期末頃の土器が主体を占めるが、（418・419）等は体部が球体化し底部が丸底を呈しており、古墳時代前期の範疇で捉えられる土器である。（424～429）は鉢形土器である。底部は丸底化しているが、少量僅かに平底を残す（429）等の資料もある。（430）は壺ないし甕に伴う蓋形土器で、かなり希な資料である。（429～430）は混入品の瓦片である。



- |   |                       |
|---|-----------------------|
| II ①. 淡灰褐色砂混粘土（粗砂少量）                            | II ⑭. 暗灰色小礫混砂質土       |
| II ②. 暗茶褐色砂混粘土（粗砂少量）                            | II ⑮. 黄色粘土ブロック混暗灰色シルト |
| II ③. 暗灰褐色砂混粘土（粗砂多量）                            | II ⑯. 暗灰色シルト          |
| II ④. 黒色粘土                                      | II ⑰. 灰色砂             |
| II ⑤. 淡灰色砂（II ④の小ブロックを含む）                       | II ⑱. 灰色シルト           |
| II ⑥. 淡黒色シルト（砂が混在）                              | III ①. 乳灰色シルト         |
| II ⑦. 淡黒色砂礫混粘土（硬質）                              | III ②. 淡黄褐色砂          |
| II ⑧. 淡黒色砂混シルト（II ⑧に類似）                         | III ③. 暗灰黄色砂礫（一部シルト混） |
| II ⑨. 黒茶褐色砂質土（土器を多量に含）                          | III ④. 暗灰色細砂（黒のシミあり）  |
| II ⑩. 暗灰茶褐色砂質土                                  | III ⑤. 乳灰色細砂          |
| II ⑪. 黒色砂礫混粘土（比較的大きい〈5cm位〉の礫を含む<br>基本的にII ⑥に類似） | III ⑥. 乳灰白色細砂         |
| II ⑫. 淡茶灰色砂質土（シルトに近い）                           | III ⑦. 灰色砂            |
| II ⑬. 黄褐色粘土小ブロック混淡黒色粘土                          |                       |

第77図 第2低地帯II-⑥層遺物出土状況

### (3) 第2低地帯の出土遺物

第2低地帯からはコンテナ25箱程の遺物が出土している。Ⅱ①層～Ⅱ⑩層まで遺物は含まれるが、Ⅱ④～Ⅱ⑥層出土の遺物が主体を占める。時期的な点では弥生時代前期、中期～古墳時代前期、古墳時代末～奈良時代、中世までの遺物を含むが、中心になる遺物は弥生時代後期初頭～後期末頃までの土器である。なお、南端部B10区ではⅡ④～Ⅱ⑤層間で土器溜りを確認した。また、河床面上のA・B11・12区に堆積しているⅡ⑥層の最深部からは、土器・石器及び種実等と共に鋤の未製品を主体にした木製品が数点出土した。さらに、河床の最深部に近い地点で小形仿製鏡が1点出土した。

#### Ⅱ①～④層出土土器 (第78・79図, 図版27)

Ⅱ①～Ⅱ④層間では、コンテナ7箱程の遺物が出土した。出土遺物の内訳は、弥生前期・後期初頭・後期後半～後期末頃の土器、少量7～8世紀頃の須恵器、中世土器、瓦類等であるが、主体を占めるのは弥生後期後半～後期末頃の土器である(第78・79図)。

(350～354)は、Ⅱ①層出土の遺物である。(353・354)は7～8世紀の須恵器の杯蓋及び高台が付く小型の長頸壺の底部である。(351)は弥生の甌底部である。穿孔の数が多き希な資料である。

(355～363)は、Ⅱ②～Ⅱ④層までの遺物である。(355)は壺に分類したが形状より器台の可能性はある。(359・360)は弥生後期初頭の高杯である。(362)は中世の土師器の椀、(363)は瓦片である。

(364～383)は、純粋なⅡ④層出土の遺物である。(364～369)は甕の上半部である。(367～369)は弥生後期初頭の特徴をもつ甕である。なお、(367)は胎土より下川津B類に含まれる。(375・376)は弥生前期の壺の底部、(371～373)は前期の甕の底部である。(381)は瓦片(382)は須恵器の小型の長頸壺の底部である。

#### Ⅱ⑨・⑩層出土土器 (第81図)

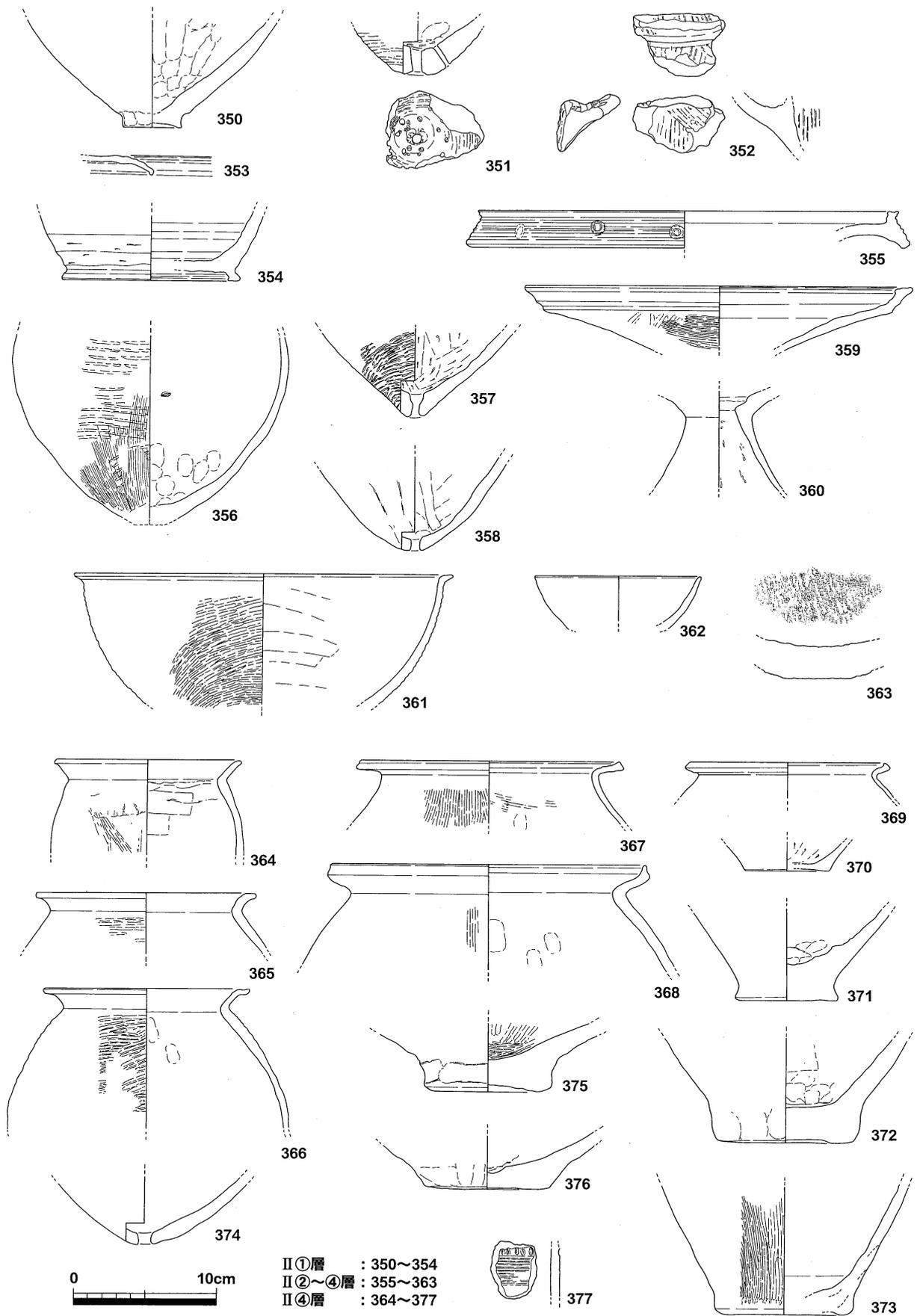
(433～438)は土器溜りに隣接する下位層から出土した土器である。(433)は弥生後期末頃の壺底部(438)は高杯の杯部である。(437)はおそらく、弥生の大型の壺ないし甕の底部と考えられる。

#### Ⅱ⑤層出土土器 (第81～83図, 図版29)

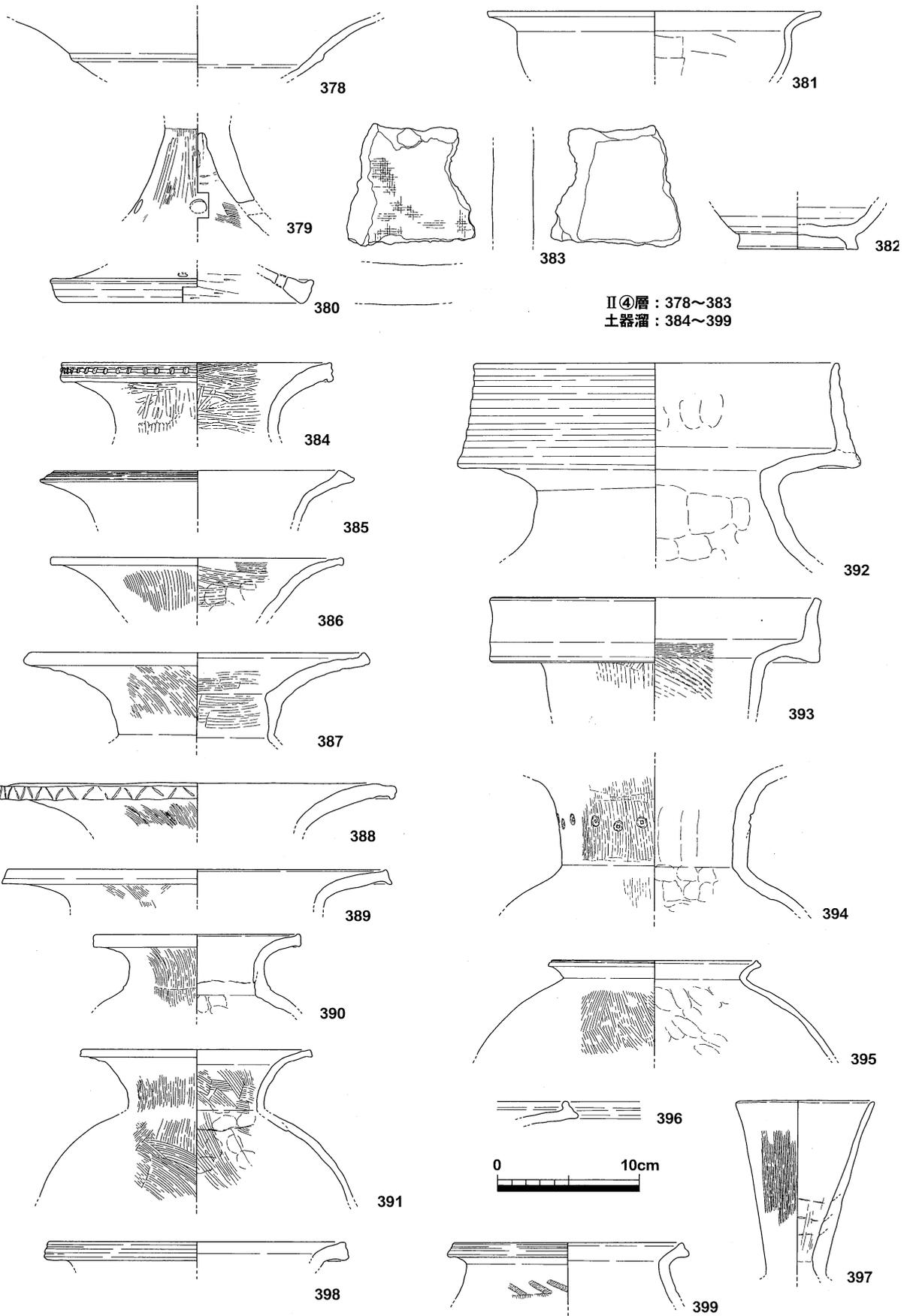
(439～490)はⅡ⑤層出土の土器である。(439～454・470)は壺形土器である。(440)は口縁部に凹線文を顕著に施す事より弥生中期後半頃にあたる。(444)の口縁部には退化した凹線文が数条施されており、後期初頭の特徴を示している。(449)は壺の頸部で、外面には線刻による鋸歯文が認められる。(453・454)の壺の体部片には、何を表現しているかは不明であるが線刻が認められる。(455～467)は甕形土器である。主体を占めるのは弥生後期後半頃の土器である。(463)は体部が球体化し底部は丸底で、外面のタタキも細く緻密であり、弥生後期末～古墳前期初頭として捉えられる甕である。(466)は形状及び胎土より下川津B類に類似する。(480～486)は弥生後期中葉頃の高杯である。(480・483・484)は下川津B類の範疇で捉えられる。(487～490)は鉢形土器である。口縁部が外上方に外反する点で共通する。(492)は製塩土器に分類したが、備讃瀬戸内地域ではみられないタイプである。

#### Ⅱ⑥層出土土器 (第83・84・86図, 図版29)

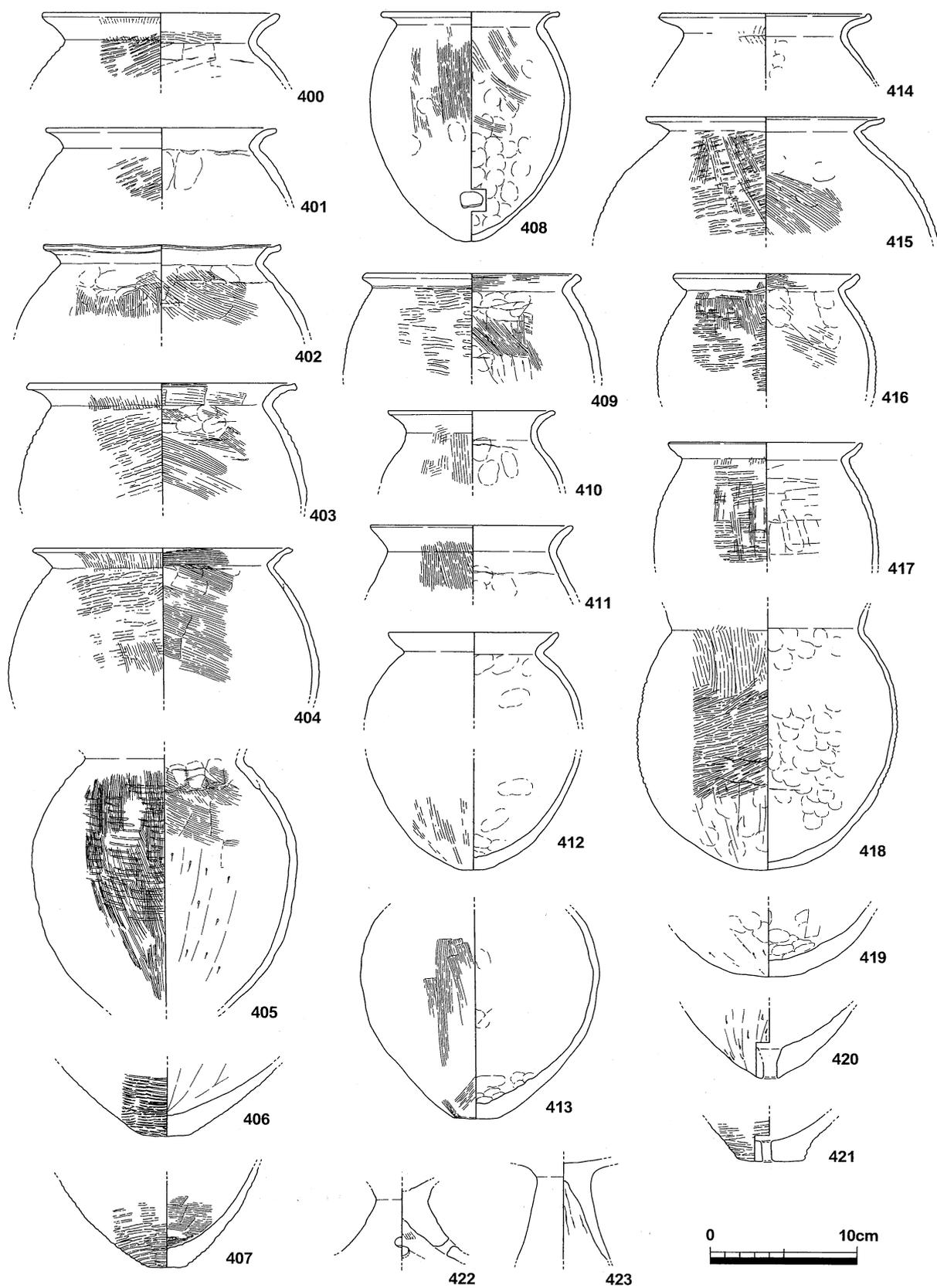
(494～521)は第2低地帯の最下層にあたるⅡ⑥層から出土した土器である。(494～505)は壺形土器である。弥生中期中葉～後期前葉頃の特徴をもつ土器が主体を占めている。(494・495・501・504)は弥生中期中葉～中期末頃の壺である。(501・504)は退化した凹線文(497・498)は口縁端部に凹線文を真似たヨコナデを施しており後期初頭の特徴を示している。(505)は後期前葉の直口壺である。(506～510)は甕形土器(517～519)は高杯である。壺形土器同様に後期前葉の特徴をもつ土器が認めら



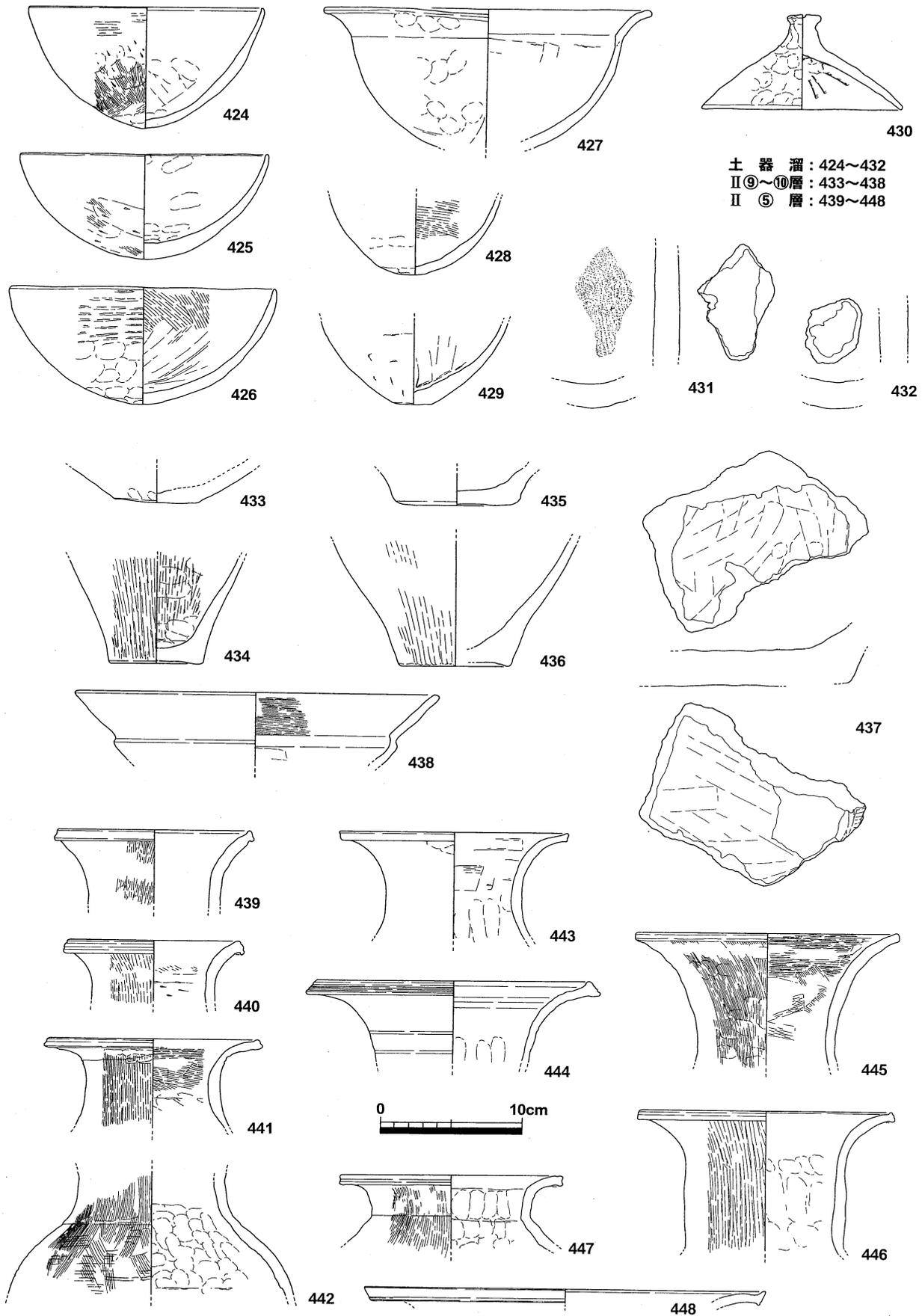
第78図 第2低地帯出土土器 (1)



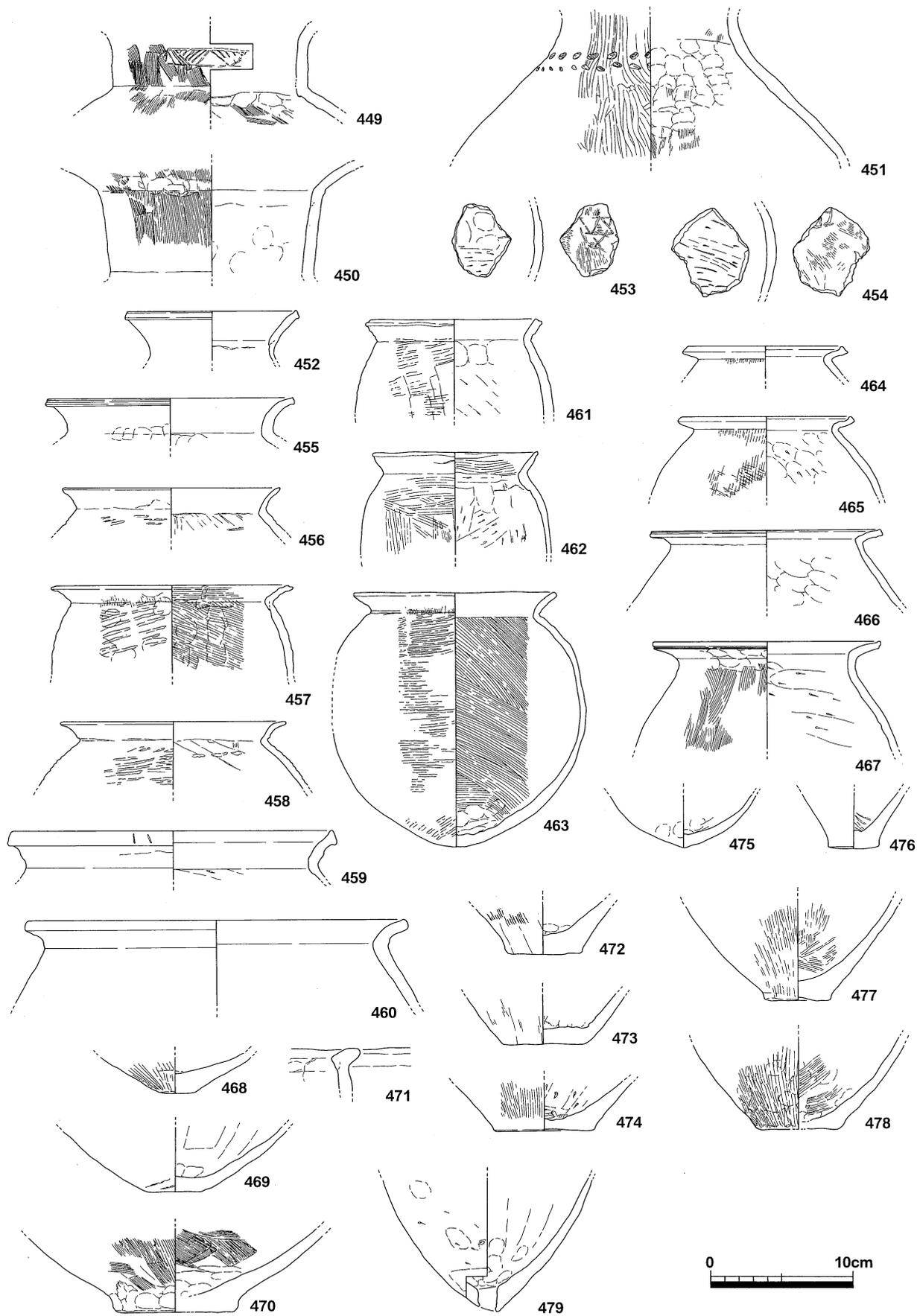
第79図 第2低地帯出土土器 (2)



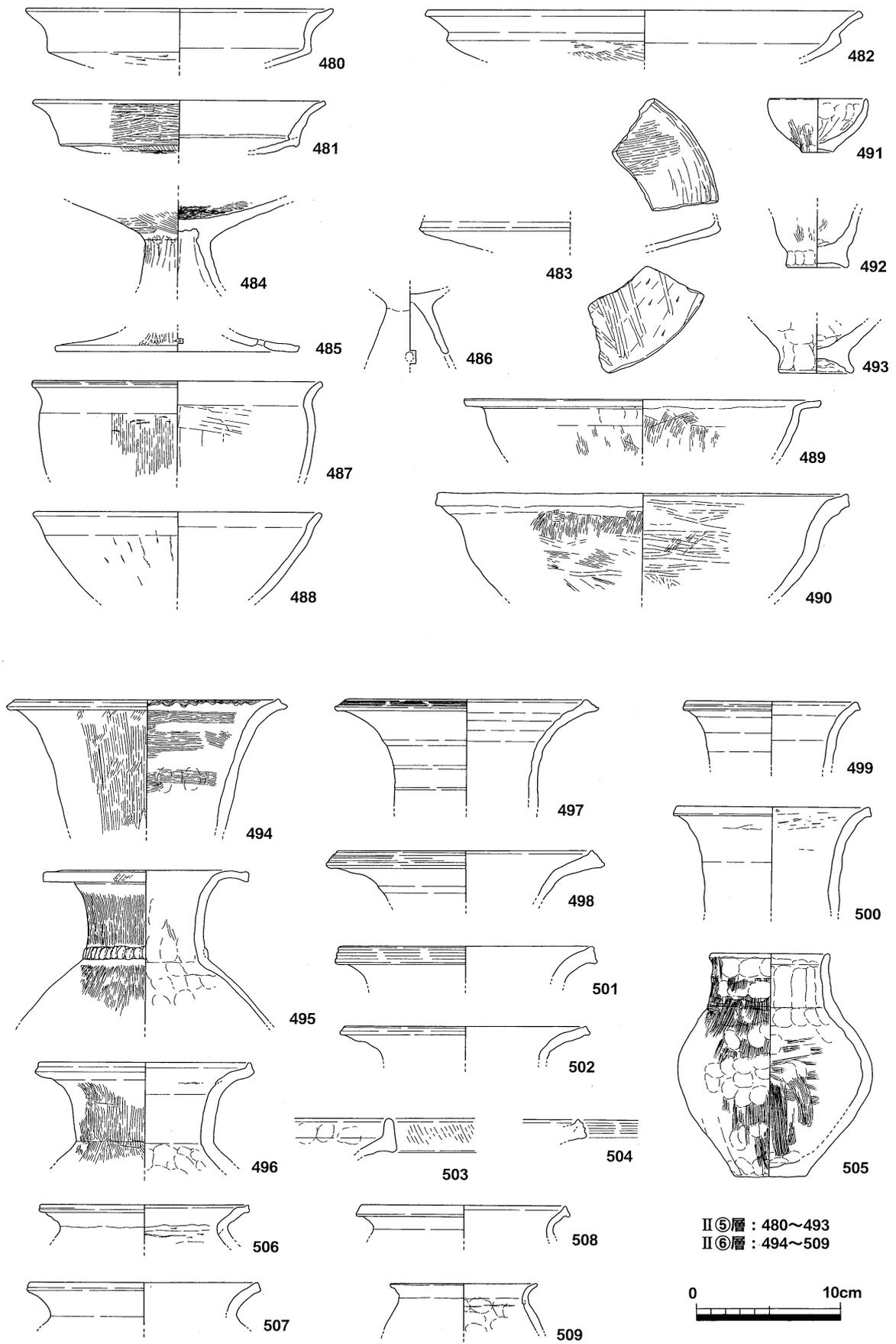
第80図 第2低地帯出土土器 (3)



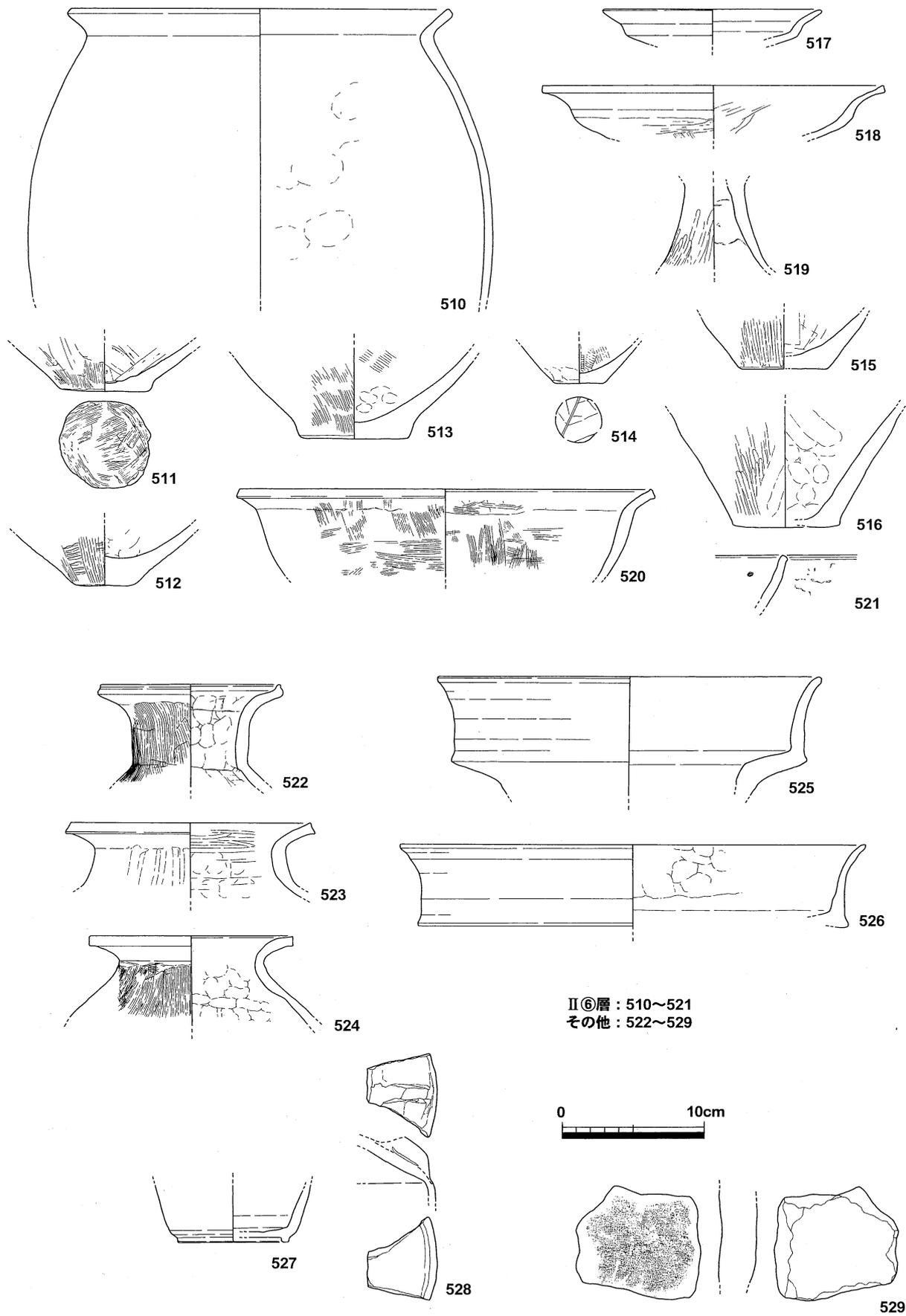
第81図 第2低地帯出土土器(4)



第82図 第2低地帯出土土器（5）

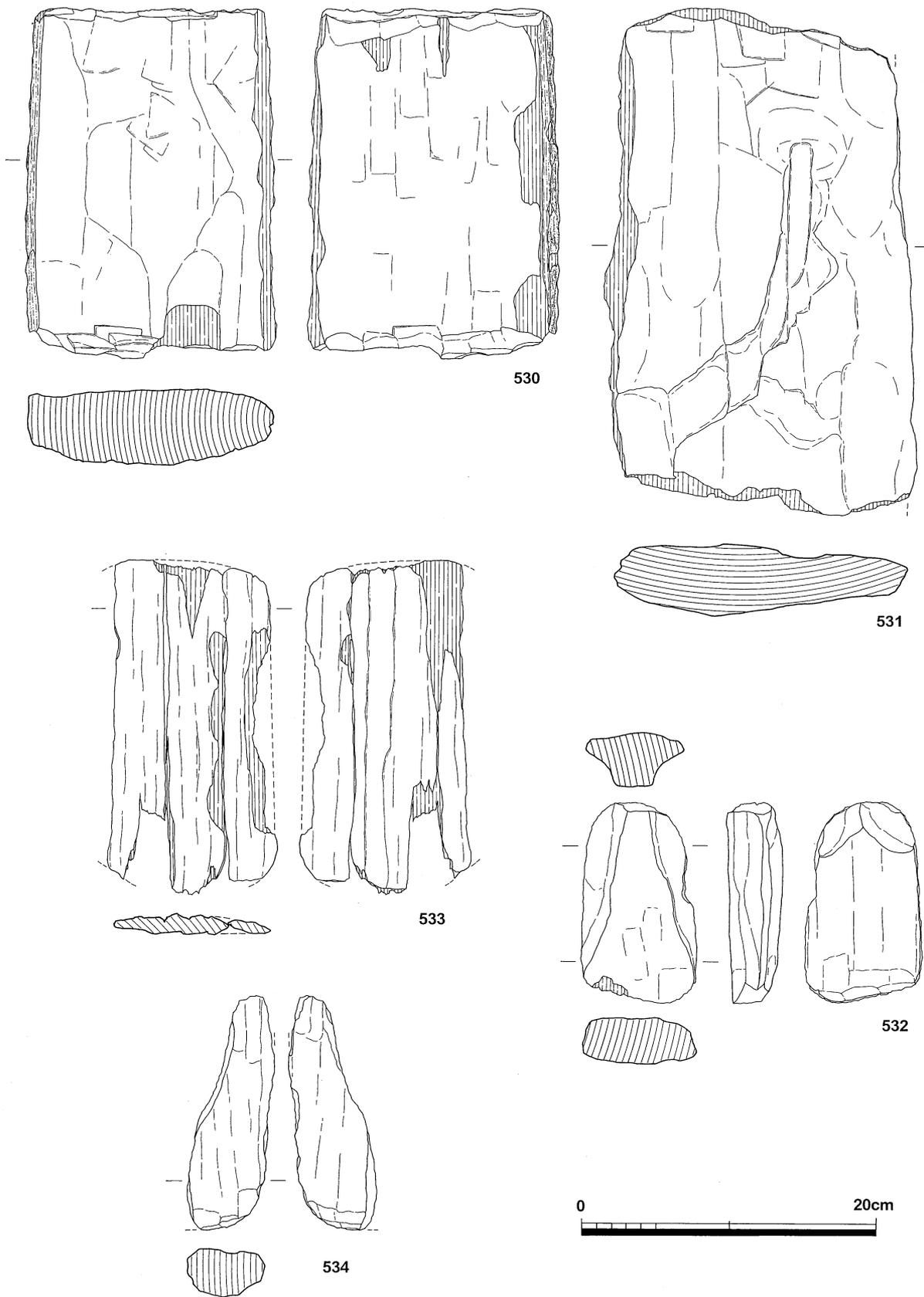


第83図 第2低地帯出土土器 (6)

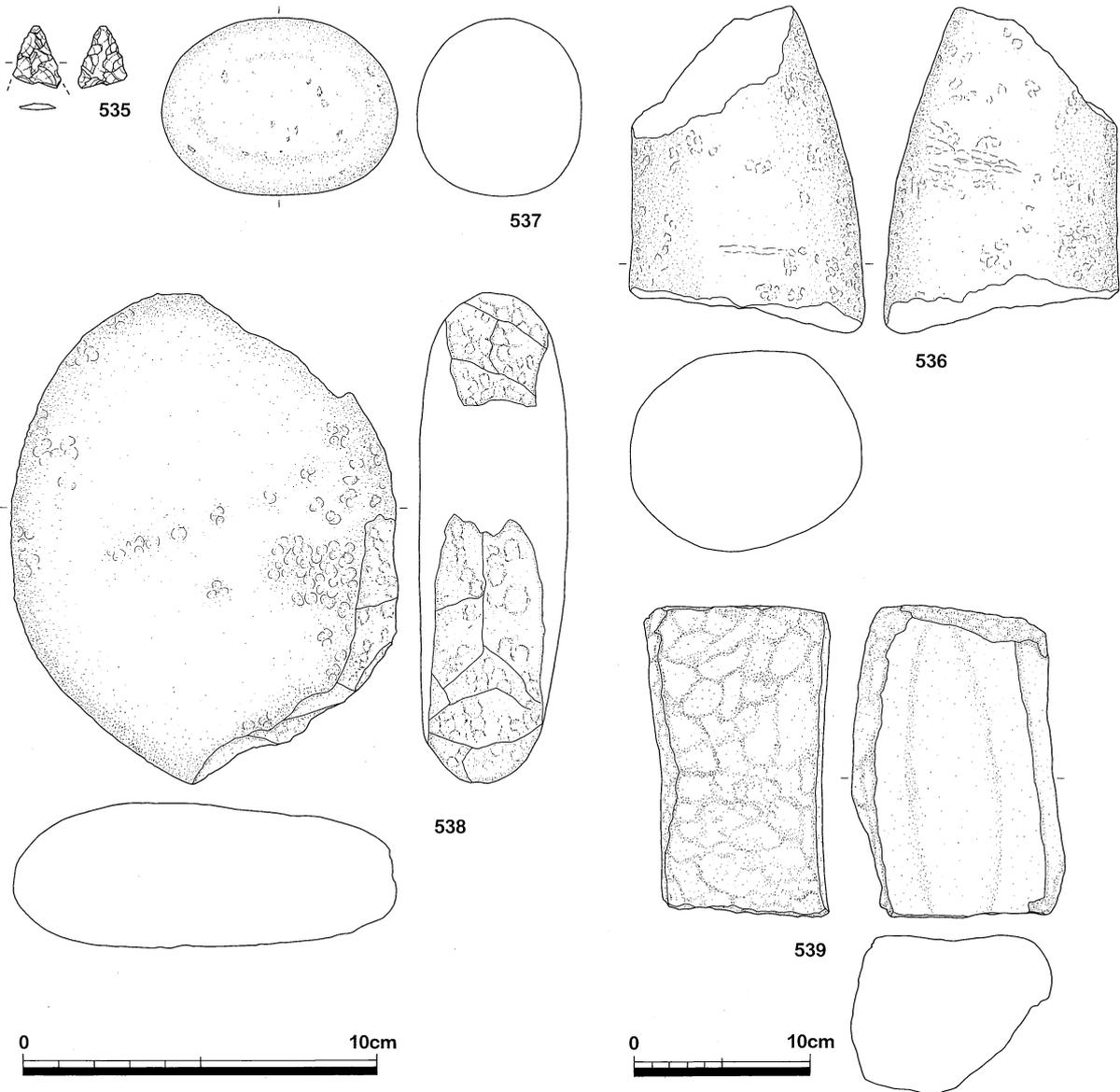


II⑥層：510～521  
 その他：522～529

第84図 第2低地帯出土土器（7）



第85図 第2低地帯出土木製品



II④層 : 538      II⑦層 : 537  
 II⑤層 : 535      II④・⑨層 : 539  
 II⑥層 : 536・440

第86図 第2低地帯出土石器及び金属器

れる。(512)は外面にタタキを施した弥生後期後半頃の甕の底部である。同層よりタタキを施す甕は極微量である。

#### 木製品 (第85図, 図版34)

最下層のⅡ⑥層中からは(第85図530~534)の木製品が出土した。(530・531)は一部樹皮を残すが板状に整形している板材である。(530)は柾目材で、ミカン割り材を整形した鋏の未製品とも考えられるが、鋏とした場合かなり小型の部類になる。(533)は板目材を使用した鋏の未製品と考えられるが、(530)同様、鋏とした場合かなり小型の部類になる。(532)は残りが悪く不明瞭な点が多いが、形状より鋏の一部である舟形隆起片と考えられる。(533)は扁平で小型の板材である。(534)は残りが悪く不明瞭な点が多いが、形状より板材状の木製品である。

#### 石器 (第86図, 図版40)

(535)はⅡ⑤層出土のサヌカイト製の石鋏である。(536)は先端と基部が欠損している大型蛤刃石斧片である。(537)は磨き石(538)は形状より敲き石として使用された円盤状の河原石である。

#### 小形仿製鏡 (第86図, 図版19・44)

第2低地帯の河床面上から1点の(540)小形仿製鏡が出土した。出土地点は最深部から斜面部にかわる、傾斜変換点に近い斜面上で、小形仿製鏡が丑を表にした状態で出土した。周囲には供伴遺物は出土しなかったが、層位的には上面を被覆しているのがⅡ⑥層にあたるため、同層の資料をもって鏡の時期を決める必要があり、同層の出土土器を検討すれば、上限は弥生時代中期中葉頃で下限は後期後半の新相頃にあたる。鏡は外区径78mm・内区径57mm、厚さは外区3mm・内区1mm強を測る。鏡は表面の腐食が著しく、X線の写真から文様構成を分析すれば、外区は平縁で(幅10mm)、内区は斜行櫛歯文(幅5.5mm)―無文帯(幅7.0mm)―四花文帯―丑 以上の文様構成がかるうじて観察できる。河川から小形仿製鏡が出土する事例は高松市居石遺跡等でも確認されており、それらの事例より弥生後期後半頃、第2低地帯において水利に関する祭祀が行われたものと考えられる。

## 6. 第3低地帯

### (1) 概要

第3低地帯は、産宮通地区の北端部(Ⅶ・Ⅷ区)に位置し、幅約54.0m、深さ約0.5mを測り、北西方向に延びる。低地帯内には弥生時代後期前半・鎌倉時代の流路4、鎌倉時代の流路5~8等の小流路を検出した。所在地及び周囲の地理的な状況よりみて、爛川の氾濫原から延びる旧河道Aの埋没河川に含まれる流路群と考えられる。

### (2) 流路04

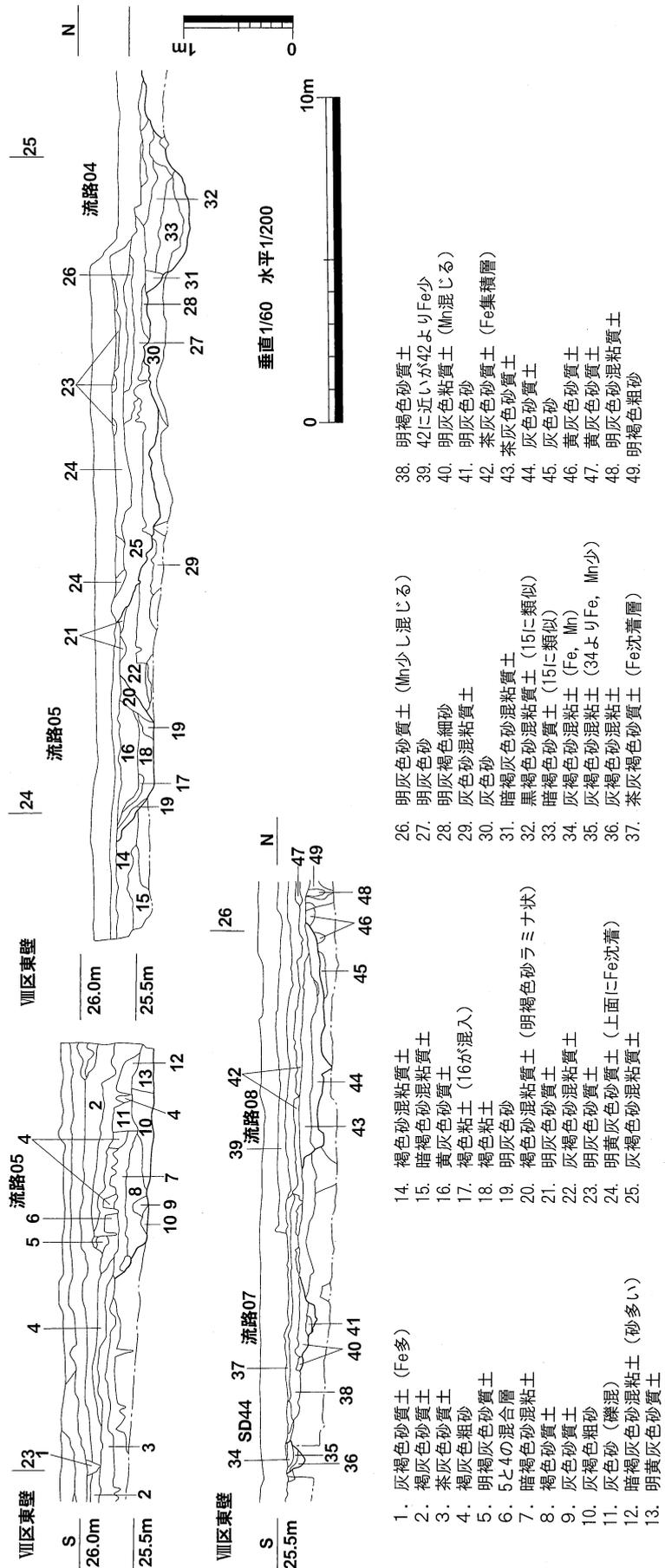
Ⅷ区の第3低地帯の中央A・B24区で検出した北西方向に延びる流路である。検出長約13mを測る。形状・幅・深さ等上層と下層とで異なっている。上層部分の上面幅は西端で約7.0m、東端で約16.0mを測る。深さは西端で約0.7m、東端で約0.1mを測り、幅広で浅い皿状を呈している。下層部分は上面幅約5m程で上層に比べかなり狭く、深さは0.4m~0.7mを測る。なお、河床面の傾斜と後世の削平により上層及び下層とも東端が深く、西端がかなり浅い。流路4の下層の河床面上からは木製品・種実を多量に含んだ木製品集積遺構01・02と、土坑に隣接した木製品群を検出した。流路04の出土遺物としては弥生時代後期前葉~中葉(下層)、鎌倉時代(上層)頃の遺物を中心とした土器・石器・木製品等がコンテナ28箱程出土している。

木製品集積遺構01 (第88図, 図版21)

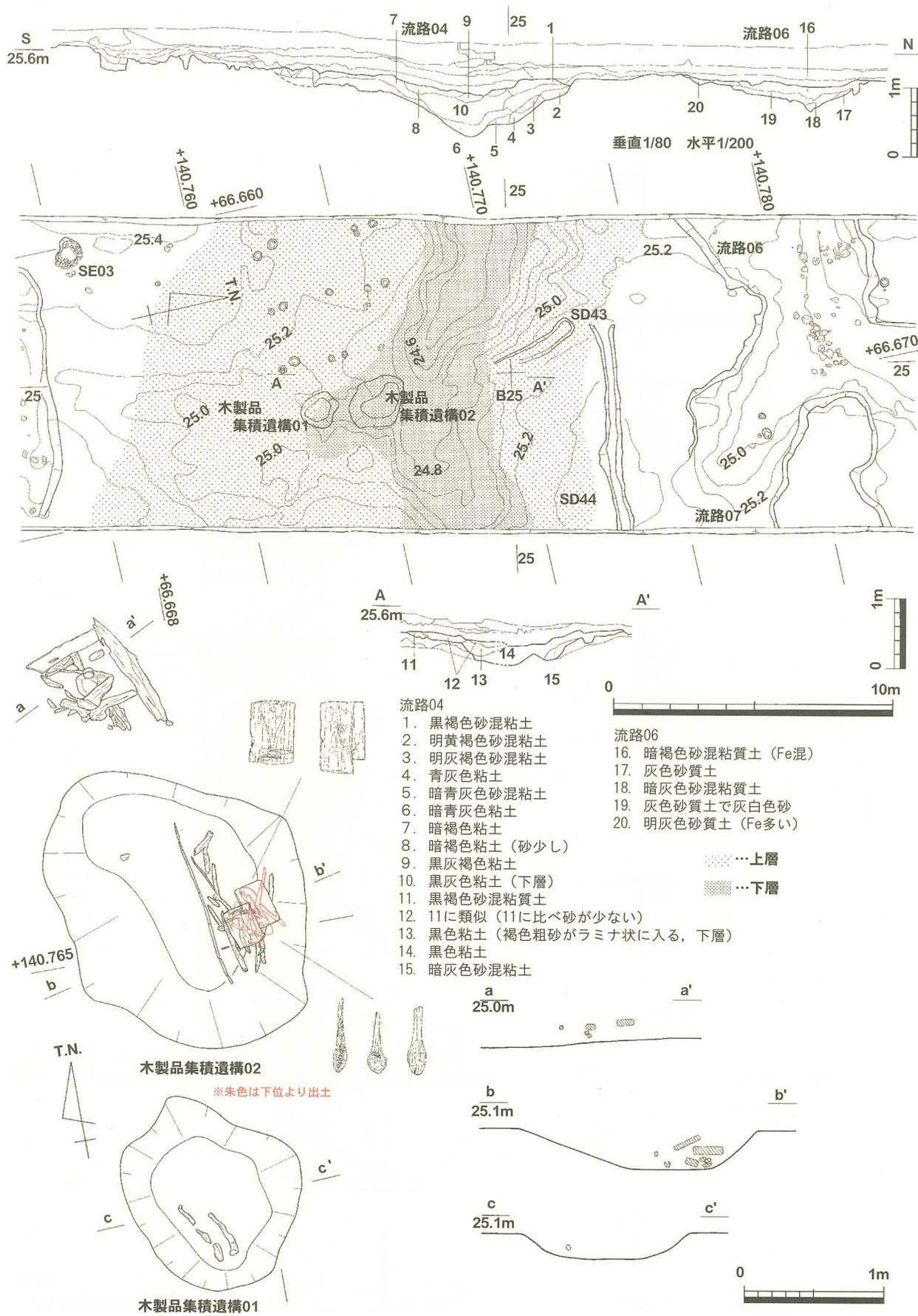
流路04下層の河床面上で検出した不整楕円形状を呈する落ち込みである。断面は浅い皿状を呈する。長径1.5m×短径1.3m、深さ0.2mを測る。埋土は上層からの流れ込みで黒灰色粘土を呈している。出土遺物としては、器種が特定できない程残りの悪い木製品を数点検出した。

木製品集積遺構02 (第88図, 図版21・22)

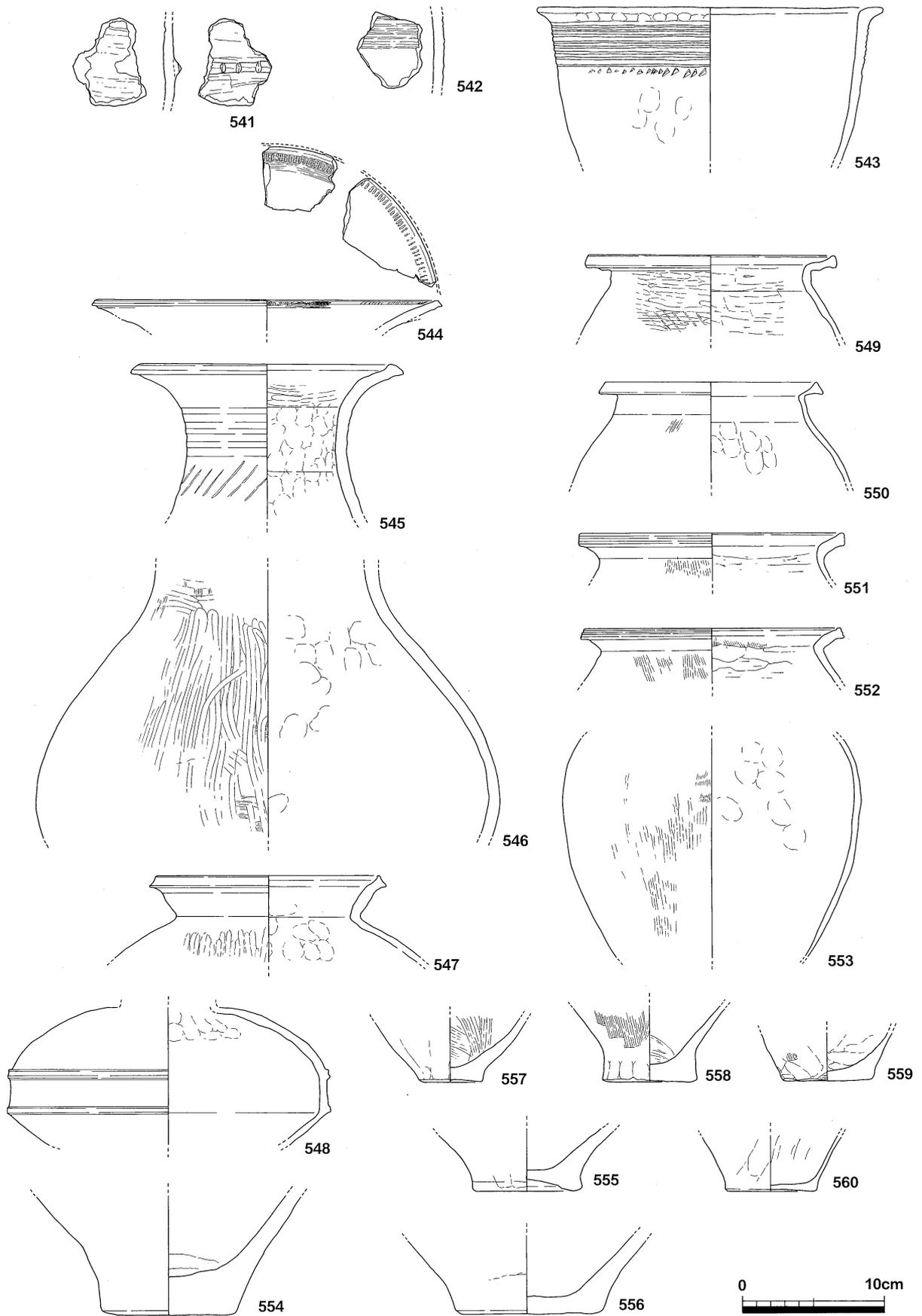
流路04下層の河床面上で木製品集積遺構01に隣接して検出した不整楕円形状を呈する落ち込みである。断面は浅い皿状を呈する。長径2.3m×短径1.9m、深さ0.3mを測る。埋土は上層からの流れ込みで黒灰色粘土を呈している。出土遺物としては、広鋏の未製品2点・匙3点等がかたまって出土した(第94~96図)。また、木製品の周辺にはヒョウタン等の種実が多量に出土している。



第87図 第3低地帯東壁断面土層図



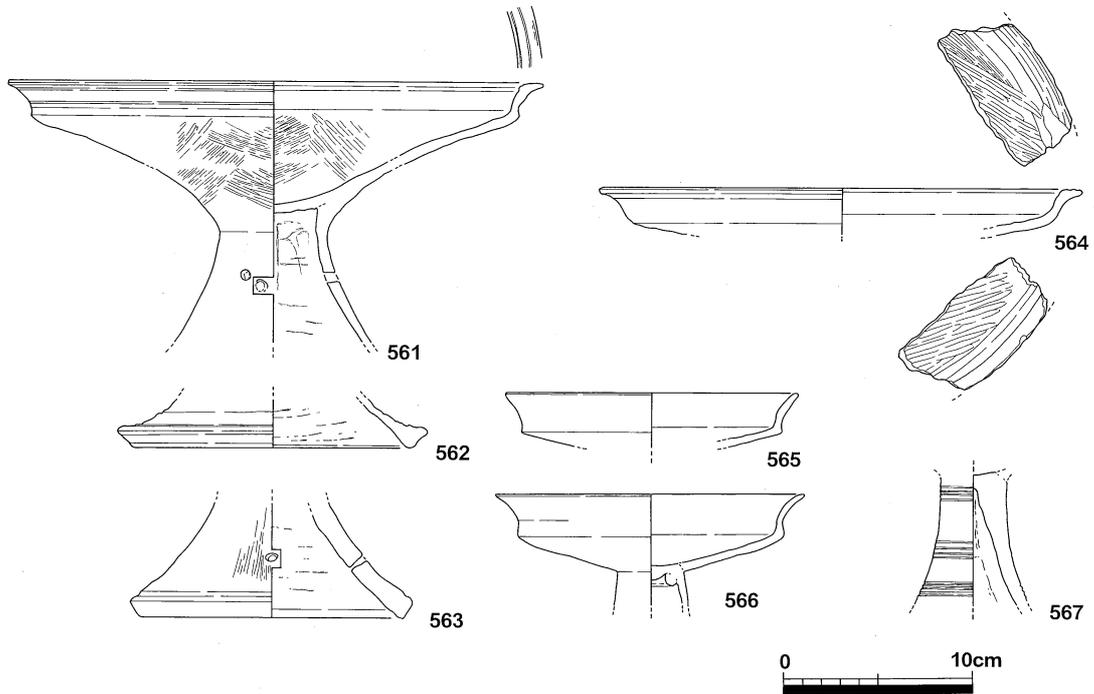
第88図 第3低地帯流路04遺物出土状況



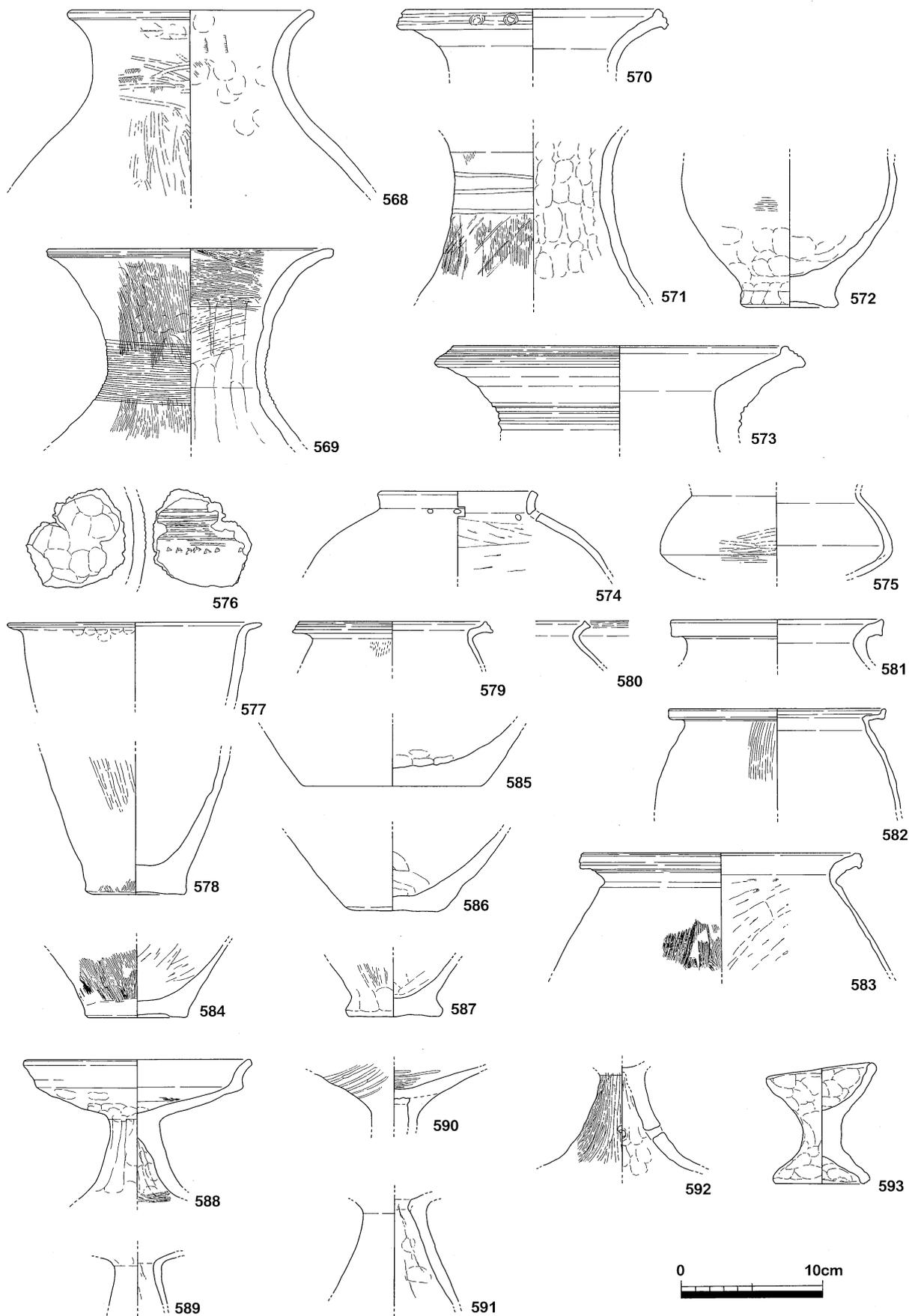
第89图 第3低地带流路04下層出土土器(1)

流路04下層出土土器（第89・90図，図版30）

（541～567）は流路04の下層より出土した土器である。（541）は縄文時代晩期の突帯文を付した深鉢片である。（542・543）は弥生前期の甕である。（544～548）は壺である。（544～546）は弥生中期後半頃の特徴が顕著である。（547）は弥生後期前葉の短頸壺である。（548）は弥生後期中葉頃の細頸壺の体部である。（549～553）は甕で、弥生後期前葉の特徴が顕著に認められる。（551・552）は口縁端部に退化した凹線文を施し、体部内面のヘラ削りは口縁直下まで施している。（554～556）は弥生前期～中期頃の大型の壺の底部である。（561～567）は高杯である。（561・562・564）の高杯は弥生後期初頭頃の特徴が顕著であり、下川津B類に含まれる。（567）は弥生中期後半の高杯の柱状部である。



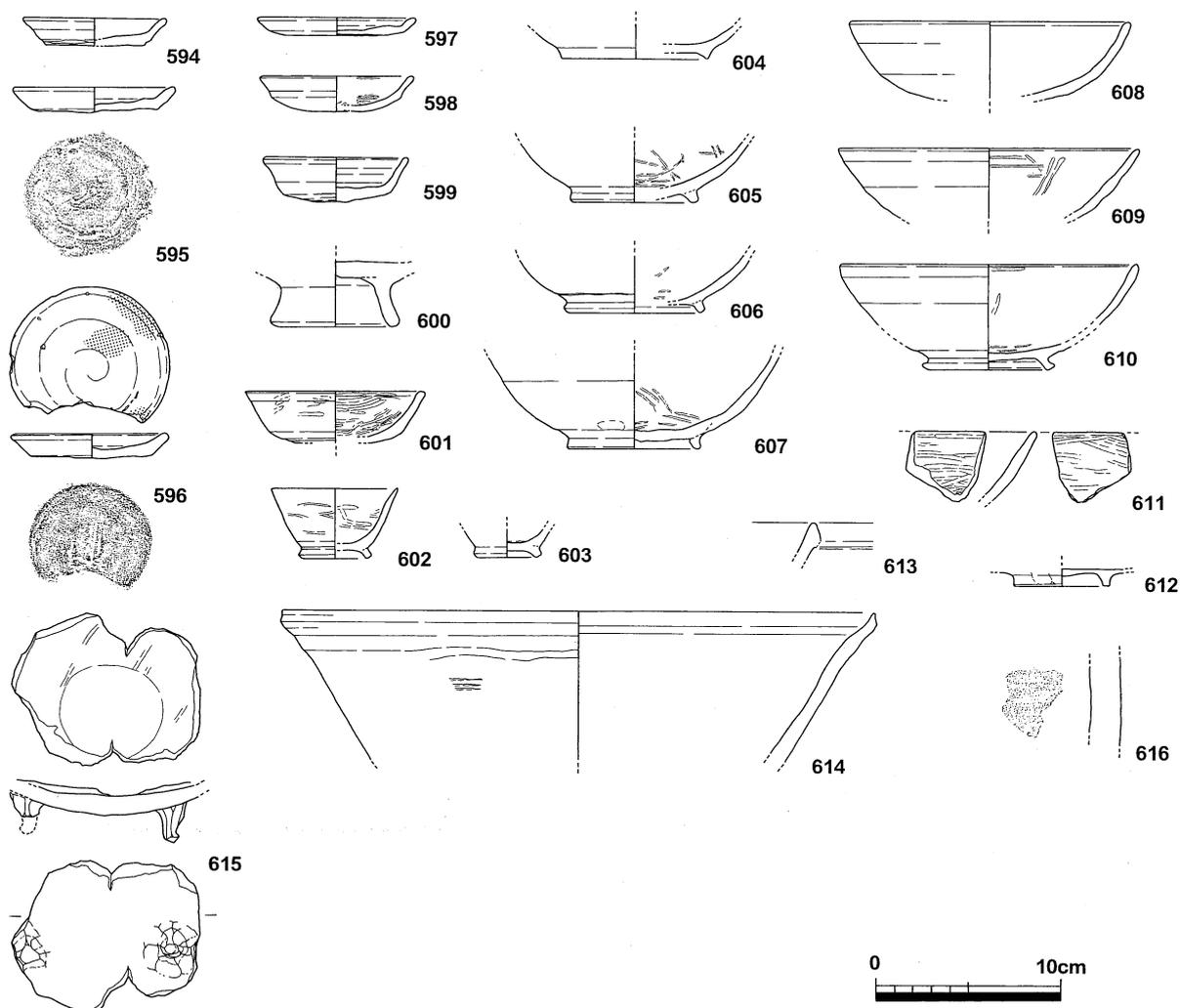
第90図 第3低地帯流路04下層出土土器（2）



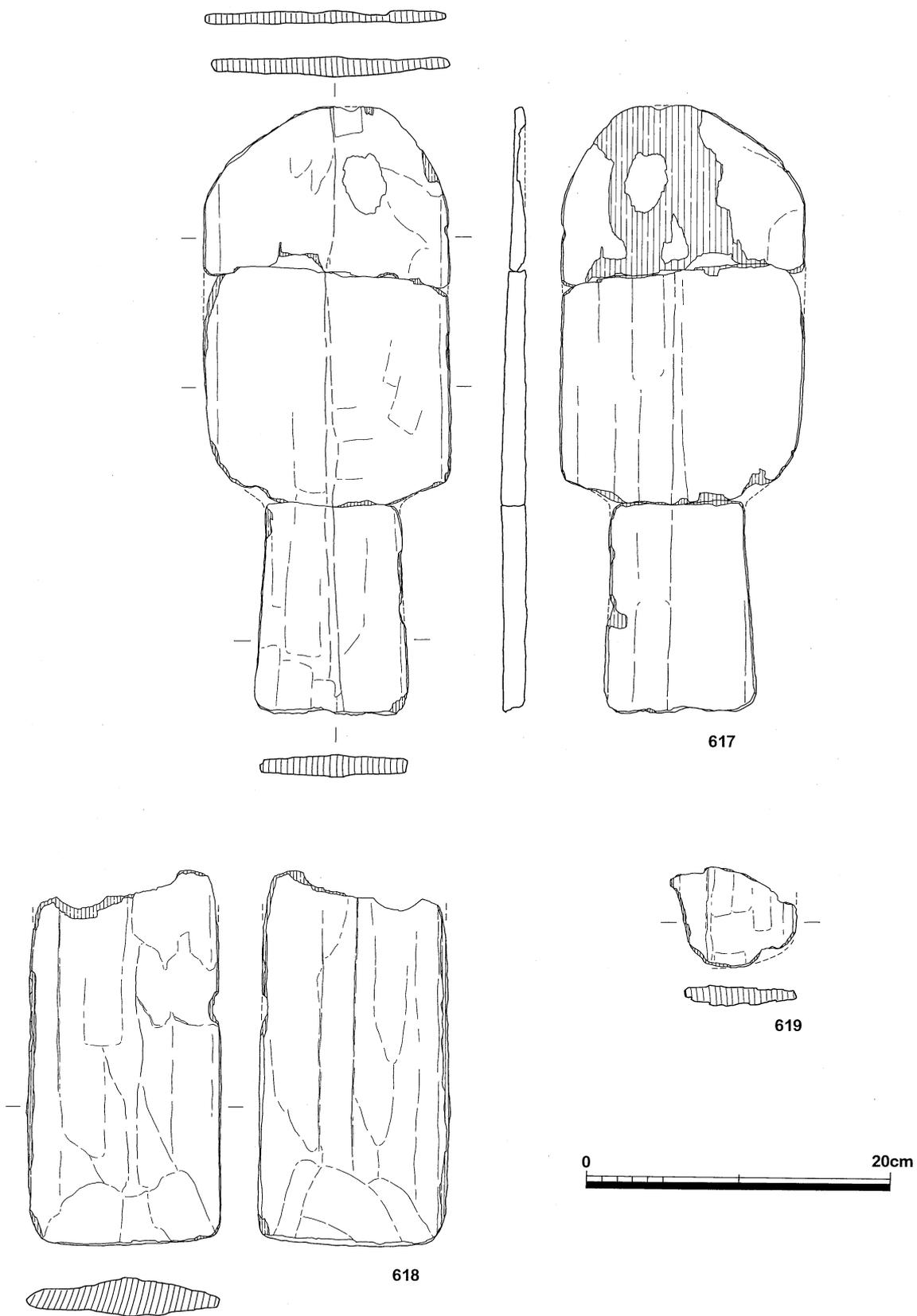
第91图 第3低地带流路04上層出土土器 (1)

流路04上層出土土器 (第91・92図, 図版30・31)

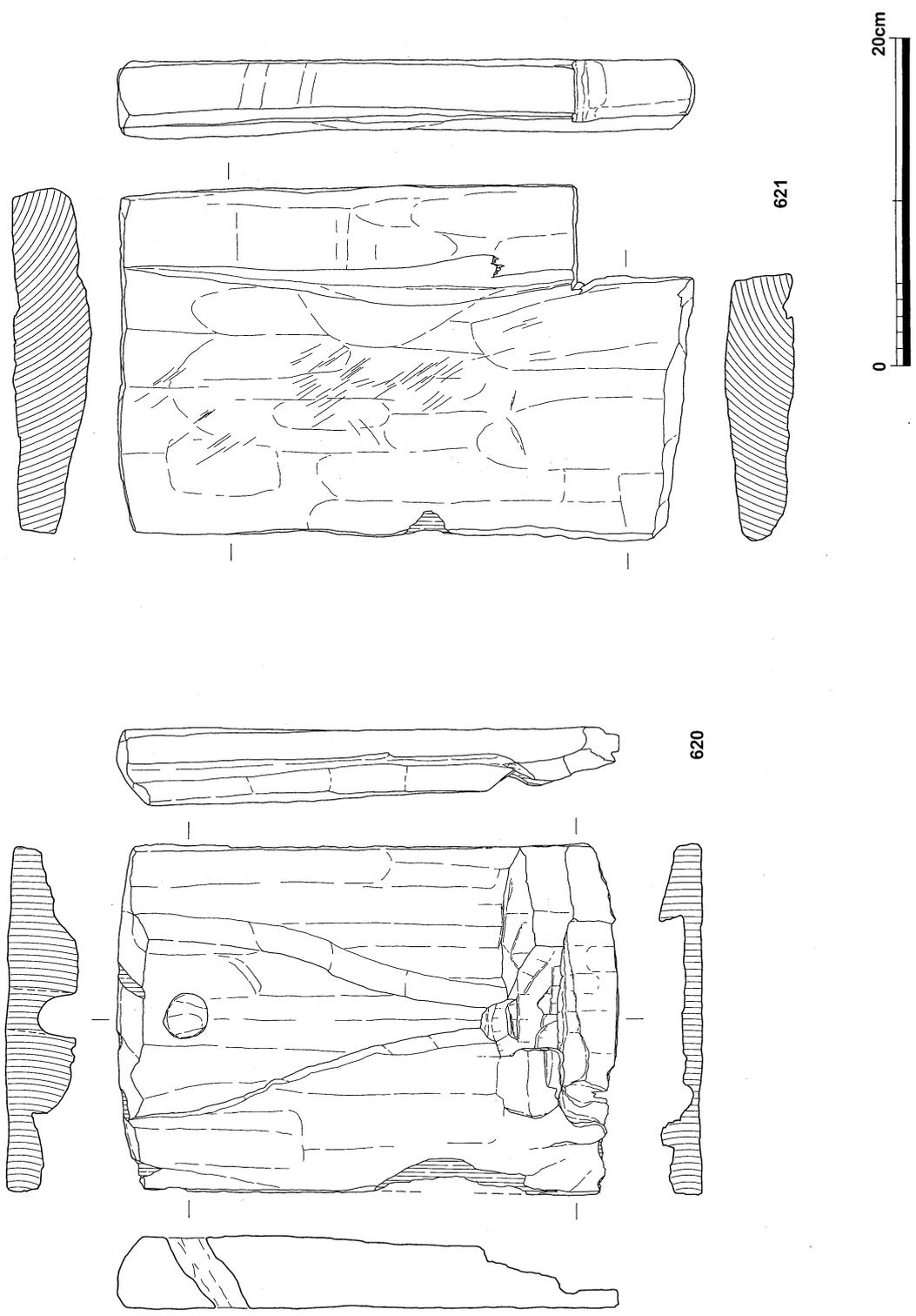
(568~593) は流路04上層出土土器に含まれている弥生土器である。弥生時代前期~後期まで様々な時期の土器が含まれている。前期の範疇で捉えられるのが (572・576~578) 等である。中期が (568・569・639) 等の土器である。(594~616) は流路04上層土器に含まれている、12世紀前葉~中葉頃の中世土器である。これらの土器群は流路04の最終埋没時期を示している。(594~599) は小皿である。(594~597・599) は土師器の小皿で (598) は瓦器の小皿である。(595・596) の底部外面には板状圧痕を、また (596) の内面には灯油痕を残している。(599) は小皿に分類したが、台付小皿の可能性が高い。(600) は土師器の台付小皿の脚部である。(601~603) は黑色土器B類の小型杯である。(601) は高台部が付く可能性が高い。(602・603) は現在の猪口の様な形状をしている希な資料である。(604~612) は椀である。(604) は土師器の椀底部である。(605~607) は黑色土器A類 (608~610) は黑色土器B



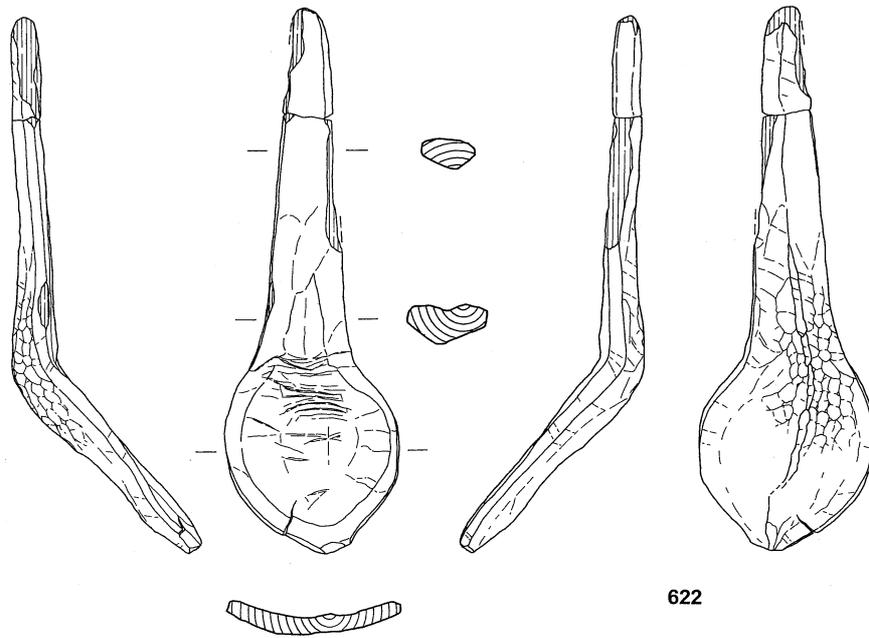
第92図 第3低地帯流路04上層出土土器 (2)



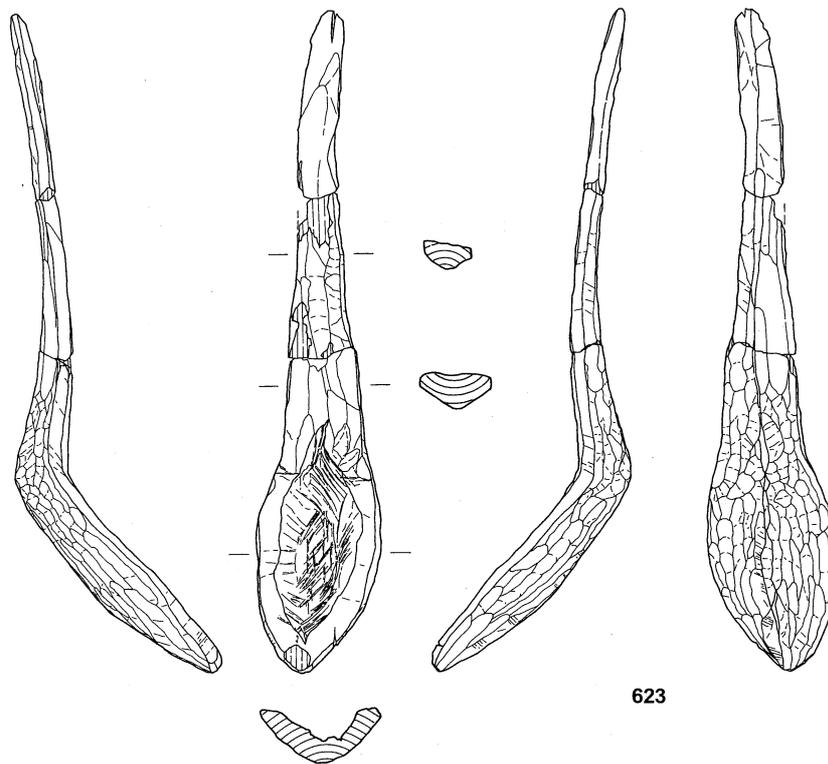
第93図 第3低地帯流路04出土木製品（1）



第94図 第3低地帯流路04出土木製品（2）



622



623

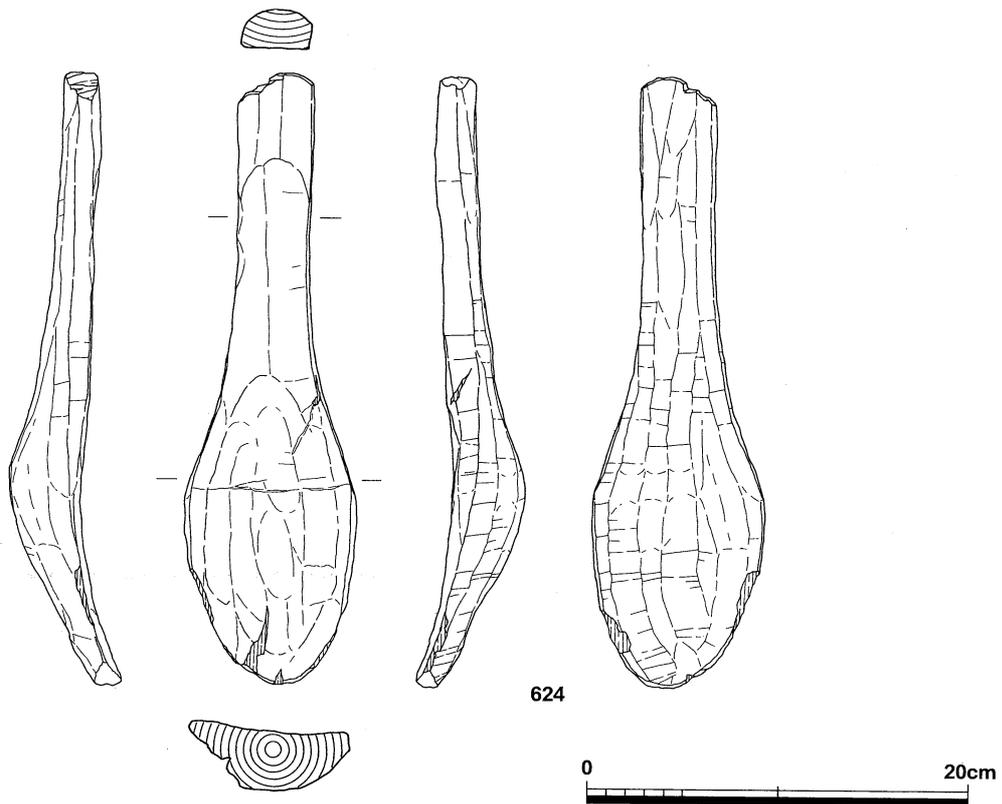


第95図 第3低地帯流路04出土木製品（3）

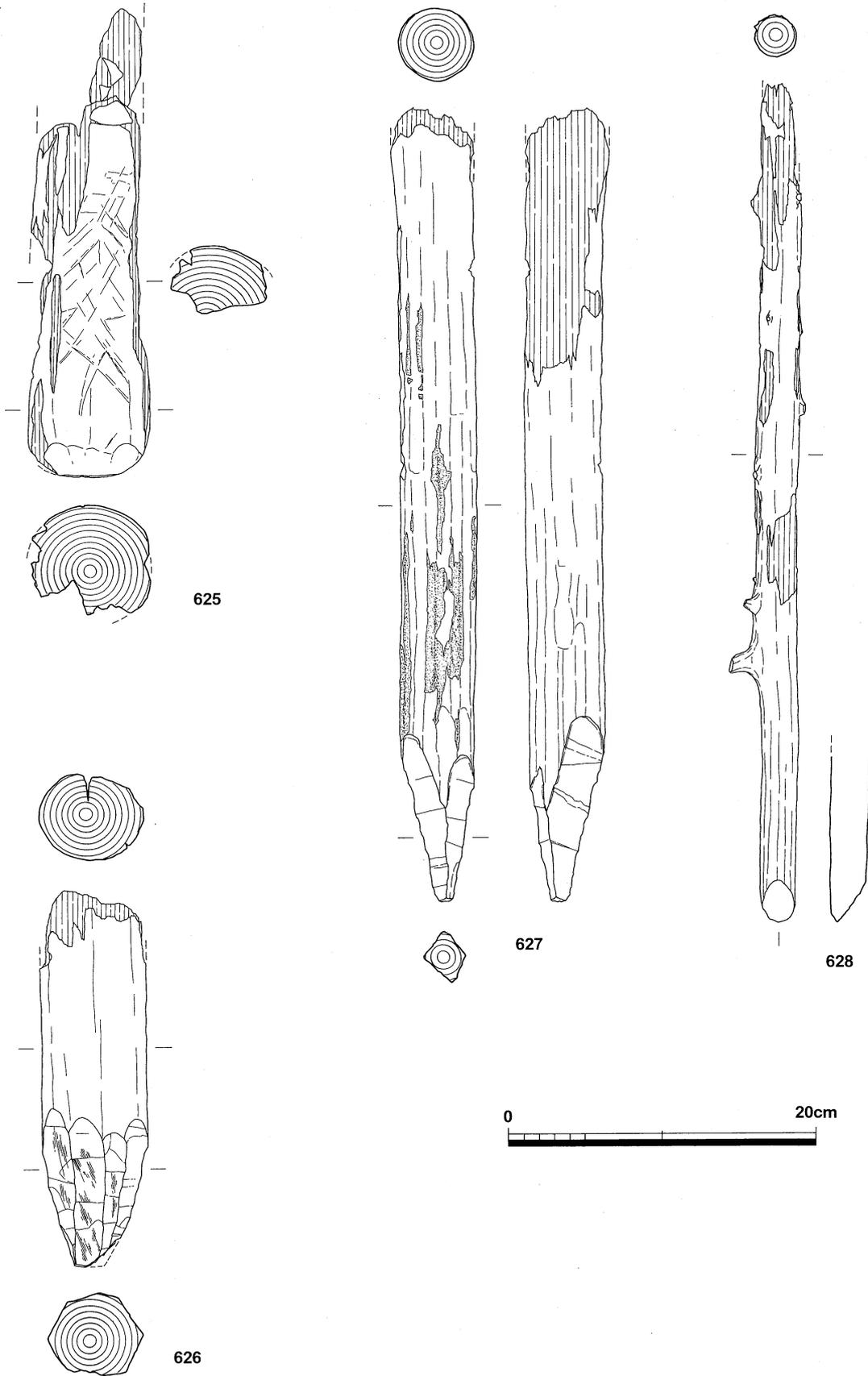
類 (611・612) は瓦器である。(611) は緻密なへら磨きの状況より楠葉型の瓦器の範疇で捉えられる。(613・614) は須恵器の鉢で (613) は東播系 (614) は十瓶産の捏鉢である。(615) は黒色土器B類の器種不明土器である。対になる小さな支脚を持つことより、香炉等の可能性がある。(616) は瓦片である。

流路04出土木製品 (第93～96図, 図版34～38)

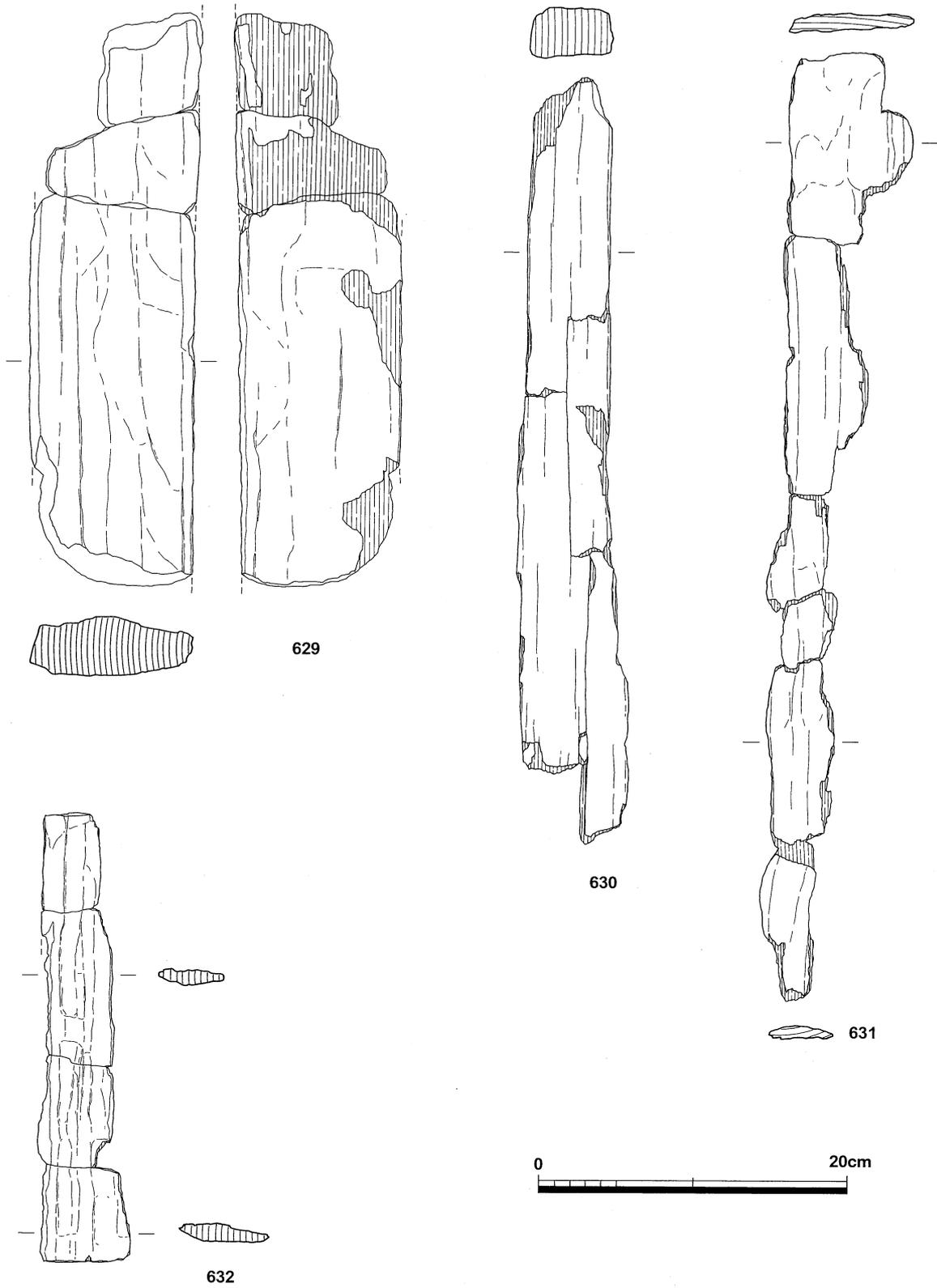
(617～633) は流路04より出土した木製品である。また、これらのうち (620～624) は、木製品集積遺構02より出土している木製品である。(617・618) は器種不明の木製品である。形状より櫂の未製品を連想するが、類例を検討する必要がある。(617) は柁目材を板状に整形し、体部と柄を作り出している。板状に整形の際には主軸に稜線を作り、断面は扁平な菱形を呈している。(620・621) は小型の広楸の未製品として分類した。柁目材を素材している。(621) は幅広な舟形突起を作り出し、柄孔を斜め方向で穿っている。刃先の調整は施されておらず、横長状の突起を残している。この突起は舟形突起を作り出す際の残存部と考えられ、この広楸の完成度の低さを示すものと考えられる。(621) は舟形突起を作り出す以前の段階の広楸の未製品である。側縁に挟れが認められる。(622～624) は匙である。半裁丸太材の木芯近接部を使用している。柄と体部に木芯部を残す。柄が九の字状に曲がる (622・623)



第96図 第3低地帯流路04出土木製品 (4)



第97図 第3低地帯流路04出土木製品（5）



第98図 第3低地帯流路04出土木製品(6)

と、柄が直線状を呈する（624）と、柄の形態が二種類に分かれる。（623）の体部内面には細かい加工痕を顕著に残し、完成度が比較的低いものと考えられる。（629～633）は板状の木製品である。（629）は比較的幅広で、断面不整四角形状を呈する板状の木製品である。（630）は断面四角形で角材状を呈している木製品である。（631・632）は扁平で全長の長い板状の木製品である。（633）は全長がかなり長い断面三角形状を呈し、所謂ミカン割り材の範疇で捉えられる木製品である。

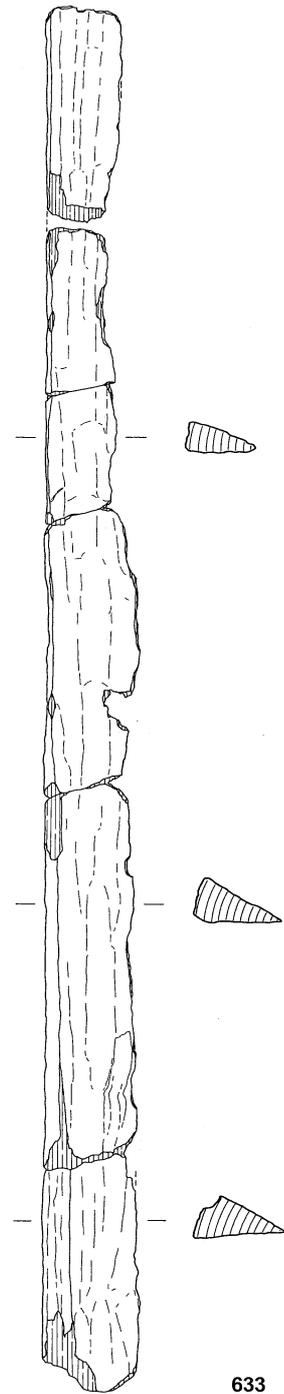
流路04出土石器（第100図，図版39・40）

流路04から出土した石器は（第100図634・637・639～641・642・644～646）等の石器である。（634）は先端部を欠くサヌカイト製の石鏃である。（637）はサヌカイト製の削器である。背面に礫面を多量に残す肉厚な剥片を素材としている。刃部は上下2側縁に認められる。（639）はサヌカイト製の石錐である。側縁端部に短い錐部を作り出している。また上方の側縁部には調整が認められ、削器としての機能も考えられる。（640）サヌカイト製の楔形石器で、（641）は裁断面が認められないため楔形石器の素材と考えられる。（642）は形状より先端部を欠く打製石斧片と考えられる。（644）は周囲を円盤状に調整している事より石製紡錘車の未製品と考えられる。（645）は円礫を素材とした叩き石、（646）は棒状の自然礫を素材にした叩き石である。なお、先端部には直線状の使用痕が認められる。

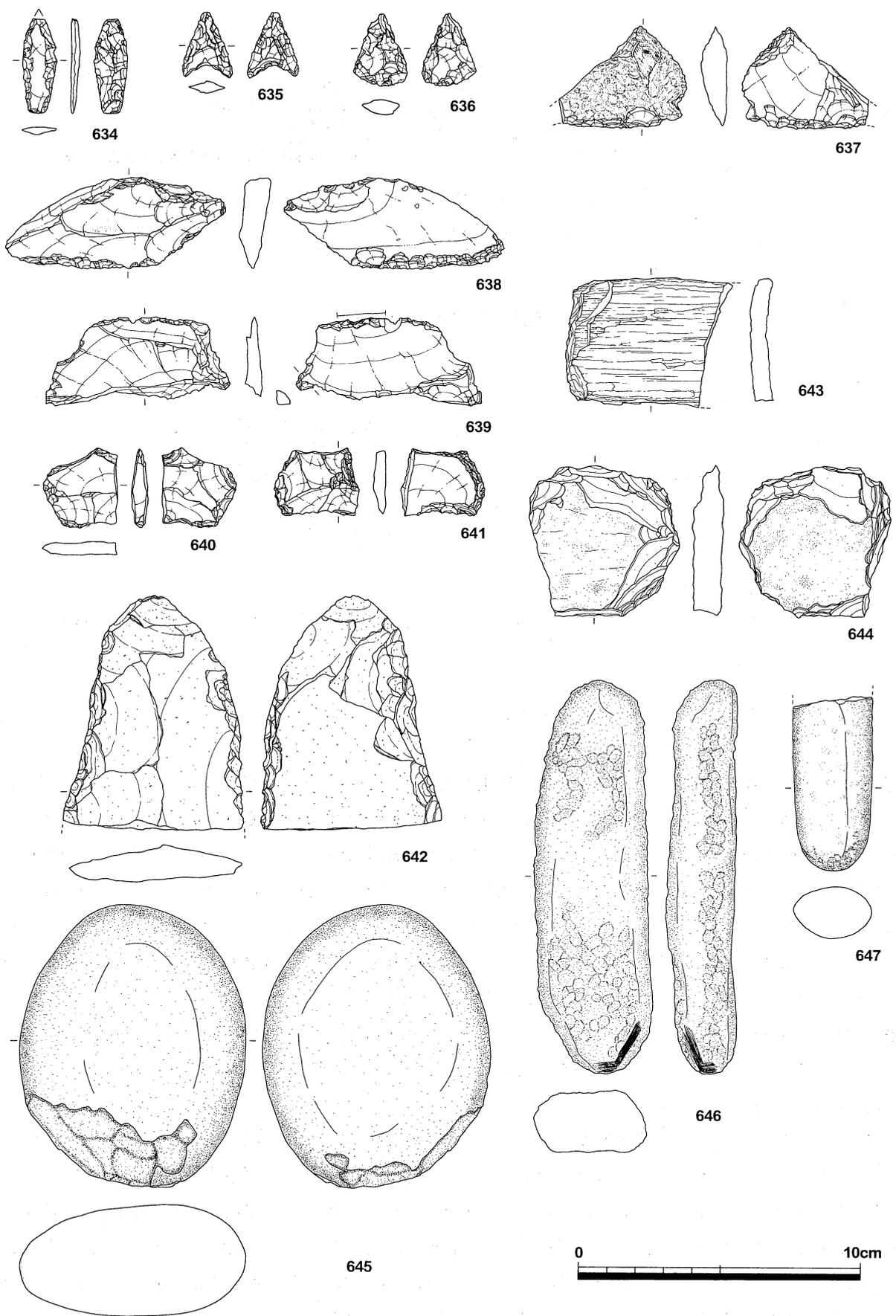
（3）流路05

Ⅶ・Ⅷ区の境界周辺のA・B23・24区で検出した流路である。この位置は第3低地帯の南端にあたる。流路の方向は複雑で、東西流路が南側に所在し、もう一方の支流が北側で東西流路に合流する。流路の平面観を記号で示せば「h」字状を呈している。検出長約10.0m、幅は地点によりかなり異なるが、東西流路の東・西端で7.0m～10.0m、北側の支流で4.0m～5.0mを測る。断面は浅い皿状を呈し深さ約0.3mを測る。流路05の出土遺物としては、鎌倉時代の12世紀前葉～中葉頃の土器を主体にして、少量の石器・金属器片等を含めコンテナ2箱程出土している。

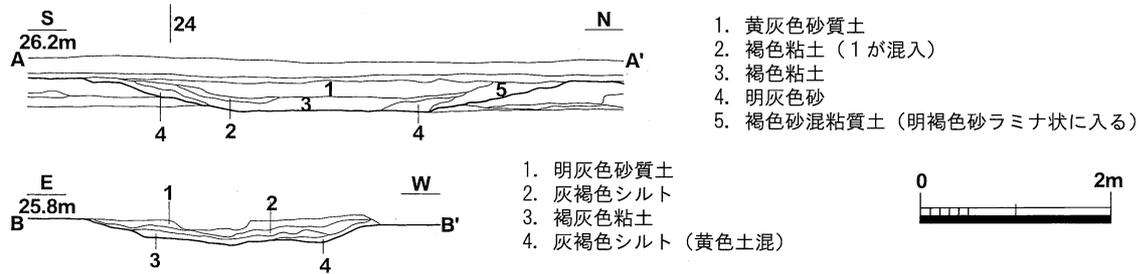
（第103図648～680）は流路05出土の遺物である。（648



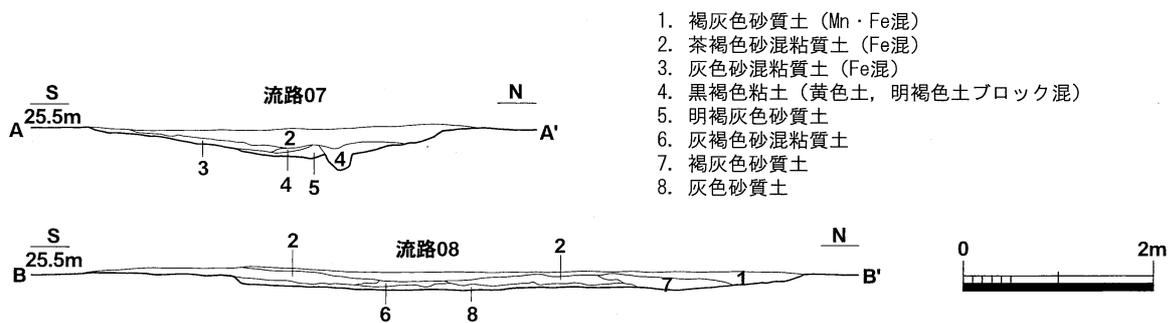
第99図 第3低地帯流路04出土木製品（7）



第100図 第3低地帯流路04及びその他の包含層出土石器



第101図 流路05断面図

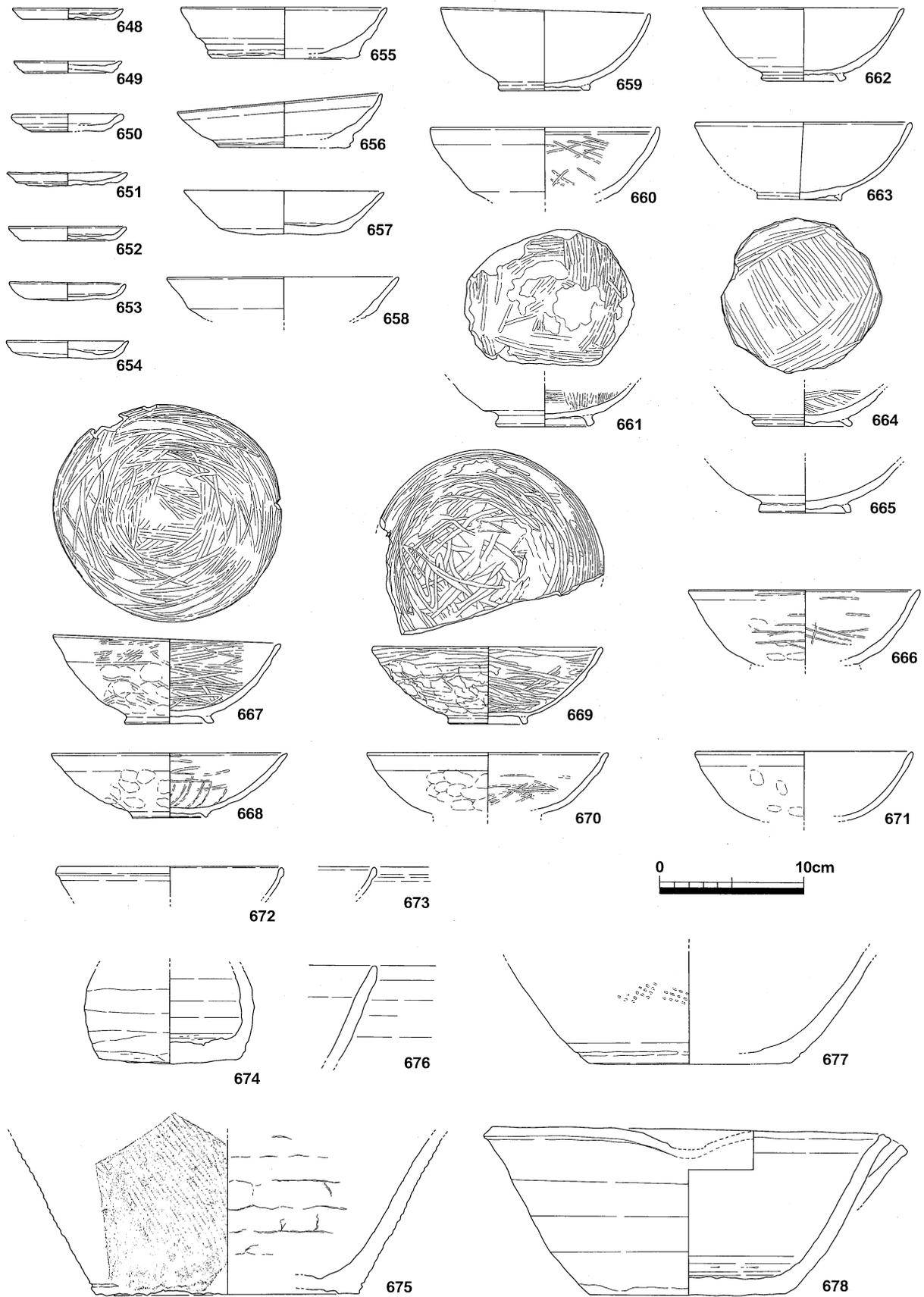


第102図 流路07・08断面図

～654) は土師器の小皿である。(655～658) は土師器の杯である。(659～673) は椀である。(660～665) は黒色土器A類の椀である。(661・664) 等は内面のヘラ磨きが顕著である。(666) は黒色土器B類 (667～671) は瓦器の椀である。調整・形状等より和泉型の範疇で捉えられる。(667・669) 等は内面のヘラ磨きが著しく口縁端部にまで至る。(672・673) は白磁の椀口縁部である。横田・森田編年の椀Ⅱ 1類にあたる資料と考えられる。(674) は須恵器の壺体部 (675～678) は十瓶産の須恵器の捏鉢である。なお、(678) は片口の機能を持つ。(679) は流路05より出土した弥生時代の、サヌカイト製の削器である。横長の肉厚な剥片を素材として、ほぼ側縁全周に調整を施している。(680) は鉄製の釘である。(第97図626～628) は流路05より出土した杭である。(626・627) は丸太材を素材とし先端部に断面多角形状に刃先を付けている。(628) は枝打ちした細い棒状の枝の先端に刃先を付けている。

#### (4) 流路06～08

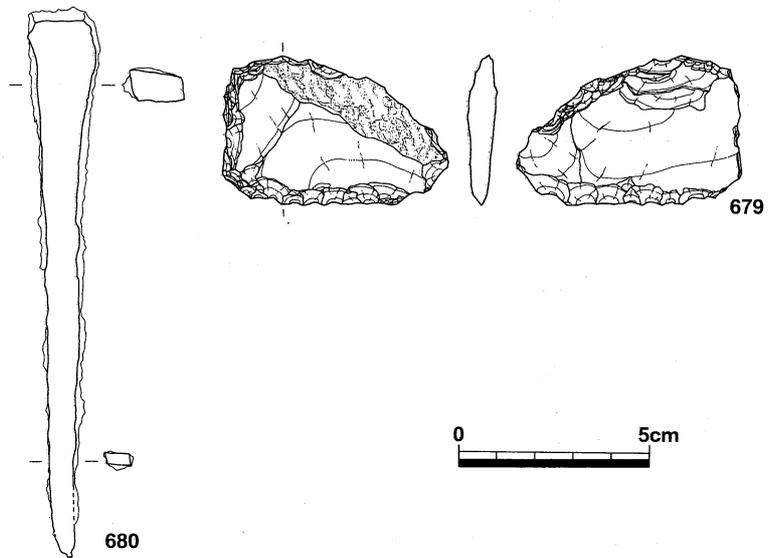
Ⅷ区のA・B25区で検出した流路群である。この位置は第3低地帯の北端にあたる。流路の方向は複雑で、南側の流路07と北側の流路08が、西側で交わり流路06となり西方へ延びる。平面観は「Y」字状を呈する。各流路の法量を列記すれば、流路06—検出長約4.0m・幅約4.0～7.0m・深さ約0.4m、流路07—検出長約8.0m・幅約3.0～4.0m・深さ約0.2m、流路08—検出長約10.0m・幅約5.0～8.0m・深さ約0.2mを測る。なお、河床面の傾斜と後世の削平により各流路とも東端が深く西端が浅くなっている。その結果、流路07・08の東端と流路06の西端ではかなり差がある。流路06～08の出土遺物としては、鎌倉時代の12世紀前葉～中葉頃の土器を主体にして、少量の弥生前期、7～8世紀頃の須恵器、瓦片等を含めコ



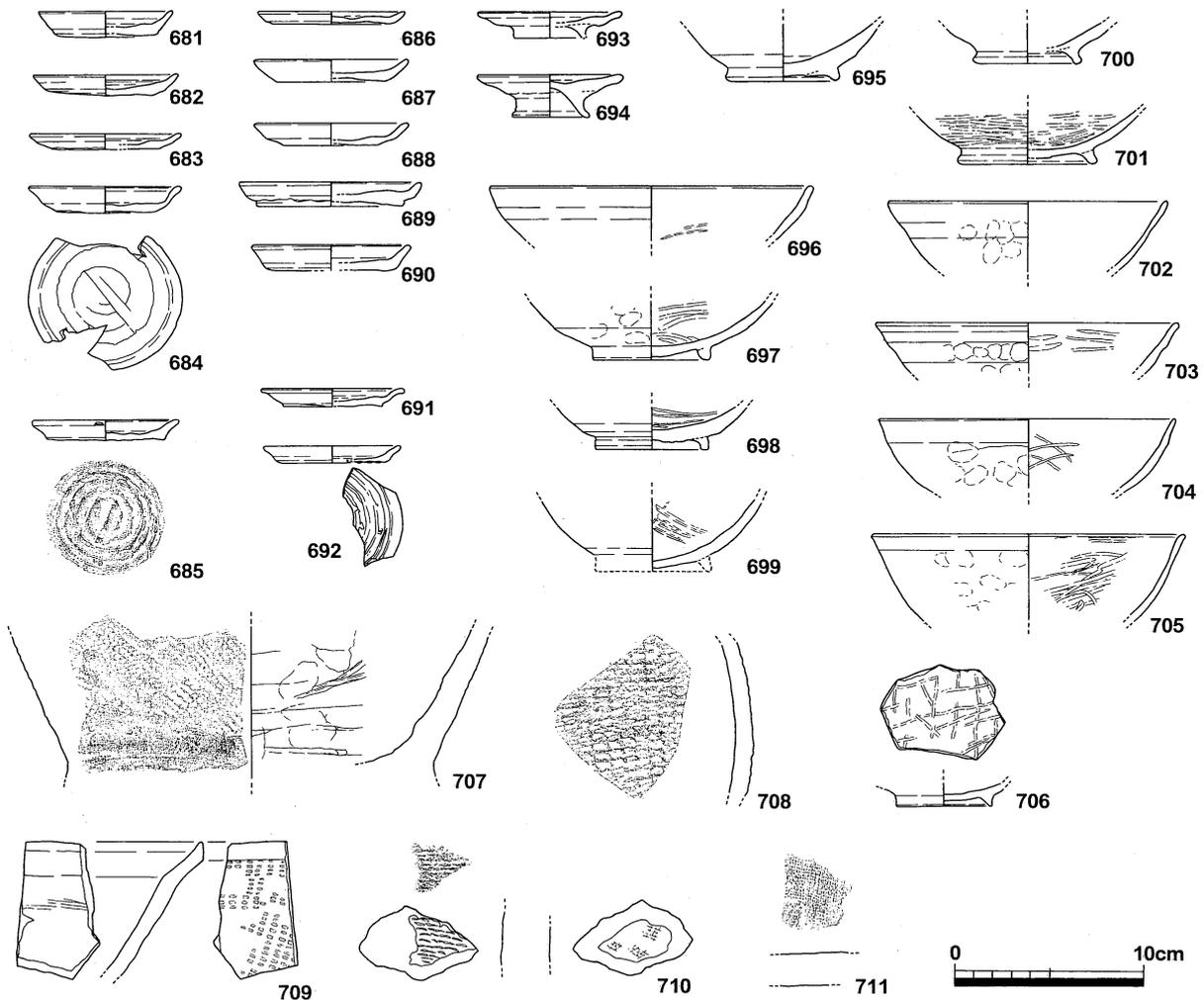
第103図 第3低地帯流路05出土土器

ンテナ3箱程出土している。

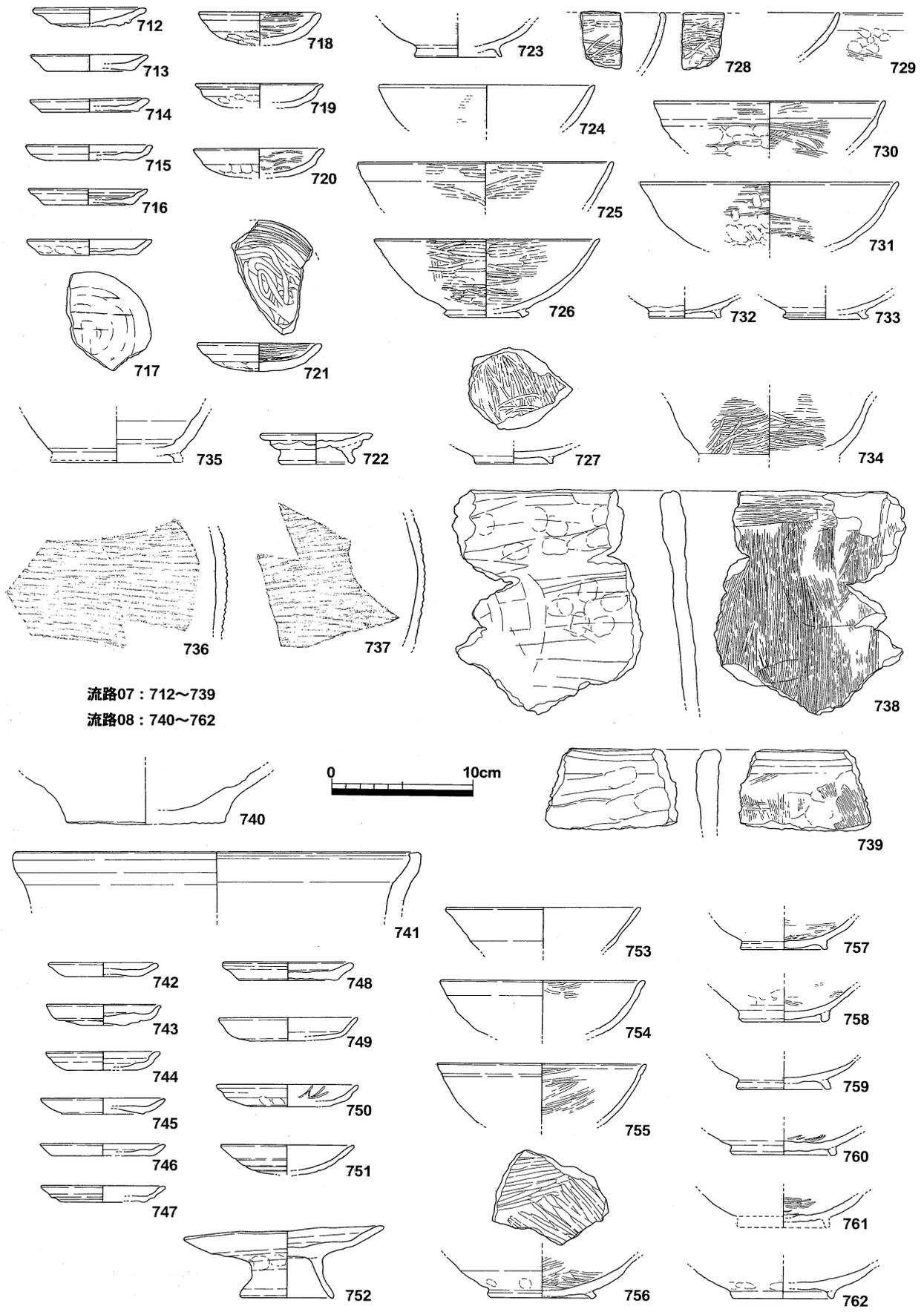
(第105図681~711)は流路06出土の遺物である。なお、遺物の取り上げは上・下層で区分されており、下層にあたるのが(685・691~693・699・703・705・706)等の土器で、他は上層より出土している。(681~692)は土師器の小皿で(684~685・692)の底部にはヘラ切り痕・板状圧痕等を顕著に残している。(693・694)は土師器の台付き小皿である。(695~706)は椀である。(696~699)は黒色土器A類(700・701)は黒色土器B類(702~706)は和泉型の瓦器椀である。なお、流路06~08出土の椀で共通する点



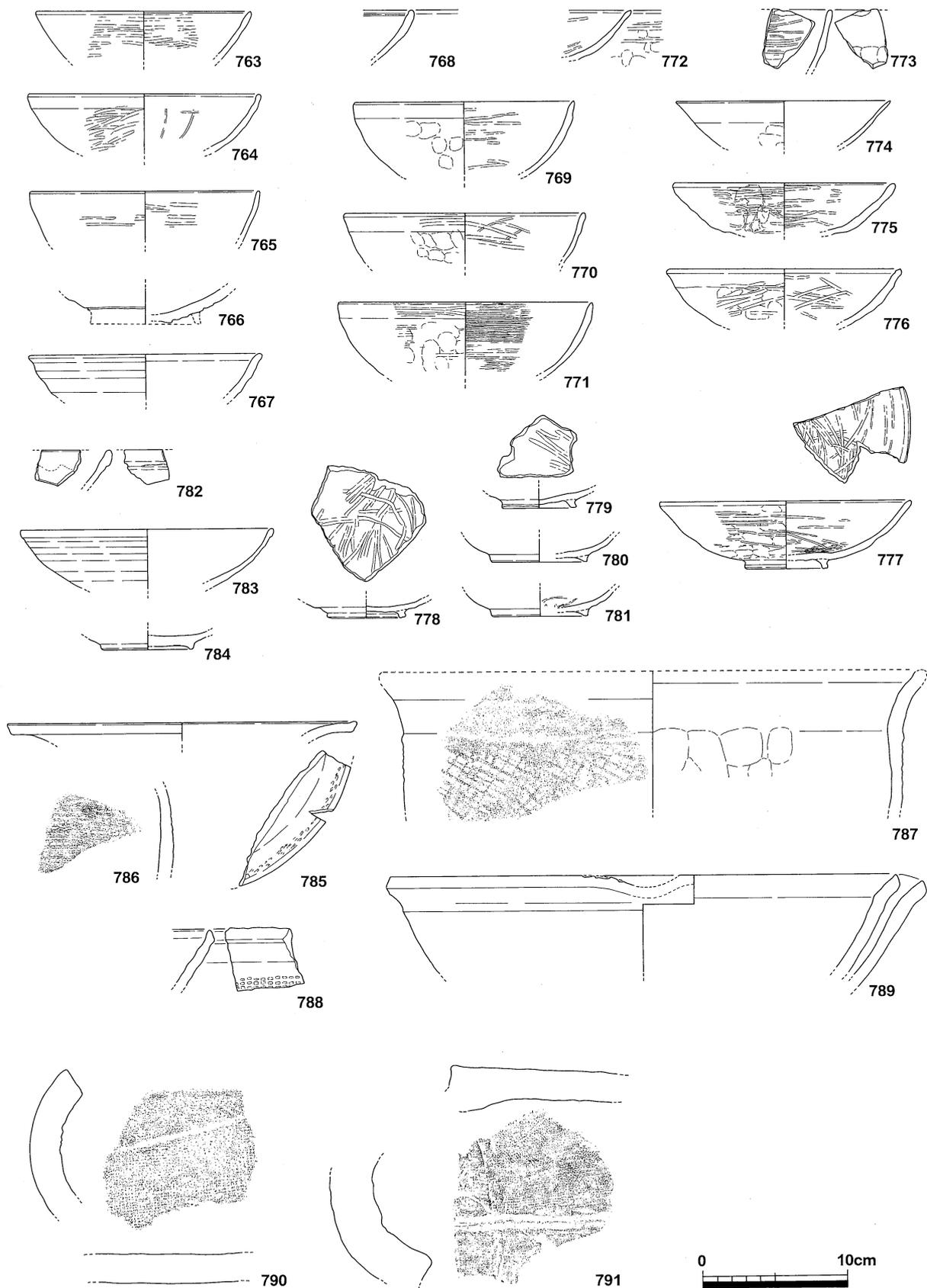
第104図 第3低地帯流路05出土石器・金属器



第105図 第3低地帯流路06出土土器



第106図 第3低地帯流路07・08出土土器



第107图 第3低地带流路08出土土器

では、黒色土器の割合が高く、特に黒色土器B類の高比率が特徴といえる。(707・708)は十瓶産の須恵器壺である。(709)は十瓶産の捏鉢口縁部である。(710・711)は少量ながら出土している瓦片である。

(第106図712～739)は流路07出土の遺物である。なお、遺物の取り上げは上・下層で区分されており、下層にあたるのが(716・717・721・729・730・734・738)等の土器で、他は上層より出土している。(712～721)は小皿である。(712～717)は土師器の小皿で(718～721)は瓦器の小皿である。(717)には板状圧痕を明瞭に残す。(723～734)は椀である。(724・725)は黒色土器A類(726～734)は瓦器の椀である。瓦器椀は和泉型が主流を占める。(734)の瓦器椀は体部が外反する特徴的な土器である。(735)は8世紀頃の須恵器壺の底部である。(736・737)十瓶産の須恵器の甕の体部である。(738・739)は形状より土師器の竈の口縁部にあたるものと考えられる。

(第106図740～791)は流路08出土の遺物である。(740)は弥生前期頃の壺底部である。(791)は7世紀頃の須恵器の甕口縁部である。(742～751)は小皿である。(742～747)は土師器(748～750)は瓦器の小皿である。(751・752)は台付小皿である。(751)は脚台部がないが、形状より本来脚台が付くものと判断した。なお、この土器は黒色土器B類である。(753～784)は椀である。他の流路同様に黒色土器B類椀の比率が高い。(753～762)は黒色土器A類(763～766)は黒色土器B類の椀である。(767)は東海系の山茶碗(768～781)は瓦器の椀である。瓦器椀の中では和泉型が主体を占めるが、少量(768・769)等の楠葉型も含まれている。(782～784)は白磁椀で、(782)は横田・森田編年の椀IV 1 a類(783・784)は流路05出土遺物(672・673)同様に椀II 1類にあたる資料と考えられる。(785・786・788・789)は十瓶産の須恵器である。内訳は(785)が長胴の壺の口縁部で(786)が甕の体部片(788・789)は十瓶産の須恵器の捏鉢で(789)は片口の機能をもつ。(790・791)は須恵質の丸瓦片である。

(参考文献)

- 平安学園考古学クラブ 1966 『陶邑古窯址群Ⅰ』真陽社
- 柳瀬昭彦 1977 「川入・上東」『都市計画道路に伴う埋蔵文化財発掘調査』岡山県教育委員会
- 奈良国立文化財研究所 1976 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ』
- 奈良国立文化財研究所 1978 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』
- 横田堅次郎・森田 勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館
- 高倉洋彰 1972 「弥生時代の小形仿製鏡について」『考古学雑誌 第58巻 第3号』日本考古学会
- 高倉洋彰 1985 「弥生時代の小形仿製鏡について(承前)」『考古学雑誌 第70巻 第3号』日本考古学会
- 西村尋文 1990 「下川津遺跡における6～8世紀の集落構造と動向」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ—下川津遺跡—』香川県教育委員会
- 大久保徹也 1990 「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ—下川津遺跡—』香川県教育委員会
- 林原利明 1992 「東日本の初期銅鏡」『季刊 考古学 第43号』雄山閣
- 片桐孝浩 1992 「川津元結木遺跡」『中小河川大東川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』香川県教育委員会
- 山元敏裕他 1995 「居石遺跡」『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第7冊』高松市教育委員会
- 高倉洋彰 1995 「弥生時代出土仿製鏡の儀鏡化について」『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第7冊—居石遺跡—』高松市教育委員会
- 中世土器研究会 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

## 第Ⅳ章 自然化学分析結果

### 第1節 プラント・オパール，花粉分析結果

株式会社 古環境研究所

#### I. 第2低地帯のプラント・オパール分析

##### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（ $\text{SiO}_2$ ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

寺田・産宮通遺跡の第2低地帯の発掘調査では、複数の堆積層で水田跡の可能性が考えられた。そこで、これらの層における稲作の可能性を検討するために、プラント・オパール分析を行うことになった。

##### 2. 試料

分析試料は、調査区西壁において上位より淡灰褐色砂混じり粘土（Ⅱ①層）、暗茶褐色砂混じり粘土（Ⅱ②層）、暗灰褐色砂混じり粘土（Ⅱ③層）、黒色粘土（Ⅱ④層）および淡黒色シルト（Ⅱ⑥層）より採取された5点である。

##### 3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに直径約40 $\mu\text{m}$ のガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 $\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体

1個あたりの植物体乾重、単位：10<sup>-5</sup> g) を乗じて、単位面積で層厚1 cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ(赤米)の換算係数は2.94(種実重は1.03)、ヨシ属(ヨシ)は6.31、ススキ属(ススキ)は1.24、ネザサ節は0.48およびクマザサ属(チシマザサ節・チマキザサ節)は0.75である。

#### 4. 結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、ジュズダマ属、シバ属、タケ亜科(ネザサ節型、クマザサ属型、その他)および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を第4表および第108図に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。各分類群の検出状況は次のとおりである。

イネが検出されたのは、II①層～II④層の4層準である。このうち、II①層～II③層ではプラント・オパール密度が5,000個/g前後と高い値である。ヨシ属はすべての層準から検出された。II③層とII④層では比較的高い密度である。ススキ属型はII①層～II④層の4層準で検出された。II①層、II③層およびII④層では比較的高い密度である。ネザサ節型はすべての層準より検出された。II①層～II④層では比較的高い密度である。クマザサ属型はII②層、II③層およびII④層で検出されたがいずれも低い密度である。なお、II②層では少量ではあるがジュズダマ属とシバ属が検出された。

#### 5. 考察

##### (1) 稲作の可能性について

II①層、II②層、II③層、II④層およびII⑥層の5層準について分析を行った。その結果、II①層～II④層においてイネのプラント・オパールが検出された。このうち、II①層、II②層さらにII③層ではプラント・オパール密度が4,500～5,100個/gであり、稲作跡の探査や検証を行う際の基準としている5,000個/gにほぼ匹敵する。したがって、これらの層準については稲作跡である可能性が高いと考えられる。なお、II④層でもイネのプラント・オパールが検出されていることから、稲作が行われていた可能性が考えられる。ただし、密度が2,800個/gとやや低く、直上のII③層が5,000個/g以上の高密度であることから、上層から後代のプラント・オパールが混入した危険性も否定できない。

##### (2) プラント・オパール分析から推定される植生・環境

おもな分類群の推定生産量(図の右側)をみると、下位のII④層とII③層ではそれぞれヨシ属の生産量が高く、卓越している。したがって、両層準の堆積時は調査地あるいは近辺はヨシの多く生育する湿地であったと推定され、こうした湿地を利用して水田稲作が行われたと考えられる。また、II④層～II①層ではススキ属型やネザサ節型も比較的多く認められることから、これらの層準では近傍にススキ属やネザサ節などが生育していたと考えられる。

#### 6. まとめ

寺田産宮通遺跡第2低地帯において、プラント・オパール分析を行い稲作跡の可能性について検討した。その結果、1) II①層、II②層、II③層は稲作跡である可能性が高いと判断された。

2) II④層については稲作跡の可能性が認められるものの、上層から後代のプラント・オパールが混入したことも考えられた。

- 3) II③層とII④層の堆積時は、調査区あるいは近辺はヨシの生育する湿地であったと推定された。  
 4) II①層～II④層では、周辺にススキ属やネザサ節が生育していたと推定された。

(文献)

杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号, p.70-83.

杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール). 考古学と植物学. 同成社, p.189-213.

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法 -. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) - プラント・オパール分析による水田址の探査 -. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

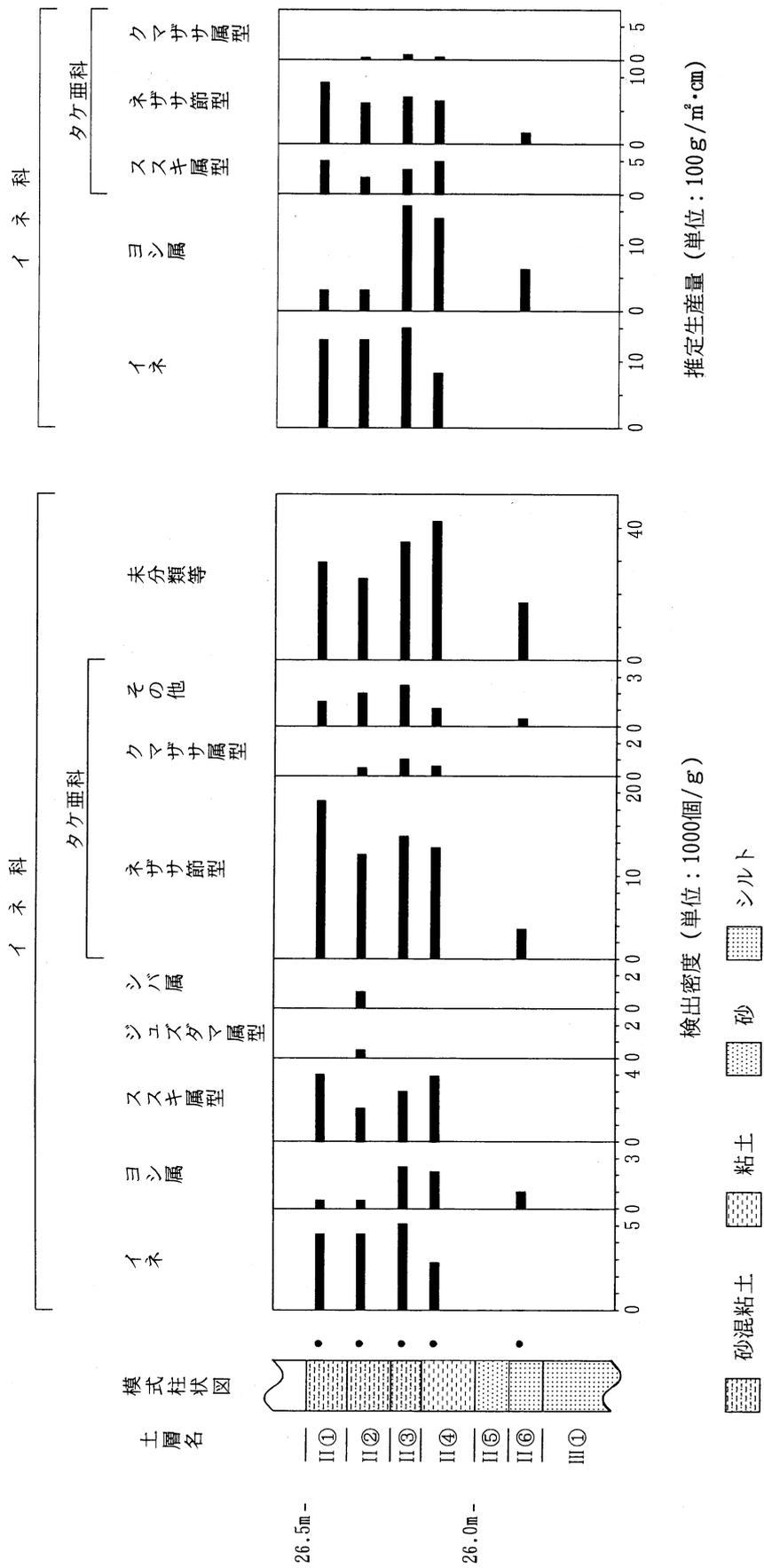
第4表 寺田・産宮通遺跡のプラント・オパール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

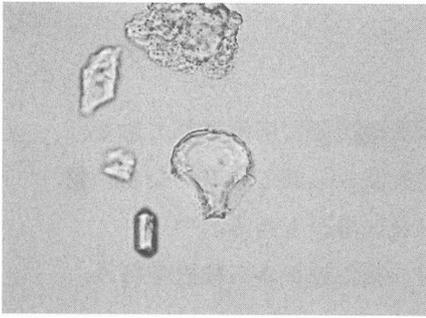
分類群 (和名・学名) \ 試料		西壁				
		II①	II②	II③	II④	II⑥
イネ科	Gramineae (Grasses)					
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	45	45	51	28	
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	5	5	25	22	10
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	40	20	30	39	
ジュズダマ属型	<i>Coix</i>		5			
シバ属	<i>Zoisia</i>		10			
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)					
ネザサ節型	<i>Pleiolobus</i> sect. <i>Nezasa</i> type	190	126	147	134	36
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i> ) type		5	10	6	
その他	Others	15	20	25	11	5
未分類等	Unknown	295	246	356	419	173
プラント・オパール総数		590	483	645	659	223

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>・cm)

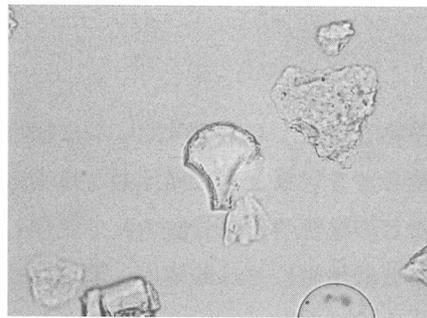
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	1.32	1.33	1.49	0.82	
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	0.32	0.32	1.60	1.41	0.64
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.50	0.25	0.38	0.48	
ネザサ節型	<i>Pleiolobus</i> sect. <i>Nezasa</i> type	0.91	0.60	0.71	0.64	0.17
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i> ) type		0.04	0.08	0.04	



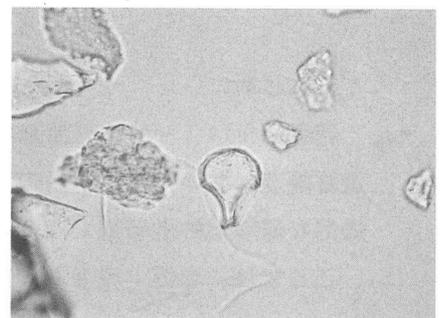
第108図 寺田・産宮通遺跡におけるプラント・オパール分析結果



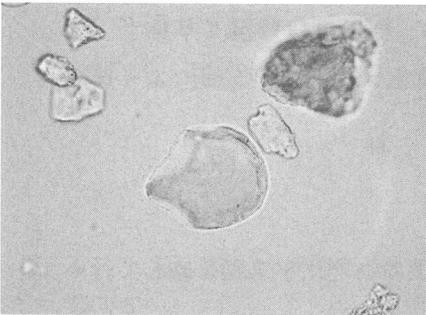
イネ  
II②



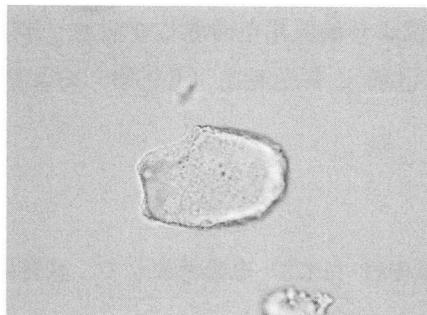
イネ  
II③



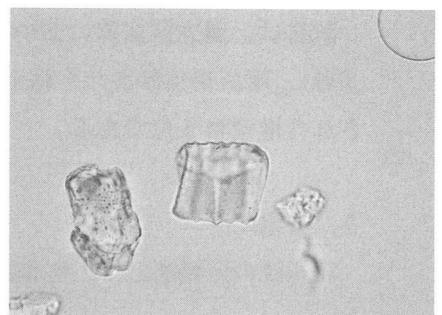
イネ  
II④



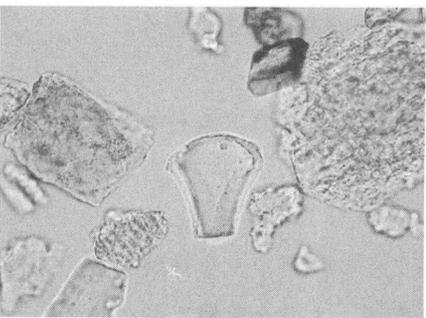
ヨシ属  
II③



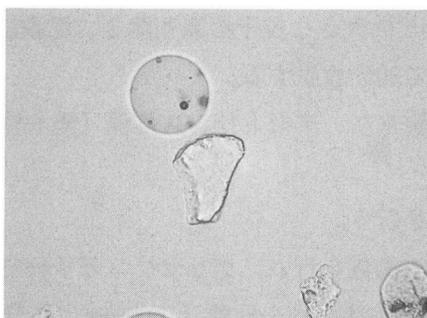
ヨシ属  
II④



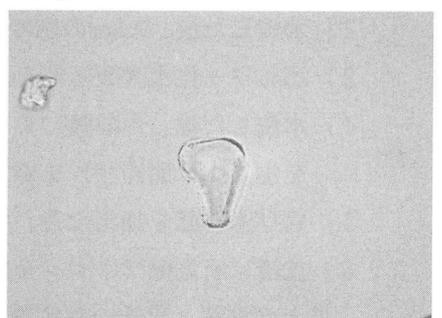
ネザサ節型  
II③



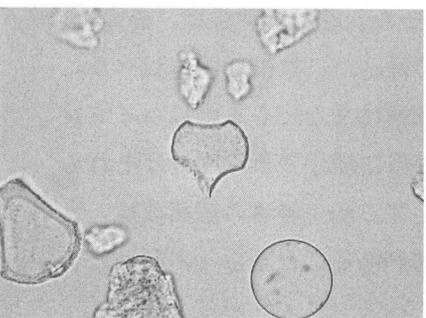
ネザサ節型  
II④



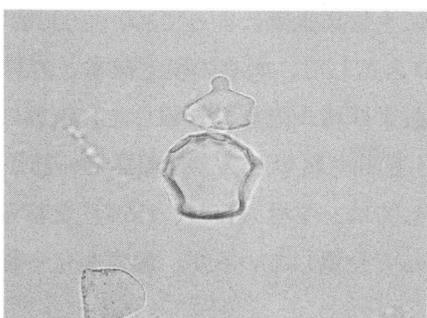
ススキ属型  
II①



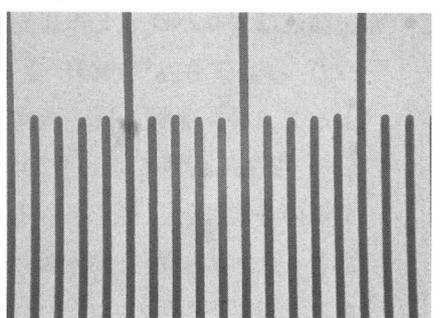
ススキ属型  
II②



シバ属  
II②



ジュズダマ属型  
II②



スケール  
1メモリは10μm

第109図 プラント・オパールの顕微鏡写真

## Ⅱ. 第2低地帯の花粉分析

### 1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて残存していない場合もある。

ここでは、寺田・産宮通遺跡の第2低地帯における植生・環境について、花粉分析から検討を行う。

### 2. 試料

試料は、調査区西壁において上位より淡灰褐色砂混じり粘土（Ⅱ①層）、暗茶褐色砂混じり粘土（Ⅱ②層）、暗灰褐色砂混じり粘土（Ⅱ③層）、黒色粘土（Ⅱ④層）および淡黒色シルト（Ⅱ⑥層）より採取された堆積物5点である。

### 3. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

### 4. 結果

#### （1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉16、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉21、シダ植物孢子2形態の計40である。これらの学名と和名および粒数を第5表に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第110図に示す。なお、200個未満であっても100個以上

の試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は写真に示した。

以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、サワグルミ、カバノキ属、クマシデ属ーアサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属ーケヤキ、エノキ属ームクノキ、カエデ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科ーイラクサ科

〔草本花粉〕

ガマ属ーミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科ーヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、フウロソウ属、アリノトウグサ属ーフサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

(2) 花粉群集の特徴

出現した花粉群集の特徴とその変遷により下位からⅠ帯、Ⅱ帯、Ⅲ帯の花粉分帯を設定した。以下、花粉分帯に沿って花粉群集の特徴を記す。

1) Ⅱ⑥層

花粉密度が非常に低く、イネ科、アリノトウグサ属ーフサモ属、ヨモギ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属が検出される。

2) Ⅰ帯 (Ⅱ④層)

樹木花粉よりも草本花粉の出現率がやや高く、イネ科の占める割合が高い。他にはヨモギ属、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、イネ属型、ミズアオイ属、ガマ属ーミクリ属などが検出される。樹木花粉は、マツ属複維管束亜属の出現率がやや高く、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、スギ、ツガ属、モミ属などが出現する。

3) Ⅱ帯 (Ⅱ②層、Ⅱ③層)

樹木花粉よりも草本花粉の出現率が高く、イネ科の占める割合が高い。ヨモギ属、ナデシコ科、アブラナ科の出現率がやや増加する。他に、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、イネ属型、ガマ属ーミクリ属、オモダカ属、ソバ属などが検出される。樹木花粉は、マツ属複維管束亜属の出現率が減少し、コナラ属アカガシ亜属、シイ属、コナラ属コナラ亜属、モミ属などが出現する。

4) Ⅲ帯 (Ⅱ①層)

樹木花粉よりも草本花粉の出現率が高く、イネ属型を含むイネ科の占める割合が高い。他にヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科、ナデシコ科、アブラナ科が出現する。樹木花粉は少なく、コナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属などが低率に出現する。

## 5. 花粉分析から推定される植生と環境

花粉群集の特徴とその変遷から推定される植生と環境を花粉分帯に沿って下位より記す。

### 1) II⑥層

花粉密度が非常に低い。その原因として、堆積速度が速く花粉などの微遺体が堆積しなかったか、乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境において花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

### 2) I帯 (II④層)

堆積地周辺は、イネ科を主にヨモギ属やカヤツリグサ科などの草本が優勢な環境であったと考えられる。これらの草本は人里植物ないし耕地雑草の性格を持ち、人為環境が分布していたことが示唆される。特に、イネ属型とともにミズアオイ属、ガマ属—ミクリ属などの抽水植物も検出されることから、周囲で水田が営まれていた可能性が高い。周辺地域の森林は、マツ属複維管束亜属を主にスギ、ツガ属、モミ属の針葉樹、コナラ属アカガシ亜属などの照葉樹などが構成要素であったと推定され、これらの樹種の生態上二次林が成立していたと考えられる。

### 3) II帯 (II②層、II③層)

下帯と同様に、イネ科を主とする人里植物の優勢な環境が引き続き分布していたと考えられる。イネ属型とガマ属—ミクリ属、オモダカ属、イボクサなどの水田雑草も検出されるため、水田が営まれたと判断される。また、ソバ属の検出からソバ栽培が行われていたことが示唆される。周辺地域の森林植生は、マツ属複維管束亜属やスギなどの針葉樹が減少し、コナラ属アカガシ亜属、シイ属の照葉樹が増加したと考えられる。

### 4) III帯 (II①層)

堆積地周辺は、イネ科を主にヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科、ナデシコ科、アブラナ科などの草本が繁茂する環境が分布していたと推定される。これらの草本は乾燥地を好み、相対的に堆積地周辺の乾燥化が進んだと考えられる。周辺地域の森林は、コナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属などの二次林が分布していたと考えられる。

## 6. まとめ

寺田・産宮通遺跡第2低地帯において花粉分析を行った。その結果、下位よりI帯 (II④層) では草本の優勢な環境が示唆され、水田が営まれていたと判断された。II帯 (II②層、II③層) になると水田は継続される一方、ソバ栽培も行われるようになったことが示唆され、III帯 (II①層) では、堆積地周辺は相対的に乾燥化したことが示唆された。

(参考文献)

中村純 (1973) 花粉分析. 古今書院, p.82-110.

金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.

島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.

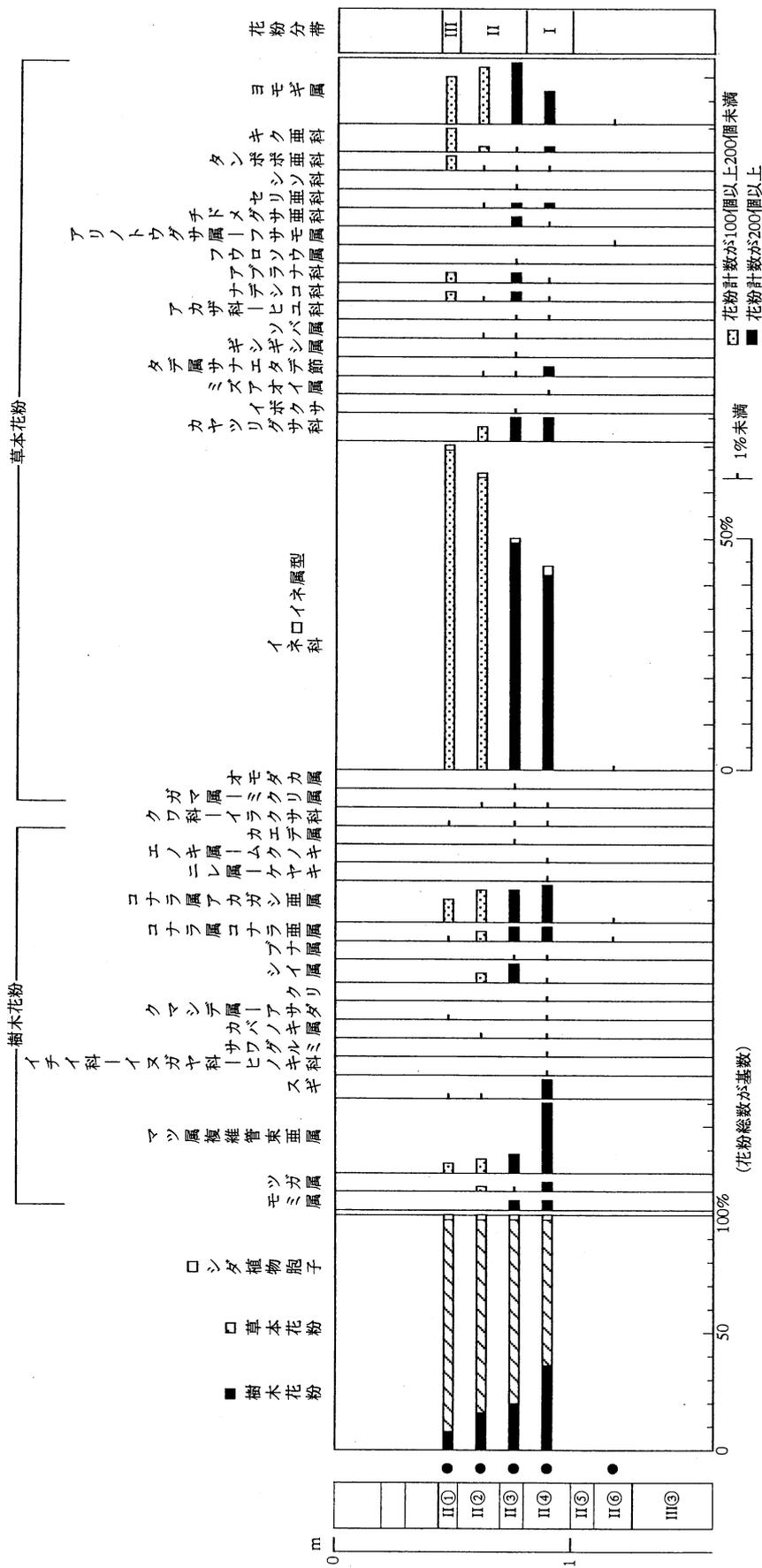
中村純 (1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.

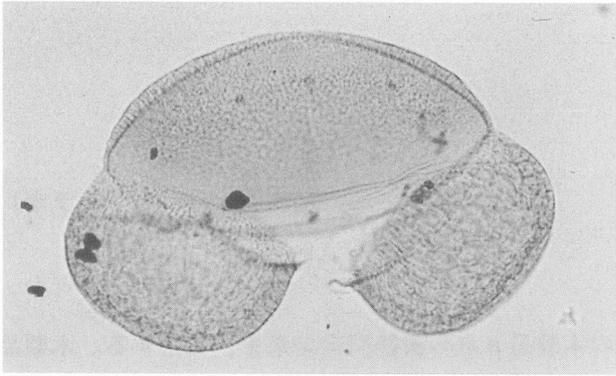
中村純 (1977) 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

第5表 寺田・産宮通遺跡における花粉分析結果

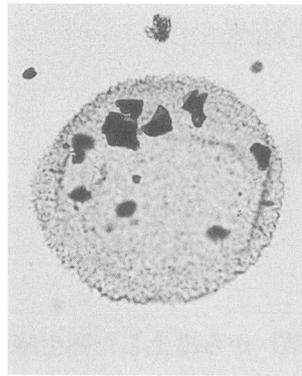
学名	分類群	和名	西壁					
			II①	II②	II③	II④	II⑥	
Arboreal pollen		樹木花粉						
<i>Abies</i>		モミ属			5	9		
<i>Tsuga</i>		ツガ属		2	1	8		
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>		マツ属複雑管束亜属	2	5	14	58		
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	1	1		16		
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科					1	
<i>Pterocarya rhoifolia</i>		サワグルミ					1	
<i>Betula</i>		カバノキ属		1			2	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ	1				3	
<i>Castanea crenata</i>		クリ					1	
<i>Castanopsis</i>		シイ属		4	14	3		
<i>Fagus</i>		ブナ属			1	2		
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	1	3	10	10	1	
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	5	12	25	31	1	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ					1	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ					1	
<i>Acer</i>		カエデ属			1			
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	1		2	1		
Nonarboreal pollen		草本花粉						
<i>Typha-Sparganium</i>		ガマ属-ミクリ属		1	2	1		
<i>Sagittaria</i>		オモダカ属			1			
Gramineae		イネ科	77	106	168	162	2	
<i>Oryza type</i>		イネ属型	1	1	3	6		
Cyperaceae		カヤツリグサ科		5	17	21		
<i>Aneilema keisak</i>		イボクサ			1			
<i>Monochoria</i>		ミスアオイ属					1	
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節		1	2	6		
<i>Rumex</i>		ギシギシ属			1			
<i>Fagopyrum</i>		ソバ属		1	1			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科			2	1		
Caryophyllaceae		ナデシコ科	2	1	6	3		
Cruciferae		アブラナ科	2		7	1		
<i>Geranium</i>		フウロソウ属			1			
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>		アリノトウグサ属-フサモ属						1
Hydrocetyloideae		チドメグサ亜科			7	1		
Apiodeae		セリ亜科		1	4	5		
Labiatae		シソ科			1			
Lactucoeidae		タンポポ亜科	3	1	1	2		
Asteroideae		キク亜科	5	2	1	5		
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	11	21	45	27	1	
Fern spore		シダ植物胞子						
Monolate type spore		単条溝胞子		2	1	3		
Trilate type spore		三条溝胞子	3	3	1	4	3	
Arboreal pollen		樹木花粉	10	28	71	147	2	
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	1	0	2	1	0	
Nonarboreal pollen		草本花粉	101	141	271	242	4	
Total pollen		花粉総数	112	169	344	390	6	
Unknown pollen		未同定花粉	5	5	2	4	0	
Fern spore		シダ植物胞子	3	5	2	7	3	
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	
		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	



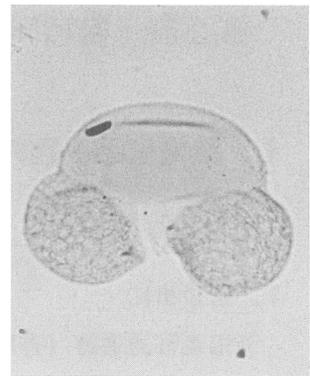
第110図 寺田・産宮通遺跡Ⅲ区AⅡにおける花粉ダイアグラム



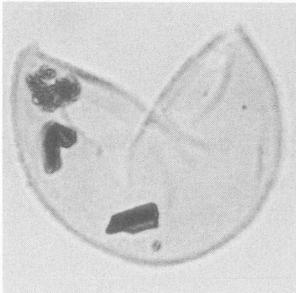
1 モミ属



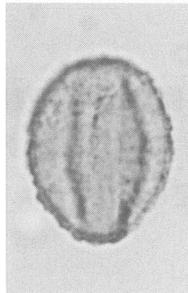
2 ツガ属



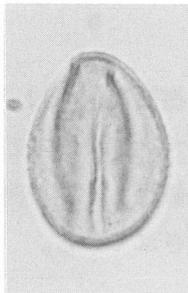
3 マツ属複雑維管束亜属



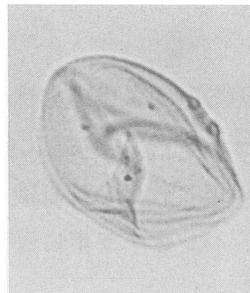
4 スギ



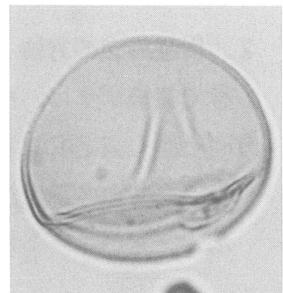
5 コナラ属  
コナラ亜属



6 コナラ属  
アカガシ亜属



7 イネ科



8 イネ属型



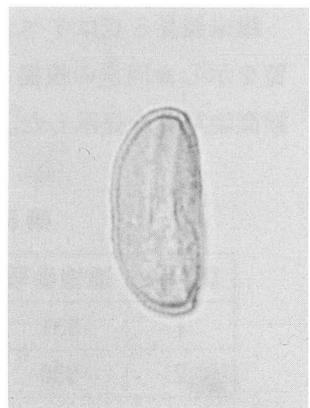
9 カヤツリグサ科



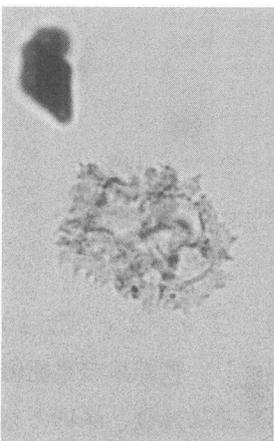
10 ソバ属



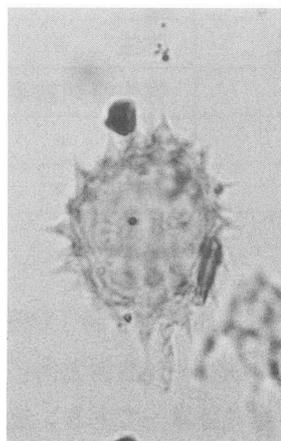
11 ナデシコ科



12 セリ亜科



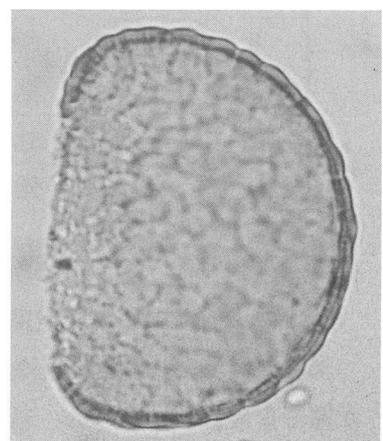
13 タンポポ科



14 キク亜科



15 ヨモギ属



16 シダ植物単条溝孢子

第111図 寺田・産宮通遺跡の花粉・孢子顕微鏡写真

1-3 — 10 μm  
4-16 — 10 μm

## 第2節 樹種同定結果

### I. 鋤未製品・匙の樹種同定

植田弥生 (パレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

寺田産宮通遺跡(香川県)から出土した弥生時代の木製品8点の樹種同定結果を、報告する。木製品は、鋤未製品(樹種同定試料No1~5)5点と匙(樹種同定No6~8)3点である。

#### 2. 樹種同定の方法

材の組織標本は、片刃の剃刀を用いて材の横断面(木口)・接線断面(板目)・放射断面(柾目)の3方向を薄く剥ぎ取りスライドガラスの上に並べ、ガムクロラルで封入し永久プレパラートを作成した。そして光学顕微鏡を用いてこれらの材組織を観察し同定を決定した。

永久プレパラートは、パレオ・ラボに保管されている。

#### 3. 結果

鋤未製品5点はすべてアカガシ亜属であり、匙3点はすべてサカキであった。第6表に同定結果の一覧を示し、同定の根拠とした材組織の観察結果を以下に記した。また、第112図には各分類群の材組織顕微鏡写真を提示した。

第6表 寺田産宮通遺跡出土木製品の樹種同定結果

試料No.	遺物番号	木製品	木製品	時期
1	531	鋤未製品	アカガシ亜属	弥生後期
2	530	鋤未製品	アカガシ亜属	弥生後期
3	620	鋤未製品	アカガシ亜属	弥生後期前半
4	621	鋤未製品	アカガシ亜属	弥生 〃
5	617	鋤未製品?	アカガシ亜属	弥生 〃
6	623	匙	サカキ	弥生後期前半
7	622	匙	サカキ	弥生 〃
8	624	匙	サカキ	弥生 〃

#### 樹種記載

(1) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版1 1a-1c (No1)

細胞幅の広い複合放射組織を挟み厚壁の小型~大型の単独管孔が放射方向に配列し、接線状の柔組織が顕著な放射孔材である。道管の壁孔は小さく交互状、穿孔は単一である。放射組織は同性、単列と複合放射組織があり、道管との壁孔は孔口が大きく開き柵状や交互状に配置している。

アカガシ亜属は、いわゆるカシ類と総称される常緑広葉樹であり、おもに暖温帯に分布する。山野に

普通なアラカシ・アカガシ・シラカシ、関東以南に多いイチイガシ・ツクバネガシ、海岸や乾燥地に多いウバメガシ、寒さに強くブナ帯の下部まで分布するウラジロガシなどがある。材は丈夫で弾性や耐湿性があり、農具として用いられる代表樹種である。

(2) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図版1 2a-2c (No.8)

非常に小型で多角形の管孔が密に分布する散孔材である。道管の壁孔は階段状、穿孔は横棒数が30本前後の階段穿孔である。放射組織は単列異性、道管との壁孔は交互状や階段状である。サカキは、本州の茨城県および石川県以西より南の暖帯から亜熱帯に生育する常緑小高木である。材質は強靱・堅硬で割裂困難で丈夫である。木製品として遺跡から報告されることの多い樹種であり、農具の柄・漁労具・杭・杵や小物器具類などに使用されている。

#### 4. まとめ

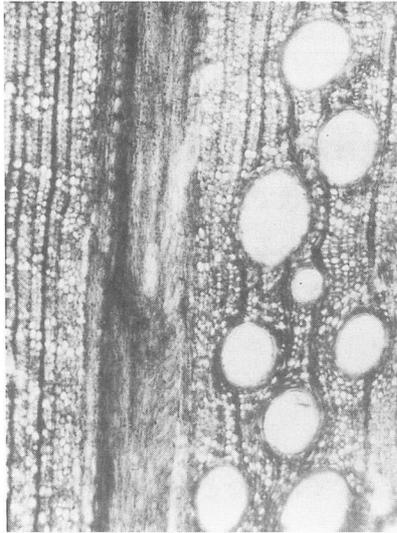
鋤未製品はやや疑問視される木20も含めすべてアカガシ亜属であり、すでに鋤などの農具類に多用されることが知られている樹種が、やはり利用されていた。

調査した匙3点はすべてサカキであった。島地・伊東(1988)の集計を通覧すると、匙・匙形木製品などや杓・杓子にはヒノキとスギの針葉樹材が多いが、これは奈良・平安時代の近畿地方の調査例が多いことを反映しているようである。弥生時代の西日本の遺跡に注目して見ると、常緑広葉樹材のカシ・アラカシ・ユズリハ?・クスノキなどや、落葉広葉樹のケヤキ・ヤマグワなど、広葉樹材が使用されている。北九州市の金山遺跡(1999)から出土した弥生時代終末から古墳時代初期の木製品の中で、匙状を呈する杓子2点はサカキ、杓子はアカガシ亜属、横杓子はタブノキの報告がある。従って、弥生時代頃の西日本では、豊富な照葉樹林を背景に小型の木製品には小高木のサカキの材も利用されていたようである。

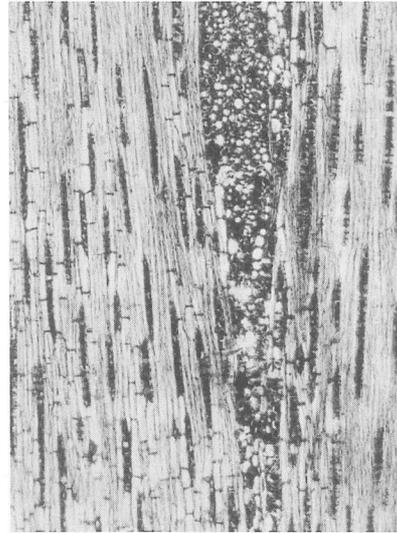
#### (引用文献)

島地 謙・伊東隆夫、1988、「日本の遺跡出土木製品総覧」、雄山閣出版。

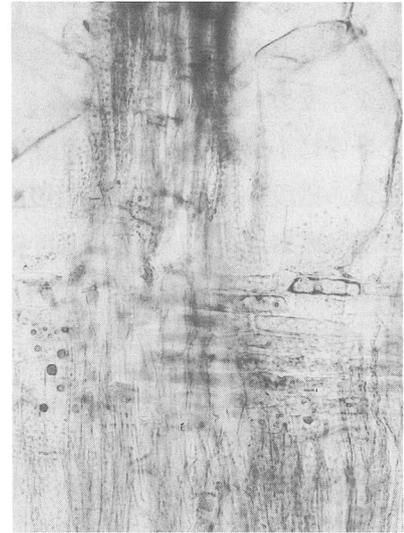
「金山遺跡 I・V区」、1999、北九州市教育文化事業団。



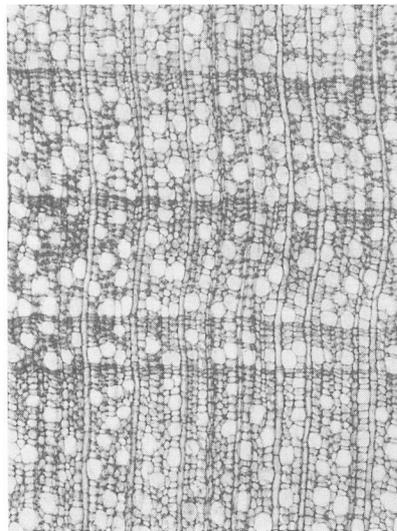
1a アカガシ亜属(横断面)  
No.1 bar:0.5mm



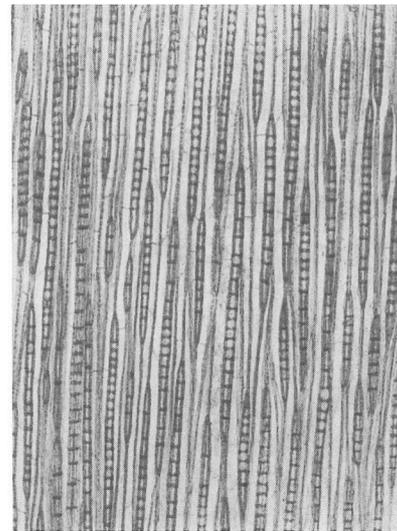
1b アカガシ亜属(接線断面)  
No.1 bar:0.5mm



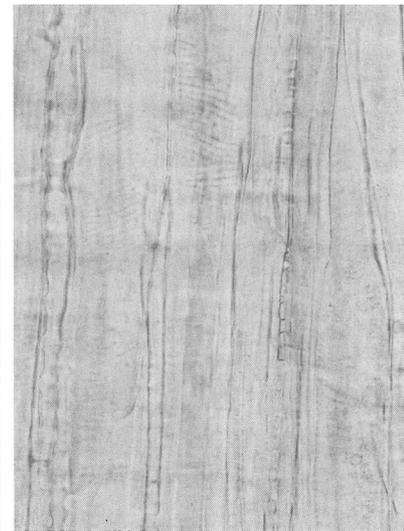
1c アカガシ亜属(放射断面)  
No.1 bar:0.2mm



2a サカキ(横断面)  
No.8 bar:0.5mm



2b サカキ(接線断面)  
No.8 bar:0.5mm



2c サカキ(放射断面)  
No.8 bar:0.1mm

第112図 寺田・産宮通遺跡出土木製品の樹種

## II. 寺田・産宮遺跡出土木製品の樹種

パリーノ・サーヴェイ株式会社

### 1. はじめに

寺田・産宮通遺跡は、香川県さぬき市大川町富田西大道に所在し、讃岐山脈から延びる低丘陵の末端部の津田川が形成した氾濫原に立地している。今回の発掘調査区はⅠ区～Ⅷ区に分けられており、Ⅰ・Ⅱ区およびⅣ～Ⅶ区は微高地であり、Ⅲ区の低地帯（第2低地帯）により分断されている。なお、発掘調査区の最北にあたるⅧ区では、地形が北へ落ちていく状況が確認されている（第3低地帯流路04）。発掘調査の結果、Ⅰ・Ⅱ区の微高地上から弥生時代後期末～古墳時代後期初頭の竪穴住居址・古墳時代後期末の掘立柱建物・溝状遺構・中世の掘立柱建物、Ⅳ～Ⅶ区の微高地上から弥生時代中期の掘立柱建物・鎌倉時代の井戸や中世の柱穴、Ⅷ区から弥生時代後期の竪穴住居跡や13世紀代の流路や縄文時代晩期～弥生時代後期までの遺物を含む流路状の遺構が検出されている。

本報告では、Ⅲ区包含層および弥生時代後期中葉に比定されるⅢ区の第2低地帯出土の木製品、Ⅷ区から検出された第3低地帯流路05出土の木製品、さらに、同区第3低地帯流路04から出土した木製品等の樹種同定を行い、寺田・産宮通遺跡における木材利用に関する情報を得る。

### 2. 試料

今回樹種同定を行う木製品は、Ⅲ区包含層出土試料1点（遺物番号：534）、同区第2低地帯出土試料2点（遺物番号：534・533）、Ⅷ区第3低地帯流路05（木9～11 遺物番号：626～628）、同区第3低地帯流路04出土試料（遺物番号：619・625・629～633）7点の計13点である。各木製品の出土位置・層準および時代観については樹種同定結果と共に表1に記す。

### 3. 方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

### 4. 結果

樹種同定結果を第7表に示す。各調査区の木製品の樹種は、針葉樹3種類（マツ属複維管束亜属・モミ属・ヒノキ）と、広葉樹3種類（コナラ属アカガシ亜属・ヤブツバキ・トネリコ属）に同定された。調査区間で利用されている樹種の傾向は類似しており、常緑広葉樹のアカガシ亜属が多様されている傾向がある。以下に同定された各種類の主な解剖学的特徴を記す。

#### ・マツ属複維管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

#### ・モミ属 (*Abies*) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で1～4個。放射組織は

単列、1～20細胞高。

第7表 樹種同定結果

遺物番号	注記番号	種類	調査区	区画	遺構名	出土状況	時代	樹種
534	KTS0167	不明	Ⅲ区	B09	第2低地帯	Ⅱ-②③④層		コナラ属アカガシ亜属
532	KTSR0012	鋏?	Ⅲ区	B11	第2低地帯	Ⅱ-⑥層	弥生時代後期後半	コナラ属アカガシ亜属
533	KTSR0016	板材	Ⅲ区	A12	第2低地帯	Ⅱ-⑥層	弥生時代後期後半	モミ属
626	KTSX0134	杭	Ⅷ区		流路5		12世紀後半～13世紀初頭	マツ属複雑管束亜属
628	KTSX0321	杭	Ⅷ区		流路5		12世紀後半～13世紀初頭	ヒノキ
627	KTSX0321	杭	Ⅷ区		流路5		12世紀後半～13世紀初頭	マツ属複雑管束亜属
632	KTS0315	板状の木製品	Ⅷ区		流路4		弥生時代後期前半	コナラ属アカガシ亜属
631	KTS0315	木片	Ⅷ区		流路4		弥生時代後期前半	コナラ属アカガシ亜属
619	KTS0317	鋏	Ⅷ区		流路4	下層	弥生時代後期前半	コナラ属アカガシ亜属
633	KTS0288	ミカン割り材端	Ⅷ区		流路4	下層	弥生時代後期前半	コナラ属アカガシ亜属
629	KTS0302	板材	Ⅷ区		流路4	下層	弥生時代後期前半	コナラ属アカガシ亜属
630	KTS0319	角材	Ⅷ区		流路4	下層	弥生時代後期前半	トネリコ属
625	KTS0308	杵?	Ⅷ区		流路4	下層	弥生時代後期前半	ヤブツバキ

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が早材部の終わりから晩材部にかけて認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向～やや散在状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・ヤブツバキ (*Camellia japonica* L.) ツバキ科ツバキ属

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性Ⅱ～Ⅰ型、1～2細胞幅、1～20細胞高で、時に上下に連結する。柔細胞は時に結晶を含む。

・トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

環孔材で、孔圏部は2～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または2～3個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～40細胞高。

## 5. 考察

寺田・産宮通遺跡から出土した木製品は、鋏、杵、杭、板材、角材、ミカン割材端、木片等がある。これらの木製品からは、針葉樹3種類(マツ属複雑管束亜属・モミ属・ヒノキ)と、広葉樹3種類(コナラ属アカガシ亜属・ヤブツバキ・トネリコ属)の合計6種類の樹種が確認された。本遺跡では、このほか保存処理が行われた木製品の樹種同定結果がある(財団法人山梨文化財研究所,2001)。それによれば、保存処理が行われた木製品の樹種は、Ⅲ区第2低地帯出土の鋏未製品2点がアカガシ亜属、Ⅳ区第3低地帯流路4出土の鋏未製品3点がアカガシ亜属、匙3点がサカキに同定されている。これら木製品

の樹種同定結果を時代別・種類別に整理して第8表に示す。

木製品の樹種構成は、弥生時代後期中葉と弥生時代後期前半で有意な違いは認められない。いずれもアカガシ亜属が多く利用されている傾向がある。アカガシ亜属は、暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素である。今回認められた種類では、サカキやヤブツバキ

第8表 時代別・種類別種類構成

器種	時代	弥生時代後期前半				合計	弥生後期中葉			12世紀後半～13世紀前半		
		アカガシ亜属	ヤブツバキ	サカキ	トネリコ属		モミ属	アカガシ亜属	合計	複雑管束亜属	ヒノキ	合計
板材		2				2	1		1			0
角材					1	1			0			0
杵?			1			1			0			0
杭						0			0	2	1	3
鋏未製品		3				3		2	2			0
鋏		2				2			0			0
鋏?						0		1	1			0
匙				3		3			0			0
ミカン割り材端						0			0			0
木片		1				1			0			0
不明						0		1	1			0
合計		8	1	3	1	13	1	4	5	2	1	3

1) 板材には、板状の木製品も含む。  
2) 鋏未製品には、鋏未製品?を含む。

も照葉樹林の構成要素である。また、トネリコ属は湿地林や河畔林を構成する要素を含む種類であり、針葉樹のモミ属は暖温帯から冷温帯にかけての推移帯に成立する温帯針葉樹林（中間温帯林）の構成要素である。本遺跡の立地や、近隣の鴨部川田遺跡の花粉分析結果（パリノ・サーヴェイ株式会社、未公表資料）を考慮すると、これらの樹種は遺跡周辺に分布していた可能性が高い。

一方、12世紀後半～13世紀初頭では、マツ属複雑管束亜属・ヒノキ属が確認されている。両種類とも針葉樹であり、前者は暖温帯における二次林の代表的な種類でもある。

以上、遺構の年代観による植物利用状況を見ると、弥生時代後期と想定されているⅢ区第2低地帯やⅧ区の第3低地帯流路04から出土した木製品などの多くはアカガシ亜属である。一方、古代～中世の包含層上面に構築された第3低地帯流路5から出土した杭はいずれも針葉樹であり、弥生時代に木製品に用いられた樹種との差異が認められる。このような差異が地域的に木材利用形態の違いを反映しているかは今後の課題としたい。また、本遺跡の古植生については、木製品が出土している低地帯の花粉化石や種実同定に基づく古植生情報を含めて検討する必要がある。次に木製品の種類と樹種の関係について述べる。

鋏は未製品も含めてアカガシ亜属が利用されていた。本遺跡の北方約3kmに位置する鴨部川田遺跡で弥生時代前期などの木製品の樹種同定が実施されており、鋏・鋏類の身に使用される樹種の多くがアカガシ亜属であり、アカガシ亜属以外ではブナ科とサカキが各1点ずつ認められるのみである（パリノ・サーヴェイ株式会社、2000）。同様な結果は、香川県内の林・坊城遺跡、井手東I遺跡、川津一ノ又遺跡などでも確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1993,1997；能城・鈴木、1995）。県外における類例を見ると、主に西日本を中心に出土した鋏・鋏類のほとんどがアカガシ亜属に同定されている（島地・伊東、1988）。なお、アカガシ亜属は、高い強度を有する樹種とされており、アカガシ亜属以外に認められたサカキも強度の高い種類である。したがって、本遺跡および鴨部川田遺跡などで鋏や鋏などにアカガシ亜属が多用された要因として、樹種のもつ強度の高い材質を考慮した選択性や、アカガシ亜属が暖温帯常緑広葉樹林の主構成種であり遺跡周辺で比較的容易に入手できる種類であった事などが

考えられる。なお、今回の低地帯堆積物からは未製品も多く出土している。木の幹には内部応力があり、生木を細かく切断すると、乾燥と内部応力により割れたり曲がったりするが、未製品状態で保存することで内部応力を緩和させることができる。今回の未製品について、そのような措置がとられたかは不明であるが、今後、本地域における農具製作という観点から木材組織学的な検討も行っていくようにしたい。

杵は、ヤブツバキであった。杵も、鋏・鋤類と同様に鴨部川田遺跡から出土しており、ケヤキとヤブツバキ、カエデ属などの樹種が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，2000）。香川県内では下川津遺跡においてアカガシ亜属、ヤブツバキ、ヒサカキ、イボタノキ属の使用例が確認されている（島地・林，1990；能城・鈴木，1990）。これらの木材は、いずれも重硬で強度が高い材質を有する点で共通する。組織構造の点からみると、ヤブツバキ・カエデ属・ヒサカキ・イボタノキ属は、いずれも散孔材であり、細かな加工や滑らかな表面の仕上げに適した比較的均質な材質を有する。ケヤキは環孔材であり、早材部と晩材部で道管の占める面積が大きく異なり、材質も不均質である。アカガシ亜属も放射孔材であるために、道管が分布する場所と分布しない場所があり、不均質になりやすい。以上のことから、杵は強度が高い木材が利用されている傾向がある。また、比較的均質な材質をもつ散孔材を利用している傾向もある。

匙は、3点とも芯持ちあるいは樹芯に近い部分まで使用された木取りであり、小径木または太い木材の中心部付近を利用していることが窺える。樹種は全てサカキであった。サカキの木材は、重硬で強度が高い材質を有し、道管径が極めて小径の散孔材であるために材質も比較的均質である。これらの材質から、比較的細かな加工が可能であり、濡れたり乾いたりを繰り返す使用環境にも耐えられたことが推定される。

杭は、いずれも針葉樹で、複維管束亜属とヒノキが認められた。マツ属複維管束亜属は松脂、ヒノキは精油成分を含み、共に耐水性・耐朽性に優れた材質を有する。これまで各地の報告例では、杭には多様な樹種が用いられていることが確認されている（島地・伊東，1988）。そのため、本遺跡の結果についても、周辺で入手が可能であった種類を利用した可能性もある。また、ヒノキや複維管束亜属が有用材であることを考慮すると、加工時の余材等が利用された可能性もある。

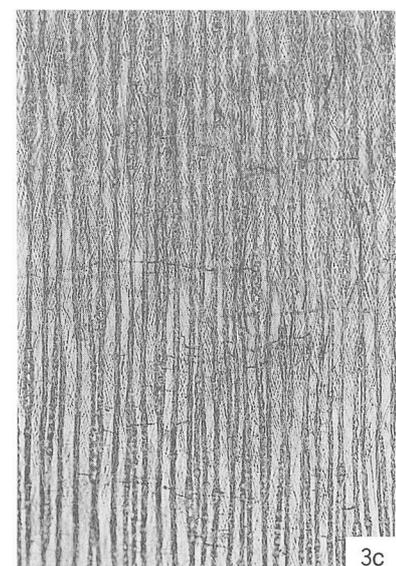
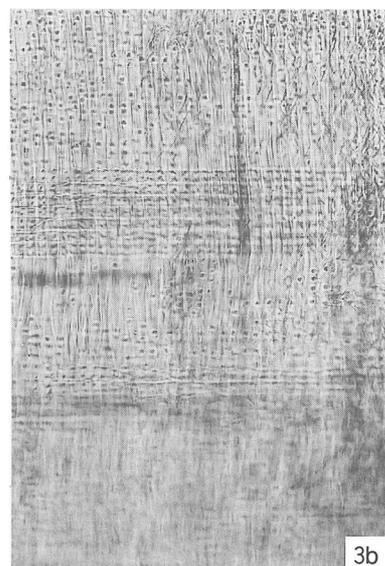
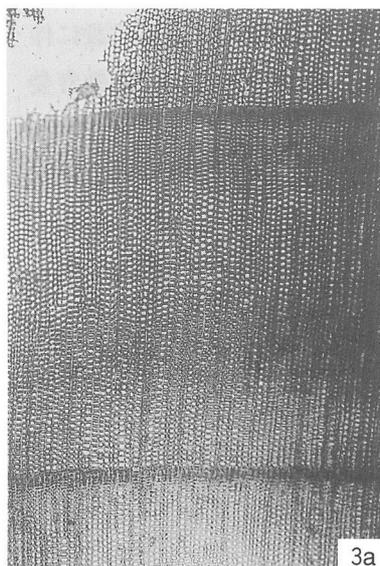
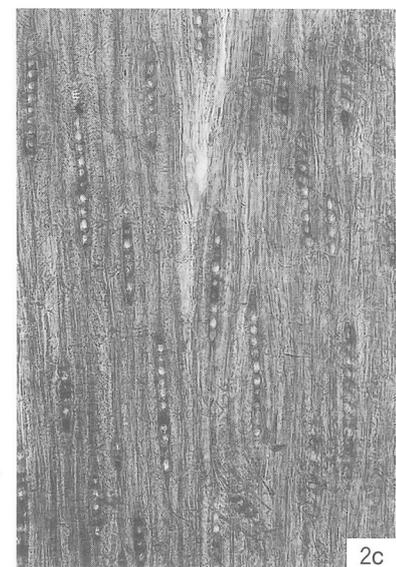
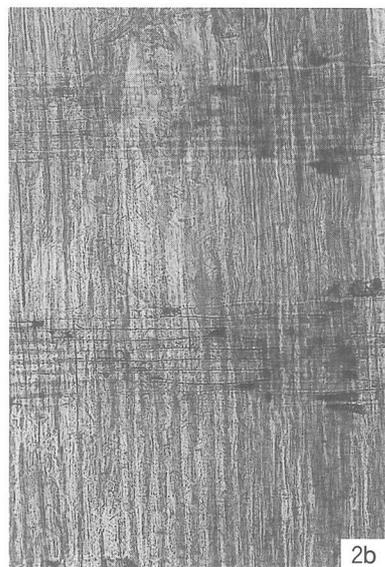
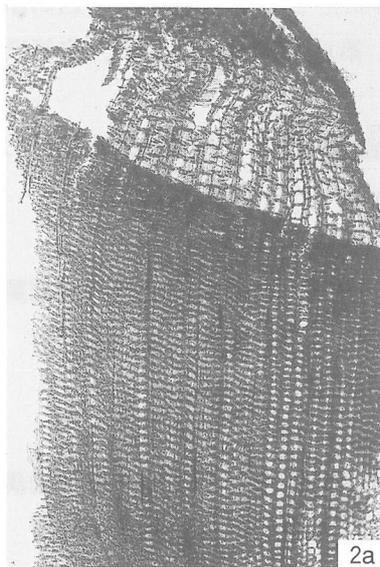
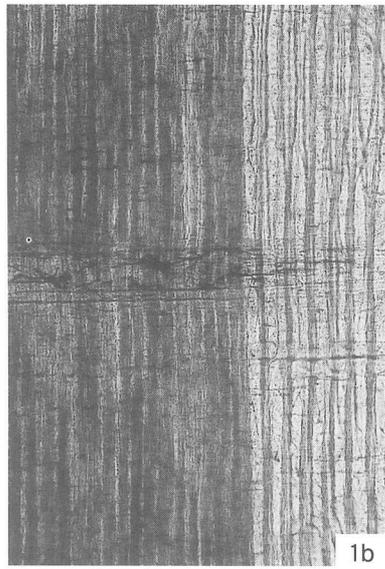
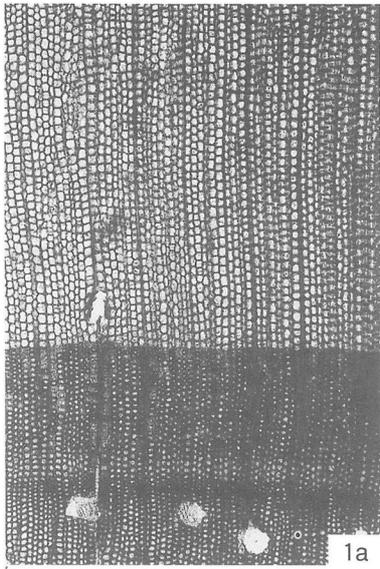
板材および板状の木製品は、用途の詳細が不明である。モミ属は、やや軽軟で加工は容易であるが、耐水性・耐朽性はそれほど高くなく、アカガシ亜属とは強度や加工性などの材質が全く異なる。ここで樹種の違いは、用途が異なっていた可能性も考えられる。

## 6. むすび

寺田・産宮通遺跡における木材の利用は、遺構および包含層から出土した木製品等の樹種からアカガシ亜属を多用する状況や強度などを考慮した樹種の選択性など、得られた結果をもとに考察を行った。しかし、木製品の樹種は、当該期の植物利用の一部であり、寺田・産宮通遺跡における植物ならびに木材利用の全体的な様相を示してはいない。今後は、住居構築材や燃料材と考えられる木材等の利用状況など分析調査を実施し、詳細な樹種の選択性を把握するとともに、周辺の古植生と合わせて評価・検討し、寺田・産宮通遺跡の木材利用状況の実態を復元していきたいと考えている。

(引用文献)

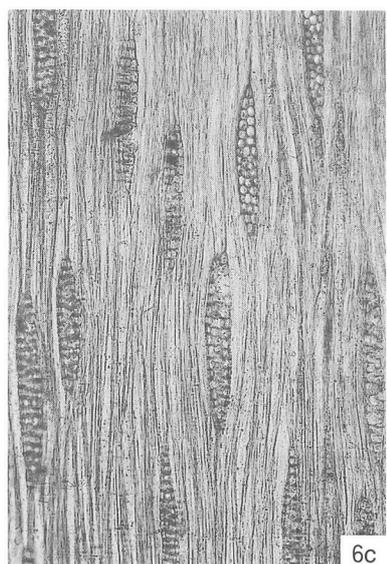
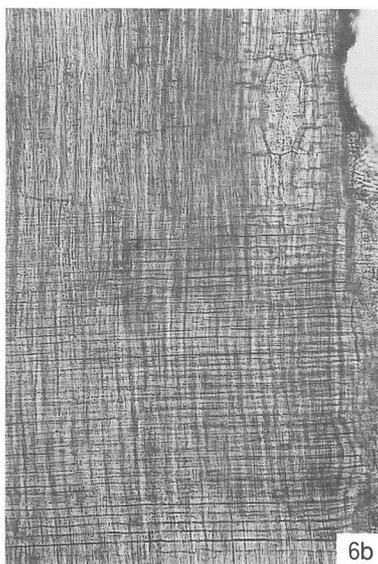
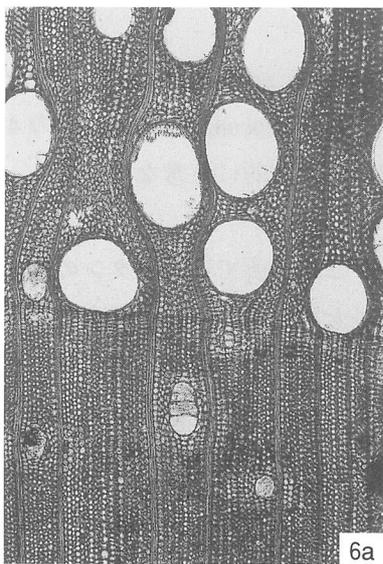
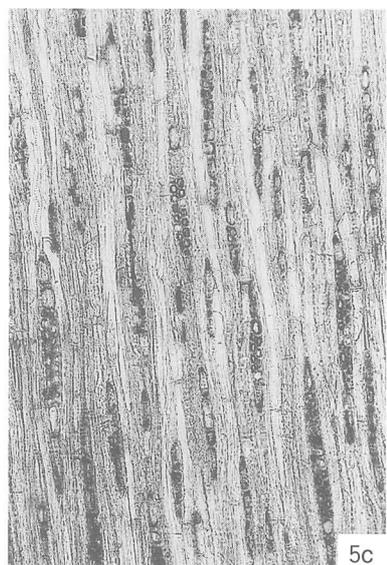
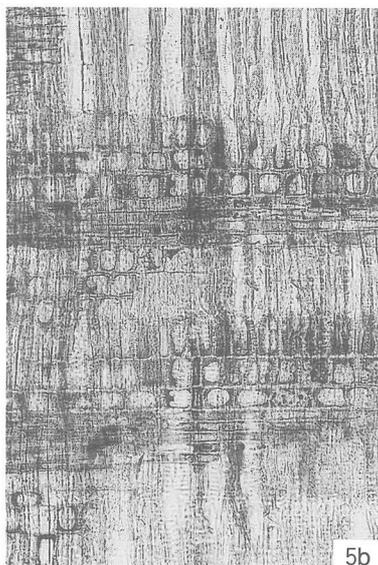
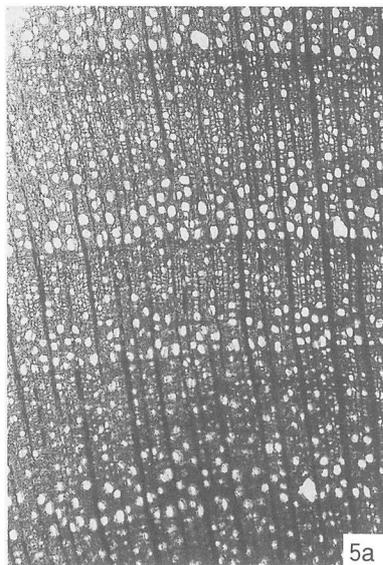
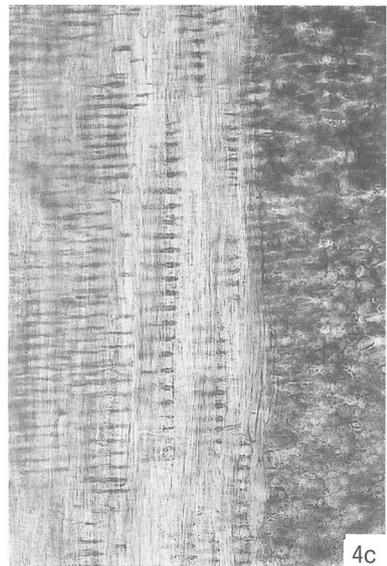
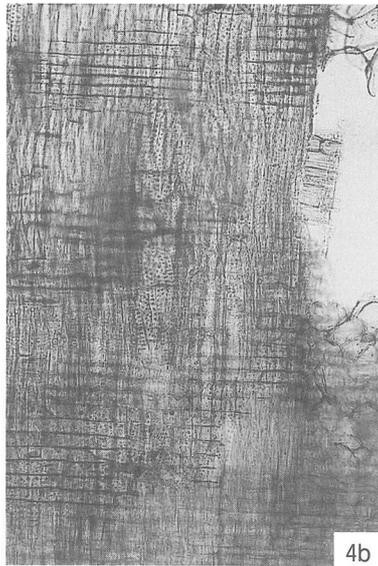
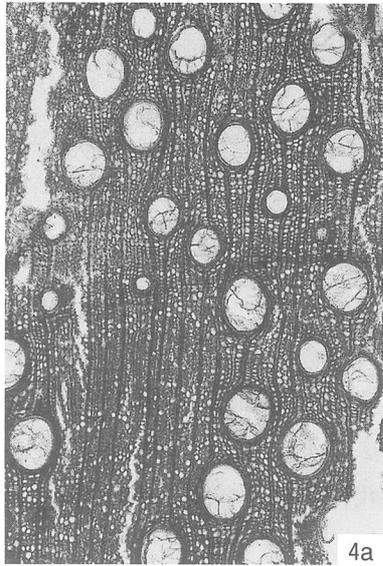
- 出原恵三(1999) 高知県土佐市居徳遺跡群 - 縄文時代晩期の木胎漆器と鋏-. 考古学ジャーナル, 44  
4, p.22-25
- パリオ・サーヴェイ株式会社(1993) 林・坊城遺跡自然河川出土木材の樹種. 「高松東道路建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 林・坊城遺跡」, p.224-238, 香川県埋蔵文化財研究会.
- パリオ・サーヴェイ株式会社(1996) 出土木製品の樹種. 「宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書-第1分  
冊-」, p.113-138, 東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会.
- パリオ・サーヴェイ株式会社(1997) 川津一ノ又遺跡から出土した木材の樹種. 「四国横断自動車道建  
設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第23冊 川津一ノ又遺跡Ⅰ」, p.263-267, 香川県教育委員会・  
(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団.
- パリオ・サーヴェイ株式会社(1999) 西川津遺跡Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅴ区から出土した木材の樹種. 「西川津  
遺跡Ⅵ 朝酌川広域河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第11冊」, p.329-342, 島根県  
土木部河川課・島根県教育委員会.
- パリオ・サーヴェイ株式会社(2000) 鴨部・川田遺跡から出土した木製品の樹種. 「高松東道路建設に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告第9冊 鴨部・川田遺跡Ⅱ 第2分冊」, p.34-47, 香川県教育委員会・  
(財)香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局.
- 島地 謙・林 昭三(1990) 昭和61年度調査の分析委託結果. 「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調  
査報告Ⅶ 下川津遺跡 -第2分冊-」, p.520-532, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財  
調査センター・本州四国連絡橋公団.
- 島地 謙・伊東隆夫編(1988) 日本の遺跡出土木製品総覧. 296p., 雄山閣.
- 能城修一・鈴木三男(1990) 昭和63年度調査の分析委託結果. 「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調  
査報告Ⅶ 下川津遺跡 -第2分冊-」, p.533-567, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財  
調査センター・本州四国連絡橋公団.
- 能城修一・鈴木三男(1995) 井手東Ⅰ遺跡出土の木製品の樹種. 「一般国道11号高松東道路建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告第四冊 井手東Ⅰ遺跡(自然科学分析・考察編)」, p.1-28, 高松市教育委  
員会・建設省四国地方道路局.



1. マツ属複維管束亜属 (試料番号 9)  
 2. モミ属 (試料番号 5)  
 3. ヒノキ (試料番号 10)  
 a: 木口, b: 柾目, c: 板目

200 μm : a  
 200 μm : b, c

第113図 木材顕微鏡写真 (1)



4. コナラ属アカガシ亜属 (試料番号2)

5. ヤブツバキ (試料番号25)

6. トネリコ属 (試料番号24)

a: 木口, b: 柾目, c: 板目

200 μm : a

200 μm : b, c

第114図 木材顕微鏡写真 (2)

### 第3節 寺田・産宮通遺跡出土種実について

香川大学農学部 助教授 望岡亮介

#### 1. はじめに

寺田・産宮通遺跡は香川県東部のさぬき市大川町富田西大道に所在する。大川町は南北および東の三方を山塊に囲まれており、町中央から西方の寒川町に向かって平野部が広がる。本遺跡は讃岐山脈から北西方向に向かう低丘陵部の端に位置し、周辺には弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が広範囲に分布している。

今回は、本遺跡から出土した57試料の同定を試み、当時の植物利用や古植生に関する情報を得ようとした。また、一部のヒョウタン種子については、現在栽培されている品種の種子と大きさを比較した。

#### 2. 調査方法

試料はすべて水道水に浸漬して保存されていた。同定は、すべて現生種との比較によって行い、比較できなかったものについては未確認とした。

出土ヒョウタン種子については、200個以上の個体を水切りした後、布で拭き、直射日光の当たらない、風通しの良い場所で室温で1時間程度乾燥させ、生乾きの状態で縦径および横径をノギスで計測した。比較として、市販の2種類の栽培ヒョウタン（センナリヒョウタン、ヒョウタン）の種子を1昼夜水道水につけ、同様に水切りし、直射日光の当たらない、風通しの良い場所で室温で1時間程度乾燥させ、生乾きの状態で縦径および横径をノギスで計測した。栽培ヒョウタンは20個以上の種子について測定した。

#### 3. 結果および考察

同定結果を第9表に示した。確認できた植物の種類はヒョウタン (*Lagenaria siceraria* Standl.)、コナラ属 (*Quercus* sp.)、トチ (*Aesculus turbinata* Blume)、ウリ (メロン仲間) (*Cucumis melo* L.) の4種類であった。中でも、出土種子の大半はヒョウタンであり、その大部分が形態的に正常な種子であった。

大量のヒョウタン種子が出土した場所の近くには木器も出土しており、この場所でヒョウタンの加工が行われていたのではないかと推察される。しかし、中にはスイカの種子と間違えそうな、発育不十分な‘しいな’ (未熟種子) もいくつか見いだされた。これは単に、果実が成熟に至らないうちにツルが枯死または引き抜かれたものか、野菜として利用しようとしたものの種子なのか、祭祀儀礼上のやや未熟な供物果実の種子なのかは判断できない。野菜としてのヒョウタンの利用は東南アジアや中近東方面で普通に見られる。

出土ヒョウタンの正常種子は縦径11.12mm、横径5.63mm、縦／横比は2.13で、現在栽培されているヒョウタン (縦径15.37mm、横径6.30mm、縦／横比2.44) よりはかなり小さかったが、センナリヒョウタン (縦径10.57mm、横径5.40mm、縦／横比1.97) よりはやや大きかった (第10表)。このことから、当時栽培されていたヒョウタンの果実は、センナリヒョウタン並みの大きさではないかと推測される。また、出

土した植物遺体の中にはヒョウタン果実の一部も見いだされ、果梗部分の頭頂部（ツルの着いていた部分）も混在していた。その頭頂部の形状は比較的湾曲が小さかったことから、果実の形は偏球形ではなかったかと推定された。なお、出土種子はいずれも種皮のみの遺体で、中身の胚や幼根は完全に分解しており、発芽能力のある個体は全く認められなかった。

コナラ属の植物遺体（果皮、殻斗の一部）はイチイガシ（*Quercus gilva* Blume）ではないかと思われる。イチイガシについては善通寺市永井遺跡（縄文時代）からも多数出土している。また、出土しているのが果皮の一部のみで子葉が見られなかったことから、これらは食料残渣ではないかと思われる。同様に、トチに関しても果皮の一部のみ出土していることから、これも食料残渣ではないかと思われる。

ウリの種子は縦径7.7mm、横径3.5mmで、マクワ・シロウリ型に該当すると思われた。

KTS 0305のⅧ区包含層東西トレンチャーより出土した植物遺体の中に、昆虫の鞘翅目（甲虫類）の翅が混在していた。この翅の形体は、多数の小孔が規則正しく配列していた。

以上の結果を踏まえて、主だった植物遺体の図版を掲載しておく。

第9表 試料同定結果

注記番号	遺構名	層位	種類 <sup>*1</sup>								備考
			ヒョウタン				コナラ属	トチ	ウリ (種子)	未確認 <sup>*2</sup>	
			正常種子	しいな	奇形種子	果実					
KTS 0299	第3低地帯 流路4	下層	123	-	-	-	-	1	-	-	トチは果皮の一部。
KTS 0298	流路4木器集 積遺構02	下層	222	-	-	-	-	-	-	-	
KTS 0312	流路4木器集 積遺構02	下層	629	-	-	-	-	-	-	-	
KTS 0305	流路4木器集 積遺構02周辺	下層	1,580 <sup>*3</sup>	1	-	4 <sup>*4</sup>	2 <sup>*5</sup>	-	-	2 <sup>*6</sup>	*3には種皮上に筋ありと筋なしのものあり。 *4は果実の破片。 *5は果皮の一部と殻斗。 *6には昆虫（鞘翅目）の翅の一部を含む。
KTS 0306 KTS 0304	流路4木器集 積遺構02	下層	2,037 <sup>*7</sup>	8	5	1 <sup>*8</sup>	3 <sup>*9</sup>	-	-	2 <sup>*10</sup>	*7には種皮上に筋ありと筋なしのものあり。 *8は果実の破片。 *9は果皮の一部と殻斗。 *10は木片を含む。
KTS 0287 KTS 0297 KTS 0300	流路4木器集 積遺構02周辺	下層	646	2	-	2 <sup>*11</sup>	2 <sup>*12</sup>	-	-	-	*11は果実の破片。 *12は果皮の一部。
KTS 0313 KTS 0314	流路4木器集 積遺構02周辺	下層	620	2	-	2 <sup>*13</sup>	1 <sup>*14</sup>	-	-	-	*13は果実の破片。 *14は果皮の一部。
KTS 0303	流路4木器集 積遺構02周辺	下層	-	-	-	-	1 <sup>*15</sup>	1 <sup>*16</sup>	-	-	*15、*16は果皮の一部。
KTS R0011-1	第2低地帯	II-⑥層 No.05	2	-	-	-	-	-	-	-	種皮上に筋ありと筋なしのものあり。
KTS R0013	第2低地帯	II-⑥層 No.01	19	-	-	-	-	-	1	-	

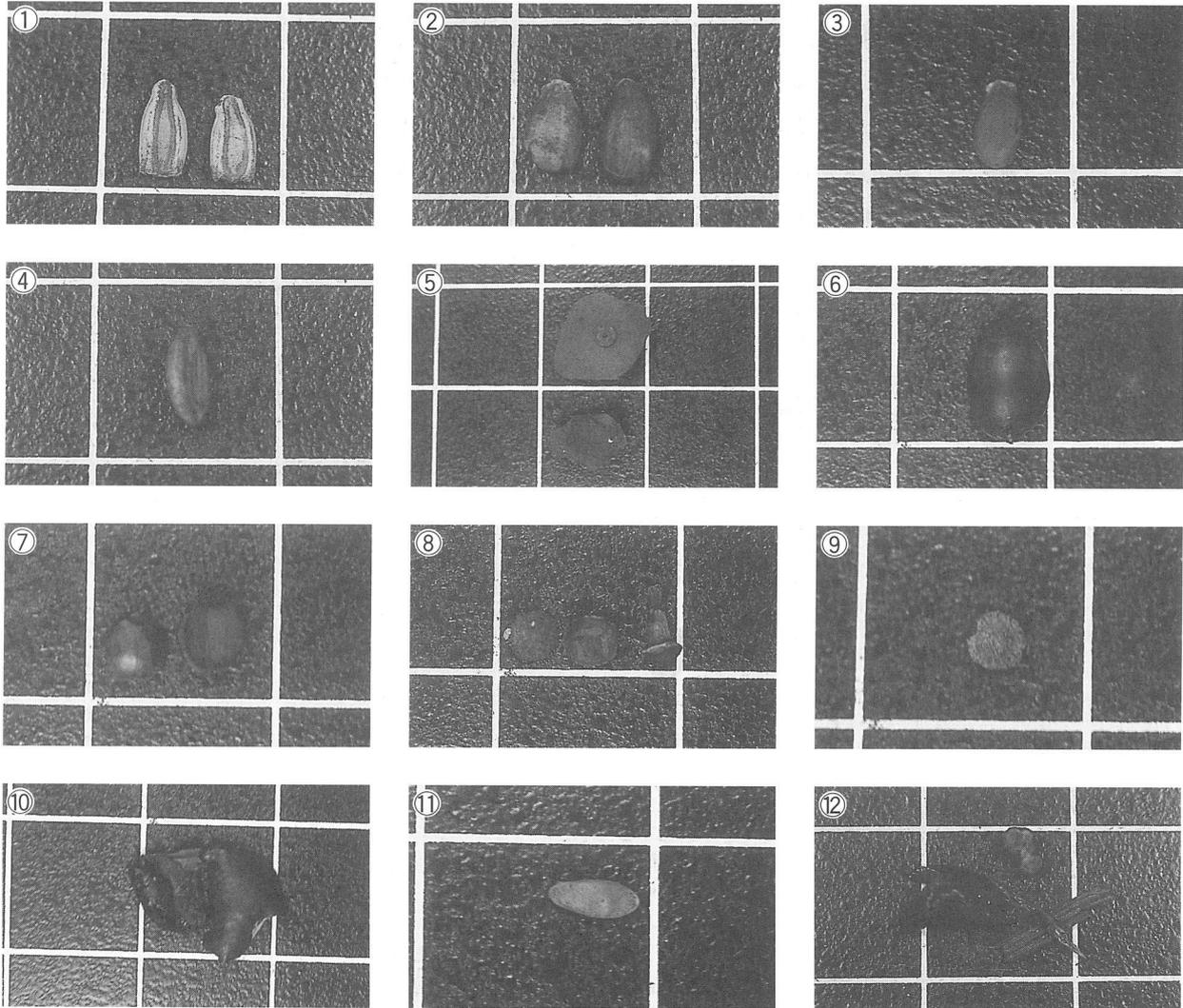
\*1：種子については出土個体数で表示。その他は出土件数で表示。

\*2：未確認のものについては、出土件数で表示。

第10表 出土ヒョウタン種子と栽培品種の比較

	縦径 (mm)	横径 (mm)	縦径/横径
出土種子	11.12±0.05* <sup>1</sup>	5.63±0.02	2.13±0.02
栽培品種			
センナリヒョウタン	10.57±0.18	5.40±0.07	1.97±0.05
ヒョウタン	15.37±0.21	6.30±0.06	2.44±0.03

\* 1 : 平均値±標準誤差



写真上のマス目は 2 cm 四方

番号	植物体の種類	注記番号	備 考	出 土 地 点
①	ヒョウタン	KTS 0306	種皮上に筋のある種子。	流路04木製器集積遺構02
②	〃	KTS 0304	種皮上に筋のない種子。	〃
③	〃	KTS 0303	しいな。	〃
④	〃	KTS 0304	奇形種子。	〃
⑤	〃	KTS 0306 KTS 0304	果実の破片。果梗痕が見える(上)。	〃
⑥	コナラ属	KTS 0303	果皮。	流路04木製器集積遺構02周辺
⑦	〃	KTS 0305	果皮(外面と内面)。	〃
⑧	〃	KTS 0305	殻斗(左2つ)と果梗(右)。	〃
⑨	〃	KTS 0306 KTS 0304	殻斗。	流路04木製器集積遺構02
⑩	トチ	KTS 0303	果皮。	流路04木製器集積遺構02周辺
⑪	ウリ	KTS R0013	種子。	第2低地帯Ⅱ⑥層
⑫	木のかげら	KTS 0304	種類は未確認。	流路04木製器集積遺構02

第115図 寺田・産宮通遺跡出土種実写真

## 第V章 まとめ

### 第1節 低地帯の様相

寺田・産宮通遺跡の地理的な特徴については、前章第Ⅱ章第1節、第Ⅲ章第2節等で詳しいが、ここでは地理的視点を加味したうえで低地帯の様相を概観したい。調査地は津田川の支流である古川により南方の寺田地区と北方の産宮通地区に分断される。寺田地区では旧河道Bより古川の氾濫原に向けて延びる第1低地帯、産宮通地区南端部では、古川ないし旧河道Bの支流と考えられる第2低地帯、北端部では爛川の氾濫原から延びる旧河道Aの延長部分にあたる第3低地帯を検出した。

第1低地帯は寺田地区の微高地を横断する小規模な低地帯で、下層面で弥生時代中期後半以降の竪穴住居を検出しているが、上層面では低地帯の北辺部で弥生後期末の住居跡、古墳時代後期末以降の建物群等が展開していることから、比較的短期間で埋没したようである。

第2低地帯はその堆積状況より、最深部のⅡ⑥層（弥生後期後半頃）には、すでに流路としての機能を失い湿地状を呈していたようである。Ⅱ⑥層の直上で洪水砂と考えられるⅡ⑤層が薄く堆積しているが、同層以降の堆積は極めて安定している。注目できる遺物として、河床面上からは小形仿製鏡が1点出土している。河川から小形仿製鏡が出土する事例は高松市居石遺跡等でも確認されており、それらの事例より弥生後期後半頃、第2低地帯において水利に関する祭祀が行われたものと考えられる。なお、祭祀を司った集団であるが、第2低地帯周辺の微高地にはこの時期の集落が展開しないため、隣接する寺田地区の集落によるものか、対象地周辺に別に集落を推定するのか二つの見方がなりたつが、前者の可能性が高い。また、下層では土器溜りの資料を含め、大量の遺物が出土した。その量は寺田・産宮通遺跡の全出土遺物の約3割を占めている。注目できる点では、多量の弥生土器に混入して少量8世紀頃の遺物が認められることである。この時期の遺構は寺田地区でも産宮通地区でも見られないことより、対象地周辺に8世紀頃の集落が所在する可能性は高い。今後も周辺地域の開発行為には注意を要する。中世以降の堆積層と考えられる上層部では、Ⅱ①②層上面でSD21～30の鋤溝群を検出した。化学的分析でもプラント・オパールがⅡ①～③層で抽出できた事などより、上層部分では中世（12世紀頃？）以降には耕地化が及んでいたようである。

第3低地帯の低地帯内には 弥生・鎌倉時代の流路04、鎌倉時代の流路05～08等の小流路群を検出した。遺物も多量に出土しており、その量は寺田・産宮通遺跡の全出土遺物の約3～4割を占めている。

流路04はその堆積状況より下層が弥生時代後期前葉～中葉、上層が鎌倉時代（12世紀）に埋没した流路である。下層からは鋤未製品・匙等を集積した木製品集積遺構を検出した。この遺構の性格は、その検出状況より、木製品の水漬け保管を意図した遺構の可能性が考えられる。なお、流路04の遺物中には、弥生前期後半～中期初頭頃の土器が多数出土している。この時期の遺構は寺田地区でも産宮通地区でも見られないことより、対象地周辺にこの時期の集落が所在する可能性は高い。

流路05～08は、鎌倉時代12世紀前葉～中葉頃に埋没した流路群である。堆積状況及び複雑に錯綜する流路方向などより、ほぼ同一時期に比較的短期間に埋没したものと考えられる流路群である。流路群からの出土遺物は豊富で、中世の土器資料の少ない東讃地域にとっては、この時期の様相を知る上では貴重な資料といえる。特に椀の中で黒色土器が高比率を占める点などは注目できる事項である。なお、こ

の時期の微高地上では、建物 6 棟と井戸 1 と数条の溝が確認されただけであり、集落の端をつかまえた程度の成果である。周辺域に集落の中心域を想定した場合、比較的安定している調査地の西方の微高地上を考えたい。

(参考文献)

- 山元敏裕他 1995 「居石遺跡」『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第7冊』  
高倉洋彰 1995 「弥生時代出土仿製鏡の儀鏡化について」『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第7冊—居石遺跡—』

## 第2節 集落の変遷

寺田・産宮通遺跡は、弥生中期後半より近世以降まで継続した遺跡であるが、途中数時期空白期間があり6期に大別できる。第1期は弥生時代中期後半～後期前半、第2期は弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭、第3期は古墳時代後期末、第4期は平安時代後半、第5期は鎌倉時代、第6期は室町時代後半以降である。この第1期～第6期までのまとめりごとに、微高地上の遺構を中心としてその概観をまとめてみたい。

### 第1期

弥生時代中期後半～後期前半の資料は少なく、寺田地区においては第1低地帯下層のSH02、産宮通地区においてはV～VI区のSB07～15等の住居跡があたる。この二地区の集落は、住居形態の相違、地理的にも離れている事より、二つの異なる集団の集落といえる。この時期の集落は東讃でも調査例は少なく、特に掘立柱建物を主体とする集落は貴重な資料といえる。

低地帯の資料では、第3低地帯の流路04の木製品集積遺構などが該当する。これらの遺構は産宮通地区のV～VI区に展開する集落によるものと考えられる。なお、流路04の遺物中には弥生前期後半～中期初頭頃の土器が多数出土している。この時期の遺構は寺田地区でも産宮通地区でも見られないことより、対象地周辺にこの時期の集落が所在する可能性は高い。

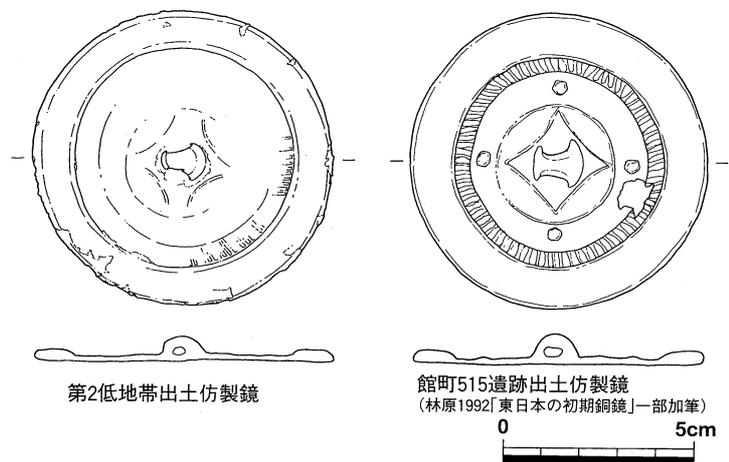
### 第2期

弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭頃は遺構・遺物共にかなり豊富である。寺田地区では第1低地帯は埋没過程にあり、集落は低地帯の周辺に展開している。主要な遺構では、SH01・03～06、SK02・04～06・10・12～14・17～19・21、SD01・03・09・13、SX01・02・04等があたる。この集落は、寺田地区が所在する推定南北180.0m、東西60.0mの小規模な微高地上に展開している事を考慮すれば、かなりの遺構密度といえる。集落範囲を推定すれば北限は古川の氾濫原まで、南限はSD01が集落の南限を画しているものと考えられる。東限は古川の氾濫原、西は旧河道Bまでの、南北100m、東西60mの小範囲を推定できる。なお、この集落の生産域は微高地西側に展開する旧河道Bの縁辺部が推定できる。

産宮通地区では第3低地帯に隣接するSH07があたる程度でかなり小規模である。竪穴住居が単体で集落を構成するとは考えにくく、隣接する周辺域に集落の中心部分を推定する必要があるが、第3低地帯の出土遺物中にこの時期の遺物がないことを考えれば、さほど大規模な集落は想定できない。

低地帯の資料では、第2低地帯の河床面上の土坑、溝等の遺構群及土器溜りなどがある。なお、小形仿製鏡もこの時期にあたり、先に述べたように水利に関する祭祀が行われたものと考えられ、祭祀を司った集団は、隣接する寺田地区の集落による可能性が高い。

第2低地帯出土の小形仿製鏡は日光鏡

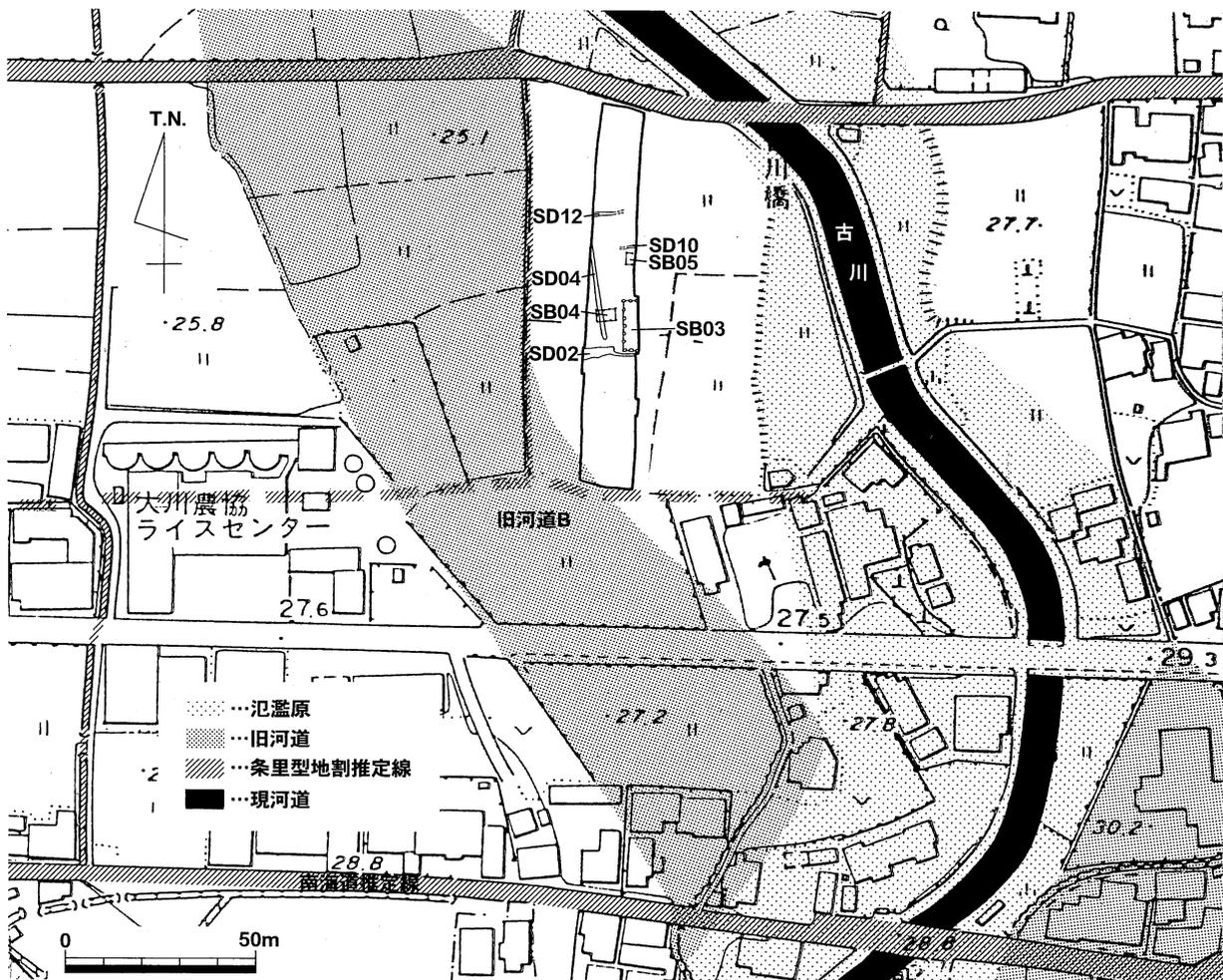


第116図 小形仿製鏡

系の斜行櫛歯四花文内行花文鏡である。四花文の内行花文鏡の類例は全国的にも少なく、ただ1例、東京都八王子市館町515遺跡出土の小形仿製鏡に類似性を見いだせる。両者を比較すれば、法量、櫛歯の施紋状況、花文の配置等かなり類似性が強い。ただ、館町515遺跡の鏡には低い乳を4方向に配している点が相違点であるが、少なくともモデルの鏡が同一である可能性は極めて高い。今後は類例の増加を期待すると共に、両者の材質の比較を行う必要を感じる。

### 第3期

古墳時代後期末頃の集落は、寺田地区で確認された。主要な遺構では、SB03～05、SD02・04・10・12等がある。極く限られた寺田地区の微高地上（推定南北180m、東西60m）に展開するこれらの遺構群は、わずかな時期差は含まれるとしても、7世紀中葉頃のほぼ同一時期の遺構群と考えられる。配置上の特徴では、方形区画の東辺を除く三辺を画するように溝が配され、その区画内に大型建物のSB03が配されている事より、首長クラス以上の屋敷地を構成する遺構群と捉えられる。また、これらの遺構群が展開する寺田地区の微高地は、周囲を古川・古川の氾濫原・旧河道に囲まれた独立丘陵状を呈しており防御的に適した土地条件といえる。なお、微高地と周囲域との比高差は約1.0mを測る。SB03は2間（3.5m）以上×6間（13.4m）、主軸方位はN1°Wを測る、大型の南北棟の掘立柱建物である。この建物の東側柱列は、対象地の東に広がるため全体をつかめてはいないが、検出状況より少なくともあと梁間1間分は東に広がる。この建物に梁間1間分を追加した場合、建物の構造は3間（5.3m）×6



第117図 寺田地区第3期遺構配置概要図

間(13.3m)となり、少なく見積もっても面積約70.5㎡の大型の建物を推定できる。7世紀中葉頃でこの規模の建物は県内でも類例が少なく、下川津遺跡で確認された3間×6間の構造で面積76.2㎡を測るSBⅢ29しか見出せない。そのため、建物規模だけでみて、集落の一構成員の住居と考えるより、首長クラス以上の屋敷跡の一建物と捉えた方が適切と考えられる建物である。

次に個別の溝の概要を説明する。SB03の南辺に隣接する東西溝のSD02は、SB03との配置状況より、SD02は屋敷地の南限を区画する溝とSB03の雨落ち溝を兼ねた溝と考えられる。SB03の西に南北方向に直線状に配されたSD04は延長21m、主軸方位はN7.5°Wを測り、屋敷地の西辺を画する区画溝と考えられる。SD12は主軸方向よりSD04に直交する東西溝と考えられ、この溝より北に同時期の遺構が確認できない点より、屋敷地の北限を画する区画溝と考えられる。また、敷地内に所在するSD10はSD12と主軸方向を揃えている点より、敷地内を小区画する区画溝と考えられる。東辺は調査地より外れるためデータは無いが、仮に屋敷地が正方形を呈するのであれば、一辺約38m四方で、面積約1,400㎡程の敷地が推定できる。このクラスの敷地面積を有する類例では、下川津遺跡の第1微高地の1群(約1,000㎡)、第4微高地上に展開する42群(約1,600㎡)等の敷地面積に近い。いずれも首長クラスの住居と考えられている一群である。今後の問題となるのがSB03と区画溝SD02・04・10・12等の主軸方位の問題である。SB03の方位は、真北方位に向く周辺の条里型地割りの方位に類似するに対して、これらの溝の主軸方位はN7.5°W(SD04)～N84°E(SD10・12)を測り、わずかにズレが認められる。そのため、条里型地割方位に近い主軸方位が後出する要素と考えた場合、SB03がわずかに後出する可能性が指摘できる。

#### 第4期

平安時代後半の遺構は少なく、産宮通地区のSX10・11の不整形遺構のみである。この遺構はV区の南端部で検出された、10世紀頃の比較的豊富な一括資料を出土した遺構である。

検出状況より、集落の中心は調査地外の周辺域を想定することになる。

#### 第5期

鎌倉時代は遺構・遺物共にかなり豊富である。集落は寺田地区と産宮通地区の北半部の二地点で確認された。寺田地区の主要な遺構は、SB01・02、SA01である。SB01・02伴に13世紀頃の大型で庇を備えた建物である。面積はSB01-25.8㎡、SB02-51.2㎡を測る。主軸は周辺の条里型地割方向に揃えている。この規模の建物がどの程度の階層の住居か問題を残すが、少なくとも有力農民層以上の階層が考えられる。なお、この建物群は、推定旧南海道に隣接しており、南海道との関連で今後も検討が必要になってくるであろう。そのため、周辺の土地開発については今後も注意が必要である。

産宮通地区の集落は、調査区北半部のⅥ～Ⅷ区で確認した。主要な遺構はSB16～21、SE03、SD41・43・44等である。建物の主軸は周辺の条里型地割方向に揃えている。広範囲に遺構が展開している割には遺構密度は低い。また、時期的には決め手になる資料は少なく、集落の北端に展開する第3低地帯出土の資料等よりおおよそ12世紀前半頃を中心とした時期が考えられる。低地帯の資料では、第3低地帯の流路05～08などが該当する。流路05～08は鎌倉時代12世紀前葉～中葉頃に埋没した流路群である。堆積状況及び複雑に錯綜する流路方向などより、ほぼ同一時期に、比較的短期間に埋没したものと考えられる流路群である。

流路群の豊富な遺物のわりには、微高地上の遺構は建物6棟、井戸1、数条の溝が確認されただけであり、集落の端をつかまえた程度の成果となった。そのため、周辺に集落の中心域を想定すれば、比較

的安定している調査地の西方の微高地上を考えたい。なお、第2低地帯の上層遺構面の畝溝群（SD24～30）もこの時期にあたりと考えられ、本格的に低湿地を含めた周辺域の農地開発が始まるのも、少なくともこの時期以降と考えられる。次にこの時期の産宮通地区の集落の性格についてであるが、一つ見方として調査地が津田川に面した占地条件等より、津田川の水運を利用した物資の中継地点とみる考え方もできようが、周辺の調査成果、出土遺物の産地同定など問題を残しており、それらを含めて今後の課題としたい。

#### 第6期

室町時代後半以降の時期にあたる遺構は、産宮通地区を中心に展開しているが、遺構中に混入遺物が多く、的確に時期を掴めない遺構がほとんどである。そのため形状・埋土・切り合い等よりこの時期に含めている遺構が多い。主要な遺構ではSE01・02、SD33・34・36～38、SX06～09等である。SE01は産宮通地区の微高地上に位置する15世紀後半の素堀井戸であり、微高地上の農耕に伴う野井戸と考えられる。それ以外の遺構は、主に近世以降の農地開発に伴う遺構と考えられる。これらの遺構中に、住居跡等を含まない点より、調査地周辺は現在の景観の様に農地化されたものと考えられる。

#### （参考文献）

- 高倉洋彰 1972「弥生時代の小形仿製鏡について」『考古学雑誌 第58巻 第3号』日本考古学会  
高倉洋彰 1985「弥生時代の小形仿製鏡について(承前)」『考古学雑誌 第70巻 第3号』日本考古学会  
西村尋文 1990「下川津遺跡における6～8世紀の集落構造と動向」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ—下川津遺跡—』香川県教育委員会  
林原利明 1992「東日本の初期銅鏡」『季刊 考古学 第43号』雄山閣  
山元敏裕他 1995「居石遺跡」『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第7冊』高松市教育委員会  
高倉洋彰 1995「弥生時代出土仿製鏡の儀鏡化について」『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第7冊—居石遺跡—』高松市教育委員会

# 寺田・産宮通遺跡 観察表

第11表 寺田・産宮通遺跡竪穴住居跡一覽表

報告遺構名	調査区	区画	主軸方位	平面形	規模・長軸 (m)	規模・短軸 (m)	規模・深さ (m)	面積(m <sup>2</sup> )	施設					
									主柱穴	炉	竈	ベッド	壁溝	排水溝
SH01	I区	B2・3	N-63°-E	隅丸方形	4.9	3.8	0.20	(15.4)	2	○	-	-	-	-
SH02	I・II区	B3・4	-	円形	6.0	-	0.44	(28.3)	3(6)	○	-	-	○	-
SH03	II区	A5	N-4°-W	隅丸方形	3.4以上	4.1	0.42	(17.8)	4	○	-	-	-	-
SH04	II区	A5・6	-	-	-	-	0.32	(24.9)	-	-	-	-	-	-
SH05	II区	A5・6	N-10°-E	隅丸長方形	7.2	3.2以上	0.27	(30.4)	3(4)	-	-	-	-	-
SH06	II区	B5・6	-	円形	7.5	-	0.25	(39.9)	2(4)	○	-	-	-	-
SH07	III区	A25・26	N-27°-E	隅丸方形	4.4	2.7以上	0.14	(13.3)	2(4)	○	-	-	○	-

\* ( )内は推定値

第12表 寺田・産宮通遺跡掘立柱建物跡一覽表

報告遺構名	調査区	区画	主軸方位	構造・規模		面積(m <sup>2</sup> )	柱間寸法	
				梁間(m) × 桁行(m)	面積(m <sup>2</sup> )		梁間(m)	桁行(m)
SB01	I区	A3	N-88°-W	2間(4.6) × 2間(5.6)	25.8	2.1~2.4	2.5~3.0	
SB02	I区	B3	N-2°-E	1間(4.0) × 5間(12.8)	51.2	4.0	2.2~3.0	
SB03	I・II区	B3・4	N-1°-W	2間(3.5) 以上 × 6間(13.4)	46.9以上	1.5~1.8	2.1~2.5	
SB04	II区	A4・B4	N-86°-E	2間(3.0) × 3間(5.3)	15.9	1.4~1.5	1.4~2.2	
SB05	II区	B4・5	N-86°-W	1間(3.2) × 1間(1.6) 以上	5.1以上	3.2	1.4~1.6	
SB06	IV区	A14・B14	N-76°-E	1間(2.6) × 2間(3.9) 以上	10.1以上	2.6	1.9~2.0	
SB07	V区	A16・B16	N-47°-W	2間(3.4) × 2間(4.4) 以上	15.0以上	1.5~1.9	2.0~2.5	
SB08	V区	A17・18 B17・18	N-52°-E	1間(2.9) 以上 × 1間(1.9) 以上	5.5以上	2.9	1.9	
SB09	V区	A18	N-81°-W	1間(2.7) × 1間(1.5) 以上	4.1以上	2.7	1.5	
SB10	V区	A18	N-34°-W	2間(2.6) × 2間(3.5) 以上	9.1以上	1.2~1.4	1.4~2.1	
SB11	VI区	A18・19 B18・19	N-50°-E	1間(3.2) × 2間(5.3) 以上	17.0以上	3.2	2.6~2.7	
SB12	VI区	A19・B19	N-79°-W	1間(2.7) × 5間(6.5)	17.6	2.7	1.0~1.6	
SB13	VI区	A19	N-54°-W	2間(2.2) × 1間(1.3) 以上	2.9以上	1.0~1.2	1.3	
SB14	VI区	A20	N-29°-W	2間(2.7) × 3間(4.2) 以上	11.3以上	1.1~1.6	1.2~1.8	
SB15	VI区	A20	N-83°-W	2間(2.9) × 4間(5.5)	16.0	1.4~1.5	1.0~1.7	
SB16	VI区	B20	N-4°-E	2間(3.3) × 2間(3.4) 以上	11.2以上	1.5~1.8	1.5~1.8	
SB17	VII区	A21	N-85°-W	2間(2.5) × 1間(1.8) 以上	4.5以上	1.2~1.3	1.7~1.8	
SB18	VII区	A21・B21	N-89°-W	1間(2.9) × 2間(3.6)	10.4	2.3~2.9	1.2~2.4	
SB19	VII区	A22・23 B22・23	N-7°-E	1間(1.9) × 3間(5.5)	10.5	1.9	1.8~1.9	
SB20	VIII区	A24	N-90°-E	2間(3.7) × 2間(4.3)	15.9	1.8	2.0~2.3	
SB21	VIII区	A24	N-90°-E	2間(3.7) × 2間(4.3)	15.9	1.8	2.0~2.2	